
IS&It;インフィニット・ストラトス>黒き牙と永遠の月

ユートピア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス<黒き牙と永遠の月

【Nコード】

N1864R

【作者名】

ユートピア

【あらすじ】

総てを照らす月の編集版です。

少女は記憶を取り戻すため、少年は守るため力を手に入れた。
牙と月が今、現れる。

プロローグ（前書き）

よろしくお願ひします。

プロローグ

IS、正式名所インフィニット・ストラトス、宇宙空間での活動を想定した、マルチフォーマット・スーツである、だがある事件を境に兵器として注目された。

今では、スポーツなどとしている。

IS学園、IS操縦者を育成する機関である。

その門の前に二人の生徒がいた。

一人は、女で腰まで来る、オレンジ色の髪で黒い瞳だ。
もう、一人は男である、銀色の髪に赤い瞳だ。

「何でこうなっただよ」

気だるそうに少年が呟いた。

少女は本を読みながら答えた。

「仕方がないですよ、ISを動かせるんですから」
「けどよ、別にいいだろうが、どうしようが」

二人はISの操縦者らしい。

「終さんはもう少し自覚を持って下さいよ」

少女はため息を吐いた。

終と呼ばれた、少年は、だるそうに。

「楓はまだ良いよ、俺は男子が二人だぞ、後は女子だけだよ」

ISには欠陥があった。

それはなぜか女性にしか反応しないということ、男で動かせるのは終と織斑一夏という少年しかいない。少女、楓が何かに気づいた。

「終さん、人が来ていませんか？」

終も前を向いた。

「ああ、来てるな、俺等を喰おうとして」

終はケタケタ笑った。

そして、終達の前に一人の女性がたっていた。

「お前等か束が言っていた奴らは」

女性は鋭い目つきで終達を見た。

楓は本をしまい、終は真面目な表情に成った。

「はい、音梨楓です、こちらは」

「黒谷終です、ウェイ」

と、楓は真面目に話し、終はふざけていた。
女性はため息を吐いた。

「私の名前は、織斑千冬だ、お前達の担任だ」

終は真面目になり、言った。

「そのクラスに、男子はいますか？」

「一人いるぞ」

終は喜んでいて、終を無視して楓が話した。

「そろそろ、教室に行きませんか？」

千冬は思い出したように言った。

「ああ、そうだな、そろそろ行くぞ、黒谷、音梨」

終も楓と一緒に返事をした。

「はい」

三人は、校内に入っていった。

プロローグ（後書き）

感想を待っています。

キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介を紹介します、前のは少し設定が違います。

キャラ紹介

キャラ紹介

おとながえで

音梨楓

性別女

容姿

腰まで来る、オレンジ色の髪で、黒い瞳が特徴。出ているところとそつでないところがハッキリしている。

性格

誰に対しても敬語でさん付けをする。

頼まれたことは断れないお人好し、終からは良くも悪くも他人のため

年齢15

生い立ち

3年前までの、名前以外の記憶がなく、常識も少しはずれている。

身長156、3

体重46、5

くろやまゆう

黒谷終

性格男

容姿

銀色の髪で赤い目、筋肉質でしかも、いつも鍛えている。

性格

一見冴えない感じだが、趣味がハッキングと言った物であり、洞察力も選れという、ISの知識や電子機器の扱いは束が一目置くほどである。

生い立ち

5年前に東に出会い、そのときにISを動かしたため東から専用機を貰っている。

身長169、8

体重52、6

キャラ紹介（後書き）

次回から本編です。

二人の存在（前書き）

終のスキルが発動します。

二人の存在

教室の前で楓と終は待っていた。

「いい加減待つのも飽きたから、入るか？」

終が欠伸をしながら言った。
楓はため息を吐いて。

「だめですよ、呼ばれるまで待てと言われたじゃないですか」

楓は待つように終に言うが、終は扉を蹴り破らん勢いで体を慣らしていた。
楓は冷や汗を流していた。

「何をやる気ですか？」

終はにっつと笑い。

「ドアを蹴り破るわ」

ドアの死刑宣告が放たれた。

（無茶苦茶ですよ！！そんな事をしたら私までなんとと言われるか解りませんよ！？）

本気で蹴り破ろうとした時

『これで自己紹介を終わりにしたいところだが、後二人居るからな、二人とも入ってこい』

終がドアを蹴り破ろうとした格好でドアが開いた。

「織斑先生、助かりました、主にドアが」

楓はそつと呟き、千冬はため息を吐いた。

「黒谷、お前は何をしようとしているだ」

終は足を下ろすことなく言った。

「ドアを蹴り破ろうとしました」

ドカ！！終の頭に出席名簿と楓の本が同時に振り落とされた。

「ちっちと、自己紹介をしろ」

楓は終を引き吊りながら教卓の前に立った。

「じゃあ、俺からやるか」

終が立ち上がった。

「気絶してなかったんですか？」

「ああ、運んでくれてありがとう」

にっと笑い、楓はその笑顔を見たとき本を取りだした。

「そんなに三途の川を渡りたいんですね、解りました渡らせてあげますよ」

前髪で目が隠れているから、更に怖くなった。

「まあ、俺の名前は黒谷終だ、趣味はハッキングだから、よろしく」

指鉄砲を構えて打つ動作をした。

終の時のとは3倍の音が響いた。

「何あの子!?!すごく可愛い!!」

「うるうるの目もまた可愛い!!」

「マイナスイオンが出てない!?!」

「あの子が欲しい」

また終の3倍の黄色い声だ。
最後は無視して

「はわわわわわわわ!!!!!!!!!!」

楓も楓で大混乱中だ。

ここで千冬が咳払いをしてまた静めた。

「すげーな、織斑先生は怪物か?」

ブシャアアアアア！！！

終の頭に主席名簿が刺さった。

「頭に主席名簿が刺さってるー！！」

その現実に一夏は驚いていた。

「いや、お前が織斑一夏か、よろしくな」

「ああ、よろしく、えっと」

「終で良い」

「俺も一夏で良い」

終と一夏が話をしていると一人の女子が近づいてきた。

「ちつと良いか？」

「あ、箒か」

「誰？」

「ああ、自己紹介がまだだったな、私の名は篠ノ之箒だ」
「篠ノ之!？」

終が驚き、二人が聞いた。

「どうしたんだよ!？そんなに驚いて!!」

「私の名字がどうかしたか？」

二人の問いに答えたのは終ではなく

「篠ノ之と言う名字が聞き覚えがあったので、それでだと思います」

楓であった。

「音梨か、どこでなんだ？」

「楓で良いですよ、篠ノ之さん」

「篤で良いぞ、楓」

「分かりました、篤さん」

二人が話していると、一夏が聞いてきた。

「と言うか、どこで聞いたんだよ？」

「「「あゝ忘れてた」「」」

楓、終、篤が同時に言った。

「で、あるからしてISの運用は現時点で国家の認証が必要で枠内を越えた運用は刑法で罰せられ・・・」

楓は真面目に聞いているが、終は別のことを考えていた。

(次の武装は何にすか?)

ノートには別のことが書かれていた。
しかも、びっしりと

(何をどうしたらいいのか、でもアイツや俺は基本的に今でも良い
しな)

考えていると、千冬が

「織斑、黒谷どうかしたか」

「えっ!?!」

「.....」

「黒谷君、聞いてますか?」

「.....」

「織斑先生、山田先生、無駄ですよ、今の終さんには何も聞こえま
せんから」

一夏は返事をしたが終が返事を返さなかったため、千冬と副担任の山田真耶が聞いたが、楓が無駄と言って驚いていた。

「無駄とはどう意味だ？音梨」

「そのままの意味です」

クラス全員が首を傾げた。

「どうしてなんだよ？」

一夏が聞くと楓はこう続けた。

「今の終さんは、集中しているからなんですよ」

「だから、何で無駄なんだ？」

「じゃあ、山田先生終さんになんかしてみてください」

「わ、私ですか！？」

一夏と話していた、楓が山田先生に話を振った。
山田先生が恐る恐る、終の肩を叩き話しかけた。

「黒谷君、返事をして下さい!？」

揺すり始めると終は、顔を上げると同時に

「うるせえ、黙れ」

かなりの威圧感があり殆どのクラスの人が怯えた。

「何で黒谷はこうなるんだ？」

千冬が平然と楓に聞いた。

「集中しているところに何かしらの動作が入るとあんな感じになります」

「じゃあ、どうするんだよ？」

一夏が聞くと、楓が微笑みながら、言った。

「じじやると良いんですよ」

楓は終の机にあるノートを取った。
すると、終は

「何すんだよ、楓」

普通に話しかけてきた。

「取り組んでることに関する物が無くなれば、普通に戻ります」
「何の話し？」

楓が説明して、終が首を傾げる。

「黒谷は分かった、織斑はどうした？」

千冬が終の方から一夏に向いた。

「織斑君、どこか分からないところがあるんですか？」

山田先生が聞くと、一夏は

「え〜と、全部分かりません!!」

「えっ、全部ですか？」

一夏が言つと山田先生が少し引いた。

「入学前に参考書は読んだのか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました!!！」

ドカ!!！」

一夏は千冬（と書いて悪魔）が持っていた、主席名簿（と書いて兵器）で一夏の頭を叩いた。

「必読と書いていてあったらろが馬鹿者が」

千冬が呆れていると終が

「俺が一夏に教えましょうか？」

その言葉に楓が

「終さんは勉強より戦闘の方がいいじゃあないですか、私が教えときますしょうか？」

「じつ言つのは男の方がいいんだよ」

終が言つと一夏も

「俺も終の方が気楽でいい」
「だよ」

楓はため息を吐きながら

「分かりました、よろしくお願いします」

終はにっこり笑い。

「分かった、一週間で覚えさせる」

終は一夏の方に向き言った。

「覚悟しろよ、一夏」
「ああ、よろしく頼む」

こうして話がまとまった。

二人の存在（後書き）

感想やご指摘お願いします。

永遠に輝く月

「ちつと、よろしくて」

「ああ？」

「ん？」

授業が終わった後、二人が勉強していると、金髪で輝くような青い目が特徴の女子が話しかけたきた。

「女子が話しかけてきたな」

「俺ら以外、女子しかいないけどな」

終の眩きに一夏がツッコミを入れた。ツッコミを入れた一夏は遠い目をしていた。

「聞いてますの？お返事は？」

「あ、ああ。聞いている、何の用だ？」

「早く済ませよ、暇じゃないんだ」

一夏は戸惑いながら訪ねて、終は興味がなさそうに言った。

少女は一回咳払いをしてわざと声を大きくして言った。

「まあ！何ですの、その返事と態度は？この私に声をかけられることすら光栄ですのに、それ相応の態度があるのでは！？」

終は興味が無さそうに聞いていた。ここで一夏が

「俺は君が誰だか知らないし」

「俺は興味がないしな、誰だよ、お前は？」

終は目を合わせずに聞いた。

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生で入試首席の私を！？」

「全く、知らん」

「興味ないね」

一夏は素っ気なく返して、終はどごそのソルジャークラス1stの

台詞を言った。

「それだったら、金髪の青目の方が合いますよ」

声が出た方を見ると、そこには楓がいた。

「楓、居たのか？」

「居ましたけど、悪かったですか？」

終は薄ら笑みを浮かべて言った。

「悪かったかもな、ツッコミが」

楓が無表情になり、本を取り出す。

「三途の川をここにいる全員を渡らせてあげますよ」

「「「何でー?!」「」
「一夏、逃げるぞー!!」
「分かった!!」

一夏と終が逃げようとする、セシリアが声を上げた。

「ちょっと、私はどうなってるんですか!?!」

楓、終、一夏が同時に

「「「忘れてた」「」

セシリアは咳払いをして話した。

「それにしても、あなたよくそんなんでこの学園には入れましたね、世界で、今は二人ですが、ISを使えるとあって、もう少し知的だと思ってましたのに」

楓と終がため息を吐いた。

「だから何だよ」

「ですから、私がおの方に教えてあげますわ」

そう言っつて、セシリアは一夏に指を指した。

「それは必要ないと思いますが」

「? どうゆう事ですか?」

楓の言ったことにセシリアは意味が分からなかった。

「そのままの意味だと思っただが」

その問いに終が答えた。

「何が言いたいんですか？」

終は少しイラつきながら言った。

「もう足りてんだよ、俺で十分だ」

セシリアと終が睨み合っていると、チャイムが鳴った。

「逃げたら承知しませんわよ」

「誰が逃げるか、バカ」

「それは言い過ぎだぞ、終」

「後で勉強の続きですね」

それぞれ席に着いた。

「それでは、この時間は実践で使う各種装備の説明をする」

今度は山田先生では無く、千冬が教卓に立っていた。

「ああ、その前にクラス対抗戦にでるクラス代表を決める」
「要は雑用を決めると?」

終の弦きに千冬が終を睨んだ。

「すみません、つい本音が出ました」
「・・・つまり、クラス代表がめんどくさいと言いたいんだな」

終の弦きを千冬が返した。

「YES!!」

ゴガ!!

楓の本が終の頭に当たり、終は帰らぬ人となった」

「死んでないし!!それに言っただったら、言葉に出すなよ!!」

一夏が言ったことに終がツッコミをした。

「クラス代表はどうするんですか?」

楓が呟いた。

「私は織斑君を推薦します」
「私も!!」

一夏が推薦された。

「マジかよ!?!」

「良かったな、一夏(笑)」

終が笑いながら言った。

「他にいないか?それだったら織斑に決まるぞ」
「ちふ、織斑先生、俺は黒谷終を推薦する!!」
「一夏!貴様!何を!!」

一夏の言葉をきっかけに

「黒谷君も良さそうね」
「確かに」

終も推薦される。

「一夏！！テメエどうしてくれんだよ！！」

終が一夏に殴り掛かろうとすると、

「納得できませんわ！！」

セシリアが声を上げた。

42

「男がクラス代表だなんていい恥じさらしですわ、そのような屈辱を一年間味わえと言うのですの！？」

「めんどくさいな、アイツ」

終の呟きも聞こえずにセシリアは続けた。

「第一、私はこの極東の地にISの鍛錬に来ましたの、サーカスをしに来たわけじゃありませんの」

「そろそろ、ヤバいな」
「何が？」

セシリアは構わず続けているが終は難しい顔をして呟き「夏が何故か聞いたが時すでに遅し。」

バン！！

「あゝあ、やっちゃたな」

机を叩いたのは楓だった。

「人の故郷をバカにしないでください」
「何ですか？」

セシリアが聞いたとき、終は顔色を悪くしていた。

「何度言ったら解るんですか？ 人の故郷をバカにしないでください、てっ言っただですよ、聞こえませんでしたか？」

その顔は誰もが見ても怒ってるようにしか見えなかった。

「あなたの母国には、古臭い歴史とまずいご飯しかありませんよね」

「あなた！！ 私の母国を侮辱するんですか！？」

「そんな価値もありませんよ」

終はため息を吐いた。

「俺はもう知らないぞ、セシリア・オルコット」

終はセシリアに指を指して言った。

「楓をなめると痛い目を見るぞ、アイツの月は永遠に輝くからな」
「何を言ってるんですの？」

楓が冷たくセシリアに言った。

「後で吠え面を書かないでくださいよイギリス代表候補生のセシリア・オルコットさん」

その言葉はどこまでも冷たかった。

永遠に輝く月（後書き）

感想をよろしくお願いします。

月の初陣（前書き）

頑張ります

月の初陣

「なあ、一夏 お前はこれからどうするんだ？」

「俺は一週間ぐらいは自宅がよいだ」

放課後に一夏と終は一通り勉強を終えて話していた。

「終、お前は？」

「一週間ぐらいは野宿する」

さらっと、凄いことを終は平然と言った。

「野宿って、凄いこと普通に言うよな」

一夏の顔がひきつっていた。

「.....」

「楓？ どうすんだって、あれ？」

楓が席を立ち一夏が今度、セシリアとの決闘、とは言いづらいが戦うことになりそれについて聞こうとしたが楓は無言のまま教室を出た。

「なあ、終、俺は楓に何かやったか？」

「いや、大体あんな風になるんだよ」

一夏は自分が楓に何かやったの終に聞いたが終はそれを否定した。

「大体な、あのセシリア・オルコットの言葉がムカついて決闘する事になっただろ」

「それとこれが何の関係があるんだよ？」

一夏は疑問を浮かべていたが、終は笑いながら

「アイツはしばらく、あのままだぜ」

「だから何で何だよ？」

「理由は、アイツはな、怒るとしばらくは自分を落ち着かせる為に話さないんだよ」

「そうなのか？」

「どんぐりかには分かんが」

話していると山田先生が二人に近づいてきた。

「二人まだ教室にいたんですね」

「何ですか、山田先生？ 俺はそろそろ野宿の場所探しに行かないといけないんですが」

「野宿!？」

山田先生は驚いた、終が平然と野宿をすると言ったからだ。

「部屋のカギを届けに来たんですよそれに黒谷君は野宿したら駄目ですよ!!」

「駄目なんですか!？」

「驚くのはそつちかよ!!」

鍵を届けに来た、山田先生が終に野宿を駄目だといったら終はそれ

に驚き、一夏がツツコミを入れた。

「学園は俺達の保護と監視を優先した訳か」

終が真面目に言った。

「何だよ？」

「馬鹿かお前は、俺らはISを使える男だろ？」

「なるほどな」

一夏が納得した、自分たちが勧誘や拉致や監禁などある事に気づいた。

「じゃあ、またな一夏」

「じゃあな、終」

それぞれ鍵を受け取り部屋に向かった。

「ここか」

終は部屋についた。

「入るか」

部屋には行っていた。

「おお、凄いな」

部屋はとても豪華でベットが二つ合った。

「本当にすいません!!」

「いや、頭上げてくださいよ、蹴れないじゃないですか」

山田先生が謝り、終は足を構えていた、ほかの三人は見ないように他の方向を向いていた。

今回のことは山田先生のミスらしい、終の後ろに阿修羅が見えたのは別の話。

翌日、一夏、終、楓が話し合っていた。

「そう言えば、楓は訓練機でやるのか？」

「そんなに相手も優しくないので専用機でやりますが」

「専用機なのか？」

「俺と楓はそれぞれ専用機だぜ」

今度の戦いで一夏は楓が訓練機で戦うのかと聞くと終が自分も含めて専用機持ちだと話した。

「黒谷君と音梨さんは専用機持ちなの？」

「ああ、これが俺の専用ISだ」

終が左手首についでるチェーンアクセサリーを見せた。

「それがお前のISの待機状態か？」

「ああ、楓も見せたらどうだ？」

楓は無言で首からつるしているアクセサリーを見せた。

「まあ、あなた方も専用機持ちでしたね」

四人で話しているとセシリアが割り込んできた。

「先ほども授業でも言っていましたけどISは467機しかなくて、専用機持ちは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「今のISの数は469機ですが？」

「え！？」「」

楓の発言に周りが何言ってるのこの子という目になった。

「後の2機は今、目の前にあるぞ」

終が左手首についているアクセサリを見せた。

「俺のは、468機目のIS、ブラックファングだ」

「私のは、469機目のエターナルムーンです」

楓は月の形をした首飾り、終は牙を用いたシルバーアクセサリをそれぞれ見せた。

「何で、その二機をお前達が持ってんだ？」

一夏が質問したところでチャイムが鳴った。

「みんな、席に着こうぜ」

終の言葉とともに全員が席に付いた。

「もしかしたら、一夏と戦つかもな」

笑みを浮かべて

「せいぜい、楽しませてくれよ、一夏」

「どうですか？ 一夏さん」

「ああ、悪くない」

「まさか、一夏と終が戦うことになるとは」

楓、一夏、箒がアリーナ入り口にいた。そこに終の姿はない。

「何で終がいないんだ？」

一夏が終がいないことを疑問に思うと楓が返した。

「終さんは一夏さんのISの情報が自分に入らないようにしてるんですよ」

「何故、そんな事をするんだ？」

「正々堂々と戦いたいですよ」

そう言って楓はアリーナに向かった。

「輝け、エターナルムーン」

「あれが、469機目のIS」

セシリアの前にいたのは右手に刀、左手に拳銃、背中には羽みたく付いてるスクーター 469機目のIS エターナルムーン

「さあ、始めましょうか」

その姿は美しく、そして、恐ろしく、セシリアには感じた。

月が舞い降りた。

月の初陣（後書き）

感想、ご指摘をよろしくお願いします。

月の姫（前書き）

セシリア戦です

月の姫

「これが、469機目のIS」

セシリアの目の前には、469機目のIS、エターナルムーンを纏った、楓が居た。

『おい、セシリア・オルコット聞こえるか?』

「えっ!?!」

『ブルー・ティアーズのプライベートチャンネルに繋いでる』

「あなたは!?!」

セシリアにブルー・ティアーズのプライベートチャンネルに繋いでいたのは終だった。

『これから、エターナルムーンのデータを送るから頑張れよ、無様にならないようにな』

セシリアは終の言葉にムカついた、そして、エターナルムーンのデ

「タガブルー・ティアーズに届いた。

「エターナルムーン

操縦者 音梨楓

戦闘タイプ 遠近両用型

特殊武装あり」

「何ですの!?!? このISは!?!?」

「無茶苦茶なISじゃないですか!?!?」

エターナルムーンは攻撃力、防御力、機動力がどのISより高かった。

『まあ、アイツに合わせた奴ですからね』

終がプライベートチャンネルで繋いできた。

「どつゆつ事だ？ 黒谷」

千冬の問題に終は説明した。

『普通のISだと、楓の動きを制限してしまうですよ』
「制限ですか？」

終の言ったことを山田先生が繰り返した。

「付いて来れないならありますけど、制限はあまり聞いたことがありませんが？」

終は一度間を置き、話した。

『まあ、見れば分かりますから』

音声の向こうの終はどこか楽しそうだった。

「まあ、いいですね、使用者が付いて行けなければ意味がありませんわー!!」

少し声が震えていたがすぐ持ち直し、レーザーライフル『スターライトmk?』を構える。

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で!!」

スターライトmk?とブルー・ティアーズ(以下ビット)で攻撃するが

「遅いですよ」

それより早く楓が拳銃型の武器、ゼウスでビットの一つを破壊する。

「なっ!!」

「ワルツ円舞曲ですか、私は踊れないので無理です!!」

楓は瞬間加速で一気に近づく

「っ!!」

セシリアはスターライトmk?を構えるが、楓が先にルシファーで

セシリアにダメージを与える。

「すげえ」

一夏は啞然としていた、一夏だけでなく、篝や山田先生も同じだった。
千冬は終に聞いた。

「あれがお前の言っていたことか？ 黒谷」

千冬の問題に終は

『アイツ、遊んでいますよ』
「「「なっ!!!」」」

一夏、箒、山田先生が声を出し驚き、千冬も声を出さなかったが驚いた表情をしていた。

『本気でやってたらずくに終わりですよ』

四人はただ黙って試合を見ていた。

試合は楓のワンサイドゲームだった。

「早いー!」

セシリアがビットを使うがルシファーでビットを破壊し、ゼウスでセシリアを狙う。

「まだまだですよ!!」

セシリアがゼウスから放たれた、レーザーを避けるがルシファーで攻撃される。

「くっ!!」

セシリアは避けられずにあつたてしてしまう。
ビットを使い攻撃するがルシファーとゼウスを使い破壊する。

「これで、終わりです!!」

セシリアはスターライトmk?で楓を攻撃したが避けられた。

「行きますよー!!」

楓はルシファーを構えてセシリアに向かった。

「掛かりましたわね!!」

スカート型のアーマーがはづれた。

「ブルー・ティアーズは六機ですよ!!」

ミサイルが出てきた。

「そうですね、ですから何ですか？」
「えっ」

ルシファーでミサイルを打ち落としたり、その動きはセシリアには見えなかった

「万策尽きましたか？」

笑顔で聞くとセシリアは素直に

「私の負けですね」

負けを認めた。

「どうして、そんなに強いんですか？」

楓は思い出すような顔をしていった。

「ある人達が私に生きる意味をくれたんです」

ゼウスをセシリアに向けた。

「私はその人達のようになりたくて」

ゼウスにエネルギーが溜まっていき。

「だから、私は強くなりたいんですよ」

ゼウスからエネルギーが放たれた。

(ああ、私は負けてしまいましたわ)

セシリアの眼には楓が銀色の鎧を身に纏っている姫のように

(綺麗ですわね、楓さん)

セシリアは楓を名前で呼んだ。

(けど、清々しいですわ)

墜ちていくセシリアを楓が受け止めた

「気絶してますね」

そのまま、ピットゲートに向かった。

ピットゲートで待機していた医療班にセシリアを預けた。

「凄いな、楓は」

最適処理化を終えた、一夏が話しかけてきた。

「一夏さん、言っときますけど」

楓はエターナルムーンを待機状態にして言った。

「私に戦い方を教えたのは、終さんですから」
「なっ！！」

一夏が驚いた、セシリアを相手に一方的だった楓に戦い方を教えたのが今から戦つ終であることに

「何とかするか」

一夏はアリーナに向かった。

「終は、どこにいるんだ？」

まだアリーナに終の姿がなく、探しているとピットゲートに終の姿があった。

「『起きろ、ブラックファング』」

その言葉と共に獣の叫びのような物が聞こえた。

「待たせたな、一夏、これが俺のIS『ブラックファング』だ」

一夏の目の前に来たのは背中には悪魔の翼の用なスクーター、右手に持った牙のような鎌、全体的に攻撃的で腰にパイルが付いている、黒いISブラックファングを纏った終の姿だった。

「始めようぜ、一夏、対等の戦いを」

「ああ、どこまで出来るかわかんねえけどな」

一夏は雪片式型を構え、終は鎌の武器、ハデスを構える。

「全力で行くぞ！ 終！！！」

「来い、一夏！！！」

白と黒がぶつかる。

月の姫（後書き）

次回、一夏対終

ISや武器は次回終了後に

感想、指摘をよろしくお願いします。

白式対ノリミックフマンダ(前書き)

一夏対終です。

白式対ブラックファンゲ

「行くぞ、終!!」

「来い、一夏!!」

雪片式型とハデスがぶつかり合う。

「おつら!!」

「うわ!？」

ハデスで雪片式型を払い、距離を取る

「まだだ!!」

終はニヤリと笑った。

「もっとだ一夏! 本気で来いよ!!」

「分かってるよ!！」

雪片式型とハデスがまたぶつかりある。

「凄い戦いですよね、織斑先生」
「いや、黒谷が合わせてるんだ」

山田先生の言ったことに千冬が言った

「黒谷君が織斑君に会わせている?」

山田先生が疑問に思っていると

「今の一夏さんでは終さんには勝てませんから」

楓が入ってきた。

「音梨、なぜは入ってきた？」

「何となくです」

楓は首を傾げて言った。

「音梨、お前はこれをどう見る？」

楓が真剣な表情になり

「終さんは一夏さんを試してますね
「試す、か」

楓と千冬の話に山田先生が付いていけず聞いた。

「どうゆう事なんですか？」

「山田先生は知らないだろうが、黒谷はISの知識はそれなりにある」

「はい、それは分かりますが」

山田先生は何故終がここまで出来るのかが分からなかった

「さらに黒谷は、戦いより戦場なんかで生きてきたものだからな」
「えっ！！」

山田先生は驚いた、何せ、自分の生徒が戦場で生きてきたものだと聞かされたからだ。

「どうした、一夏!! お前はこんなもんじゃあないだろ!!」
「ぐっ!!」

一夏が雪片式型で攻撃すればハデスで止められる。
さらにハデスで追撃を喰らう。

「くっそ、無茶苦茶だな!!」
「当たり前だ! じゃあなきや戦場で生き残れねえよ!!」
「ハア!？」

一夏は驚愕して聞き返した。

「何で戦場の例えなんだよ!？」
「まあ、気にしたら負けだ!!」

ハデスに力を込める。

「くそ!!」

一夏が距離を取ると終はパイルを動かす。

「やっぱり、動くか!!」

「動かなかつたら意味ないわ!!」

終はハデスを戻し、ナイフ型の武器を両手に出した。

「オルトロス!!」

オルトロスを持って一夏に突っ込む。

「リーチは雪片だが、動きの早さはオルトロスか」

ピットで試合を見ていた箒が呟いた。

長さでは雪片だが、全体の動きはオルトロスが上だった。

「一夏、負けるな」

箒は静かに呟いた。

「オラア!!!」

終が一つのオルトロスで攻撃するが雪片で止められる。

「忘れんな、オルトロスは一本じゃあねえ!!」
「っ!!」

終がもう一つのオルトロスを振るうが一夏は何とか避けた。

「強いな、終」

「お前もだよ、一夏、普通付いて来れないだろ」

「ホントだな」

二人が目を瞑り、それぞれ言う。

「零落白夜、これじゃあねえと勝てねえ気がする」

「そうか、俺は使わなくても勝てるんじゃないか？」

二人は笑いながら話す。

「けどな、全力でやらないと意味が無い気がする」

一夏は零落白夜を発動する。

「俺はそんなのではないからな」

オルトロスをしまい、ハデスを出す。

「こんなのしか無いからな」

ハデスからエネルギーが放出する。

「おいおい、こんなの無しだろ」

一夏は雪片を構える、終はハデスを振り回して、掴むとハデスから

放出していたエネルギーが溜まった。

「『ファンングクラッシュャー』 俺の零落白夜みたいなものだ」

終はハデスを構える。

「なあ、終」

「何だ、一夏」

一夏は一呼吸置き、聞いた。

「何で？ そんなに苦しそうな顔すんだよ？」
「・・・」

終は黙って聞いていた。

「何で？ そんな詰め込んだ顔すんだよ？」
「……」

うつむいた。

「答えるよ！！ 終！！」
「……昔な」

終は話始めた。

「七歳ぐらいから、戦場にいたんだよ」
「……」

一夏は終の話聞いた。

「六年ぐらい前まで、戦場に居た」
「……」

懐かしんでいる顔だった。

「俺はその中で、楽しんでいたのかもしれなくてな」
「楽しんでいた？」

一度目を瞑り思い出す。

「五年前に助けられたんだよ、あの人に」
「あの人？」

目を開けて話す。

「東さんだよ」

ハデスを握る手に力が入る。

「俺はあの人に助けられたから、守りたい物を守るために」
「……」

—夏も雪片を握る手に力が入った。

「だから、俺は強くなる!! 守るために!!」
「だったら、俺も守るために強くなる!!」

二人同時に動いた、信念を胸に。

「ハアアアアア!!!!!!!!!!」
「ウオオオオオオ!!!!!!!!!!」

雪片とハデスがぶつかる。

「……やっぱ、強いな、終」

「・・・お前もな、一夏」

ふと終が笑う。

「だけど、俺の勝ちだ、一夏」

終の眼には、織斑一夏は今までであった、どの兵士よりも戦士に見えた。

「では一年一組代表は織斑一夏君です。あ、一撃がりでもいいですね！」
「一が三回続いただけですよ」

朝のSHRで嬉しく話していた山田先生に終が突っ込み一夏は

「何でだよー!!!」

魂の叫びだった。

一夏がクラス代表になったときだった。

白式対ノリックフアング（後書き）

感想、ご指摘お願いします。

オリジナルIS紹介（前書き）

終「俺達のIS紹介だ」

楓「よろしくお願いします」

オリジナルIS紹介

オリジナルIS

エターナルムーン

469機目のIS

スペックは各ISを上回るっている。

外見は銀色で背中部分は天使のような羽型のスクーターを付けている。

武器はルシファー、ゼウス等がある。

ルシファー

刀型の装備 接近戦に優れている。

ゼウス

拳銃型の装備 遠距離戦に優れていて、連射、狙撃が出来る。二丁ある。

基本的に右手にルシファー、左手にゼウスを持ち、遠近両方を扱う。

あまりの能力に普通の人では耐えられないぐらい、終日く 楓に合

わせて作った。

ブラックファング

468機目のIS

外見はエターナルムーンとは違い、全体的に攻撃的な感じで背中部分は悪魔のような翼型のスクーター、腰にはパイルを付けている。

武器はハデス、オルトロスと接近戦重視である。

ハデス

刃が獣の牙のようになっていて、ファングクラッシャーと言う技がある。

ファングクラッシャー

ブラックファングの零落白夜

オルトロス

二丁のナイフ型の装備、速さがあるがリーチが短いのが欠点

基本的な戦闘スタイルはハデスやオルトロスを入れ替えて戦う。

基本的なスペックはエターナルムーンよりも上で更に訓練機などを

相手をすれば圧勝するほど強い。一夏は反則的な強さと言っている。

どちらの二機もコアは束、その他は終が作り出した。終は更に強くしようとしている。

オリジナルIS紹介（後書き）

一夏「お前等は強すぎるだろー!!」

終「そうか？ 別に普通だろ」

篤「それよりも何を更に強くしようとしているんだ!？」

楓「次回にしようよ」

セシリア「私と楓さんの【閲覧禁止】な物語を!!」

終、一夏「お前は何言ってるんだー!!」

つかの間の一時(前書き)

更新遅れてごめんなさい。

ー夏は中華娘にフラグは建ててません。

「お前が負けたから、ある意味罰ゲームだな、はっはっはっ」
「はっはっはっ!? 何でそんなに上機嫌なんだよ!?!」

終は目を細めて言った。

「実は先日、軍隊を壊滅させたからな」

「そうか、よかったなって言っと思っつか!?!」

一夏は席に付こうとするが終にツッコミを入れた。

「何、軍隊壊滅さしてんだよ!?!」

「ウザかったからな、憂さ晴らしもかねて」

「何で、憂さ晴らしで軍隊壊滅さしてんだよ!?!」

一夏と終の漫才を止めたのは

「いい加減しろお前等」

千冬だった。

「「すいません、閣下」」

「何故そこで閣下なんですか？」

「楓さん、あのお二人を気にしたら駄目ですわ」

楓とセシリア以外が凍り付いた。

「どうしました？ 皆さん、そんなに驚いた顔をして」

「ホントですわね、何故そんなに驚くんのですの？」

「「「・・・」」」

一瞬の間が空き

「何か、仲良くなってるな」

「何故だ！？ 何故なんだ！！」

一夏と終は二人に聞くと楓が返した。

「昨夜の事ですから、用はセシリアさんが暴言などを謝りに部屋に来てその後は話したりしてましたから」

楓が遠い目をしてしていると一夏と終が怒鳴った。

「ちつと、待ってー!!」

「何ですか？」

「何ですか？ じゃあなえー!!」

「俺等には何もないのか!？」

「忘れてましたわ!!」

「何だよそれ、嫌がらせか!？」

「いえ、素で忘れてましたわ」

「俺等はその程度の存在か!？」

三人が言い争っていると千冬が咳払いをした。

「織斑、黒谷、オルコットいい加減静かにしろ」

「すみませんでした」

そんなこんなで時間は過ぎた。

「それではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、音梨、オルコット。試しに飛んでみる」

桜が散り新しい芽が芽吹き始めた四月下旬、グラウンドで千冬の授業を受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者なら展開に一秒もかからないぞ」

千冬に急かされて右腕に付いているガントレット、白式を掴む。

(来い、白式)

意識を集中させて、白式を展開した。終が一言いった。

「相手に余裕を持たせたんだな、心の余裕は大切だからな。良くやった、そしてさようならだ。一分は覚えとくよ」

「そうなのか、俺は死ぬのか、みんなありがとうって違アアアアアアアウウ！！ 何やらすんだよいきなり！？」

一夏が終の言葉に反応して目を閉じて倒れようとした時に目を開けて叫んだ。

「うるさい！！ 俺の命令は絶対だ！！ 黒谷終が命じる消滅しろ」
「イエス、マイロード！！ って違うだろ！！ 何でこうなるんだよ、話が続いてないだろ！！」

一夏は終が言ったことで話が続かないことを指摘したら終は開き直り。

「一夏、静かにしろよ」

「お前が言うか!! 何で俺だけなんだよ!?!」

楓が痺れを切らしたのかルシファーを終の首、ゼウスを終の頭に向けた。

「何で二つとも俺!?!」

「ゲームオーバーですから」

楓は笑顔だったが、絶対零度を感じた、と終は語った。

「まあ、いい飛べ」

その瞬間、楓とセシリアが飛び遅れて一夏が飛んだ。

「何をしている、エターナルムーンは兎も角ブルー・ティアーズより白式の方がスペックは上だぞ」

一夏は二人と同じ高度に並んで飛んでいた。一夏は先日上昇と降下を習ったがまだ『前方に角錐のイメージ』が掴めていなかった。

「全然わかんねえ、どうゆうイメージだよ」

「所詮イメージはイメージでしかありませんから」

冪も一夏のISの訓練を手伝っていたがすごく擬音が多かった。

「楓、コツとか無いか？」

「コツ、ですか」

しばらく考えているとああ、と頷きながら話した。

「鳥になったと思えばいいですよ」

「鳥、て何で？」

「少しわかりずらく無いですか？」

楓の説明に一夏は首を傾げてセシリアは疑問に思った。

「私もあまり分からないんですよ」
「えっ!?!」

一夏とセシリアは驚いた、普通にISを動かしているのに本人が分からないと言っているからだ。

「お前等、そろそろ戻ってこい。 ついでに急降下と完全停止をして見せる。 目標は地表十センチだ、 順番は音梨、オルコット、織斑だ」

楓は何も言わずに急降下して、地表五センチで止まった。 周りにいる女子たちはおおー、と歓声を上げた。 次にセシリアが地表十二センチで止まった。

「よし、やるか」

次に一夏が降りてきた。

ヒュウウ・・・・・・・・・・・・・・・・ガシイ！！

「自殺したいのかお前は」

「わりい・・・・返す言葉がねえ」

いつの間にかブラックファングを展開した終が一夏を掴み、一夏は目の前にある地面に冷や汗を流していた。

「ふう、やっと着いた」

IS学園前に小柄な少女がいた。小柄な体とは不釣り合いな大きなボストンバックを持っていた。

「どこ行けばいいんだっけ？」

茶髪で上着のポケットから紙を取り出したがくしゃくしゃだった。

「本校舎一回総合事務、つてどこよ!？」

辺りは暗いから殆どの生徒はいないだろと思い歩き出した。

「探せばいいのよ、探せば」

暫く歩いていたら全然着かなかった。

「まさか、迷ったのかな？」

辺りをキョロキョロしていると前から人影が見えた。

(ラッキー、これで道を聴ける)

前を歩いているうち二人が男子であることに気づいた。

(一夏と隣は誰だろ？ あれ？)

銀髪の少年の隣のオレンジ色の髪の少女に見覚えがあった、いや忘れなかった少女だった。

(確か、あの娘は、あの時のよね)

自分と出会ったときはあまり笑ってなかったのに今は笑顔が輝いていた。

(どうしてたんだろ、今まで)

近づいてることに気づいてとっさに隠れた。楓達を通り過ぎたとき
思った、場所どこか聞けばよかった、今更後悔した。

つかの間の一時（後書き）

感想、ご指摘をお願いします。

忘却の悲しみ（前書き）

楓と終の声は

音梨楓 / 白鳥涼子

黒谷終 / 宮野真守

終「俺は、銀河美少年か!？」

楓「私は借金執事ですか!？」

まあ、置いというて本編スタート!!

終・楓「無視するな!？」

忘却の悲しみ

「織斑君クラス代表決定おめでとう!!」

「「おめでとう!!」」

「・・・何これ？」

一夏が出した言葉がそれだった。一夏だけではなくて終と楓もだった。

「あれじゃあないですか？」

「「ん？」」

楓が指を指したところを一夏と終が向いた。

「パーティー、だよ」

「そっらしいな」

看板が掛けられていてそこには織斑一夏君クラス代表決定祝賀パーティー、と書かれていた。

「・・・」

終は何も言わずに食堂を出た。一夏はその姿を見て声を掛けようとしたが女子の波に飲まれて叶わなかった。

「終さん、やっぱりそうしますか」

「楓さん？ どうしましたの？」

セシリアの声に気づいた楓は振り向いて微笑みながら答えた。

「何でもありませんよ、セシリアさん、それよりパーティーですから楽しみましょうよ！！」

セシリアは思った、可愛すぎると楓のあだ名がガールズキラーに成るのはまた別の話。

「楓さん、なにか飲み物はいりませんか？」
「ありがとうございます、セシリアさん」

楓はセシリアから紙コップを受け取った。

「なあ、これって一組だけか？」

「うひゃー!?」

突然声を掛けられて楓とセシリアは声を掛けた人物を殴った。

「ぐふう!?!」

綺麗な弧を描きながらその人物は地面にぶつかった。

「あべし!?!」

その人物は床に頭が刺さり、足を広げていた。(要は犬神家)そしてズボンを履いていたため男子と解り、一夏以外の男子は一人しかいなかった。

「「終さん!?!」」

「ああ、川の向こうに花畑がある、あはははははは」

「それは三途の川ですわ!?!」

「終さん!?! カムバーク!?!」

そこに一夏と箒が来た。

「どづしたんだよ、これ」

「解らん、だが一つ言えることがある」

箒は一呼吸おいて

「終が床に刺さっていることだ」

その後は終を床から抜き話していた。

「終、お前どこ行ってたんだよ？」

「わりいわりい、手洗いだ」

ああ、と全員が納得した。そう言えば、と終が言った。

「これって一組だけか？ リボンの色から二年が居たような気がするんだが」

終の問いに答えるように声がした。

「はいはい、新聞部副部長二年、黛薰子です。噂の新生、織斑一夏君と黒谷終君にインタビューです！！」

「この人か？」

「認めたくないけど、この人だよ」

異様にハイテンションの二年生に一夏は苦笑いをして、終は現実逃

避でもするように目を反らした。そのまま、薫子は続けた。

「二人ともなんかコメント下さいい」

一夏はボイスレコーダを向けられた。

「え〜と、とりあえず頑張ります」

薫子は不機嫌そうに言った。

「何か他にない、『俺がIS学園のキングになる!!』とか」
「そんな気ありませんから」

一夏は苦笑いしながら言った。

「まあ、黒谷君もどうぞ!!」

「俺？」

いきなり話を振られた終は自分に指を指しながら聞いた。

「何か無い？ コメント？」

「じゃあ」

終は咳払いをして

「通りすがりの死神だ！ 覚えとけ！！ で良いか？」

「OK、そう言うのが欲しかったんだよ！！」

これが元で終のあだ名は死神と呼ばれることになったようではない。
い。

「次はセシリアちゃん」

「私はこうゆうことは苦手ですが、よろしくてよ」

「そう言っているわりには身だしなみを気にしてますが？」

セシリアも咳払いをして

「そもそも何故、私がクラス代表を辞退したかと言いますと」

「ああ、長くなりそうだから写真だけで良いや」

「自分から言っつとしてそれはありませんわ!!」

セシリアは抗議するも聞いていなかった。

「次は楓ちゃん、よろしく!!」

「わ、私ですか!?! でも何ですか?」

楓の問いに薰子は

「専用機持ちのコメントが欲しいから」

「解りました」

楓は深呼吸をして

「専用機持ちとして自覚ある学園生活を送りたいです」

最後に笑顔で答えると殆どの生徒が鼻血の海に沈んだ。

「じゃあ、最後は専用機持ちで写真撮るから並んで」

「楓、セシリア、一夏、俺の順で良いか？」

終の提案に全員が異議なし、と答えた。並ぶと薫子は

「それぞれ専用機が見えるようにお願いね!!」

それぞれ専用機が見えるようにして

「1 + 1 は？」
「「「「2」」」」

普通に終われば良かったが、普通に終わるはずがない。何故なら一組全員が入っていたからだ。箒は一夏の隣にいた。

「また凄いな、このクラスは」

「そこが良いところですよ・・・多分」

楓と終の喧きは女子の波に消えた。

「織斑君、黒谷君聞いた？ 転校生が来るんだってよ」

「「へえ、そうなんだ」」

朝クラスメイトが話しかけてきて二人は返事を返した。終は誰とでも話せるし一夏はここ数日でようやく慣れてきた。 終は誰とで

「でも何でこの時期にですかね？」

「私の存在を危ぶんでの転入かしら」

「それはない」

楓が不思議に思い、セシリアは腰に手を当て自信があるように言う
が終が否定した。

「別にこのクラスに転入するわけではないから騒ぐことはないだろ」

127

自分の席に鞆を置いてきた箒が言った。やはり、箒も噂が気になるらしい。

「でも、どんな奴なんだろうな？」

「聞いた話だと中国の代表候補生らしい」

「中国、ですか？」

一夏が言ったことに終が返し楓が呟く、何かを考え込むように。

「楓さん？ どうしました？」

「えっ！！」

「考え込んでたようだが」

セシリアが楓に声を掛けてそれに気づき箒が聞いた。

「大丈夫ですよ、何でもありませんから」

「・・・一夏は気にする暇はないはずだが？」

楓が笑顔で答えた後終が一夏に言った。

「ああ、そうかもな・・・箒、今日放課後剣道付き合ってくれ」

「ああ、わかった」

一夏は終に言われて少し考えた後箒に言った。箒も素っ気なく返すが嬉しそうだった。

「まあ、専用機持ちはこのクラスと四組だけだからな、クラス対抗戦は四組を注意すればいいだろ？」

終は机に突っ伏しながら言った時だ。

「その情報、もう古いよ」

入り口付近から声が聞こえたため楓達だけでなく一組全員が向いた。

「二組も専用機持ちだから、簡単には優勝させないよ」

小柄でツインテールの少女が居た。一夏は見覚えがあったため驚いていた。

「お前、鈴か!？」

「そ。中国代表候補生、鳳・鈴音。今日はあんた達、一組に宣戦布告してきた訳よ」

鈴は一夏に指鉄砲を向けた。

「それと、六年ぶりくらいよね？」

そのまま楓に向けた。

「楓、覚えてる？」

「っ！！」

終の目つきが変わった。楓は考え込んで言った。

「どこかで、会いましたか？」

「え？」

楓は首を傾げて聞き鈴は驚いた顔をした。

「覚えてない？ 六年前、一緒に遊んだよね？」

鈴は目尻に涙を溜めていた。

「えっと、六年前ですか？」

「そうよ！！ 六年前のこと、覚えてない！？ 一緒に酢豚作たよね！？」

鈴は涙を流しながら言った。

「六年前、酢豚、中国？」

楓が考えてると終は悲しそうな目をして言った。

「鳳・鈴音、ちょっと良いか？」

保健室に着いた終達は楓をベットに寝かせた。

「まずは、自己紹介だ、俺は黒谷終」

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ」

「篠ノ之箒だ」

「さっきも言ったけど中国代表候補生、鳳・鈴音よ」

それぞれ自己紹介した後一夏が聞いた。

「なあ、終・・・何で楓は叫んだんだ？」

「そつよ！！ 私のこと覚えてないし」

「人違いではなかったんですのでは？」

「間違えるわけ無いでしょ！！」

「話すから、静かにしろ！！」

一度全員が黙り、終が話した。

「楓は、三年前までの自分の名前以外覚えてねえ」

「「「「嘘!?!?!」」」」

終が言ったことに全員驚いた。

「俺も出会ったときには名前以外わかんねえって言ったからな、それ以上は聞けなかった」

「そうなんだ」「鈴」

終から理由を聞いた鈴は落ち込み、一夏は何も言えなかった。

「一回、教室戻るぞ、また来ればいいからな」

全員が保健室を出た。

忘却の悲しみ（後書き）

感想ご指摘お願いします

クラス対抗戦前（前書き）

楓のイメージは白鳥ではなく、白石涼子でした。
訂正とお詫び申し上げます。

クラス対抗戦前

「食堂、行くか？」

終の問いに一夏、箒、セシリアが無言で頷く、昼休みつまりは昼食なのだがあの話を聞いた後だから気持ち沈んでしまっていた。

「」「」「」

無言で歩いているにも関わらず女子が付いてくる。例えるなら蟻の行進だ。

「あれ？ みなさん暗い顔してどうしました？」

「」「」「へ！？」「」「」

四人の目の前に保健室で寝ているはずの楓が居た。

「楓、お前、へい」「楓さん!?!」「ゴフウ!?!」

終が声を掛けようとしたらセシリアに押されて壁にダイブした。

「楓さん、大丈夫ですよ!?!」

「はい、大丈夫です!?!」

セシリアの問いに笑顔で答える楓だが一夏と箒が叫んだ。

「「終はほったらかしかー!?!」」

「ああ、川の向こうに花畑が」

「「もう良いわ!?! そのネタ!?!」」

食堂に足を運んでいると小柄な少女が見えた。

「よお、チビツインテール、グンに喰われなかったか?」

「それはツインテール違いよ!?! 後チビ付けるな!?!」

鈴が居た。鈴は楓を見ると近づき

「忘れてるんだったら、思い出してよね」

悲しそうに言って楓はそれを見て言った。

「鈴さん、酢豚、うまく作れるようになりましたか？」
「え？」

楓は微笑みながら話した。

「また、一緒に酢豚、作りましょう」

笑顔で言った。それを見て鈴は泣きながら言った。

「今度、おいしい酢豚食べさせたあげる」
「はい」

二人が笑顔になったのを確認した終は楓と鈴の肩を優しく叩いた。

「飯食べようぜ、この六人で」

そう言つと食堂に入つていった。楓達も慌てて付いていった。

「でよ、お前とこのチビツインテールはどうゆう関係だ?」
「何度も言つけどいい加減チビとツインテールは止めなさいよ!」
「うるせえ!!」
「グンに喰われとけ!」

終と鈴が言い争っていると楓は本を取りだして

「いい加減そのネタは止めましょう」

何の迷いなく終の頭を叩いた。そのときの音はバキ！！と鳴った。

「ギアアアアアア！！！！！！！！！！」

終は頭から血を吹き出しながら机に突っ伏した。

「幼なじみだよ、セカンド幼なじみ」

「そうそうって、ほっというて大丈夫？ 凄い血を流してるけど」

終の頭から流れた血はテーブルを真っ赤に染めた。

「テーブルが赤く染まったな」

「ある意味恐ろしいですわ」

その状況に筭は苦笑いしセシリアは冷や汗を流していた。

「鈴さんと一夏さんは幼なじみだったんですか？」
「待て一夏、私も幼なじみだろ？」

楓が聞くと箒は一夏に訪ねた。

「ああ、箒がファースト幼なじみ、鈴がセカンド幼なじみ」
「何だそれ、めんどくせえな」

終が復活したを見て楓達はそれぞれ言った。

「生きてたんだ」
「死んだかと思ったんだがな」
「以外としぶといですわね」
「少し浅かったんですかね？」
「今度は私も手伝うわよ」
「お前等、俺泣くよ、泣いて良いよな？」

上から一夏、箒、セシリア、楓、鈴、終の順番だ。

「泣いたら、ゼウスで吹き飛ばしますから」

サラッと笑顔で怖いことを言う。終は笑いながら言った。

「止める、待て、ゼウスは止める」

「解りました、ルシファーで良いですよね？」

そう言ってルシファーを出す。

「止める、降ろせ、いや振り降ろすなよ！！ エターナルムーンの
整備はどうするんだ！？」
「あ、それは困りますね」

そう言ってルシファーを仕舞った。

「何でお前がエターナルムーンを整備するんだよ？」

一夏の問いに千冬は舌打ちをした。

「あれほど言うなと言っただろうが」

「すみません、生命の危機を感じてつい」

千冬の出席名簿で終は叩かれた。

「全く、良いか？ このことは口外するなよ」

「けど、織斑先生」

「良いな？」

千冬の言ったことに一人の生徒が喋ろうとするが千冬が黙らせた。
そのまま解散となった。

翌日の放課後、一夏のIS訓練をしていた。

「おら!! 一夏!! もう少し早く動け!!」

「無茶、言うな!! 避けるのも大変なんだよ!!」

終はハデスを振るい、一夏はそれを避けたり避けたり避けるしかない。

「ハアアアアア!!!!!!!!」

「ウアアアアア!!!!!!!!」

終の猛攻に一夏は逃げるしかできなかった。

「終の奴、やけに気合いが入っているな」

「そうですわね」

訓練用IS打鉄を纏っている箒とブルー・ティアーズを起動させているセシリアが終に一夏の訓練の様子を見ていた。

「くそ〜！！ 授業中に何か変な視線を感じた〜！！ これも全て織斑一夏のせいだ〜！！」
「八つ当たりかよ!？」

昨日の爆弾発言があり妙な空気が流れたため終はその腹いせを一夏にしていた。まあ、八つ当たりだ。

「やる気があるわけではなく、八つ当たりですか」
「一夏は関係ないだろ〜！！」
「八つ当たりとは、何か一夏さんに同情しますわ」

楓は冷静に考え、箒は一夏に八つ当たりしている終に怒鳴り、セシリアは一夏に同情していた。

「はあ、いい加減止めますか」

楓の言葉に気絶している終とセシリア以外が返事をした。

「終とセシリアはどうすんだ？」

一夏が疑問に思い聞くと箒が返した。

「一夏は終を、私がセシリアを運ぶ、楓は先にピットに行つてくれ」

「解つた、じゃあな、楓」

「はい、お先に失礼します」

楓は一夏と箒に礼をした後ピットに向かった。

「ふう、着替えて部屋に戻ってお風呂に入りますか」

そう言つて楓がロッカーを開けようとした時

「だ〜れだ？」

「ひゃ!？」

いきなり背後から声がしたと同時に首に冷たい物が当たった。

「鈴さん!！」

「お疲れ様、楓」

タオルとペットボトルを持った鈴が居た。

「ビックリしましたよ〜」

「御免ね〜、飲み物はスポーツドリンクでいいよね？」

そう言っつて鈴は楓にペットボトルを渡す。

「ありがとうございます」

楓は笑顔でお礼を言った後スポーツドリンクを飲んだ。

（色々と大きくなってるな）

鈴は楓の体を見て思った。実際に楓は体つきは良く、胸は筍ぐらいある。

（それに比べて私は）

鈴は自分の体を見た。小柄な自分と体つき抜群な楓、正直な話鈴は悲しくなってきた。

「・・・」

スポーツドリンクを飲んだ後楓はタオルで汗を拭いていた。そんな楓の後ろから鈴が楓の胸を揉んだ。

もの凄い勢いで飛んできたセシリアに楓は驚きの声を上げた。

「何で物騒な物持ってるのよ!？」

「撃ったら駄目ですよ、セシリアさん!！」

「撃ちませんわよ楓さん!！」

足を軸に体を回してそのまま、スターライトmk?で鈴を殴った。

「ぐふう!？」

「こっしますのよ!！」

「鈴さー!ーん!？」

綺麗な弧を描いて鈴は飛んでいった。

「楓さん!! 大丈夫ですか!？」

「は、はい。大丈夫ですけど鈴さんが」

「良かったですわ」

セシリアは鈴を無視していたが楓は飛ばされた鈴を心配していた。

「あんたいきなり何すんのよー！？」

鈴が右腕だけにISを展開して突っ込んできた。

「楓さんの胸を揉んどいて何を言いますか！！」

セシリアも鈴に向かって突っ込もうとするが楓が

「ストップ！！」

二人の間に入ったが急に止まれるわけではなく

「うわあ！！」

「きやあ！！」

「ひやあ！！」

三人仲良くぶつかつた。

「何だ、騒がしい・・・」

箒が遅れて来たが絶句した。今の状況はセシリアが楓の胸に手が行き、鈴の手が楓の太股に来ていた。セシリアと鈴が手を動かせば楓が

「ひゃあん!?!?!」

何て声を出す、箒は三人の周りに百合が見えたと語った。

「・・・すまん、邪魔した」

箒はその場を去ろうとすると楓は

「箒さん！？ 見捨てないでください！！」

捨てられた子犬のような目で箒を見たが箒は振り向き言った。

「幸せにな、愛に性別は関係ないんだな」

「誰も言ってますん！！」

箒が遠い目をして言うと楓がツッコミを入れた。

「鳳さん、本当に何をしてるんですか？」

「アンタこそ何よ」

「お二人とも、すいませんが退いてくれませんか？」

セシリアと鈴は倒れた体制のまま睨み合っていた為、楓はその空気に耐えられず言った。二人は誤りながら退いた。

「アンタはクラス対抗戦が終わったらぶっ潰す！！」

鈴はセシリアを指さしながら言っ
てセシリアは腰に手を当てて言っ
た。

「返り討ちにして差し上げますわ!」

箒は呆れながら言った。

「早く部屋に戻らないか？」

箒の言葉で楓とセシリアは制服を着た。ピットから出ると終と一夏
が居た。

「お前等、遅いわ」

「まあまあ、終は落ち着けよ」

不機嫌な終を一夏が宥めていた。

「すみません」

楓が謝り、一夏が聞いてきた。

「そう言えばどうして遅かったんだよ？」

「確かに、気にはなるな」

一夏が言ったことに終も聞いた。

「それは「三人が百合を咲かせていたからだ」 篝さん!？」

楓が言おうとしたら篝が答えた。一夏と終は苦笑いをして言った。

「……聞かなかったことにしとく」

「……俺も、忘れとく」

そのまま逃げよつとするがセシリアが

「鳳さんが楓さんの胸を揉んでつい」

終は鈴に目を向けて言った。

「・・・鳳鈴音、お前そんな趣味があつたのか」

鈴は手を振るい否定した。

「わ、私は楓がどんだけ成長したか知りたかつただけよ!!」
「だからって、なぜ胸を揉む?」「」

一夏、終、第の三位一体攻撃を鈴は食らった。効果は抜群だ。

「うぐ!？」　そ、それはね、あれよ、む、胸が大きくなってたから
ついでよ」

鈴はもじもじしながら答えたため一夏と終が同時に

「駄目だ、救いようねえ」「」

ここで鈴が右腕だけにISを展開していた。

「一夏、アンタはクラス対抗戦で潰す、後黒谷もオルコットを潰し
た後で潰すから」

右腕を振り回しながら鈴は部屋に戻った。

「部分展開か、パワータイプ、しかも白式と同じ近距離か」

終は冷静に考えていた。一夏は

「俺、明日鈴に謝った方が良いかな？」

楓は一夏に言った。

「明日のクラス対抗戦は一回戦が二組対三組ですよ」
「謝る機会無いな」

終はそのまま部屋に戻った。

「はあ、仕方ないか、俺も明日に備えて寝るよ」

一夏も部屋に戻った。

「私達も部屋に戻りましょうか」

楓、セシリア、篝も部屋に戻った。

クラス対抗戦前（後書き）

次回、クラス対抗戦！！

クラス対抗戦（前書き）

クラス対抗戦です。

クラス対抗戦

クラス対抗戦当日は流石に一夏が出るだけあってかなりの人の数があつた。

「それにしても人が多いな」

「そうですね、一回戦なんですがね」

楓と終は人の多さに啞然としていた。

「まあ、一夏が出るからな」

「そうですね、男でISを使える人ですから」

篤が言ったことにセシリアが同意するように言った。四人はリアルタイムモニターで一夏と鈴の試合を見ることにしていた。

「二人とも近距離だが、鳳鈴音の方がISを使ってる時間が長いかな」

終が考え込んでいると試合が始まった。一夏は雪片式型、鈴は青龍刀型の武器、双天牙月を出した。

「始まりますね」

「一夏」

楓が言つと箒は心配そうに呟いた。終は箒の肩を叩き言った。

「信じて待つのも、仲間の役目だぞ」

「・・・ああ」

終の言葉に箒は安心した用に言った。

一夏は雪片式型を鈴へ振るうが双天牙月で防がれる。

「くそつ！！」

「まだまだよ！ 一夏！！」

鈴は力を込めて双天牙月を振るう、それに応じて一夏も雪片でそれを防ぎながら体を使い受け流す。それを見ていた楓達は

「動きが良くなってますわね」

「確かに、訓練の成果か？」

楓は一夏の動きに見覚えがあった。そしてその動きをする人物、終を見た。

「終さん、一夏さんはもしかして」

「ああ、お前の思ってる通りだ」

楓の疑問が晴れた。一夏の動きは終の動きに似ていた、いや終の動

きを自分流にアレンジをしていた。

「こんな短時間で俺の動きを自分の物にして、更に自分に合わせてやがる」

正直終は驚いていた。一夏とは訓練をしていたがまさか自分の動きを真似てしかも雪片とハデスのリーチの違いをカバーできるようにアレンジまでしていたからだ。

(一夏の成長スピードには目を見張るな、だがまだ荒削りだな)

終は心の中で不適な笑みを浮かべた。

「ウオオオオオオ!!!!!!」

一夏は雪片を振るうものの避けられるか防がれてしまう。

(くそ、受け流せても攻撃が当たらないんじゃないじゃあ)

一夏は内心焦っていた。攻撃は食らわないものの、一夏も攻撃が当てられない。一夏は一度距離を取ったがいきなり吹き飛ばされた。

「ぐあ!?!」

一夏は何が起きたか解らなかった。それは見ている楓達もだった。

170

「一夏!?!」

「何が起きたんですの!?!」

「解りません!?! 一体何で!?!」

楓達は何が起きたか解らず混乱していたが終は冷静に状況を見ていた。

「・・・衝撃砲か」

「衝撃砲ですか？」

終の呟きに楓が聞き返した。

「ああ、多分、空間を固めて放ってるんだ、砲弾は兎も角砲身も見えないだろうな」

「でも幾ら何でも角度限界があるはずだ！！」

終の説明に篤は自分の考えを言ったが終はそれを否定した。

「それだったら、鳳鈴音が代表候補生には選ばれないぞ、角度限界は無いだろうな」

「それでは一夏さんは勝てるんですの！？」

終の答えにセシリアは聞いたが終は楓達の方に向いて言った。

イグニッション・ブースト
「瞬間加速、何回か教えたからな、それを使えば何とかなるが」
「なるが？」

終は一呼吸置いて言った。

「そんな不意打ちは一回きりだ、一撃必殺の零落白夜でやるしかない」

「一回ですか、一夏さんは大丈夫なんですか？」

終は楓達に指鉄砲を向けて言った。

「信じることも、仲間の役割だ」

終がモニターに向いた瞬間アリーナに衝撃が走った。

「な、何だ!？」

「アリーナに何かが入り込んだんだ!！」

「っ!！」

楓はアリーナに向かって走って行った。それを見たセシリアは楓に声を掛けた。

「楓さん！？ どこに行くんですの！？」

楓は聞こえているかいないのかそのまま走って行った。

「たく、俺も向かうか」

終も別の場所へ走って行った。

「終！？」

「貴方もどこに行くんですの！？」

セシリアと箒は終を追いかけた。

「もしもし!! 織斑君、鳳さん!? 返事をしてください!!」

ピットでは山田先生がプライベートチャンネルで一夏と鈴に連絡をしていた。

「まあ、山田先生、落ち着こうではないか」

「けど、織斑先生!! 織斑君と鳳さんは自分達で食い止めるって!?!」

悲鳴のような声を上げる山田先生とは対照的に千冬は落ち着いた物腰で話していた。

「じつゆ時は甘い物を取ると良いぞ」

そう言って千冬はコーヒーに砂糖では無く塩を入れていた。山田先

生は驚いた様子で見ている。

「織斑先生！！ それは塩ですよー！！」

終はピットに飛び込みながら千冬に言った。

「ああ、そうか」

「ハア、ハア、ハア・・・何とか着いた」

終は息を切らしながらコーヒーに砂糖を入れて千冬と山田先生に渡した。

「どうぞ」

「ああ、すまん」

「どうぞも」

コーヒーを飲んだ後千冬は終を見た。

「で、何故お前が此処にいる？」

「楓にISの使用許可を」

終は真面目な様子で言った。それと同時に箒、セシリアも着た。

「そうしたいのは山々だが、これを見る」

端末を操作してモニターを切り替えた。そこには

「遮断シールドがレベル4、全扉ロックか……。侵入者か」

終は冷静に状況を見たが箒とセシリアが声を上げた。

「そんな！？ これじゃあ」

「政府には連絡は！？」

終は無言で山田先生の座っている操作パネルに向かった。

「山田先生、少し退いてください」

「あ、はい!!」

終が言うと山田先生は席を退いた。

「黒谷、何をやる気だ？」

「まさか、遮断シールドを解除するんですか？」

終は苦笑いをして言った。

「流石に解除は難しいですよ、せめてレベルを下げるしかできませんから」

終の言ったことに千冬は聞き返した。

「レベルを下げてどうする？」

「楓とエターナルムーンでぶち破れるレベルまで下げますから」

終以外の全員がその言葉に驚いた。終は真面目な顔になり、高速で端末を操作した。

「早い、こんなに早く操作できるなんて」

山田先生だけでは無く他の三人も驚いていた。

「よし、これで良いだろ」

終が操作を終えるとモニターには

「遮断シールドのレベルが1だと!?!?」

「こんな事ができるなんて、一体何をしたんですの？」

終は笑いながら

「後は任せたぜ、楓、疲れた」

楓はアリーナの前に居た。楓はエターナルムーンを握り

「『輝け、エターナルムーン』」

エターナルムーンを展開した。遮断シールドにゼウスを向けて引き金を引いた。そのまま銀色の閃光が遮断シールドを破壊した。

一夏と鈴は突然来たISと戦っていたが相手は強力なレーザーで攻撃をしてくる。

「うわぁ!?!」

「くそ!?!」

鈴は龍砲と言う衝撃砲が有り遠距離攻撃が出来るが一夏は雪片しかないため必然と近距離になる。

「どつすんのよ!?! 一夏!?!」

「どつするって言われてもよ!?!」

その時、敵ISが鈴に向かって攻撃しようとして腕を向けた。それに気づいた一夏は鈴に向かって叫んだ。

「鈴!! 逃げる!!」

「えっ？」

相手が自分に向かって攻撃しようとしていることに気づいたが間に合わないと思った鈴は諦め掛けていた。

(ああ、打たれるな、御免ね、楓、約束守れないかも)

攻撃されようとした時

「諦めないで!!」

銀色の閃光が敵ISの目の前に放たれた。

「あ……楓？」

鈴の目の前にエターナルムーンを展開した楓が居た。楓は振り向いて微笑んだ。

「大丈夫ですか？ 鈴さん」

鈴も微笑み返した。

「うん、大丈夫よ」

二人の元に一夏が来た。

「鈴！！ 大丈夫か！？」

「大丈夫よ、一夏」

楓は振り向き敵ISにゼウスを向けた。それと同時に一夏達も構えた。

「一体なんですか？ あれは？」

楓の問いを一夏が答えた。

「わかんねえ……だけど解ることがある」

雪片を握る力を強めた。

「アイツが俺等狙いだって事だ！！」

一夏達は敵ISに向かっていった。

「ウオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

一夏が雪片を振るうがそれを避けた。

「一夏！！ 楓！！」

鈴は龍砲を敵ISに放った。

「二人共、大丈夫！？」

鈴は二人に近寄り安否を確認した。

「ああ、何とかな」

「鈴さん、有り難う御座います」

鈴は相手を見て芋虫を噛んだような顔をした。

「相手は遠距離でしかも威力が高い」

「どうするんだよ！？」

ピット入り口に箒が来た。

「一夏!!」

箒が一夏の名前を叫び全員が箒の存在に気付いた。

「箒!？」

一夏達が気付いた為敵ISも気が付いた。

「させない!!」

楓はゼウスをしまいルシファーを両手で持った。

「「楓!？」」

イグニッション・ブースト
瞬間加速を使っても間に合うかどうかだった。だが敵ISをレーザ
ーが貫いた。そして敵ISが倒れた。

「セシリアさん」

楓が見た先にはスターライトmk?を構えたセシリアが居た。

「楓さん!!」ご無事でしたか!？」

「はい、何とか」

「一夏さんもご無事で何より」

「あ、ああ」

セシリアは楓の所に向かおうとするが鈴が叫んだ。

「ちょっと待ちなさいよ!!」

「何ですか？ 鳳さん？」

「何ですか？ じゃあないわよ!! 何であたしにも何も無いわけ

!？」

「楓さんの胸を揉んどいて言いますか!？」

鈴は楓の腕を取った。白く細い腕を

「こんな細い腕で戦ってたんだ」

鈴は静かに楓の前髪を掻き分けて額にキスをした。

「鈴さん？」

鈴が顔を上げたと同時に楓が起きた。

「楓!!」

「うわぁ!?! り、鈴さん!?!」

鈴はいきなり楓に抱きついた。鈴は小さな声で呟いた。

「無茶し過ぎよ、心配したんだから」

「鈴さん」

鈴は楓を優しく抱きしめていた、時悪く保健室のドアが開いた。

「楓さん！！ このセシリア・オルコットが看病・・・しに」

セシリアが見たのは現在進行形で楓に抱きついている鈴の姿だった。

「鳳さん！！ 貴方は何をしてらっしゃるんですの!?!」

「あ、あんた来たんだ」

「セシリアさん、ご心配お掛けしました」

セシリアは目が点になっていた。

「鳳さん！！ 貴方、抜け駆けしましたわね!?!」

「知らないわよ!?! 第一何で抜け駆けよ!?!」

セシリアと鈴は今にもガチバトル寸前だった。それを止めたのは

「病人が居るんだ、静かにしろ」

「それに騒ぐところじゃあないだろ、此处は」

一夏と篝だった。二人は呆れた様子でセシリアと鈴を注意した。楓はあることに気付いた。

「あれ？ そう言えば終さんは？」

「ああ、終なら千冬姉達とあのISについて調べてる、後『楓は大丈夫だ、信じてやれよ、仲間なんだから』って言った」

「あはははは、終さんらしいですね」

一夏の答えに楓は苦笑いをしていた。

「やっぱり、無人機か」

「しかも、登録されてないコアでした」
「そうか」

終は山田先生と千冬と一緒にあのISを調べていた。

「無人機、か」

終は何かを考えていたが席を立った。

「黒谷、どこに行く？」

「部屋に戻ります」

「解ってるな、このことは」

終は頭を掻きながら答えた。

「俺もそこまでバカじゃあないですから、山田先生後はよろしくお願ひしますね」

そう言って部屋を出た。

クラス対抗戦（後書き）

感想ご指摘よろしくお願ひします。

ジェノサイドウォーリアー（前書き）

終「今回はフランスとドイツからアイツ等が来る」

楓「アイツ等？」

終「まあ、本編スタート」

楓「台詞が~~~~~!!」

ジェノサイドウォーリアー

「・・・」

六月初旬、楓は特にやることが無く自室で読書をしていた。ただ、もう5冊目ぐらいだが

「・・・」

部屋に日の光が入り丁度良い温度だった。そんな部屋のドアがノックされた。

「・・・誰だろ？」

ドアを開けると鈴とセシリアが居た。

「鈴さんとセシリアさん、どうかしましたか？」

「「・・・」」

セシリアと鈴は楓、いやその服装を見て絶句した。

「楓、何か他に服無いの？」

「ありませんよ」

「さ、流石にそれはどうかと思いますわ」

楓の服装はゴスロリに猫耳だった。

「ねえ、流石にそれはちょっと」

「ええ、考え物ですわ」

二人は揃って苦笑いをした。

「?????」

楓の疑問は全く解けなかったがここで銀髪で赤目の男が来た。

「あ、終さん」

「よっ、何やってんだお前等は」

終が居た。終は何故セシリアと鈴が居るか聞いた。

「たまたま、通りがかったから／／／」

「私は、楓さんの様子を見るに／／／」

理由を述べる二人だが顔が何故か赤くなっていた。終は冷めた感じ
て言った。

「成る程、つまり百合を咲かせに来たのか？」

終の答えに鈴とセシリアは全力否定した。

「ち、違うわよ!! そんなつもりは無いから!! / / /」
「そうですわ!! それに何故そんな事を! ? / / /」

否定した二人だが実際は

(楓にキスしたいなんて言えないわよ / / /)
(楓さんの胸を揉みたいなんて、言えませんか / / /)

実際考えていることが似ていた。鈴は終に聞き返した。

「そう言うアンタはどうなのよ! ?」

効果音が付くくらいの勢いで指を指した。それに終は軽々しく答えた。

「運動場に行く予定だ」

「？ 何ですか？」

セシリアが聞くと終は笑いながら言った。

「鍛えに行くんだよ 体と心を」

サラツと言った終に鈴が叫んだ。

「あなた、それ以上体鍛えてどうすんのよ！？」

鈴の言った通り終はかなり筋肉質でこれ以上鍛えてどうするつもりか聞くと終は言い返した。

「いや、体が鈍らないように」

「鈍るわけ無いでしょ！？」

そんな漫才じみた会話は置いてセシリアは楓と話していた。

「楓さんはどうしていらしたんですの？」

「ああ、本を読んでいた」

楓は笑顔で答えた。その笑顔にセシリアは少し赤くなった。セシリアは聞いてみた。

「何を読んでらしたんですの？」

「え〜と、少し待ってください」

楓は一度部屋に戻り5冊の本を持ってきた。

「えっ？」

「これらですかね、読んでみますか？」

楓が読んでいた本はどれも参考書並に分厚かった。

「こ、こんなに読んでらしたんですね」
「はい!」

笑顔で答える楓だがセシリアは苦笑いをするしかなかった。と言うより苦笑いしかできなかった。

「はああああ」

「終は何落ち込んでんだ？」

「「「さあ?」「」」

翌日、ため息を吐いていた終を一夏達は見ていた。何故落ち込んでるかは解らんが一夏は終に話しかけた。

「どうしたんだよ終、ため息なんか吐いて？」

「一夏か、いや実はな」

「そんな事で悩むな〜!!」

「そんな事？」

一夏の言葉を繰り返した終の目はハイライトが消えていた。しかも右手にハデスを持って振り回していた。

「危ないですよ!! 終さん、止めて下さい!!」

「終、止める!! 教室でそれを振り回すな!!」

楓と一夏が叫ぶが終は止まらずこんな事を言い始めた。

「一夏、お前・・・死にたいんだってな」

「言っていないわ!! 何をどうしたらそう聞こえるんだよ!？」

一夏は雪片を出して応戦する。

「乾、貴様!!」

「乾じゃあなえよ!! 俺は乾では無く、織斑、一夏だ!!」

終は黄色い のライダー、一夏は加速するライダーの台詞を言った。

「ディケイドー!!」

「楓さん、ディケイドの要素はあそこにはありませんわよ!？」

「おのれ、ディケイド!!」

箒はどっからか木刀を出して終に向かった。

「箒さーん!!!!!! あなたもでしょ!？」

セシリアは叫ぶが楓はゼウスを取り出した。

「ハアアアアアアアア!!!!!!」

山田先生の言葉と共に二人の生徒が入ってきた。

「失礼・・・うわぁ!？」

「・・・っ!!！」

二人の生徒は終が頭から血を流して倒れてることに驚いたが一夏達は別の事で驚いた。

「自己紹介をお願いします」

「えっ? ほっといて大丈夫ですか?」

「安心しろ、そいつは人間ではないからすぐ復活する」

千冬の言葉に反応するか如く、終が起き上がった。

「俺は人間だ!! 血も赤いし、正真正銘人間だ!!！」

銀髪が赤になるのではないかぐらい血を流し尚終は起き上がった。

「いいえ、私は貴方を人間とは認めたくないです」

起き上がった終に楓は終が人間であることを否定した。

「否定すんな!!」

終は叫んだが千冬に一蹴りされた。

「どうでも良いから席に戻れ黒谷」
「グハア!!」

終は落ち込みながら席に座った。

「あははは、自己紹介しますね」

「ウエ~~~~~イ!!!!!!」

何て叫びだし、女子達は

「男子、三人目!!」

「二人とは違って守ってあげたい!!」

「音梨さんとデュノア君で・・・ハア、ハア、ハア」

「貴女！ 鼻血が出るわよ!!」

色々な反応があった。最後の方は聞きたくないがもう一人の転校生、銀髪で左目に眼帯をして右目は赤、終と同じ髪と目の色だった。

「・・・」

終は自分と同じ銀髪の少女に敵意が籠もった目を向けた。それに気づいたのか同じ様に敵意を終に向けた。

「・・・ボーデヴィツヒ、挨拶をしる」
「はっ、教官」

少女は千冬に向かって敬礼をした。千冬はため息を吐いた。

「・・・ボーデヴィツヒ、ここでは教官では無く織斑先生だ・・・
黒谷もボーデヴィツヒに殺気が籠もった敵意を向けるな」
「はっ！」
「・・・解りましたから睨まないで下さい」

銀髪の少女は向き直り自己紹介をした。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」
「・・・ラウラ・ボーデヴィツヒか」

ラウラが自己紹介をした後終は静かにラウラの名前を口にした。山田先生はラウラに聞いた。

「それだけですか？」

「それだけだ」

素っ気なく返された。

「それじゃあ、席に座って下さい」

一夏はシャルルが気になった。自分と終以外の男子だったからだ。陰が差し見上げるとラウラが居た。

「貴様が」

ラウラは一夏を叩こうとしたが

「止めるよ、黒ウサギ」

終が止めた。今まで見せたことがない目でラウラの手首を掴み人差

し指をラウラの首側面に当てていた。

「貴様、何をする？ それに何故その事を？」

ラウラは聞いたが終は絶対零度の眼差しで言った。

「俺の指がナイフだったら頸動脈斬られて失血死だぜ」
「っ！！！」

ラウラの手首からミシミシと音が鳴っていた。ラウラは少し驚き振り解こうするがそれより先に終がラウラの足を払った。

「がっ！！！」

背中からの衝撃で肺から空気を吐き出した。終は指を首側面から引く形で退かした。

「今のだと、どうなってるのかな？」
「くっ！！」

そんな二人を千冬が止めた。

「黒谷、ボーデヴィツヒ、お前等止めんか」

終は無言で席に戻ろうとするがラウラが言った。

「成る程、貴様が殺戮戦士か、ジェノサイドウォーリアーならあれも説明が付く」

終は喉を鳴らすような笑い声を出した。

「有名だな、俺は」

終は指鉄砲をラウラに構えた。

「よろしくな、似たもの同士な・・・ラウラ・ボーデヴィッヒ」

ジェノサイドウォーリアー（後書き）

感想ご指摘お願いします。

謎の声(前書き)

うわ、やばい方向に行くな、これは

謎の声

「似たもの同士・・・だと？」

ラウラの問いに終は喉を鳴らしながら答えた。

「ああ、俺等は似たもの同士・・・失敗作だ」

終は失敗作の部分を強調した。その言葉にラウラは反論した。

「うるさい！ 私と貴様は違う！！ 同じな訳が無い！！」
「同じだよ」

反論したラウラに返すように終は言った。

「違うんだったら、何故左目に眼帯をしてんだ？」

終はラウラの左目の眼帯を指しラウラは眼帯に触れた。

「失敗作だから、付けてんじゃあねえのか？」

「違う」

「違うんだったら何故だ、付ける意味が無いだろ」

「・・・」

ラウラは何も言えなくなっていた。終は喉を鳴らしながら席に向かい最後に言った。

「そして、絶望の中救われた・・・ほら、似たもの同士だろ」

ラウラからは見えなかったが終は微笑んでいた。

「あー・・・これでHRを終了する！！各自、第三アリーナに向かえ、今日は二組との合同IS模擬戦闘だ、遅れるなよ！！」

千冬の号令で教室は慌ただしくなった。千冬は教室を出る際言った。

「織斑、黒谷、デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だからな」

そうして千冬は教室を出た。一夏と終はシャルルの元に向かった。

「織斑君に黒谷君だよな？ 初めまして僕は」

「後が良い！ 逝くぞ一夏」

「文字がちがう！！ お前は死ぬ気か！？」

「あれを相手に生き残れるか！！」

「生き残ってんだろっが！！」

そんなコントをかましながら一夏、終、シャルルは教室を出た。楓は無表情にラウラを見ていた。

『クスクス』

頭に直接声が聞こえ、その声は自分の声に似ていた。

（誰？ あなたは？）

『クスクス、良いの？ 彼女、貴女のお友達を傷つけようとしたのよ』

何かを楽しんでるかのように話してきた。

（誰？ 何で？）

楓が言う？前に答えた。

『私は貴女、そして貴女は私』

（私は貴女？ 一体何が？）

楓が考えるも声を掛けられて思考を中断した。

「楓、早く行きませんか？」

「あ、セシリアさん？」

「何故疑問系ですか？」

楓は手を振りながら言った。

「い、いえ、それはその」

セシリアは楓の手を取り言った。

「早く、行きませんか？」

「・・・はい!!」

セシリアと一緒に楓はアリーナに向かう。そんな時にまた声が聞こえた。

『クスクス、覚えといて、貴女は私の・・・うふふふ』

酷く冷たい声に聞こえた。

「遅いぞ」

「遅い！？ 授業が始まってるならまだしも」

「ドガ！！」

終は千冬に出席名簿で頭を叩かれた。

「グハア！！」

血を吐き顔を地面にぶつけた。

「ゴガー!!」

顔が地面に埋まった。

「五分前行動だ」

千冬の言ったことに終は地面に顔を埋めながら返事をする。

「い、イエッサー……ガク」

力尽きた終に一夏が叫んだ。

「終、死ぬな!……生きる!!」

「いや、一夏……終は死んでないと思うよ」

一夏の叫びにシャルルがツツコミを入れる。

「早く列べ馬鹿共」

一夏とシャルルは週を運び列に並んだ。列に並ぶと同時に終は立ち上がる。

「運んでくれて有り難うな」

「終！ テメエ！！」

終の言葉を聞き一夏が睨みシャルルが宥める。

「取り合えず、二人共並ぼうよ」

「解った・・・終を殺した後で」

「へ？」

物騒なことを言う一夏に終は腑抜けた声を出した。

「い、一夏？ 何言ってるの？」

シャルルの言葉に一夏は不気味な笑みを浮かべながら答えた。

「いや、ここで殺らないと大変なんだよ、後々な」

遂に雪片まで出した一夏。

「止める！ 一夏止める！！」

なんて事をやってる一夏と終に千冬が出席名簿で叩いた。

「いい加減にしる」

バツコーン!!

出席名簿で叩いた音が響き楓が眩く。

「良い音ですね」

「これより、格闘及び射撃を含めた実戦訓練を開始する!!」

「「「「「「「「「「はい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」」」

「

合同であるため元気よく返事をする生徒たちだが楓はさっきの声を
ことを考えていた。

(あの声は一体？ それに何で私の声に似ていたんだろ？)

楓は声について誰かに相談するべきか悩んでいた。その様子に気付いたセシリアと鈴が声を掛けた。

「楓さん？ どこか具合でも悪いんですの？」

「それだったら、無理しない方が良いでしょう」

「・・・え？」

声を掛けられて楓は驚いた様子でセシリアと鈴に向いた。

「あ、大丈夫ですよ、何でもないですから」

楓は笑って答えるが明らかに作り笑いに見えた。

「楓、無理しないでよ」

「そうですね、何かあれば相談してください」

「お二人とも、有り難う御座います」

楓は微笑んで答えた。

「今日は戦闘を実践して貰おう幸い若さが爆発している奴らが居るからな・・・オルコット！ 鳳！」

「え！？」

いきなり自分が呼ばれた事に驚く二人に楓は謝った。

「ご免なさい、私が悩んでたばかりに」

楓は沈んだ様子で言った。セシリアと鈴は慌てた様子で言った。

「いや、楓は悪くないから！」

「そうですわ、ご自分を責めないでください！」

そう言うと二人は前に出た。千冬は二人にこう呟いた。

「やる気を出せよお前等……。そうすればあいつが相談してくれるかもな」

「やはり！　ここはイギリス代表候補生のこの私が！！」

「専用機持ちの実力、見せてあげる！！」

セシリアと鈴が何故かやる気を見せたのに皆驚いた。そこで二人は何故千冬が楓の事を何故知っているか疑問に思わなかった。いや、そこまで気が回らなかった。何故なら楓が悩んでいることで頭が一杯だった。

「で、誰と闘えばよろしいのですの？」

「何時でも良いわよ！！」

「そう焦るな、お前等の相手は」

何かが飛んでくる音がアリーナに響いた。

「ああああー！！　ど、退いてくださーい！！」

上から山田先生で楓の順番ここで終が呆れた様子で一言言った。

「何時までそのままだ？」

因みに二人共顔は真つ赤だった。楓は慌てて山田先生の上から退くと同時にレーザーが楓を掠めた。楓はその撃った人物を見る。

「せ、セシリアさん、違うんですよ」

「解ってますわ、解りますけど」

楓は涙声でセシリアに訴えるがセシリアは堪えるように手が振るえていて鈴が叫びながら双天牙月をブーメランの要領で投げた。

「楓の馬鹿ー！ー！！」

「じめんなさーい！ー！！」

楓は目を瞑り身構えるが銃撃音が二回鳴り金属音がすると地面に何かが刺さる音が聞こえ楓は目を開けると双天牙月が地面に刺さり銃を構えている山田先生が目に映った。

「大丈夫ですか？ 音梨さん」

山田先生が笑顔で聞くと楓は泣きながら言った。

「大丈夫でしたけど、怖かったです……!!」

ここで殆どの女子は鼻血の海に沈み一夏と箒そしてシャルルは苦笑いして終はセシリアと鈴に説教をしていた。

「たつく、何やってんだよ？ いきなりやられたら誰でも驚くし怖がるわ、解るか？ 本当にお前等馬鹿か？」

「「すいません」」

「俺じゃあねえよ、楓に謝れよ、馬鹿共が」

「「はい、解りました」」

二人は泣いている楓の元に向かった。

「楓、御免ね」

「申し訳ありませんでしたわ、楓さん」

楓は泣きながら返した。

「ひぐ、いえ、ぐす、良いですよ、えぐ、気にしませんから、ぐす」

「うわ、罪悪感がハンパないな・・・にしても山田先生凄いな」

泣きながら答えた楓に終は感想を言った後山田先生に関心の目を向けていた。

「当たり前だ、山田先生は元代表候補生だ」

終の呟きに千冬が説明した。

「結局、代表候補生止まりでしたけど」

山田先生の呟きに終が言い返した。

「けど、代表候補生止まりだとしても、もう少し自信を持って良いじゃないですか」

終に自信を持つように言われて山田先生は少し嬉しそうに言った。

「そんな褒められる事でも無いんですけど、やっぱり嬉しいですね」
「当たり前ですよ、褒められて嬉しくない人は居ませんよ」

千冬が咳払いして全員が千冬を見た。

その後は山田先生とセシリアと鈴が2対1で戦い専用機持ち相手に山田先生は余裕で勝ってしまった。終は二人に冷たく言った。

「二人でやってんのに駄目だろ」

二人は落ち込み楓が励ましていた。千冬はIS学園の教師の強さを示した。その後は専用機持ちがグループリーダーに成りISについて他の生徒に教えていた。

「教えるのは良いが・・・流石にこれは悪夢かよ」

終の周りには結構な数の生徒が居て終は教えるのに骨が折れたとか

謎の声（後書き）

感想ご指摘よろしきお願いします。

もう一人の自分（前書き）

色々ツッコミを入れられそうですが気にしないで下さい。

本編スタート

もう一人の自分

昼休みの屋上

「いい天気で良かった」

終は空を見ながら呟いた。

「さっきから晴れてたたるが」

一夏が終にツツコミを入れた。他にも篤、セシリア、鈴、シャルル、楓が居る。早い話屋上で昼食を食べることに成った話だ。

「お昼は長くないので早く食べましょうよ」
「それもそうだな」

終が弁当を出した後それぞれ、自分の昼食を取り出す。鈴は不意に

思った。

「終、あんた弁当って」

鈴が何を言いたいか気付いた終はへらへら笑いながら答えた。

「自分で作ってんだよ」

「「「嘘お!?!?!」」」

終の衝撃の発言に楓以外は驚きの声を上げた。その反応に終は肩を落としながら話した。

「流石にその反応はキツイぞ・・・まあ、作れないとは言っていないからな」

自慢げに話す終に一夏が聞いた。

「終は何作れるんだ？」

「例えば、カルボナーラ、ビーフシチュー、パエリア、ピザ、スペアリブ、蕎麦とか色々作れる」

「まじかよ、終って以外と料理できたのかよ」

素直に驚く一夏、因みに一夏の弁当は筈が作ったとか。楓は苦笑いしながら言った。

「皆さん、早く食べませんか？」

「・・・そうだよな、早く食おうぜ」

楓は咳払いをして7人仲良く

「いただきます」

「……………いただきます」「……………」

それぞれ自分の弁当を食べる一同。鈴は楓に話しかけた。

「楓、酢豚いる？」

「あっありがとうございます」

鈴の作った酢豚を食べる楓。笑顔で楓は告げた。

「とっても美味しいですよ。腕を上げましたね」

「良かった。美味しいって言って貰って」

セシリアも負け時と楓に話しかけた。

「楓さん。よかったら私のもどうぞ」

「良いんですか？」

「はい。イギリスにも美味しい食べ物があることを知って貰いたくて」

「あ、あの時は」

楓が暗い顔を見るとセシリアは苦笑いしながら言った。

「良いですよ楓さん・・・私も同じような事を言いましたから・・・
それにもう気にしてませんわ」
「そう言われると助かります・・・ではいただきます」

楓はセシリアが作ったサンドイッチを食べた。

「うっ!?!」

サンドイッチを食べた楓は少し顔が青くなっていた。それに気付いた終はセシリアのサンドイッチを手を取った。

「ちょっと、終さん!?!」

セシリアが抗議する間もなく終はサンドイッチを食べた。

「グウ!?!」

終も楓同様に顔が青くなっていた。

「楓さん？ 終さん？ どうかしましたか？」

セシリアは二人に話しかけて楓は笑顔に成って答えた。

「こっ、個性的な味ですね」

楓の返事にセシリアは喜んだ。

「良かったですわ、もう一ついらいますか？」

そう言ってバスケットを向けるが終が言った。

「自分の分が無くなったら困るだろ」

～回想～

「でさあ、シャルルの部屋はどうなるんだ？」

終は部屋に戻るときにシャルルの部屋は何処になるのかが気になった。

「多分、一人部屋とかじゃあないかな？」とシャルル

「でも何処になるんだろうな？」と一夏

「鍵が渡されたりするんじゃないですか？」と楓

「まあ、私達はあまり関係ないだろうな」と箒

「異性が同じ部屋は無いですわよね」とセシリア

「確かに・・・あつたら驚くわよ」と鈴

全員がそれぞれ感想を言っていると山田先生がそわそわしながら来た。

「？ 山田先生、どうかしましたか？」

〜回想終了〜

「……／／／」

未だ話せていない状況。因みに二人とも顔が真っ赤。

「えっと……よろしくね、音梨さん」

シャルルは同じ部屋に成った楓に挨拶をするが楓は

「名前で良いですよ……デュノアさん／／／」

「えっ／／／」

暫く沈黙した後シャルルは笑顔で言った。

「僕もシャルルで良いよ、楓」

「はい、解りました。シャルルさん／＼」

シャルルに笑顔で返す楓。顔はまだ赤い。何故なら楓は異性とはあまり部屋は一緒にならなかったからだ。終もそれなりに常識を持っていて部屋を一緒にする事はなかった。

「シャルルさん、一夏さんの訓練を手伝って貰えませんか？」

「良いけど、どうして？」

シャルルの疑問に楓は素直に答えた。

「一夏さんに射撃を教えるのにとおもっています」

「何で？ 射撃なら楓は得意じゃないの？」

シャルルは返すように疑問を言った。楓は苦笑いをしながら言った。

「射撃は出来るんですけど、教えられないんで」「どうして?」

シャルルが聞き返すと楓は

「射撃は感覚でやっていて、教えるのが難しいんです」

シャルルは楓の言葉を聞いて少し考えた後言った。

「良いよ、僕が一夏に射撃を教えるよ」

シャルルの答えに楓は笑顔で答えた。

「よろしくお願いしますね。シャルルさん」
「うん。よろしく」

そう言って二人は握手をした。

「一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応理解してたんだけどな」

土曜の午後に一夏はシャルルに射撃の訓練を手伝って貰っていた。因みに終はセシリアと鈴で新しい武器の性能テストをしていた。

「何であたし達なのよ!?!」

「そうですわ! 私達以外に居るはずですわ!?!」

セシリアと鈴は抗議するも終はそれを一蹴りした。

「無茶苦茶だしな。特に終が」
「あははははは」

一夏とシャルルは基本的に平和だった。そんなとき楓が近付いてきた。

「お二人共、訓練はどうですか？」
「どっかの馬鹿が居ないから平和だよ」
「それは言い過ぎだよ一夏」

平和な三人であった。セシリアと鈴は終にどうゆうふうになされているかと言つと余りに酷いので音声だけで

「もう少し、うまく避ける！！ それだったら一夏の方がまだましだ！！」
「だったら一夏にしなさいよ！！」
「うるせえ！！ 口答えするな！！」

ドカーン！！

「有り難う、楓」

一夏は二人が名前で呼び合っていることに気づき聞いた。

「そう言えば・・・楓とシャルルって何時から名前で呼び合っているんだ？」

「えっと・・・それは」

一夏の疑問にシャルルが答えようとすると思楓がある一点を見ていることに気が付いた。

「楓？ どうしたの？」

「あれって」

楓が指さした方向を向くと黒いISを身に纏ったラウラが居た。

「あれって、ボーデヴィツヒさんだよな？」

「そうですね・・・それにドイツ第三世代IS『シュヴァルツェア・

レーゲン（黒い雨）『ですね』

ラウラは一夏に向かって言った。

「貴様も専用機持ちとは話が早い」
「何がだよ？」

一夏が聞き返すとラウラは言った。

「私と戦え」
「断る、戦う理由がねえ」

一夏が断るとラウラは大型のレールカノンを一夏に向けて言った。

「貴様に無くても私にはある」
「っ！！」

一夏に向けてラウラはレールカノンを撃とうとするが終がケルベロスを放つ。

「っ!!! 貴様!?!」

「よお、黒ウサギ、いきなり悪いな・・・まあ、お前もいきなりだけどな」

終が放ったケルベロスの弾はラウラには当たらなかったがラウラの注意は終に向いた。

「終さん!?!」

「終!?!」

終は一夏に向かってケルベロスを向けながら言った。

「モテモテってか？ 良かったな、跡形もなく消して貰え」
「言ってることが限りなく怖いわ!?!」

漫才みたいな会話をしている終と一夏を余所に楓は最初の時と同じ無表情でラウラを見た。

（あの人は・・・一夏さんに攻撃しようとした）

その時楓の頭にまたあの時の声が聞こえた。

『クスクス、また彼女は貴女のお友達を傷つけようとしたのよ？』
（傷つける・・・友達を）

261

段々楓の目からハイライトが消えてきた。

『さあ、貴女の大切な友達を傷つけようとしたのよ、彼女は・・・
貴女はどうする？』
（わた・・・しは、どうしたら・・・良い？）

その時アリーナのスピーカーから先生の怒鳴り声が聞こえた。

『その生徒！ 何をしている！？ 学年クラス主席番号を言え！』
「ハッ！！」

大音量で流れた先生の怒鳴り声に楓は正気に戻った。

（私は何を？ 一体何で？）

楓は考えるがラウラと終は話し合っていた。

「・・・興が削がれた」
「ああ、俺もだ」

ラウラは戦闘態勢を解いてアリーナゲートに向かった。

「待てよボーデヴィッヒ・・・一つ聞きたいんだが」
「何だ？」

ラウラは不機嫌そうに終に向いた。

「お前に背負ってる物はあるか？」

「背負ってる物・・・だと？」

ラウラは終の言ったことを聞き返した。終は続けた。

「お前には背負ってる物が有るか？」

「では聞くが貴様にはあるのか？」

ラウラの問いに終は遠い目をして話した。

「俺は罪を背負ってる。だから俺は戦うんだよ」

ラウラは終が何故罪を背負っているか聞くこととしたが終は続けた。

「俺の罪をお前に教えるつもりは無いからな」
「!?!」

ラウラは自分の考えていたことが終に何故解ったのか気になった。

「大体予想が出来るからな」
「ふん」

ラウラは鼻で笑った後アリーナを出た。終も何も言わずアリーナを出た。

「なあ、この二人はどうするんだ？」
「ん？」

箒の言葉を聞いて一夏とシャルルが振り向くとそこにはセシリアと鈴……だった物が倒れていたと言っておく。

「ふう、・・・」

楓は部屋に着いてベッドに身を投げた。シャワールームの電気が付いていてふっと思いついた。

「シャンプー・・・切れてたんだ」

電気が付いていることには気が回らなかった。

「ハア、えっと・・・シャンプー、シャンプーっ」と

楓はシャンプーを片手にドアを開けようとしたが手を掛けるより先にドアが開き楓は初めて誰かが入っていることに気づいて顔を上げるとシャルルが居た。

「あっ／＼／」

楓は自分の目を疑った。・・・シャルルが居るがその体つきは・・・
・・・女性だった。

「えっと・・・これ、シャンプー／＼／」

「あ、有り難う／＼／」

楓はシャルルにシャンプーを渡すとドアを閉めてベッドに座った。

267

(何か・・・今日は凄く疲れるな・・・シャルルさんは女の子で、
後は私の頭に声が響くことぐらいかな?)

少し考えるとまたあの時の声が聞こえた。

『クスクス、こんにちは・・・もう一人の私』
(えっ?)

楓は驚いた。自分が考えていたときに丁度その声が聞こえたからだ。

『クスクス、そんなに驚かないでよ、ねえ・・・楓』
(誰? 誰なの?)

その声はしばらく考えた後告げた。

『^{もみじ}椀で良いわよ、楓』
(貴女は一体誰なんですか?)

椀は薄い笑みを浮かべて(多分、浮かべてる)言った。

『私はもう一人の貴女よ』

もう一人の自分（後書き）

次回はシャルルの真実と終の罪、そして楓が抱えている恐怖が明らかになり！！

感想、ご指摘お願いします。

真実と恐怖と罪（前書き）

終「オーズのタイトルかよ!?!」

終以外「「本編スタート」」

終「俺は無視かー!?!」

真実と恐怖と罪

(もう一人の・・・私?)

楓が驚いてると椋は追い詰めるかのように話した。

『ええ、私はもう一人の貴女よ』

楓はただ震えているだけだった。椋はつまらなそうに呟いた。

『まあ、また何時か会いましょうか？ 楓 ばいばい』

そこから椋の声は聞こえなくなったが楓はまだ震えていた。そして
謔言うわごとのように呟いた。

「何なの・・・私は？ 一体何なの？ 違う、違う、私は、私は」

「……僕が男の振りをしているのはデュノア社の社長、僕の父からの命令なんだ」
「命……令？」

楓が聞くとシャルルは頷きながら答えた。

「そつ、僕は本妻の子供じゃあ無いんだ」
「つまり……愛人の子供……ですか？」

楓が言うとシャルルは苦笑いをした。

「うん、お母さんが死んで父の部下が来て、その時に色々検査してIS適性が高かったから非公式だけどデュノア社のテストパイロットなんだ」

悲しそうに話すシャルルの話を楓は黙って聞いていた。

「父に会ったのは二回……話した時間は一時間にも満たなかった

よ

楓は今にも泣き出しそうな顔をしながらシャルルの話を聞いていた。

「それからだよ、デユノア社の経営危機は」

「・・・第三世代の開発の遅れ、ですよね・・・ラファール・リヴァイブは第二世代ですから」

楓の言葉を聞いてシャルルは乾いた笑いをした。だが楓は愛想笑い
は出来なかった。逆に涙を耐えていて目尻には涙が溜まっていた。

275

「そつ、いくらISのシェアが世界三位だからって、リヴァイブは
第二世代だから、第三世代の開発に着手しても」
「情報の少なさ、時間不足ですね」

シャルルの言葉を繋ぐように話す楓。そんな楓を見ているシャルル
は少し悲しそうに見ていた。

(震えてるな、怒ってるってより・・・怖がってる?)

シャルルの思ってる通り、楓は怖がるように震えていた。理由は桜の存在が楓を更に不安にさせていた。

「・・・広告と一夏の白式、終のブラックファングのデータと本人のデータを盗んで来いって言われたんだ」

「だから・・・男の振りを？」

「うん・・・女だってバレたから本国に呼び戻されるし、良くて牢屋行きだよ」

シャルルの言葉に楓は下を向いた。肩が震えていた。

「か、楓？ どうしたの？」

シャルルが聴いてみると楓は顔を上げた。目からは涙が溢れていた。

「そんなのは、駄目ですよ、シャルルさんが、可哀想ですよ」

楓の声は震えていてシャルルも楓が涙を耐えているのが解った。

「楓・・・ありがとう、けど良いよ」

「良くないですよ!」

楓はシャルルの言葉を否定した。シャルルは楓が怒鳴ったことに驚いた。

「そんなの、良くないですよ、何で、何で、平気なんですか？」

「・・・」

楓の問いにシャルルは黙ってしまい、楓は泣いていた。

「そんなの、嫌です、シャルルさんが、傷つく、必要が、無いのに」
「・・・楓」

楓は何かを思い出したような顔をした。シャルルは楓の顔を見て首

を傾げた。

「学園の特記事項に学園在学中の生徒はあらゆる、国家、企業、団体の接触を禁止する。つまり、三年間の間に方法を考えれば」

楓の顔が少し明るくなり、シャルルは苦笑いをした。

「凄いね、学園の特記事項って五十五個もあるんだよ」

「たまたま、思い出したんですよ」

シャルルは楓に笑顔で礼を言った。

「ありがとう、楓」

楓が微笑んでいると柊の声が頭に響いた。

『どうするか、考える？ 楓、こつ言つ時は壊せばいいのよ』
「!?!」

楓は突然、頭を押さえた。その様子にシャルルは驚き声を掛けた。

「楓!?! どうしたの!?! 楓!?!」

「あ、ああ」

楓の頭に怯える子供とそれを囲む二人の大人が写る、子供は何かを言っているが大人はそれを聞かずに殴る蹴る等の暴力を振るっていた。

【お願いだから止めて! ごめんなさい! ごめんなさい!!--】
「あ、ああ、ああああ」

それと同時に流れってくる言葉と感情、楓の目が段々と虚ろになっていた。

『うふふ 怖い？ 痛い？ 苦しい？ 辛い？・・・楓、絶望してよ、楽になるから・・・ね』
「嫌、止めて、嫌だよ」

流れてくる風景と言葉、そして感情、それら全てが痛み、恐怖、恨みなどの負の感情。楓は更に震えている。シャルルは楓に声を掛ける。

「楓、どうしたの！？ 楓！ 楓！！」

楓は返事を返すどころか過呼吸を起こし始めた。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」

楓は胸に手を当てて苦しそうに呼吸をしている楓にシャルルは楓の今の状態を見た。

（何かが原因で過換気症候群を起こしてる！？）

シャルルは部屋を見渡してある物を探していた。

「！！ あった！」

シャルルは紙袋を取った。その紙袋を楓の口に当てた。

「楓、これを口に当てて呼吸して！！」

楓は数回呼吸すると段々落ち着いてきた。

「ハア、ハア、ありがとうございます、シャルルさん」

息を途切れ途切れに喋る楓にシャルルは心配した様子で言った。

「楓、大丈夫？」

「大丈夫です。御心配をお掛けしました」

楓は笑顔を作るが顔と唇が少し青かった。シャルルはそんな楓を見て聞いた。

「本当に大丈夫？ 何か無理してない？」

もうここまで来るとお母さんだ。楓は弱々しく答える。

「大丈夫ですよ、心配しすぎですよ」

笑って答えたが誰が見ても無理をしていた。シャルルは楓の頭を撫でた。

「シャルルさん？」

楓は首を傾げているとシャルルは優しく言った。

「無理しなくて良いよ・・・辛かったら僕が相談に乗るから、だから一人で抱え込まないで」

楓は今までの事をシャルルに話すことにした。

「実は・・・」

楓はシャルルに全てを話した。自分が記憶を失っていること、椀のこともシャルルは楓の話を黙って聞いた。

「・・・」

シャルルは楓の話を聞いた後、ある可能性を言った。

「もしかしたら、幼少期に何かあって、もう一つの人格が出たのかも」

「幼少期に……ですか？」

シャルルが言ったことを楓は考えるが思い当たることがない。記憶が無く二重人格だからなおのこと不安が広がる。

「大丈夫だよ」

シャルルが楓に優しく微笑む。

「シャルルさん……私」

楓は震える声でシャルルに話す。

「怖いです。自分が」

シャルルは黙って楓の話聞く。

「私が誰なのか・・・解らなくて、怖いんです」

楓は話す度に震える。

「自分が誰なのか知りたい、けどそれを知るのも・・・怖いんです」

楓は震える声で必死に話す。シャルルはもう話させたくはなかった。

「もう良いよ、楓」
「あっ」

シャルルは気付いたときには楓を抱きしめていた。

「言わなくて良いよ、辛いなら、言わないで」

シャルルは抱きしめてる腕の力を強めた。

「僕が知ってる楓は、優しくて、綺麗で、誰かのために泣いてくれる」

今、離れたら目の前にいるはずの楓はどこかに行ってしまったのでは？ そんな不安がシャルルの頭をよぎる。

「辛かったら、僕が相談に乗るよ」

小さな子供のように震えていた楓はシャルルの背中に手を回した。

「楓は……一人じゃあないよ」

楓の目から涙が出てくる。

「僕が居る」

目の前にいる。自分に優しくしてくれる。シャルル・デュノア

「終が居る」

不器用だけど、実は優しい、銀髪と赤目の男子。黒谷終

「一夏が居る」

強くなるうと頑張るが、優しさを忘れない、男子。織斑一夏

「みんなが居る」

笑い掛けてくる人たち、箒やセシリア、鈴、いろんな人が側にいた。

「一人じゃあないよ、一人にしない」

優しくけれど力強く聞こえるシャルルの声、楓は気付いたら決壊したダムのように泣いていた。

「泣き止んだ？」

「はい」

目の辺りが赤くなっているが自然な笑みを浮かべる楓、そんな楓にシャルルは微笑んだ。

「何時でも相談に乗るからね」

「……ありがとうございます」

すると、ドアをノックする音が聞こえた。シャルルがドアを開けると千冬が居た。

「……デュノア、いきなりだが、別の部屋が空いた。……解るな」

シャルルは今気付いた。まだ男の振りをしてたんだ。

「は、はい」

荷物を纏めて部屋を出る準備をするが……捨てられた子犬のようにシャルルを見る楓。非常に、視線が痛い。物理的な力があれば楓の視線はシャルルを射抜く力を持っているだろ。

「「「」」」」

そんな視線にシャルルだけでは無く、千冬ですら言い出せない。

「・・・」

楓がシャルルの荷物を纏めるのを手伝った。

「か、楓？」

「・・・男の子と女の子が同じ部屋は駄目ですよね」

楓は知らず知らず、上目遣いの涙目を使っていた。

「!」

シャルルは罪悪感を感じた。千冬が咳払いをして慌てて我に返った、シャルルと楓。

「……大丈夫だよ、何時でも会えるよ」

シャルルの言葉に楓は静かに頷き、シャルルは部屋を出た。楓はベツドの上で体育座りをした。

「……ありがとうございます」

楓の弦きは一人になった部屋に痛いほど響いた。

「……」

一夏と終は部屋に帰ってきてからずっと無言だった。

「」
「」
「」
「」

一夏はベッドに寝そべっているが終は何か作業をしていた。一夏は試しに聞いてみた。

「終、お前、何やってんだ？」

「あ？ ああ」

終は一夏の方に向いて言った。

「エターナルムーンの新しい武器の微調整」
「新しい・・・武器？」

終は一夏にデータを見せた。

「武器の名は『ポセイドン』、まあ、三叉槍だ」

「お前のハデスみたいなものか？」

終は苦笑いをしながら言った。

「ハデスは斬るだけだけど、ポセイドンは斬ると突くだ」

ああ、と言って一夏は納得した。一夏は聞いた。

「終、お前の罪って何だ？」

「・・・」

一夏の問いに終は真面目な表情になった。

「・・・聞いてどうする？」

一夏は終に怒鳴った。

「何でお前、一人で背負うんだよ!!」
「・・・」

一夏は終の胸倉を掴んだ。

「一人でカッコつけんな!! 仲間だろ!!」
「!!」

一夏が仲間と言ったら終は目を見開いた。

「仲間なのよ・・・何で一人で抱え込むんだよ!!」

終は一夏の手を振り払い、言った。

「仲間……か……悪いな、話すよ、俺の罪を」

終は話した。自分が戦場にいたことを、そして悲しそうに言った。

「俺は沢山の命を奪い、守れなかった」

終の目には後悔と罪悪感があった。

「だから、生きて償うんだよ、俺の罪を」
「……デカいな」

一夏は呟く、終の罪を背負う覚悟を確かめながら

「俺はな、親に捨てられた……俺だけじゃあ無い、千冬姉も」
「そっか……あゝあ、スキッリした」

真実と恐怖と罪（後書き）

感想、御指摘お願いします。

黒対黒、時々銀（前書き）

久しぶりの更新

黒対黒、時々銀

「……」

「返事がない、ただの屍のようだ」

「……髪が赤になったな、逆に赤すぎるな」

上から終、一夏、箒、そして、楓、シャルル、セシリア、が苦笑いをしていた。なぜこんな事になったかと言うと、一夏と終は前日雑談をしていた。一夏はすぐ寝れたが終はポセイドンのデータを纏めていた。睡眠をあまり取れず寝不足に。授業中居眠りをしそうになると千冬に出席名簿で頭を叩かれ、今に至る。

「……楓さん、学年別トーナメントに向けて、特訓しませんか？」

セシリアの提案に楓は笑顔で答えた。

「私、何かでで良ければ」

「では行きましょう!!」

セシリアは楓の返事を聞くと楓の手を掴みアリーナへ行った。

「人さらいだー！！」

シャルルの声が響く、正しく、お母さん。

アリーナに着いた楓とセシリアはISスーツに着替えて用意ができていた。

「楓さん……もしよかったら、実戦訓練を一緒にしますか？」

セシリアの言葉を返したのは楓では無く。

「あんだじゃあ、相手に成らないでしょうが」

ISスーツに着替えた鈴だった。

「あ、鈴さん」

楓は鈴を見て手を振った。セシリアは少し不機嫌そうにした。

「あら、何ですの・・・鈴さん」

「学年別トーナメントに向けて特訓よ、それしかないでしょ」

鈴は呆れた様子で言った。

「鈴さんも一緒に特訓しますか？」

楓の言葉にセシリアは

「楓さん……二人の約束では？」

「なっ!？」

セシリアの言葉に鈴は驚愕した。しかもセシリアは二人の部分を強調した。

「じゃあ、私とやろうよ、楓」

鈴は楓の手を掴み言った。勿論、セシリアが黙っていなかった。

「鈴さん……楓さんをお誘いしたのは私ですわよ？」

「あんたより私の方が良いわよ!」

「楓さんは射撃をしますから私の方が良いですわ!」

「私は遠近両方出来るから、私の方が良いわよ!」

セシリアと鈴はISを展開して、睨み合っていた。

「どうやら、どちらが上か、ハッキリしましょうか」

「偶然ねえ、丁度、私も同じ事を思ってたのよ」

セシリアはスターライトmk?を構えて鈴は双天牙月を構える。

「二人共、止めて下さい!!」

悲鳴じみた声を出す楓を無視してセシリアと鈴が戦闘態勢に入り、ぶつかり合おうとすると二人の間に攻撃が入り、砂煙が上がる。

「・・・黒い・・・IS」

学園内で黒い専用機は終のブラックファンク以外に一機、ラウラのシュヴァルツエア・レーゲン。

「ちょっと、あんだ、危ないじゃない!!」

鈴の抗議にラウラは無視してブルー・ティアーズと甲龍のデータを見ていた。

「イギリスのブルー・ティアーズと中国の甲龍か・・・データで見た方がまだ強そうだった」

その言葉に二人は怒りを感じた。それもそうだ、データで見た方が強いと言われ怒りを感じないわけがない。

「何？ あんた、転校早々、ボコボコにされたいの？」

「鈴さん、そんなに苛めては可哀想ですわよ」

二人はラウラを挑発したが逆にラウラに挑発される。

「挑発ならもう少し上手くやれ・・・来い、格の違いを教えてやる」

ラウラの目は自信に満ちていた。楓は黙ったまま三人を見ていた。その顔は不安に満ちていた。

「頭がクラクラするけど、お陰で目が覚めたな」

（（その前に良く生きてたな）（）

終の言葉に三人は同じ事を思った。一夏は終にある事を聞いた。

「なあ、終・・・ポセイドンって」

「ああ、後はアイツが慣れるだけだ」

一夏の問いに終は即答した。すると数名の女子がアリーナに向かって走っていた。

「何だろうな？」

「」「」「ああ？」「」「」

終は三人に聞いてみるが三人も首を傾げる。少し女子の会話が聞こえてきた。

「代表候補生がアリーナで決闘してるって本当？」
「本当らしいよ、行ってみよ」

女子の会話を聞いた終の表情が険しくなった。

「・・・行くぞ」

終は一言、言いつと走り出した。慌てて三人も付いて行く。

アリーナに付いて終達が見たのはラウラに一方的にやられている、セシリアと鈴の二人だった。

「・・・不味いな」

「どうゆう事だ？」

終の呟きに一夏が聞いた。その時、鈴がラウラに向かって龍砲を放った。

「ふん・・・無駄だ」

ラウラは避けるわけではなく、右手を前に出した。すると龍砲が消えた。

「A I C ! ? 」

「A I C ? 何だよそれ？」

シャルルが言うと一夏が聞き、終が答えた。

「アクティブ・イナードナル・キャンセラー……別名、習性停止
結界……ISに搭載されてるPICを使って任意の対象を停止さ
せるんだ」

「……そうか」

「解っているのか？ 一夏」

箒が聞くと一夏は三人の戦いを見ながら言った。

「見れば解る」

「……」

終は横目で一夏を見たがすぐさま三人の戦闘を見た。

「……ねえ、あれって」

シャルルが指さした方向を見るとグラウンドに座り込んでいる楓が居

た。

「何でアイツはあんな所で座り込んでるんだ？」

終達が楓に気を取られてる隙に爆発音が聞こえた。

「何だ!？」

「ミサイルだろ、しかも至近距離」

一夏達が慌てて音の方を見るが終は冷静に見た。

「ふん、こんな物か？」

煙が晴れて無傷のラウラが居た。

「……無傷か、やるな、アイツ」

ラウラはワイヤーブレードで二人を捕まえ自らの方へ寄せて一方的に攻撃し始めた。

「酷い、あれじゃあ、シールドエネルギーが持たない!!」

「あれでは二人の命に関わるぞ!!」

「くっ!!...っ!!」

シャルルが声を上げ、箒が状況を言い、一夏は終の方を見るが終はその場にいなかった。

「いや、止めて」

座り込んでいる楓は静かに呟いた。

終は左手を持つている、ケルベロスをラウラに向けた。

「・・・覚悟しろよ、手加減はしねえからな!!」

終はラウラに右手に持っていたハデスを振るった。

「くっ!!」

すぐさまラウラはプラズマ手刀で防ぐが勢いに押されて吹き飛ばされた。

「まだまだ、まだ終わらないぞ!!」

終は更にケルベロスをラウラに放ったが停止結界で防がれる。それを見ていた楓の頭に杖が話しかけてきた。

楓は叫びながらエターナルムーンを展開してラウラに突っ込んだ。

「っ！！！」

「なっ！！！」

攻撃を仕掛けられたラウラだけではなく終も驚きの表情をした。そんな二人を気にせず楓はラウラに向かってポセイドンを振るった。

「ちっ！」

ラウラはすぐさまプラズマ手刀で防ぐが楓は右手に持っているルシファーを振りかざした。

（しっまた！！）

ラウラは目を閉じるが何も起こらず代わりに金属音が鳴った。

「……」

ラウラは目を開けるとハデスでルシファーを防いでいる終の姿があった。

「貴様、何故？」

「勘違いするなよ、俺はコイツを止めるためにお前を助けただけだ」

終は相変わらず敵意の目をラウラに向けていた。

「……二人共離れて!!」

上空から声が聞こえ見上げるとライフルを構えたシャルルが来ていた。

「ふっ」

「ハアアア!!!」

「!?!」

二人はそれぞれ力を入れて距離を置きその拍子に楓は無防備に近い状態になった。

「ごめん」

シャルルはそう呟きながら引き金を引いた。無数の弾丸が楓に降り注いだ。

「終!!!」

「一夏」

白式を展開した一夏が終とラウラの元に来た。

「どうなんだ？ こんな弾丸の嵐で大丈夫か？」
「流石に無傷ではないな」

一夏とラウラは気を緩めるが終はまだ煙が立ちこめている場所にケルベロスを放った。少しして金属音が鳴った。

「・・・やっぱりな、一夏、ラウラ・ボーデヴィツヒ、気を抜くな」

終はすぐさま構えてそれを見た一夏達も構える。

「終！！」

その場にシャルルも加わる。煙が晴れるとそこにはポセイドンを回して弾丸を防いでいた楓が無表情のまま居た。

「嘘！！」

「マジかよ」

「ちっ」

「・・・」

シャルルはあの弾丸の嵐を三叉槍一つを回しただけで防いでいることに驚き、一夏はそれに啞然として、ラウラは舌打ちをして、終は黙っていた。

「・・・ああ」

楓がポセイドンを構えるとポセイドンの刃から銀色に光が出た。

318

「何だあれ!？」

「『ムーンブレイカー』、エターナルムーンの零落白夜」

終は静かに呟いたが一夏の耳に聞こえていた。

「何でそんなもん付けたよ!？」

「・・・」

三人に睨まれて終は間を置いてこう言った。

「面白そうだから」

三人同時に転けたが直ぐに楓を見た。楓が近づきポセイドンを振り下ろすと金属音と聞き覚えのある声が聞こえた。

「いい加減にしろ、練習熱心なのは良いがアリーナを壊されたら困るんだが」

ISの近距離ブレードを生身で使い、ポセイドンを防いでいた。そのまま楓は気を失った。

「全く、学年別トーナメントまで私闘を禁ずる。良いな？」

四人は黙りながら頷いた。千冬は気を失っている楓を見て言った。

「怪我人と音梨を保健室に連れていけ」

その言葉を聞いて一夏達はセシリア達を保健室に運んだ。

保健室でセシリアと鈴は怪我の治療をしたが楓は元々気を失っただけでベッドで寝ていた。

「・・・ハア、何やってんだよ」

終は寝ている楓を横目で見たが直ぐ二人を見た。二人共同体に包帯が巻かれていた。

「別に助けってくれって言つてないのに」
「あの後、逆転しましたわ」

そんな二人を終はあきれた目で見た。

「馬鹿か？ まあ、学年別トーナメントは出れねえな」

終は二人にISの損傷レベルがCである事を伝えて説明が終わった後、像が大群できたぐらいの地響きが鳴り、大勢の女子が保健室に駆け込んできた。

「何だよこれ？」

その後はペアになるように迫られた三人だが終は一夏と組、シャルルは楓と組むことで何とかすんだ。

そして、学年別トーナメントの当日、トーナメント表を見た終の一言は

「最悪だ」

一回戦は楓、シャルルペア対箒とラウラのペアだった。

黒対黒、時々銀（後書き）

感想、ご指摘よろしくお願ひします。

学年別トーナメント(前書き)

学年別トーナメント編

学年別トーナメント

「……………」

ラウラは楓を睨んでいたが楓は怯えた表情だった。

「楓、大丈夫？」

「は、はい」

シャルルの問い掛けにも少し声が震えていた。

「さうして、面白くなりそうだな」

そんな状況に終は不適な笑みを浮かべた。

楓、シャルル、ラウラは専用機を展開して箒は打鉄を身に付けていた。

「スー、ハアー・・・よし」

楓は深呼吸をして右手にルシファー、左手にポセイドンを構えた。それに続いてシャルルはアサルトライフル、箒は近距離ブレードを構え、ラウラも構える。

（平常心、平常心・・・大丈夫、私は一人じゃあ、ない！！）

楓が気合いを入れると同時に試合開始のブザーが鳴る。

「私もいるぞー!」

箒は楓に近距離ブレードで楓を攻撃しようとするが

「させないよ!」

シャルルが箒に向かってアサルトライフルを連射する。

「ヤアアアアアアア!」

楓はラウラと距離を取り、箒にルシファーを振りかざし箒は近距離ブレードで止める。

「フツ、ハア、ヤアアアアアア!」

「ラウラは仲間は無視だな」

終は試合を見て思った。隣に一夏やセシリア、鈴が居る。

（お前等はどつ戦うかだ・・・楓、シャルル）

一度一夏達を見るが直ぐ楓達を見た。

「いつけえ!!」

楓はルシファーとポセイドンを仕舞い、両手にはゼウスが握られていた。

「チツ!!」

ラウラは放たれたエネルギー弾をすべて避けた。

「まだまだ!!」

「!?!」

シャルルがアサルトライフルでラウラを攻撃するが停止結界で防がれる。

「無駄だ」

「後ろがから空きです!!」

「しまった!?!」

楓がルシファーでラウラを攻撃するが箒が近距離ブレードを楓のルシファーを弾いた。

「私を忘れるな!!　ハアアア!!」
「キヤア!?!」

箒は近距離ブレードを振るうが楓はポセイドンで防ぐが勢いが殺せず吹き飛ばされる。

「ハアアア!!」

箒は楓に近づくがシャルルがライフルを放つ。

「くっ!!」

暫くすると打鉄から煙が上がり、戦闘続行不可能の知らせが入る。

「くっ!!」

盾が外れて69口径のピルバンカー、灰色の鱗殻グレイ・スケールが出てくる。

「なっ！！ 盾殺し（シールド・ピアース）だと！？」

シャルルは至近距離でラウラに放つ。

「うわ、えげつねえなあ」

見ていた終達は苦笑いをしていた。

(私は・・・こんな所で・・・負けてられない!!)

遺伝子強化体C-100371それがラウラ・ボーデヴィツヒと言う存在。戦闘に関する様々なことを覚え、軍の中で最強になるがIS適合のために左目にナノマシンを埋め込まれた。だが、一切、危険はないはずだが、常に『境界の目』が発動した状態になり、落ちこぼれに陥った。

(私は・・・私は、負けてられない)

そんなラウラを絶望から救ったのが千冬だった。ラウラはある日、千冬にどうして強いかを聞いた。千冬は微笑みながら自分の弟の事を話した。

(違う、私の目指してる貴女は、凛々しくて、堂々としている・・・だから、私は倒す、織斑一夏を、どんな手を使っても)

それ故、ラウラは力を求めた。

込んでいった。

「ラウラさん!？」

楓は目の前で起きてることに目を疑った。楓だけではなくシャルル、観客席にいる一夏達もだった。シュヴァルツェア・レーゲンはラウラを飲み込むと形を変えていった。

「嘘・・・」

「何、あれ？」

ラウラを飲み込んだ物はある形をした。必要最低限の装甲しかない四肢、何より手に持っている武器に目が行った。

「雪片・・・」

一夏が持っている雪片だった。

「楓!!!」

「えっ、キヤアア!?!」

少し、ボーっとしていた楓はシャルルの声でハッとしたが反応が遅れて左腕を切られた。白い腕から赤い血が出ているのがハッキリと見えた。

「放せ!!! 俺はあいつをぶん殴りに行くんだ!!!」

「終さん、放して下さい!!! 私はある方を黄泉の国へ送らなくては!!!」

「終、放しなさいよ!!! 私はある方を肉片にしなきゃ気が済まないのよ!!!」

「お前等は落ち着け、それとセシリアと鈴は殺人だ」

上から一夏、セシリア、鈴、終の順番、一夏は雪片を握っているときに、セシリアと鈴は楓の腕から血が見えたときに暴れ出した。

「一夏は良いとして、お前等二人を放したらマジでラウラ・ボーデ
ヴィツヒを殺しそうだ」

終はそんな三人を一人で止めていた。

「一夏は落ち着け、そして、二人を止めるのを手伝え」

暫く、鼓膜に響く緊急用の放送が流れる。

『非常事態発生！ 全試合を中止！ 状況をレベルDと断定、鎮圧
のため教師部隊を投入する！ 来賓、生徒は直ちに避難すること！』
「・・・教師部隊で足りるかだ」
「・・・えっ！？」

放送が入った後終の呟きに一夏達は驚いた。

「それはどごゆご事ですの?」

終は目を閉じて言った。

「ここは楓達を信じろ」

「っ!」

「楓、大丈夫!?!」

シャルルが楓に近寄るが楓の頭に桜が話しかけてきた。

『痛い? 楓』

(桜……さん)

楓はラウラを見ていた。椋はそつと呟いた。

『このままあの子をほっといて良いの、かしらっ?』

楓の目が段々、虚ろになっていくそれにつれて楓の意識も朦朧としてきた。

「うっ」

『貴女がやらないなら、私がやるわよ』

楓は自分の力でこの事態をどうにかしようとしていた。

(だ……め……私は)

楓が意識を失いそうになったときシャルルが声を掛けた。

「楓！ しっかり！！」
「シャルル……さん」

シャルルだけではなく箒も楓に声を掛けた。

「しっかりしろ！！ 楓！！」
「箒さん」

二人を見ると楓は立ち上がった。

「シャルルさん、箒さん……ラウラさんは私が止めます」

ラウラの周りには教師部隊が居るが楓はポセイドンだけを出してムーンブレイカーを発動した。

「お前は、何故そんなに強いんだ？」

『強くないですよ・・・今も昔も弱いままです』

「弱いのか？ 十分強いだろ」

『強くあるつもりですけどよ・・・私は』

怯えた声で呟っていた。

「お前は、何を恐れているんだ？」

『記憶であり、記憶がない自分を』

「……？」

最後に楓は笑顔で話す。

『私は、怖いから……守りたいんです、ラウラさんも、他の皆さんも、守りたいんです』

ラウラは思った。「だったら私が守ってやる、弱く脆い、お前を……私、ラウラ・ボーデヴィツヒが」ラウラは胸に誓いを決めた。

椛は一人考えていた。

『どつやって、楓を絶望させますか』

椛は楓の負の感情から現れた人格、元々楓は負の感情と言つ感情を
持っていないかった。

『まっ、後で考えよ』

椛は不気味な笑いをした。何れ、自分の望む展開を求めて笑った。

学年別トーナメント（後書き）

感想、ご指摘よろしくお願ひします。

夕日に照らされる記憶、星に輝く思い（前書き）

終の過去、は無視で。

夕日に照らされる記憶、星に輝く思い

「う……」

瞼を開ければ夕日に照らされた天井が見えた。

「私に……何が起きたんですか？」

ラウラは横にいた、千冬に聞いた。千冬は一度ため息をついて話した。

「一応、重要案件、機密事項であることを留意しておけ……VTシステムは知ってるな？」

「はい。正式名称、ヴァルキュリー・トレース・システム。でも、確かそれは……」

「ああ、アラスカ条約でどの国や企業で研究、開発のすべてが禁止されている、が何故かお前のISに積まれていた」

ラウラは視線を落としてベッドのシーツを握っていった。

「私が・・・望んだからですね」

千冬は一度ため息をついて言いたいことを言った。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はい!!」

いきなり、名前を言われてラウラは驚いて千冬を見た。

「お前は誰だ？」

「私は・・・」

ラウラが答えに息詰まると千冬は微笑みながら保健室を出た。

「何者でもなければ、今からラウラ・ボーデヴィツヒだ」

千冬は最後にラウラにこう言った。

「お前は私には成れないぞ」

千冬と入れ違いで保健室に終が入ってきた。

「よっ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「黒谷・・・何故？ここに」

終はベッドの近くにあった椅子に座り、真剣な表情で話し始めた。

「俺の過去は少なくとも知ってるよな？」

「ああ、お前程、有名な奴は居ないぞ」

終はラウラの答えにりと笑った。

「だよな、俺程・・・命を奪った餓鬼は居ないからな」

終は悲しそうな目をして話しだした。

「元々、俺も遺伝子強化体だ・・・それに加えて肉体強化すらやられた」

「何故だ？」

終はため息をついて何時もどろりのヘラヘラした笑みを浮かべた。

「男の体が頑丈だからだ・・・女だと耐えられないしな」

「・・・どんな事をされたんだ？」

聞いてみようとしたラウラに終は不適な笑みを浮かべた。

「良いのか？ 聞いたら精神がおかしくなって・・・だな」

終は最後の方はラウラの耳元で言った。それを聞いたラウラは顔が真っ青になって首を振った。

「まあ、初めは効率よく兵器を使う訓練だったり人体を破壊することだったり、大体それで2年・・・7歳までやってたな」
「つまり、5歳から始めたのか？」

ラウラの問いに終は苦笑いしながら答えた。

「7歳から9歳まで、戦場にいた」

終は遠い目をして思い返していた。

「9歳から10歳までは辺りをフリフリしてよ」
「2年間居たのか、戦場に」

ラウラの問いに終は今度はため息をついた。

「話の腰を折るな」

「あ、すまん」

呆れた顔で終が言うとラウラは素直に謝ったが終は苦笑いしながら答えた。

「まあ、気にしてねえ」

終は一度咳払いをして言う。

「10歳の時に会ったんだよ」

「出会った？ 誰にだ？」

終は沈み掛けている夕日を見ながら言った。

「束さんだ」

「まさか!？」

終が名前を言うとラウラは驚愕した表情になった。

「篠ノ之箒の姉、篠ノ之束さん」

「篠ノ之博士!？」

ISを作りだした人物、篠ノ之束、現在行方が解らない人物、終はその人物に5年前に出会ったと言う。

「俺は束さんに出会って、その2年後、今から3年前、音梨楓に出会った」

終はその時のことを話した。

「楓は出会ったときは俺等に警戒心バリバリだったよ」

終はその時感じたこと思ったことを話し出す。

「最初の頃は俺は誰にも心開かず、楓は警戒心の余り話さず、頼らず、東さんも苦労したのかな？ って今も思う」
「今のお前達からは想像が出来ない」

終は苦笑いしながらラウラを見た。

「時間が経つにつれて、だ」

終はラウラに最後に言った。

「まあ、俺は俺、お前はお前、楓は楓だ」

そう言って終は保健室を出た。

「
　　」

楓は屋上に座りながら、歌を唄っていた。

「
　　」

辺りは暗くなり空には星が見えていた。星を見ながら歌を唄っていた
楓に一人が近づいてきた。

「楓、隣いい？」

金髪の柔らかい声で話しかけてくる人物。

「シャルルさん」

楓は声を掛けられて初めてシャルルの存在に気づいた。

「あっ……／＼／」

自分の歌を聞いてきたことに気づいて顔を赤くしていた。

「歌、聞いてましたか？／＼／」

楓が恥ずかしながら聞くとシャルルは笑みを浮かべながら答えた。

「うん、バツチリ・・・歌、上手いんだね」
「誉めても、何もありませんよ／＼／」

楓が顔を逸らすとシャルルは楓の膝に頭を置いた・・・要は膝枕。

「じゃ、シャルルさん！？／＼／」

いきなりすることに楓の顔はトマトのように赤くなった。

「楓の膝・・・気持ちいいね」

シャルルは目を細めながら言った。楓は何も言わずにシャルルの頭を撫でた。

「楓・・・一ついい？」
「？ 何ですか？」

楓はシャルルの頭を撫でるのをやめて聞いた。

「あっ」

シャルルは楓が頭を撫でるのをやめたら少し寂しそうにした。

「それで、お話は何ですか？」

「あ、うん、実は僕のことをシャルロットって呼んでほしいんだ、二人きりの時に」

シャルル、元シャルロットは起き上がると楓の目を見た。

「シャルロット・・・さん」

「うん、お母さんが付けてくれた名前、本当の名前」

今度は楓がシャルロットの膝に頭を置いた。

「楓、これって、膝枕？」

楓から答えが返ってかないことにシャルロットは不思議に思い、顔を覗くと

「スウー、スウー」

静かに寝息を立てながら寝ていた。

「疲れてたんだよね、楓」

シャルロットは楓の頬に軽くキスをする。

「何があっても、楓は僕が守るよ」

そう言ってシャルロットは満天の星空を見上げた。

朝のSHR。シャルロットの姿が見当たらない。同じようにラウラも着ていなかった、昨日の今日だから負傷の欠席だろう。

「ふあゝ、楓、シャルルはどうしたんだ？」

「さあ？ 先に行つてと、食堂で別れましたから」

終の問いに楓が答えると、山田先生が教室に入ってきた。

「み、皆さん、おはようございます……」

山田先生は少し疲れた様子で入ってきた。

「今日ですね、転校生を紹介します。いや、転校生と言うか、自己紹介は済んでと言うか・・・」

頭を抱える山田先生だがそんな事をお構いなしにクラスは盛り上がっていた。今月、既に二人も転校生が来て間もないからだ。

「それでは、入ってきて下さい」
「失礼します」

妙に聞き覚えがある声。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」

頭を下げたのは女子制服を着たシャルロットだった。あまりの展開にクラスが啞然としていた。一人を覗いて。

「あれ？ デュノア君って女？」

「おかしいと思ったのよ、男にしては線が細いし」

「デュノア君と音梨さんなら、絵になる」

様々な声が飛び交う、最後は無視したいが。終は楓の席を見ると楓は居らず、ドアの方を見ると忍び足でドアへ向かっていた。

「音梨さん、デュノア君と一時期同室だから・・・」

その言葉と共にドアが吹き飛んだ。吹き飛ばした人物は

「楓え!!!」

「鈴さん!?!」

ISを展開していた鈴だった。

「吹っ飛べ!!!」

フルパワーの衝撃砲が撃たれた。楓は目を瞑ったその時。

ガンッ！！

楓と鈴の間に割って入った誰かが衝撃砲を防いだ。楓が目を開けるとそこに居たのは。

「ら、ラウラさん」

ISを展開していたラウラだった。

「IS、直ってたんですか？」

「ああ、コアが無事だったから予備パーツといい技術者のお陰でな」

ラウラはそう言って一度、終を見た。もの凄く眠そうな顔をしていた。

「あ、ありがとう、んん!!」

楓は最後まで言葉を続けられなかった。ラウラに胸倉を掴まれて唇で唇を塞がれたからだ。ラウラは楓に指を指して宣言した。

「お前は私の嫁だ!! 異論は認めん!! これは決定事項だ!!」

それに対して楓は顔を赤くして目を大きく見開いた後。

「きゅ／＼／／」

気絶した。それを見た終は呟いた。

「これからが、楽しくなりそうだ」

一人空を見て、静かに呟いた。

夕日に照らされる記憶、星に輝く思い（後書き）

終「今回は番外編!!」

一夏「アハハ、ウフフのポロリは無しの話だ!!」

セシ鈴シャラウ「ウゾダンドゴドーン!!」

篝「今までのことも振り替えたっりするかも知れないから」

楓「見て下さい!!…じゃあ無いと、泣いちゃいますよ?」

全「……また、次回……ばいばい」

番外編、教祖と勇者とQ B (前書き)

ある方とコラボです。

番外編、教祖と勇者とQB

セシリア「遂に来ましたわ」

鈴「この時をどんなに待ちわびたか」

シャルロット「これで、これで!」

ラウラ「ああ、やっとだ」

終「遂に、始まるぜ!」

終セシ鈴シャラウ「「IS>インフィニット・ストラトス<黒き
牙と永遠の月、番外編!」」

一夏「何、騒いでんだ? あいつ等」

箒「目を瞑るのが大人だ」

楓「軽く現実逃避ですね」

終「今回のために、ゲストが来てくれたぜ！！ 暗幕、オープニングンンン！！」

ソウジ「ん？」

リンク「よろしく！！」

終「今回のゲストは、【仮面ライダーディケイド&スマブラ】もう一つのコア対戦】及び【ディケイド&スマブラ！超スピノフC O R E】から」

楓「マイペース、教祖、天堂ソウジさんと、チートオーズのリンクさんです！！」

ソウジ「ああ、よろしく」

リンク「何か、俺の説明おかしくない！？」

セシリア「楓さんが説明して下さいましたのに文句を言っておつもりで？」
スターライトmk?を装備

鈴「楓に説明されるだけ有り難いのよ？」 双天牙月を装備

シャルロット「普通は喜ぶべきだから」 アサルトライフルを装備

ラウラ「全くだ、少しは拝め」 プラズマ手刀を発動

リンク「何これ!？」

終「そんな事は置いといて・・・」

リンク「置いとかないで!？」

終「では、早速新キャラ紹介、しない!！」

一夏「しねえのかよ!！」

ラウラ「楓、もう一度、キスでもするか？」

セシリア「ラウラさん、ズルいですわ!！」

鈴「私にもさせなさいよ!！」

シャルロット「僕だっけしたいよ!！」

リンク「ゲストの俺等は!？」

ソウジ「リンク君、彼女達は恋をしているんだ、例えどんな恋でも邪魔する権利は俺等にはない」

終「おでーん」

一夏「おでーん」

篝「おでーん」

楓「おでーん」

セシ鈴シャラウ「」「おでーん」「」

リンク「ここでも信者が増えた!？」

終「新しいキャラだけど」

楓？「自分の紹介は自分でするわよ」

リンク「あれ？ 楓さん？」

椛「椛、楓の負の人格よ」

ソウジ「負の人格？ 何だそれは」

椛「言葉通りよ、楓の恐怖や絶望の感情から生まれたから」

ソウジ「成る程」

リンク「でも何で？ 楓ちゃんは」

椛「ばいばい」 倒れる

篝「危ない！？」 受け止めた

終「椛の紹介も終わったから、次」

リンク「次、何があるの！？」

楓「あれ？ 私・・・」

QB『僕と契約して、魔法少女になってよ！』 突然現れた。

楓「キヤア！？」

リンク「一番出たらいけないのが出た！？」

終「スピンオフ、file10に登場のQB！！」

リンク「お前は何出してんだ！？」 オーズドライバーを装備

QB『母親にあのオレンジ色の髪の子を紹介したいんだよね、だったら僕と契約して魔法少女になってよ!』

シャルロット「うわあああああああああ……!……!……!……!……!……!」

リンク「二人が沈んだー!？」

楓・シャルロット「orz」

ソウジ「やはり、許せん」

一夏「ソウジさんは凄そうだな、ってこっち来た!！」

QB『守る力が欲しいなら、僕と契約して魔法少女になってよ!』

一夏「俺は男だ! 間違えるな!！」

リンク「そこ!? ツッコミ入れんのはそこ!?」

ソウジ「ある意味間違ってないな」

一夏「何で男なのに!？」 雪片装備

QB『守ることに憧れてるんだよね』

一夏「・・・」

リンク「黙った!! 少女を否定したのに黙った!!」

QB『守る力を手に入れたのなら、僕と契約して魔法少女になってよ!』

一夏「やああああめええええろおおおおお!!!!!!」

箒「一夏!! 雪片を振り回すな!」

QB『彼に振り向いて欲しいなら、僕と契約して魔法少女になってよ!』

箒「なっ何を言っている!?!?!」

鈴「否定してる割りには赤いわね」

セシリア「トマトのように赤いですわ」

終「陳情だな」 黒いバラを取り出す

リンク「それスピノフネタ!？」

ソウジ「陳情だ」 赤いバラを取り出す

ラウラ「全くもって陳情だ」 銀色のバラを取り出す

リンク「本当に何なの!？」

QB「さあ、彼に振り向いて欲しいなら、僕と契約して魔法少女になつてよ」

箒「うわあああああああああ!.....!.....!.....!.....!.....!
!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!
」 木刀を振り回す

終「第、アブねえ！？ マジでアブねえ！！ くはあ！？」 木刀
を避けるが喉に当たる

リンク「マジで何！？」

ソウジ「おばあちゃんが言っていた、番外編はカオスだ」

鈴「絶対言っていないわよ！！」

セシリア「ってこっちに来ましたわ！？」

QB『好きな人に振り向いて欲しいなら、僕と契約して魔法少女になつてよ』

セシ鈴ラウ「」「契約、契約」「」

リンク「早っ！？」

終「止めるか」

暫くお待ち下さい

セシリア「……」 死

鈴「……」 死

ラウラ「……」 同じく

一夏・篤「Orz……」

終「このままでは、カオスだ!!」

リンク「元からだよ!!」

ソウジ「終君の所に来ているぞ」

終「俺は奴らとは違う・・・」

QB『罪を償いたいなら、僕と契約して魔法少女になってよ!!』

終「・・・罪」 一瞬で沈んだ

リンク「本当に違ったよ! 一瞬でだよ!？」

QB『これで復讐を!!』

カブト「させるか!」 ライダーキック

オーズ・シャウタ「迷惑だ!!」

【スキヤニングチャージ】

シャルロット「おかああああああさああああああん……………！」

終「罪を償うために、俺の命を」 ハデスを首に

リンク「シャルロットさんは何時も心にお母さんがいるよ……！」

ソウジ「終君は生きて罪を償うことに意味があるんだ、死んではいけない」

終「おでーん」

シャルロット「リンク」

リンク「俺を拜むのおかしくない!?!」

楓「・・・」

リンク「凄い重傷だ、目が死んでる」

ソウジ「楓君、記憶は何時か取り戻せるから焦らずに」

楓「・・・ですか」

リンク「楓さん？」

楓「あなた達に何が解るんですか!？」

ソウジ「ん？」

リンク「いや、そこ違つでしょ!？」

楓「記憶のない人の気持ちなんて、知らないくせに」

ソウジ「確かにそうだが君が音梨楓であることに変わりない」

楓「私は、私は」

ソウジ「君を事を解ってくれる人がいる、それでいいじゃあないか」
後ろにハイカブオーラ

楓「おでーん」

リンク「やっぱり、信者増えるんだ」

終「まあ、これからも楽しみにしてくれ」

リンク「こっちは疲れたよ」

ソウジ「まあ、楽しかったな」

楓「では、皆さんで！」

一夏「ああ」

篤「次は臨海学校だ！」

セシリア「楓さんと【禁止事項】な展開を……！」

鈴「それだったら私が楓と【禁止事項】よ……！」

シャルロット「僕と楓の【禁止事項】だよ……！」

ラウラ「私と楓の【禁止事項】だ、これは決定事項だ」

リンク「こいつ等何言ってるんだ……！」

楓終ソウ「「「ばいばい」「「

リンク「スルーしないで!？」

では、本編で、ばいばい。

番外編、教祖と勇者とQ&B（後書き）

感想を下さい。

妄想と夢と騒動

「ありがとね、手伝ってくれて」

「いえ、いいですよ。特に用事ありませんから」

沈み掛けている夕陽で赤く染まっていく校内、シャルロットは楓と共に今月の行事の臨海学校の詳細の書かれたプリントを持っている。

「用事がないって、セシリア達と町に行くんだったんじゃあなかつたけ？」

「シャルロットさんが居ないなら、行っても」

「えっ？」

楓はシャルロットに向かい合った。

「私、シャルロットが好きでした」

「えっ？ それって、まさか」

「一目惚れで、女って解つても、好きなんです！」

「・・・楓」

楓の頬が赤いのは夕陽だけでは無いだろう。楓はシャルロットに顔を近づけて唇が付きそうな距離になり。

「あ……れ……？」

シャルロットはぼっーとしている頭をフル回転させて今の状況を把握する。朝の六時半、夕陽が差し込んで廊下ではない。つまりは、

「……夢？」

シャルロットは思いついきりため息を吐いた。

（あと十秒、あと十秒あれば、楓とあんな事やこんな事を……／

／／)

脳内リプレイをするとシャルロットは完熟トマトのように顔が真っ赤になっていた。

(学校廊下で・・・駄目だよ、楓！？　こんな所じゃあ駄目だよ！
！／／／)

シャルロットの妄想は楓が知ったら恥ずかしさのあまり気絶するくらいの映像が流れていた。

(いや、楓はそんな積極的じゃあなくて、待ってる方だよ)

シャルロットが胸に手を当てると機関銃の如く、心臓が脈打っているのが解る。

(それより、楓は相手が言わないと駄目だよ)

一気に収まってしまった鼓動、シャルロットはルームメイトを見ると・・・誰もいなかった。余談だがシャルロットは女とばれてラウラと同室になった。

「はあ、まっ、いつか」

シャルロットはもう一度夢を見るためにシーツを被るとふと思った。

「楓は、どんな夢を見てるんだろ？」

シャルロットはまた妄想をする、楓の夢に自分が出てきて、始まる。

『シャルロットさん、付き合ってくれたありがとうございます』

楓の笑顔がリプレイされるとシャルロットの頭は爆発するぐらい赤くなった。

「ここは、何処？」

楓は真っ暗な空間で目が覚めた。真っ暗と言っても自分がはっきりと見えたりした。

「それに、この服って」

楓は自分の今着ている服を見ている。白いワンピースに裸足の何の変哲もない服だが楓は持っている覚えがなかった。

「ここは一体？」

「私と貴女の二人っきりの空間よ」

楓が後ろを見るとそこに居たのは。

「わ、私？」

楓と全く同じ顔、髪の色も目の色も、違うところは楓がストレートに伸ばしてる髪に対して、ツインテールにしている、黒いワンピースを着ている。

「久しぶり、楓」

「・・・誰、ですか？」

楓は少し身構えると目の前に現れた楓は微笑みながら楓に近付いて言った。

「椛よ、忘れないでよ」

楓は少しずつ後ろに下がるが椛はそれを見て不適な笑みを浮かべながら歩み寄っていく。

「逃げないでよ・・・私は貴女と話がしたいのよ」

「な、何ですか？」

楓が止まると椛は楓の腕を掴んで抱き寄せた。

「な、何なんですか!？」

楓は椛から放れようとするが椛の方が力が強かったのか全く放れられずにより強く抱きしめら、それによって楓と椛の胸は押しつぶされる形になった。

「可愛いわね」

椛は楓の耳を甘噛みをした。

「いや！／＼／」

楓は椋の肩を押し、距離を取ろうとするが全く力が入らず、押せなかった。

「本当に可愛いわね」

椋は楓の顔を両手で挟むように抑えて唇を付けた。

「ん！？／＼／」

ラウラの時とは違い舌が楓の口の中へ入ってきた。

「ん！？／＼／んん！？／＼／んんん！？／＼／」

椀の舌が楓の口の中で音を立てながら動いていた。

「……っは、いいわね、じゅじゅの」

椀は頬を赤くして楓を見た。楓は目の焦点が合っていなかった。

「あらあら、可愛い」

楓は少しすると目を見開いて椀を押しした。

「いきなり何をするの？」

「それはこっちの台詞です！ー！ いきなり何をするんですか！ー？」

楓の問いに椀は自分の唇を触って言った。

「何って、キスよ、それ以外無いでしょ」
「そうじゃあなくて！！ 何でしたんですか！？？」

桜は楓に近付いて胸を鷺掴みにする。

「ひゃあ！？／／／」
「あら、掴みごたえがあるわね」

桜は楓の胸を揉み始めた。

「いや！！／／止めて下さい！！／／／」
「そんな声を出されるともっとやりたくなっちゃっな」

暫くお待ち下さい

暫く楓の胸を揉んだ椛は満足そうな顔をした。

「とつても、楽しかったわ」

「私は、疲れましたよ」

楓が息途切れ途切れに言うと辺りが少しずつ明るくなっていく。

「あゝあ、時間か」

椛はつまらなそうに呟いた。それに楓は意味を聞いた。

「どつゆつ事ですか？」

「そのままの意味よ、貴女は現実に・・・私は、貴女を見てるから」

楓が光に向かって歩こうとすると椀が楓の腕を掴んで唇を唇で塞ぐ。

「ん！？／／／」

数秒ほど口付けをすると椀は楓から離れた。

「しちそうさま」

楓の意識はそのまま目覚めていった。

「んんん…うーん」

朝日で楓は目が覚めた。伸びをしていると

「んんん…んん」

楓の部屋で楓以外の声が聞こえた。声の高さから女の子だと思う。いや、女の子以外だったら楓は人間不信になってしまうだろう。

「…」

恐る恐る、尚且つ慎重にシーツを一気にめくると

「何をしているんですか…ラウラさん」

案の定ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだった、しかも、裸だった、いや左目を覆う眼帯と、待機状態のIS、右脚のレックバンドのみ。

「ん、何だもう朝か。楓、おはよう」

楓が啞然してるとラウラは平然に挨拶をしてきた。

「おはようございます・・・じゃあないですよ!？」
「何がだ？」

楓は一回ため息を吐いて言った。

「何で裸で、私の布団に潜り込んでいるんですか？」
「夫婦とは何事も包み隠さないものだと聞いたぞ。それに、こつゆう起こし方は将来に結ばれる者同士の定番だと聞いたが」

楓はそんなラウラに言った。

「夫婦ではありませんし、そんな定番は聞いたことがありません」

ラウラは楓をじっと見ると楓を押し倒した。

「キヤア！」

因みに今の楓は薄着のため露出している部分の方が多い。

「ラウラさん、止めて下さい!!」
「お前が綺麗なのがいけないんだぞ。女の私が綺麗だ、と思っぐらい」

ラウラの唇が楓の唇に当たりそうな時

『楓、居るか？』

『良かったら、朝食を一緒に取りませんか？』

『私と行くよね、楓』

上から終、セシリア、鈴だと解った。しかも三人・・・二人だが返事を待たず入ってきた。

「楓さん、私と・・・」

「あなたは返事くらい待ちなさいよ・・・」

入ってきたセシリアと鈴の時間が止まった。楓とラウラもだが

「何やってんだよ・・・おお、これはこれは、邪魔したな・・・ごゆっくり」

入ってきた終は部屋を出ていった。楓は助けを終に求めた。いや、終しか居なかった。

妄想と夢と騒動（後書き）

感想、お待ちしています。

一時の仲の闇(前書き)

今回は短いです。

一時の仲の闇

「ふう、朝は散々でした」

「大丈夫？ 顔色悪いよ」

楓とシャルロットは買い物に着ていた。理由は『水着がないですから買いに行きましょう』から始まった。

「シャルロットさん」

楓はシャルロットに手を差し出し、シャルロットは首を傾げた。

「シャルロットさん、手……繋ぎませんか？」

「へっ？」

楓の言ったことにシャルロットは腑抜けた声を出した。

「はぐれないように、手を繋ぎませんか？」
「ああ、そうだね」

気のせいかシャルロットの周りが暗くなったような事が起きた。楓は何かを思い出したようにシャルロットに声を掛けた。

「シャルロットさん、二人の時にシャルロットって呼んでって、言っ
てましたけど他の皆さんも知ってますから、別の呼び名を考えて
いいですか？」
「・・・本当？」

シャルロットが聞くと楓は笑顔で答えた。

「シャルロットさんが迷惑でなければ・・・いいですか？」

シャルロットは楓に優しく微笑んだ。

「ありがとう・・・凄く、嬉しいよ」

楓もシャルロットに微笑み返した。

「うん・・・シャルさんはどうですか？」

「シャル？」

「はい、呼びやすいので・・・良いですか？」

楓は涙目の上目使いを使った。シャルロットに精神的に99999のダメージ。

「うん！　ありがとう！..！」

シャルの言葉に楓はただ、良かったと呟いた。

そんな二人を見ている三つの影、セシリア、鈴、終だ。終は何故か、顔が曇っていた。

「ねえ……」

「何ですの？……」

「何だよ？ こんな事に人を振り回しやがって」

不機嫌な終は今にも自分を連れてきたセシリアと鈴を今にも肉片にしそうな顔だった。

「あれ……手……繋いでるよね？」

「そうですね……」

「ふわぁ〜、だから何だよ？ 見れば解るわ」

遂には欠伸までする終、セシリアと鈴は何時もよりどんよりしていて、終が目を開けば戦場にいる戦士の目だろ。主にセシリアと鈴に對しての殺意だが……そんな事をお構いなしに鈴は右腕に武装を展開した。

「そっか、やっぱりそっか。私の見間違いじゃあなくて、白昼夢じゃあなくて、現実なんだ・・・よし、殺そう、想いっきり殺そう」
「オホホホホ」

二人を見ていた終はセシリアと鈴の肩を掴んだ。

「よし、解った。俺がやる・・・お前等を殺すことに」

終は両手をオルトロスを握った。目はまさに兵士だった。

「ち、違う!!! 私達じゃあないわよ!!!」
「そうですね!!! 終さん、それを仕舞って下さい!!!」

終は黙ってオルトロスを仕舞った。ほっとする二人だが終はそんなに甘くなかった。次に終は素晴らしい笑顔で（しかし目が笑ってない）・・・ハデスとケルベロスを取り出した。セシリアと鈴はこの世が終わった顔をした。

「いえーい、さあ、気合いを入れるぜ」

後に終はセシリアと鈴に対して絶対的な権限を握れる。後一步で左目に眼帯を付け、銀髪の赤い目、そんな、目立つ髪と目を持っているのは終以外は一人しか居ない。

「何をしてるんだ？」

「・・・ラウラか」

終が後ろを向くとドイツの代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒが居た。セシリアと鈴はこの時ほどラウラに感謝したことはなかった。

「何をしているんだ、こんな所で」

ラウラの問いに終は指で二人、仲良く手を繋いでいる楓とシャルを指した。

「成る程・・・」
「どうすんだ？」

終がラウラに聞くとラウラは真顔で一言。

「私も交ざってくる」

終はラウラの肩を掴んで止めた。

「待て待て待て待て待て・・・お前もアイツと仲をかき乱されるのは嫌だろ」
「確かに・・・ではどうする？」

終は未だに楓とシャルを見ていたセシリアと鈴を見て言った。

「こつ言つ時は大体相場が決まっている」
「」
「」
「」
「」
「」
「」

ラウラだけではなくセシリアと鈴も終を見た。終は一言言った。

「尾行だ」

終の一言でセシリアと鈴、ラウラを加えた、四人は楓とシャルを尾行した。

「楓・・・」

椛は暗い空間で静かに呟いた。椛は今までのことを思い返した。自分の生まれた理由、そして存在目的。

「楓……絶対に私が守るよ……だって私は貴女の

お姉ちゃんだから、安心してね」

そして目を閉じて再び開けるとその目は怒りなどが籠もっていた。

「楓にこれ以上・・・絶対に近づけないわよ・・・折斑一夏、黒谷終、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・あんな事を思い出させないために」

椀の咳きは辺りに響いた。

一時の仲の闇（後書き）

感想を下さい！！

臨海学校

「なあ、箒、ちよつと良いか？」

「どうした？ 一夏」

ショッピングモールを歩く二人の男女、言わずも知れた、織斑一夏と篠ノ之箒だ。二人は臨海学校のための水着を買いに來ていた。

「いや、少し寄りたいたいところがあるから先に行つててくれ。直ぐに追いつくから」

「ああ、わかつた」

そう言つて一夏は一人走つていった。

「うわぁ〜、凄いです」

楓は一言言った。楓とシャルは水着売り場に着いたがその数の多さに楓は驚きの声を出し、シャルはそんな楓を見て微笑んでいた。

「色々な水着がありますね・・・」

「アハハハハ、そうだね」

楓の言葉にシャルは苦笑いをした。当の楓は未だに水着売り場を眺めていた。

425

「楓、そろそろ水着を選ぼうよ」

「あ、はい!」

シャルの言葉に楓は返事をした。そして楓はシャルから手を離れた。

「あれ？ 楓」

「水着を別々に探しませんか、シャルさん」

「へっ？」

楓はシャルの答えを聞かずにどこかへ行ってしまった。それを見ていた、四人は終は笑いを堪え、セシリア、鈴、ラウラは相談していた。内容はどちらが楓を尾行し、シャルを見張るかで話し合っていた。

「私が楓を追う、これは決定事項だ」

「いえいえ、ここは私が楓さんを追いますわ」

「いえ、私が追うわ、私の方が動きやすいから」

「うるさい、チビ」

その言葉を聞いた終は大爆笑し鈴は落ち込んだが終が冷静に言った。

「と言うか、楓は何処だよ？」

それを聞いてセシリア、鈴、ラウラを辺りを見渡すがまだ啞然としているシャル以外、見当たらなかった。

「「「あっ」「」」

終はまた大爆笑した。

楓は水着を探しているが、どれが自分に合うか、ましてや水着自体
余り見たことが無く、いや、見ていたとしても記憶がないためそれ
も解らない。

「うーん・・・どうしよう」

暫く歩いていると前を歩いていた男達にぶつかった。

「あっ、ご免なさい!!--」

楓はぶつかつた相手に謝つたが男達はわざとらしく言った。

「いつてえくなあ」

「どうしてくれんだよ？ 折れたかも知れないよ？」

楓は怖くなり必死に謝つた。

「本当にご免なさい！！」

だが男達はニヤニヤ笑いながら楓に寄つてきた。

「どうすんだよ・・・なあ！？」

「っ！？」

男の一人が強く言うと楓は肩を震わせる。

「なあなあ、聞いてんのかよ？ ああ」

「おいおい、どうしてくれんだよ」

「それにしても、可愛いな」

「ハハハハハ、確かに、なあ」

男達は四人でしかも体格も良く、女子一人、しかも余力力の強くない楓が抵抗してもたかが知れている。それに加え楓は怖がっていて逃げるなど考えられていなかった。

(怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い)

楓は何時しか震えていた。それを見た男達はニヤニヤ笑いだした。

「何だ？ まさか怖いのか？」

「ハハハハハハハ！！！！！！！！！！」

男達は笑っているが楓の頭に花の音が響いた。

『大変なようね、楓』
(桜さん、どうして?)

楓が震えが段々収まってきた。それと同時に楓は下を向いた。

『大丈夫よ・・・私が守ってあげる』
(・・・はい)

男達は楓が下を向いていることに腹を立てた。

「おい、聞いてんのかよ？」
「下向いてんじゃないやあなえよ!!!」
「ふざけてんのかよ!?!」

一人の男が楓に掴み掛かろうとするとき偶然、シャルが来て今の状況を止めてようとするがそれより先に楓が頭を上げて男を投げ飛ばした。

「詰まらないわね」

そう呟いてまた、男を投げ飛ばした。楓は口元を三日月のようにして笑った。

「まだ、やる？ 死にたいんなら・・・良いわよ」

それを聞いた男達は一目散に逃げ出し、シャルは楓に近付いた。

「楓？ 大丈夫？」

楓は何も答えずに気を失い倒れそうになったがシャルが受け止めた。

「楓！？ 楓、大丈夫！？」

シャルは楓を呼び、楓は起きる。

「ん、んん・・・あれ？ シャルさん？」
「楓、大丈夫？」

楓は辺りを見渡しシャルの顔を確認した。

「私、どうして？ それに、あの人達は？」
「えっ？」

楓は何も解らないような表情をしていた。シャルは楓を立たせた。

「大丈夫？ ほら」
「あ、ありがとうございます」

シャルに手を貸して貰い楓は立ち上がる。

「ねえ、楓」

「はい、何ですか？ シャルさん」

シャルは楓の手を掴み言った。

「一緒に水着を選ぼうよ、選んで欲しいし」

そう言ってシャルは楓の手を引いて試着質に入った。

「えっと、シャルさん？ 何で」

「ほら、水着って実際に試着してみないと」

「だったら、私は外で」

「すぐ終わるから！！」

強気な口調でシャルが言うと着替え初めて楓は慌てて後ろを向いた。

(何故・・・こんな事に)

「うわぁ、凄い事するわね」

「そうですわね」

セシリアと鈴は楓とシャルを見張っていた。終は水着を選びにラウラムも水着を選んでいた。

「まさか、あんな事やこんな事を・・・」

「それはないな」

鈴が変な妄想をした時後ろから声が聞こえ振り向くと青色のトランクス型の水着を持った終が居た。

「あ、終」

「俺の買い物は終わったから見てるか？ 正真、お前等は不審者に見えるぞ」

終はたった一言、セシリアと鈴に現実を突きつけた。

試着室内の二人は顔が真っ赤になっていた。

(うう、何でこんな事に)

楓は頭をフル回転させるが理由が全く思い付かずオーバーヒートを起こしそうになった。一方のシャルはと言つと。

(楓を勢いで連れ込んだじゃったけど、変な子に思われてないよね?)

そんな事を考えながら着替えていくシャル。

「良いよ」

シャルに言われて楓は後ろを振り向くと水着に着替えだシャルが居た。彼女らしい水着を着ていて楓は見取れていた。

「どうかな? 楓」

楓は一言、言った。

「綺麗です。シャルさん／＼」

そして楓が試着室を出ようとするとそこには

「何をやっているんだお前等は」

呆れた表情の千冬と顔を真っ赤にしている山田先生、大爆笑をしている終と遠くからキョトンとした表情の一夏と篤が居た。最後に終が二人をからかう。

「デートは楽しかったか？ お二人さん」

その言葉に楓とシャルは顔を真っ赤にして

「きゅん……」

「プシュン……」

二人仲良く気絶をした。その後終は千冬と山田先生に説教をされた。

そして、臨海学校当日

「海だぜこのヤロ…！」

終の嬉しそうな叫び声が響いた。

臨海学校（後書き）

感想を下さい。

青い海、初めてなんだよなb y終

「海だぜ!! ヤフ!!」

おかしな位テンションが高い終がバス内にいた。

「うるさいぞ!! 静にしろ!! 黒谷!!」
「へい」

千冬に注意にされて返事を返すが終は窓の外に見える海を見ていた。
隣にいたシャルが聞いた。

「終、何でそんなにテンションが高いの?」

シャルの問いに終は海を見たまま言った。

「青い海を見たことがないんだ」

「青い、海？」

「そつ、俺が見たのは大体、血の海なんだ」

「血の海」

終と話をしていたシャルの顔から血の気が引いてきた。一方の楓はセシリアの隣で・・・

「スウー・・・スウー・・・スウー」

セシリアの肩に頭を置いて寝ていた。セシリアは顔が真っ赤になっていた。

(ち、近い／＼)

セシリアと楓の距離は楓の髪がセシリアの鼻に当たりそうなくらい近かった。

「うう、うーん」

同じバス内で終が騒いでいても全く起きる気配がない楓ともう一組。

「 Z Z Z
Z Z Z
」

一夏と箒の二人だった。箒は一夏の肩を枕に一夏は箒の頭を枕にして寝ていた。

「走っていいのかな」

終がそう呟いてシャルが何とか説得していた。

「うう、ん？」

楓が目を覚ますと誰かが楓を負ぶっていた。楓が目をとすると長い銀髪が見えた。

「りゃうりゃしゃん？」

上手く呂律が回らず少し眠そうな顔をしていた。

「何だ？ 起きたのか？」

ラウラの言葉を聞いた後楓は辺りを見渡し近くに海が見え何処だか理解した。

「付いたんですか？」
「さっきな」

そして、前の方を歩いている一夏と篝。自分達の後ろを歩いているシャル。

「楓、起きた？」

「お早うございますわ」

その近くを歩くセシリアと鈴、だが何処を見渡しても終の姿が見えなかった。

「終しちゃんは？」

「ああ、終なら、海だー、と叫びながら走ってたぞ」

楓はラウラの言葉に苦笑いするしかなかった。

「何だ!？」

水柱が立ったところを見るとそこには特徴的な男が居た。

「うおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

雄叫びを上げながら走ってきたそいつは青い水着を付けて銀髪の赤目しかもたった二人の男。

「終か？」

「おお、俺だ！ 黒谷終だ!！」

効果音が付きそうなくらいの勢いで砂浜に立った男。黒谷終その存在は一際目立った。

「無駄にテンションが高いな」

「ああ、海は楽しいぜ！ 例えば鮫を叩いたり、魚を鷲掴みにしたり」

「待てよ！！ おかしいだろ！？」

終の呟きに一夏はツッコミを入れた。

「何処がだよ！？」

「全部だ！！」

終の言葉に一夏だけではなく箒もツッコミを入れた。

「いいや、また行ってくるぜ！！」

終はその言葉を残して海へ飛び込んだ。一夏や箒だけではなくその場を見ていた全員が啞然とした・・・一人を除いて。

「うわあ、綺麗」

楓は終の飛び込みよりも海に見取れていた。

「か、え、でっ〜!」

「キヤア〜!」

鈴が楓に飛び付き、突然のことに楓は反応できずに押し倒される形になった。

「驚いた?」

「り、鈴さん」

鈴はタンキニタイプの水着を着て、楓はビキニタイプの水着だ。

「鈴さん、そろそろ降りて下さい」

「じゃあ、一緒に泳ごうよ」

鈴ぞつ言つと楓の上から降りて手を貸した。

「鈴さんは何をしているんですか？」

二人が声がした方向を見るとパラソルを持ったセシリアが居た。

「セシリアさん」

「楓さん、バスでの約束を覚えてますか？」

「????」

一人話についていけない鈴は疑問符を浮かべていた。

「あ、確か、サンオイルを塗るって、約束ですか？」

「ええ、お願いしますわ」

セシリアはパラソルを広げて下にシートを敷き上の水着を外してシートに寝そべった。

「背中に塗って下さいね」

「あ、はい・・・鈴さん、少し待って下さい」

楓はサンオイルを受け取るが、正直な話、楓は他の女性、ましてやサンオイルを塗るなどしたことがない。いや、覚えてない。

(うう、どつすれば良いでしょう?)

楓はサンオイルを塗り方も覚えていないため、正直どつすればいいのかすら解らない。

「え」と

取り合えず楓は手にサンオイルを付けて背中に塗り始めた。

「ひゃあ！？ か、楓さん、サンオイルは少し手で暖めてから塗って下さい」

「ごめんなさい。余り、こつゆつのは覚えてないんです」

「あつ」「あつ」

楓の言葉にセシリアと鈴は此処で改めて楓が記憶喪失であることを思い出した。

「？ どうしたんですか？」

楓は二人の顔を見て訪ねてきた。それに気づいた二人はお互いに顔を見合わせた後それぞれ答えた。

「何でもありませんわよ。気にしないで下さい」

「そつよ。何でもないので」

「???」

二人が揃って言い、楓は疑問符を浮かべていた。

「楓さん、サンオイルを塗って下さい」
「あ、はい!!」

楓はまたサンオイルを塗り始めた。鈴は面白くなさそうにそれを見ていた。

「・・・」

鈴は楓からサンオイルの瓶を取ると暖めもせず、セシリアの背中に塗っていった。

「私が塗ってあげるわよ、ペタペタ〜っ」と
「ひゃあ!?! り、鈴さん!! 邪魔し、冷たい!!」

セシリアは悲鳴を上げて、鈴はそのまま楓の手を取って海の方へ走っていた。

「あ、り、鈴さん！？ セシリアさん、ごめんなさい！！」

顔を真っ赤にして怒っているセシリアに謝りながら楓は鈴に引つ張られながら海へダイブした。

「ぶは！？ 鈴さん！！」

楓が海面から頭を出して辺りを見渡すと少し離れた場所に鈴が泳いでいた。

「楓！ 向こうのブイまで競争ね！ 負けたらかき氷奢りなさいよ！ よーい、ドン！！」
「ちよっと、待って下さいよ！！」

鈴が泳ぐと楓も鈴の後を追って泳ぎ始めた。

（サンオイルを塗って貰うって・・・セシリア大胆な事するな）

自分もやって貰おかと思えるが顔を赤くして否定した。サンオイルを楓に塗るのは良いが自分が塗られるのは恥ずかしい。

（大丈夫！！ 私には私の魅力がある！！ だから大丈夫！！）

鈴が気合いを入れると足に痛みが走った。

（あ、足、つった）

鈴は足をつり、上がろうとするが上がれず溺れると細い腕が鈴を引っ張った。

「ぶは、大丈夫ですか？ 鈴さん」

楓は鈴の背中をさすりながら聞いた。

「ケホ、ケホ、だ、大丈夫」
「一度、戻りましょう」

楓は一度、鈴を連れて砂浜に戻った。

鈴を砂浜に連れて後山田先生が居て鈴を旅館へ連れていった。

「ふう、やっぱり、海は良いです」

楓は海を見ながら独り言を言った。

「あ、楓、此処にいたんだ」

不意に声がして後ろを振り返るとシャルと……。

「ひっ！？ お、お化けですか？」

かなり怯えた表情で聞く、頭から膝までタオルでぐるぐる巻きにしている人物が居た。

「ほら、出てきなよ。大丈夫だから」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める」

「ラウラ、さんですか？」

タオルでぐるぐる巻きにしている人物、ラウラだった。何時もとは違い、弱々しかった。

「せっかく、着替えたんだから」

「し、しかしな。心の準備が・・・」

タオルを取ろうとしないラウラにシャルの行動は・・・。

「じゃあ、僕は楓と遊んでくるよ」

「な、何!？」

シャルの言葉にラウラは驚き言った。

「私も行くぞ!!」

「その格好で？」

ラウラは暫く黙ると少し怯えた様子でタオルに手を掛けた。

「ええーい、脱げばいいんだろ！ 脱げばー！」

ラウラがタオルを取ると黒いビキニタイプのフリルを付けたラウラが居た。髪は鈴の要に左右で分けていた。

「笑いたければ笑え、似合っていないのは解ってる」

ラウラはそう言うが楓は笑顔でラウラに告げた。

「そんな事はないですよ。可愛いですよ」
「か、可愛い!?!」

その言葉を聞いたラウラは何処かへ走り出した。

「ああ、何処行くの……!?」

「シャルさん、私がラウラさんを追いますから」

そう言って楓はラウラを追った。

「ラウラさん……!! …… 何処ですか……!!」

楓がラウラを探していると暫くしてラウラを見つけた。

「ラウラさん」

「楓か」

楓はラウラに手を差し出した。

「皆さんのところに戻りましょ」

ラウラが楓の手を取り歩き始めると一人の男が近寄ってきた。

「ねえ、君達、俺と何処に行かない？」

男が言うが楓が断った。

「いえ、私達はこれから行かないと行けない場所があるので」

その場を離れようとした楓の腕を男が掴んだ。

「ちょっと、待ってよ。少しで良いから」

「その手を離せ」

ラウラが睨みながら言うが男は楓の腕を離さなかった。

「良いじゃん。少しぐらい」

「結構ですから」

「離してやったらどうだ」

楓が目を伏せるとそこで楓の意識は途切れた。次に顔を上げたとき男からは前髪で見えなかったが楓の目つきは冷たく無表情なものになっていた。

「ねえ、ねえ、良いゲフ!？」

「!？」

楓が掴まれてる腕とは反対の腕で男の顔を殴った。普段から楓を見ているラウラは信じられない物を見た目をしていった。

「何すんだガハ!？」

今度は腹を思いつきり蹴り飛ばした。男が倒れると楓は男の頭を踏んだ。

「うわぁ!?! や、やめてくれ!?!」

男が悲鳴じみた声を上げるが楓は足を退けず更に体重を掛けた。

「楓、もうやめろ!?!」

楓を抑えたのはラウラだった。男は解放されると一目散に逃げ出した。

「・・・」

楓はラウラを黙ったまま見つめると気を失い倒れた。

「楓！？ 大丈夫か！？ 楓、楓！！」

ラウラは気を失った楓を抱えて走った。そのまま、千冬や山田先生
の所に付くと楓は旅館へ運ばれた。

青い海、初めてなんだよなbY終（後書き）

感想を下さい。

あゝんと騒ぎと人参（前書き）

タイトルは気にするな！！ アンク風

すいません。調子に乗りました。

あゝんと騒ぎと人參

「ん、んん・・・？」

楓が目を覚ますとそこは旅館の一室だった。

「あれ？ 私、何で？」

楓は思い返すが記憶にあるのは男にナンパされてその途中から全く覚えてなかった。

「・・・ラウラさんは」

辺りを見渡すが部屋には自分一人だけ、一夏や箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、終も居ない。此処には楓一人だけ、それが怖かった。一人が怖かった。

「ゴホッ！ ゴホッ！ ゴホッ！」

楓は突然胸を押さえて咳き込み始めた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は数回咳き込んだ後呼吸を整える。暫くして部屋の扉が開いた。

「起きたか？」

「織斑先生、どうして」

千冬は入ってきて楓の近くに座った。

「何が起きたか、覚えているか？」

楓は千冬に自分とラウラが男にナンパされたことと自分が途中で意

識を失ったこと、千冬は黙って楓の話聞いていた。暫く話と千冬が楓に言った。

「音梨、お前が気を失ったときにお前を運んだのはボーデヴィツヒだ」

「ラウラさんが？」

楓が聞くと千冬は頷いた。

「ああ。そう言うことだ。それと風呂に行けよ・・・もう直ぐ時間だからな」

そう言うと千冬は部屋を出た。暫く楓は考え込んで部屋を出た。

その後、時間は経ち夕食の時間になった。皿に乗っているのは沢山の魚介類の刺身。

「うわぁ、美味しそうですね」

「そうだね（楓たら、まるで子供みたい）」

右隣にいたシャルは隣にいる楓を見て思った。楓は左隣のセシリアを見た。

「う、ううっ……」

セシリアは楓の隣で呻き声を出していた。楓がセシリアに話しかけた。

「セシリアさん。大丈夫ですか？」

「え、ええ。大丈夫、です、わ」

途切れ途切れに答えるセシリア。正直に言うと全く説得力がない。

「正座が辛いなら、席を替わった方が良くないですか？」

実際、外国人の生徒や教員のための席があり、余談だがラウラや終はそこで食べている。

「この席を獲得するのに使った労力を考えれば、この程度の障害・
」

そう言ってセシリアは箸で刺身を取ろうとするが掴み損ねてしまう。

「あの、セシリアさん・・・」
「席は替わりませんわ」

楓が言う前にセシリアが即答した。そんなセシリアを見て楓は苦笑いしかできなかった。

「セシリアさん・・・良かったら食べさせましょうか？」

楓の言葉にセシリアはもの凄い勢いで食いついた。

「本当ですよ、楓さん!？」

「はい、それで鮮度が落ちたら勿体ないですから」

そう言って楓はセシリアの皿の上の刺身を箸で掴んだ。

「わさびはどれくらいにしますか？」

「ちよっとで」

楓は刺身にわさびを少し付けた。

「はい、あ〜ん」

「あ、あ〜ん／＼／」

楓はセシリアに刺身を食べさせた。セシリアは満面の笑みで言った。

「楓さん、ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

そんな様子を見ていたシャルは不機嫌な表情をしてセシリアを見た。シャルは楓に話しかけた。

「楓、セシリアさんに食べさせるなら僕が楓に食べさせてあげようか？」

「えっ？」

シャルの突然の言葉に楓は啞然としていた。

「ほら、あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

シャルは楓の皿にあった刺身を箸で掴んで楓の口に運んだ。そのまま楓は刺身を食べた。

「美味しい？」

「はい、美味しいです」

その後他の女子が群がったが千冬が静めた。

「
」

楓は鼻歌を歌いながら一夏と終(千冬同伴)の部屋に向かっていた。

「
　　」

暫く歩くと部屋から男の声が聞こえてきた。

「くう、うめえ」

「お前な、何で平気な顔して飲んでんだよ」

「全く、何をどうしたらこうなる」

何かを飲んでいるだろう終の声と啞然としている一夏の声、それと呆れている千冬の声が聞こえた。楓は部屋のドアを開けた。

「失礼しまゝす」

楓が見た物は床に転がっている数本のビール缶と飲みかけのビール缶を持っている終と千冬、それを見ている一夏。楓は静かになおかつ素早くドアを閉めようとした。

「待て待て待て！！ 頼むから俺を見捨てないでくれ！！」

悲痛な叫びをあげる一夏によって阻まれた。

「嫌です。これ以上は私の精神がすり減ってしまいます」
「俺もすり減るわ！！」

終は一夏の肩を掴み千冬が楓の腕を掴んだ。

「そう言わずにな」
「入れ。じゃあなければ、お前等の単位はないぞ」
「脅し！？」

そのまま一夏と楓を部屋に引きずり込む終と千冬。

「止めろおおおおおおおおおおお……………」

「いやああああああああ……………」

「！」

その後織斑一夏と音梨楓を見た物は居なかった。黒谷終と織斑千冬以外は。

セシリアは上機嫌で歩いていた。歩いている理由は楓の居る部屋に行き同室の者に楓が居ないことを聞き一夏と終＋千冬の部屋に向かっていた。もう一つの理由は。

（憧れの『あ〜ん』夢のようですわ）

頬を緩めて両手で頬を挟んでいやいやいやつと、体をクネクネさせる。

「「「「」」」」」

部屋の前には箒、鈴、シャル、ラウラが扉に耳を付けていた。ハッキリ言って不審者だ。

「皆さん、どうしますたむぐー!？」

「しっ、静かに」

声を掛けようとしたセシリアの口をラウラが塞いだ。そしてセシリアも扉に耳を付けると声が聞こえた。

478

「千冬姉、かなり久しぶりだから緊張してる？」

「そんな訳あるかバカ者っ!？ もう少し加減をしろ・・・」

「はいはい。それじゃあここは・・・と」

「うわっ!？ そ、そこは止め」

「大丈夫だつて、すぐ良くなるよ」

「あああっ!?!？」

段々と箒の目から生気が無くなっていくのを四人はあえてみないことにした。

「ちよつ!?! 待てよ!?! そこは」
「聞こえませんか・・・全く聞こえません」
「うぎあ!?! 止める!?!」
「えい」
「あああつ!?!」

そして四人も目から血の涙を流していた。そして五人も扉に寄りかかって聞いていたため扉が開いてしまった。

「」「」「うぎあ!?!」「」

更に可愛くない声を上げて前のめりに倒れた。

「ホウ・・・盗み聞きとは、良い度胸してんな」

指を鳴らしながら素晴らしいが目が笑ってない笑顔を五人、と言っか四人に見せていた。

「……………」

この時、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒはこの世で逆らってはいけない人物に黒谷を終を足したことは言うまでもない。

その後、終は盗み聞きした五人、と言うより四人に制裁を与えた後。

「一夏と楓は汗かいたから風呂入ってこい」

「ああ」

「では、お言葉に甘えて」

そう言って一夏と楓は部屋を出た。

「ふう……ほらよ、っ」と

終は冷蔵庫から飲料水を取り出し幕達に投げ渡し千冬にビールを渡し終もビールを取り出した。

「って、何取り出してんのよ!？」

「ビール」

鈴が終に怒鳴るが終は涼しい顔をしてビールを飲み始めた。

「大丈夫なの？」

「分かん」

シャルの呟きにラウラが答えた。千冬も何事もなかったようにビールを飲んだ。

「んぐっ、んぐっ……くうっ、っで、聞くけどよ……お前等はアイツをどう思っている?」

終が言うアイツ・・・セシリア達は楓の事だと思った。

「お前等は・・・アイツの記憶が戻ったらどうなると思う？」

終の話聞いていたセシリア達だけではなく、千冬と篤も耳を傾けた。

「記憶喪失には二つの例がある」

終は指を二つ立てて話を続けた。

「まず一つは、記憶が戻っても記憶を失ったときの記憶がある例」

指を一つ折り、更に話を続ける。

「これから二つ目の例だが・・・覚悟はあるか？」

終は真剣な顔でセシリア達を見た。そこにいる全員が疑問符を浮かべた。

「二つ目の例だが・・・記憶が戻ったときに・・・失ったときの記憶を失う」

その時、部屋の時間が止まったと思うほどの沈黙が流れた。セシリア、鈴、シャル、ラウラだけではなく、千冬も険しい表情をした。

「もしもだ、もしもだけどな・・・」

終は一息置いて部屋にいる全員を見た。

「アイツの記憶が戻ったときに・・・俺等のことを」

終はそれを言うとも目を伏せた。終だけではなくセシリア、鈴、シャル、ラウラ、箒、千冬も表情が更に険しくなった。

「けど、私達のことを必ず忘れる訳じゃないでしょ」

「そっだよ……楓は私達を忘れるわけがない」

「そうですね……まさか、記憶を取り戻して忘れたなんて」

「ないよね。絶対じゃないから」

上から鈴、シャル、セシリア、ラウラが言う。雰囲気は暗くなるが終が目を伏せた状態と言った。

「だとしても……まだ先の話だからな。その時に考えるか」

終は暗いが何時もと変わらない表情で笑った。

「何ですか？これは」

翌朝、楓は中庭に生えているウサギの耳を見ていった。終はウサギの耳を険しい顔で見て一夏は不思議なものをみる表情で見て箒はどこかに行ってしまった。更に看板がありこう書いてあった。

『引っ張って下さい』

如何にも怪しい。

「箒、お前はこれ、っていねえ」

終が箒に聞こうと振り返るとそこには既に箒は居なかった。そこへセシリアが通りかかった。

あゝんと騒ぎと人参（後書き）

次回は短いです。

それと感想をお待ちしております。

紅の登場、災いの前兆（前書き）

少し長いかも？

紅の登場、災いの前兆

「・・・マジかよ」

まるで言葉を捻り出すように終は呟いた。目の前にいるのはISを開発し、更には現在行方不明のはずの篠ノ之束・・・幕の裏の姉だった。しかも空から降ってきた巨大人参の中から出てきたから更に驚きだ。

「ヤッホー！！ しゅ君とかえちゃん！！」

そう言って束は楓に抱きついた。

「うわぁ！？ 束さん！！」

「かえちゃんの温もり久々にチャージ！！」

そんな光景を見て一夏は苦笑いし終は目頭を押さえていた。セシリアはただ啞然としていた。

「あつ!! 篝ちゃんは何処にいるの?」

「篝……ですか?」

束の言ったことに一夏が聞いた。束は頷いた。

「でも、やっぱりかえちゃんは温かいな」

束は楓に抱きついたらそのまま寝そづになっていた。

「ちょっと待て下さい!! 貴女の目的は何処に!?!」

セシリアが束に聞くと束はセシリアの方に向いた。

「君は誰?」

「えっ? ああ、私はセシリア・オルコットですわ」

束はセシリアの名前を聞いて頷きまた楓の方を向いて言った。

「分かったよ・・・金髪ロールちゃん」

「全く聞いていませんわ!!」

全く名前を覚える気のない束だった。楓は抱きつかれてる状況で束に聞いた。

「あゝ束さん、篝さんに何か用があるんじゃないんですか？」

楓の言葉を聞いた束は思い出したように頷いた。

「おお!! そうだった!! 私はこの篝ちゃん探知機で篝ちゃんを探すよ!! じゃあねえ、しゅ君!! かえちゃん!!」

そのまま束は嵐の如く去っていた。

「まるで、嵐だ」

終は呆れたように呟き一夏とセシリアは頷き、楓は苦笑いをしていたが突然

「ゴホッ！　ゴホッ！　ゴホッ！」

楓はいきなり咳き込み始めセシリアは楓に寄り背中をさする。

「楓さん大丈夫ですか!?!」

「俺は千冬姉を呼んでくる!!!」

「俺は山田先生を呼んでくる!」

終と一夏はそれぞれ千冬と山田先生を呼ぼうとすると楓が呼び止めた。

「二人とも・・・待って・・・下さい!!」

終と一夏は楓の声を聞いて足を止めて楓の方を見た。

「お願いです。此処にいて下さい」

「けど」

「お願いです」

「「「・・・」」」

楓の言ったことに一夏は反対しようとしたが楓が消えそうな声で頼んだため反対した一夏だけでなく背中をさすっていたセシリアと行くこうとしていた終も黙ってしまい楓は苦しそうに咳をしていた。

「ゴホッ！　ゴホッ！　ハアハアハア」

楓は咳が収まった後呼吸を整え始めた。セシリアは心配そうに楓に言った。

「楓さん・・・今日は休んで下さい」

「えっ？ 大丈夫ですよ。心配しないで下さい」

楓はセシリアの手を借りて立ち上がった。

「ぜってえ、大丈夫じゃあねえだろ」

終は笑いながら楓の額を突つつく。

「大丈夫ですから」

楓は終の腕を振り払い歩いていった。三人は啞然として楓の背中を見ている。

「ハア、ハア、ハア、ハア」

楓は少し歩いたところの曲がり角の壁により掛かって胸を押さえ
ていた。

「ハア、ハア・・・何で・・・苦しんだろ？」

楓の額から汗が流れる。楓は覚束ない足取りで歩いていった。

「よし。専用機持ちは全員集合したな」

海岸沿いには千冬と専用機を持った楓、終、一夏、セシリア、鈴、シャル、ラウラそれと専用機を持ってない篤も居た。終は篤を横目で見ると何か納得したような顔をして向き直り鈴は篤が居ることを疑問に思い千冬に聞いた。

「織斑先生、篤は専用機持ちじゃあないけど・・・」

すると終が静かに呟いた。

「そろそろか？」

終の呟きの後何かが凄く早さで近付いてきた。

「ちーいーちーやーん!!」

その人物はウサギの如く近付いてきて千冬に抱きつこうとするが頭を掴まれた。

「ちいちゃん！ 久しぶり！！」
「東、お前か」

千冬は呆れた様子で東を片手で押さえていて東はまだ千冬に抱きつかうとしていた。此处で終が口を開いた。

「成る程な・・・筈、お前の専用機はどんなのだ？」

千冬以外が驚いた。筈は何故分かったと言う顔をしていた。東はやっぱりと言う顔をした。

「やっぱりしゅ君、流石！！」

終は東を見た後筈に言った。

「力を見謝るなよ」

と、終は箒に忠告をした。

「じゃあ、箒ちゃんの専用IS、『紅椿』だよ!」

箒の専用IS・・・『紅椿』が出てきた。日光でその装甲は赤く輝いている。

「『紅椿』」

箒は自分の専用機を見てその名前を呟いた。

「それじゃあ、早速フィッティングとパーソナイズを始めよつか。天才の私がやるからすぐ終わるよ。箒ちゃんこっち来てえ〜!」
「・・・はい」

楽しそうにディスプレイを展開する束とは打って違い。箒は無表情で紅椿に乗りフィッティングとパーソナイズを開始した。

「凄いな・・・あつ、束さん！あの件!!」

「おつ、そうだった！かえちゃん！しゅ君！それぞれの専用機貸して!!」

終は何の躊躇いもなく自分の専用機を投げ渡した。

「うわあ！？しゅ君！専用機を投げないでよ!!」

束は慌てて終の専用機、ブラックファンクを掴み投げたことを終に抗議した。

「・・・」

楓は黙ってエターナルムーンを手に取り眺めていた。

「かえちゃん！ 早く早く！！」
「あっ！！ はい」

そう言っつて楓は東にエターナルムーンを渡した。

「ありがとうね、かえちゃん！！」
「・・・はい」

笑顔で言っつ束だが楓の表情は何処となく暗かった。

暫くして紅椿のフィッティングとパーソライズを終了し性能テストをした後山田先生が慌ててやってきた。

「たたたた大変です！ 織斑先生！！」

この時、まだ知らなかった。楓や一夏達にとって予想もしていなかった最悪の出来事が起こることなどまだ・・・この場にいる全員が思ってもいなかった。

月は影に落ちる時破壊の意志が動き出す。

紅の登場、災いの前兆（後書き）

オリジナルのISの名前が決まってるんですがその操縦者の名前が決まってないので募集します。

それと感想を待ってます。

白は落ち、月は赤に染まる（前書き）

オリジナルEISが登場けど操縦者の名前が決まってない。

それなので名前を募集します。アメリカ人系の名前をお願いします。

白は落ち、月は赤に染まる

「全員、揃ったな。現状を説明する」

急遽訓練は中止になり生徒は自室待機を命じられ楓を始める専用機持ちは大座敷に集められた。楓達と教師陣を中心にディスプレイが浮かび上がった。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ、イスラエル共同開発の第三型軍事用IS、『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルと『混沌の皇帝』カオス・エンペラーが突如軍の制御下を離れ暴走、軍の監視空域を離脱したと連絡が入った」

突然の説明に啞然とする一夏。周りを見渡すと筈以外が険しい表情をしていた。特にラウラは真剣な表情になっていた。終は今まで見せたことない表情になり楓は逆に不安げな表情になっていた。

「その後、衛生での追跡の結果、福音と混沌はここから二キロ先の沖合を通過することがわかった。予想接触時刻は五十分後、学園上層部の通達により、我々がこの事態を対処する事になった」

淡々と続く千冬の言葉に終の表情は更に険しくなっていた。

「教員は学園の訓練機を使い、空域及び海域の封鎖を行う。よって、今作戦の要は専用機持ちに担当して貰う」
「・・・ちっ」

千冬言葉を聞き終えた終が小さく舌打ちをしたが全員に届いた。

「終？ どうしたんだよ」

一夏が聞くと終は不機嫌な表情のまま答えた。

「要は、俺等に軍の尻拭いをしろって事ですか？」

終は不機嫌な表情のまま千冬を見た。

「それに俺達は生徒ですしいくら専用機持ちっって言っても要はただの子供ですよ・・・わざわざ子供を戦場に出すのはどうかと」

暫く全員が黙っていると楓が静かに挙手をした。

「目標二機の詳細なスペックデータを要求します」

「！？」

楓の言葉に終達は驚いた。楓は積極的に戦闘をするタイプではないため千冬ですら驚きを隠せなかった。

508

「おい、楓・・・お前」

「わかってます。わかってますから、だから」

そう言うと楓は俯いた。それを見た終が一度千冬を見てそれに気付いた千冬が頷いた。

「分かった。しかしこれらは最重軍事機構だ。口外すれば査問会の

裁判と監視が待ってる。そのつもりで」

「当然ですよ。そう言つのは実際軍にいた奴は分かりますから・・・
なあ、ラウラ」

終は横目でチラッとラウラを見るとラウラは無言で頷いた。終が指を鳴らすとディスプレイが二つに分かれてそれぞれのISのスペックデータが写されていた。

「まずは福音、銀の福音は広域^{シルバリオ・ゴスペル}織滅の特殊射撃型IS、攻撃と機動に優れてる。アプローチは一回限りだ。福音は一夏。お前がやれ」
「お、俺!？」

いきなり自分に振られたことを驚く一夏。だが終は顎に手を当てて何かを考えていた。

「だが一つ問題がある」

そこで全員が終を見ると終は一度全体を見渡すと言った。

「問題は一夏をどうやって福音まで運ぶかだ」
「待ってくれよ終！！ 俺よりもお前か楓の方が適任だろ！！」

終は一夏を見ると次に混沌の皇帝カオス・エンペラーのスペックデータを出した。

「俺と楓は混沌を相手する。理由は混沌の武器だ」

次に終は混沌の皇帝カオス・エンペラーの武器のデータを出した。

「混沌の武器、槍型の武器、チェインランスとクロスボウ型の武器、イリュージョンボウガンがそれぞれ厄介なんだよ」

終はデータを全員に見えるように説明し始めた。

「まずはチェインランスだが、まず中距離の槍だが、中に鎖が内蔵されていて遠距離も出来る。更にイリュージョンボウガンも遠距離用で追尾弾と通常弾の二つがある。要するに俺が言いたいの厄介

な奴をISを使って間もない奴よりよく使ってる奴の方がいいし、更にそれなりに追跡できる早さを持つブラックファンクとエターナルムーンの方が良い」

終の言葉に一夏は考え込んだ。

「一夏さん……これは訓練じゃあないので別に降りても大丈夫です。私と終さんで何とかしますから」

一夏はそんな楓を見た。その手は若干震えていた。それを見た一夏は終を見た。

「終……俺、やるよ、いや、やってやる」

終は笑みを浮かべると一夏に指鉄砲を構えた。

「そう来ないとな……一夏」

終は向き直ると今度はセシリアを見て聞いた。

「セシリア。確かお前、高機動強襲用の強化パッケージがあったよな？」

「はい。『ストライク・ガンナー』ですわ。超高感度ハイパーセンサーも付いていますから問題ありませんわ」

「よし、早速やるぞ。セシリアは強化パッケージを準備してくれ」

終が言った後何処からともなく声が聞こえた。

「その必要はないよ！ しゅ君！！」

束の声だと気付いた終は天井を見上げて呟いた。

「天井か？」

「残念！ こっちだよー！」

「ん？ うわぁ！？」

終の横から声が聞こえて終は自分の横を向くと壁から頭が生えてる
束が居て驚く終だった。

「皆さん。準備は良いですか？」

楓の言葉に横にいる終、一夏、箒は無言で頷いた。

何故、箒かと言うと理由は束の言葉がきっかけだった。

『箒ちゃんの紅椿はねえ、リアルタイムマルチロール・アクトレス即時万能対応機の展開装甲だからパケ
ージが無くても超高速機動が出来るんだよお』

その言葉を聞いた楓が一夏を運ぶ役をセシリアから箒を変えるように提案し終が一夏と箒に福音を頼み、自分と楓で混沌を相手することを決めセシリア達には待機を頼んだ。

「一夏と箒は福音と接触したら零落白夜で叩く、もし失敗したら離脱しろ、絶対に無理をするな。楓も良いか？」

「ああ」「」

「・・・分かりました」

それぞれ返事をするが楓だけは妙に沈んでいた。

「一夏、大船に乗ったつもりでいろよ。私が絶対に運ぶ」「お前、マジ話聞いてたか？」

終は箒にデコピンをした。デコピンをされて少し落ち着いた様子になった箒、そしてそれぞれのISを呼ぶ。

「来い、白式」

「行こう、紅椿」

「輝け、エターナルムーン」

「起きろ、ブラックファング」

全員がISを展開し楓と終が並び。一夏は箒の肩を掴む。

「みんな。これだけは守れ。絶対に死ぬな・・・それだけだ」

「当たり前だ」

「分かってる」

「大丈夫です」

そして四人はそれぞれの敵と戦いに飛んだ。

「一夏さん達は大丈夫でしょうか？」

飛行中に楓が終に聞いてきた。終は特に表情を変えずに言った。

「変なことが起きなかったらな」

その時、エターナルムーンとブラックファンクのハイパーセンサーが混沌の皇帝が近付いたことを知らせる。

「行くぜ!!」

「はい!!」

楓はルシファールとポセイドンを取り出し終はオルトロスを両手に取り出した。二人に気付いた混沌の皇帝がイリユージョンボウガンを二人に向けて放った。終はパイルを使い相殺し楓はルシファールとポセイドンを巧みに使い防いだ。

「オルトロス。セイバー!!」

オルトロスの刃からエネルギーの刃が現れる。

「行くぜ!!」

楓は混沌の皇帝の上からポセイドンを突き放った。

カオス・エンペラー

「行きます!!」

「篝、まだか？」

「もう少しで接触する。準備をしろ一夏!!」

一夏は零落白夜を発動させた。それと同時に銀の福音シルバリオ・ユスベルが見えてきた。

「行くぞ篝!!」

零落白夜の使える時間が限られてるため一夏は焦りを覚える。その隙を見逃さず銀の福音シルバリオ・ゴスヘルは無数の光弾を放った。

「まだまだです!!」

楓がポセイドンを振るうと混沌の皇帝カオス・エンペラーはチェーンランスで防ぎイリユージョンボウガンを放とうとするが直ぐ終がオルトロスを振るう。

「オラア!!」

しかし混沌の皇帝カオス・エンペラーはチェーンランスを使い楓から距離を取りオルトロスの斬撃を避ける。

「大丈夫か？」

「はい。終さんも大丈夫ですか？」
「少しシールドエネルギーがヤバい」

オルトロスのセイバーも零落白夜程ではないがシールドエネルギーを消費する。

「まだ行けるか？」
「大丈夫ですよ」

楓と終は混沌の皇帝カオス・エンペラーに向かうが幾つもの光弾が楓達と混沌の皇帝カオス・エンペラーの間に放たれた。

「あれは、福音!？」
「何!？」

楓が見た方向を終が見るとそこには銀の福音シルバリオ・ユスベルと戦闘をしている一夏と篝が見えた。

雪片から急速に光が消えていくエネルギー切れだ。銀の福音を討つシルバリオ・ユスヘル機会と作戦の要が尽きた。

「折角のチャンスが無駄にしてどうする!？」

「けど船が!!」

「そんな犯罪者ほっとけばいいだろ!!」

「箒!!」

箒の言葉に一夏が怒鳴り箒は驚いた表情をした。

「力を手に入れたら弱い奴のことが見えなくなるなんて・・・お前らしくないぞ。箒」

「わ、私は」

箒は言われたことに顔を隠した。そして銀の福音は箒に狙いを定めシルバリオ・ユスヘルて光弾を放った。

終の攻撃を銀の福音シルバリオ・ゴスペルは避けた。

「くそっ!!」

遂に終のオルトロスの刃からもエネルギー刃が消えた。

「こんな時に!!」

「終さん」

殆ど無表情に近い楓が終達の前に来た。その声は凄く冷たかった。

「楓？」

楓は終達を見ないまま続けた。

「二人を連れて行って下さい」

「けど!!」

「邪魔です」

楓の言葉を終は否定できなかった。実際戦えるほどのシールドエネ
ルギーは残ってないため実際邪魔だった。

「ぜってえ。戻ってこい」

終はそれだけを言い残し一夏と箒を連れて離れた。楓は真つ直ぐ銀
の福音と混沌の皇帝を見定めるとエターナルムーンの色が段々と変
わっていく。

「ワタシノトモダチヲキズツケタオマエタチヲユルサナイ・・・コ
ワシテヤル、オマエラマトメトコワシテヤル!!」

エターナルムーンの色が紅椿よりも黒ずんだ赤に変わった。

「オマエヲ……コロシテヤル!!」

楓は赤く染まったエターナルムーンで銀の福音と混沌の皇帝に突っ
込んでいった。シルバリオ・ゴスヘル カオス・エンペラー

白は落ち、月は赤に染まる（後書き）

感想を待っています。

月、墜ちる 牙達の反撃（前書き）

前前回書きで書いた操縦者の名前は混沌の皇帝カオス・エンペラーのです。

出来れば女性のアメリカ人系で

月、墜ちる 牙達の反撃

「終、大丈夫か!？」

終は一夏と箒を脇に抱えて海岸に降り立つとセシリア達、専用機持ちが来た。

「俺はエネルギー切れで箒もだが一夏が重傷、楓が福音と混沌を相手してる!! けど、今の楓は何かやべえ!!！」

終が矢継ぎ早で言葉を言った。その言葉にセシリア達は驚いた。

「楓は大丈夫なの!？」

「分からない。けど不味いのは確かだ!! アイツの声聞いたら嫌な感じがした!!！」

終は今だ福音と混沌を相手にしている筈の楓が居る方向を見た。

混沌を見ていた楓は首を捕まれ前を見ると福音、セカンド・シフト第二形態移行を終えた『銀の福音』シルバリオ・コスベルだった。

「グウ、ガア!!」

福音のエネルギーの翼から一斉に楓に向かって光弾が放たれる。撃ち込まれた後楓の今までの雰囲気が変わるかのようにエターナルムーンの色が血のような赤から何時もの銀色に戻った。

「グワア……ご……め……ん……な……さい」

楓は何かに謝罪すると気を失い海中へ落ちていった。

空は何時もと変わらず太陽は西へ傾いていく。旅館の一室で一夏が眠っている部屋で箒は俯いていた。

(私の、私の所為だっ！！)

戻ってきてから箒はずっと自分を攻めていた。

「やっぱり此処かよ・・・マジである意味単純だ」

箒が後ろを向くと終とセシリア達、専用機持ちが集まっていた、だがそこに楓の姿はなかった。

「楓がない理由は話してやる。単刀直入に言う。音梨楓が福音と混沌の戦闘により行方不明だ」
「・・・えっ?」「」

終以外のその場にいる全員が驚いた。終は全く表情を変えずに言った。

「これからよ。福音と混沌をぶん殴りに行くけど・・・お前等はど
うする?」

終がセシリア達を見るとセシリア達は終を見て答えた。

「何時でも良いわよ!!」

「僕も大丈夫だよ」

「ストライク・ガンナーもインストールが完了できてますから」

「私も行けるぞ。楓が戦っていたからな。嫁が戦っていたのに私が
戦わずしてどうする」

終は満足げにセシリア達を見ると今度は箒に向いた。

「後は箒。お前だけだ」

箒は俯いたまま終の話聞いていた。

「私は……」

そんな筭を見た終は筭の胸倉を掴み怒鳴りつけた。

「お前は何時までウジウジしてんだ！？ いい加減にしるよ……！」

終は筭の胸倉を掴んだまま続けた。

「一夏が墜ちたのを自分一人で抱え込むな……！ 俺達は何だ？ 仲間だろ……！」

終の言葉を聞いて筭は顔を上げた。

「私も……私も闘わせてくれ……！」

終は箒を目を見て箒の胸倉から手を離し微笑んだ。

「つたりめだ！！ サボってた分、キッチリ働きやがれ」

「何処だ？ ここは」

一夏は辺りを見渡すがあるのは海と足下に白い砂浜があるだけ。

「
　　」

何処からか歌が聞こえて一夏が歌が聞こえる方へ歩いていくと。

「
　　」

一人の少女が歌っていて一夏は声を掛けるわけではなく近くの流木に座った。

「
　　」

楓は黒い空間に浮かんでいた。実際に楓自身は浮かんでいるのか沈んでいるのか、上がっているのか下がっているのかが分からない状態だった。

「ごめんなさい。私の、所為で」

楓はただその場の流れに身を任せているだけの状態にあった。

「行くぞ！！ 福音と混沌！！ 覚悟しろよ！！ あの二人を墜と
した罪は、お前等が墜ちること償いやがれ！！」

終はそれぞれ両手のオルトロスをセイバーにした状態で福音と混沌
に突っ込んでいった。

月、墜ちる 牙達の反撃（後書き）

感想を下さい。

真面目にしてください。

蘇る白 舞い上がる堕天使（前書き）

永遠は堕天使の翼を得て闇の月へ変わる。

蘇る白 舞い上がる墮天使

「ヨッシャアアアアアアア！ 行くぞ！！！」

終はオルトロスのセイバーを発動させて福音と混沌に向かっていく。終が考えた作戦・・・作戦とは言えない。ただ二機を全員で相手するだけのシンプルな作戦だった。

「箒とシャル、鈴は福音を頼む！！ 俺とセシリア、ラウラは混沌をぶっ潰す！！！」

「援護は任せる！！！」

「全力でサポートいたしますわ！！！」

終、セシリア、ラウラは混沌に向かっていく。

「今度は負けない！！！」

「当たり前でしょ！！！」

「二人共集中して！！！」

混沌が終に向かってイリユージョンボウガンを構える。

「セシリア！！ ラウラ！！」

「分かりましたわ！！」

「任せる！！」

混沌にレーザーと砲撃が放たれた。それぞれ強化パッケージをインストールしたセシリアとラウラの攻撃、イグニッション・ブースト終は後ろに瞬間加速で一気に入るに下がる時に混沌の腹を蹴りその後レーザーと砲撃の一斉放火を浴びた。

「よし！！」

「やりましたわ！！」

「まだだ！ まだ終わってねえ！！」

終が叫んだ後煙の中から無数の追尾弾が終とセシリアに向かって放たれた。

一方、福音と戦闘を行っている箒、鈴、シャルは箒が福音に接近戦で挑み、鈴も双天牙月で福音へ向かっていきシャルがサポートを中に闘ってる。

「ハアアアアアアアアアア！！！！」

箒は雨月あまづきと空裂からわれの二つを使い福音へ攻撃するが福音は避けると別方向から炎を纏った弾丸が放たれた。

「どんなもんよ！！！！」

福音は今度は鈴に向かって無数の光弾を放つ。

「えっ？」

「鈴！！！！」

シャルが間一髪で鈴を抱えて福音の放った光弾の射程圏外へ行く。

「ハアアアアアアアアアア!!!」

箒は福音が光弾を放った後に出来た隙を付いて斬撃を放ったが福音は少し掠るぐらいで避けられた。

「今度は絶対に負けられない!!」

「行くわよ!!」

「うん!! —夏と楓の敵!!」

箒に続いて鈴、そしてまだ死んでないのに福音を敵と言うシャル。

「ちよっ、まだ一夏は死んでないぞ!!」

「楓も死んでないわよ!!」

「う、ごめん!!」

そして三人は再び福音に向かって行った。

「っ!! オラッ!!!!」

終は混沌が放ったチエーンランスでの突きを体を回転させて避ける。

「コイツでも喰らえ!!!!」

終は体を回転させた勢いで混沌に蹴りを喰らわせた。

「行けえ!!!!」

終の合図と共にセシリアとラウラは混沌へまた一斉放火をする。

「まだだぜ！！ コイツはサービスだ！！！」

終は今までナイフ型のオルトロスをセイバーにして混沌へ向かって行く。

「豪快！ 銀河！ 十文字切り！！」

終はオルトロスで混沌に×型に斬撃を放った。

「ちっ、いい加減墜ちろ！！」

終が放った斬撃は混沌が持っていたチェーンランスで防がれた。

「終さん！ 離れて下さい！！！」
「！！！」

セシリアの声を聞いた終は瞬間加速を使い離れると混沌にレーザーの雨が降り注いだ。

「うわぁ・・・えげつねえ」

レーザーの雨が止むと今度は砲撃が放たれ混沌に直撃した。

「やったか？」

終が煙を見ているとチェーンランスの鎖が終の首に巻き付いた。

「ぐっ、しまった!!」

「終!!」

「今助けますわ!!」

混沌はイリユージョンボウガンをセシリアとラウラに放った。

「セシリア!! ラウラ!!」

終が二人の名前を呼ぶと混沌がチェーンランスを一気に引いた。

「グオ!?!」

混沌は引き寄せられた終にイリユージョンボウガンを向ける前に福音の方へ向けて放った。

「何やってんだ? っておわ!?!」

終が不思議に思っていると混沌が引く力を強めイリユージョンボウガンを終に向けた。

「やべえ」

終は苦笑いをしてオルトロスのセイバーを解除した。

福音の方では箒と鈴が接近戦で戦いシャルが遠距離から援護をしていた。

「よし!! 行け・・・うわぁ!?!」

「鈴! つ!!!」

鈴とシャルは混沌の方から来た追尾弾を避けていた。

「二人共!? くっ、邪魔をするな!!!」

二人の所へ向かおうとしていた筈の足首を福音が掴み力を入れて落とした。

「グッ!？」

福音は筈の首を掴むとエネルギーの翼で筈を包み込んだ。

一夏は流木に座っていると異変に気付いた。少女は歌を歌うのを止めて空を見上げていた。

「どうしたんだ？」

一夏が聞くが全く反応せず空を見上げる少女。

「行かないきゃ・・・みんなが待ってる」
「えっ？」

一夏は空を見上げまた少女が居た場所を見ると少女は居なくなっていた。

「一体、何だ？」
「力を欲しますか？」

一夏が声の方を見ると鎧を纏い大剣を持ち目の部分をバイザーで隠した女性が居た。

「力を欲しますか？」
「力、か」

一夏は目を瞑り開けると真っ直ぐ女性を見た。

「仲間を守る力が欲しい」

「仲間？」

「そっ、この世の中で一緒に戦う仲間だ。それを守れる力が欲しい」

今度は一夏の後ろから声が聞こえた。

「だったら、行かなきゃね」

歌を歌っていた少女が一夏の後ろから無邪気な笑みを浮かべていた。

「ほら、ね」

「ああ」

一夏は頷くと段々と視界が白くなっていく。

「私が・・・行かな・・・きゃ」

楓は体を動かそうとするが体は全く動かない。

「無理よ。今の貴女は戦えない」

「・・・椀さん」

楓の横に何時の間にか椀が居た。椀は楓の頬に手を当てた。

「貴女は、今は戦えないわ。だから休んで」

「私は、皆さんを・・・守りたい、だから」

椀は暫く楓の目を見ると溜め息を吐いた。

「仕方ない。今回だけは貴女の仲間のために私が闘う」
「ありが「但し」・・・但し？」

椀は楓の言葉を遮り言った。

「今回だけだから、次は貴女のためだけに闘うから、相手がアイツ等でも・・・貴女に危害を加えるなら、殺すわ」

楓は暫く椀を見た。椀は楓に微笑み掛けた。

「だから、今は休んで・・・絶対に仲間には手を出さないから」

椀の言葉に楓は頷き目を閉じると下へ沈んでった。

「さあ、福音と混沌よね。楓を傷つけたのは」

椛が上を見上げて呟いた。

「私の楓を傷つけたことを後悔させてあげる」

箒は撃たれるかも知れない現実で目を閉じて最愛の人の名を呟いた。

「一夏……」

その時、福音が箒の首から手を離した。箒が目を開けると目に写っていたのは第二形態セカンド・シフトした白式、雪羅を纏った一夏だった。

「仲間は、やらせねえ!!」

終に向かつて混沌がイリユージョンボウガンの引き金を引こうとした時海面から何かが飛び出し混沌を蹴り飛ばした。

「グワア!？」

それと同時に強引に鎖を引きちぎった。

「……………マジかよ」

終が見たものは黒くなったがエターカルムーンで髪をツインテールにした楓、いや、椋が居た。

「さあ、可愛がってあげる」

終は今のエターカルムーンを見てこう呟いた。

「……堕天使」

エターカルムーンは全く変わらない別のES、ダークムーンへ変化していた。

蘇る白 舞い上がる墮天使（後書き）

感想を待っています。

もう時間だから(前書き)

書いてて思った。

椀が強くない？

もう時間だから

「うふふ。たつぷり可愛がってあげるわよ」

楓は口を三日月のようにして笑っていた。いや、今は楓ではなく椋としての人格が変わっていた。

「お前、楓か？」

終が聞くと丁度セシリアとラウラが来た。二人は楓を見て顔から笑みがこぼれた。

「さっきの質問だけど、当たらず遠からずね」

「当たらず、遠からず」

「「?」?」?」

椋の言葉を終は繰り返し二人は疑問符を浮かべていた。

「それにしても、何で貴方達みたいな奴等が・・・あの子の大切な人なのよ」

椀は三人に殺気を放っていた。

「はっ？ 何言ってるんだ？」

終は疑問を浮かべていた。セシリアとラウラは椀の放っている殺気に冷や汗を流していた。

「それにしても今は貴方達に構ってる暇がないし、時間の無駄よね」
「・・・何だと？」

終は無駄と言う言葉を聞き椀に殺気を放った。それにセシリアは青ざめてラウラはより一層冷や汗を流した。

「混沌を潰すのが先だし、あの子の約束があるから貴方達には手を出さないから・・・けど、殺るなら、相手をしてあげよう」

そう言ってルシファーを終を始めた三人に向けた。

「なら、正当防衛か？」

終もオルトロスを逆手に構える。

「って、言いたいけど、あっちが先」

椀はルシファーの刃先を混沌に向ける。更に左手にポセイドンを持ち混沌に向かって行く。

「い、一夏っ!! 一夏なのか!?!」
「おう、待たせたな」

箒は今自分の目の前にいる一夏を見て目尻に涙を浮かべていた。

「良かった・・・本当に、良かった」
「「一夏!!」」

遠くの方から鈴とシャルが近付いてきた。

「鈴! シャル!」
「アンタ、心配掛けんじゃないよ」
「良かった」

鈴とシャルは一夏が無事なことに安心した。

「みんな、心配掛けた」
「し、心配など」

「その目だと説得力無い」
「確かに・・・」

二人に言われて慌てて目元を拭う筈に一夏はある物を渡した。

「り、リボン？」

「ああ、誕生日おめでとう」

7月7日は偶然にも筈の誕生日だった。鈴とシャルはそんな二人をからかい始めた。

572

「ヒューヒュー」

「お幸せに。一夏、彼女を幸せにしないと」

二人に筈は顔を赤くしながら怒鳴り一夏は顔を赤くしていた。

「ふ、二人とも！ からかうな！！／／／」

「／／／」

怒鳴る筈にシャルが一夏を見ながら言っ。

「それにしてもやるね。戦場で告白？」

「おい！？ シャル！！ な、何言ってるんだよ！！！！／／／」

一夏はシャルの言葉を聞いて顔を真っ赤にさせて言った。

「だったら場所考えなさいよ」

「全く、一夏は」

鈴が呆れた目で見て筈も呆れたような顔だが満更でもなかった。

「せっかくだし、使ってくれよそれ」

「・・・ああ」

一夏と箒が少し良い雰囲気になっていると鈴とシャルが叫んだ。

「コラー！！ アンタ等は見せつけんな！！！」

「僕達空気！？ ねえ、空気なの！？」

抗議する二人に一夏と箒はキョトンとした顔で呟いた。

「忘れてた……」

「コラー！！」

二人は忘れられていた事に顔を真っ赤にして怒った。

「悪い悪い、けど今は……」

一夏は急速に向かってきた福音に真正面に向かっていた。

「再戦と行くぜ！！！」

椛は混沌が突き出したチェーンスラッスを体を捻らせて避けその勢いを利用して混沌の背中に蹴りを放った。

「その程度かしら？ 詰まらないわね」

椛は落下していく混沌を見下した。混沌は落ちながらイリュージョンボウガンを放つが椛はルシファーを振るっただけで放たれた追尾弾を掻き消した。

「こんな奴が、こんな弱い奴らが私の楓を落としたの？ 許さない。貴方達は私が消してあげる」

楯は混沌に向かって一気に瞬間加速を使い距離を縮めてポセイドンを振り下ろす。

「私の目の前から消えて」

振り下ろされたポセイドンを混沌はチェーンランスを受け止めるが次第に罅が入っていく。

「そんな物で止められるわけがないでしょ」

その言葉と同時にチェーンランスが真っ二つに砕け散り混沌の装甲を切り裂いた。

「邪魔よ」

次に楯は混沌の腹を蹴り飛ばしルシファーとポセイドンを仕舞いゼウスを取り出した、

「消えて無くなりなさい」

楯がゼウスの引き金を引くとゼウスから漆黒のエネルギー弾が放たれる。

「そのまま碎け散りなさい」

そしてそのエネルギー弾は混沌に当たり爆発が起きる。

577

「これで終わりかしら?.....ん?」

煙が晴れるとボロボロだがまだ混沌は顕在していた。

「以外としぶといのね　けど私はそう言つのは嫌いよ.....
特に貴方みたいな屑は」

椛は混沌に近付いていきゼウスを仕舞いルシファーを出した。

「さよなら、いい夢を」

椛は一振りで混沌の装甲を砕いた。

「ふう、案外詰まらないわ」

椛の左手にはIS操縦者の女性が掴まれていた。

「おい！！ 無事か！？」

終が近付いてくるのを確認した椛はIS操縦者の女性を終に向かって投げた。

「えっ？　つてあぶねえ！？」

終がIS操縦者の女性を掴んだのを確認した椛は福音と一夏が戦闘している場所を見た。

「お前、あぶねえだろ！！」

「黙ってなさいよ」

終が椛に文句を言ったが逆に睨まれた。

「アイツも、潰す」

椛はそう呟くと福音へ向かって行った。

「うおおおおおお！！！！」

一夏は雪片を振るうが福音はひらりつと避けた。一夏は慌てず雪片を仕舞い新たな装備『雪羅^{せつら}』からエネルギー爪を出し福音の装甲を切り裂く。

「よし、エネルギーの消費は激しいがその前に倒す！！！」

福音は一夏から距離を取ると一夏に向かって光弾を放った。一夏は雪羅からバリアーを出して光弾を防ぐ。雪羅は白式が第二形態へ移行した時に装備された。雪羅は一夏の意志に応じて攻撃や防御、更に遠近問わずに出来る。

「何度も喰らうか！！！」

その様子を楯は少し離れた場所から見ていた。

「私が出る幕じゃあないのかしら？」

何かを考えた後椛は不適に笑った。

「まあ、相打ちになつてくれれば私は後が楽だし最悪負けても福音を潰すのは簡単になる……だからしっかり働いてね。織斑
一夏」

（一夏が駆けつけて来てくれた……！）

箒の感情は嬉しさを飛び越えた。福音と闘う一夏を見て箒は願った。

（私は共に闘いたい。一夏の背中を守りたい……！）

箒の想いに応えるかのように展開装甲から紅に混じって金色の粒子が溢れ始めた。

「これは・・・！」

突然の事に驚く箒だが紅椿のハイパーセンサーが紅椿のワンオフ・アビリティー『絢爛舞踏』が発動した事を伝える。

（まだやれるか？）

それに応えるようにより一層粒子が溢れ出す。

（ならば行くぞ、紅椿！！）

箒は一夏に貰ったリボンを髪に付けて一夏の元へ向かった。

「クソッ!! エネルギーが」

一夏がステータス画面を見て悪能を付いている時。

「一夏!!」

「箒!? お前、ダメージは」

「そんな事はいい! これを受け取れ!」

白式の装甲に紅椿を纏った箒の手が触れると白式のエネルギーが回復していった。だがそれによって一瞬の隙が出来て福音は一夏と箒に光弾を放つ。

「不味い!!」

光弾を漆黒のエネルギー弾が全て掻き消しその発射源を見ると。

「「楓!?!」」

「ボサツとしないで早くやりなさい!?!」

今度は福音に無数の弾が発射された。

「終!?!」

「一夏、早くしろ!?!」

左手に混沌のIS操縦者を抱えて右手にケルベロスを持っている終が一夏に言った。

「分かった!?!」

一夏は雪羅のエネルギー爪を伸ばし福音に向かって行く。

「今度は逃がさねえ！！」

一夏は福音に雪羅のエネルギー爪をぶつけて福音の装甲が解除されていきIS操縦者の女性が落ちていく。

「やべえ！！」

落ちていく女性を柁掴んだ。

「楓、サンキュー」

それと同じ時にほかのメンバーが来ると柁は掴んだ女性をシャルに投げ渡した。

「へっ？ うわぁ！？」
「だから投げんなよ！！！」

椀は終の文句を無視して言った。

「残念だけど、私は椀。楓のもう一つの人格よ」
「「はっ！？」」「」

その場にいた全員が驚愕した。椀はラウラに近付いた。

「もう時間だから」

そう言い残すと椀は気を失いラウラが楓を掴んだ。それと同時にエターナルムーンが黒から銀へ戻り粒子となって消えた。

「はぁ、取り合えず戻るぞ」

全員が頷くと旅館に向かって飛んだ。

もう時間だから（後書き）

感想をお待ちしております。

バカやってる方が楽しいな

「作戦完了・・・と言いたいところだが貴様等は重大な違反を犯したよって学園に着いたら反省文と特別課題を出してやるから、そのつもりでいる」

「・・・はい」

福音と混沌を撃退した後に待っていたのは腕組みしていた阿修羅（と書いて千冬）が居た。一夏達は自分達の運命を素直に受け止め一同は大広間に正座させられていた。

「みんな、すまない・・・俺の所為で」

「いや、私達も乗ったんだ。だから同罪だ」

「俺は自分の意思だし」

「けど、これが良かったのかもな」

「・・・そう、ですわ、ね」

「楓も見つかつたし、一件落着」

「確かにね」

上から終、篝、一夏、ラウラ、セシリア、シャル、鈴の順番で言う。
楓は大広間の片隅で未だ眠っていた。

「大丈夫なのかな？ 楓は」

「一人で戦って、挙げ句の果てに全身に福音の光弾を浴びたんだ。それなりにダメージは蓄積されてるだろ」

シャルが楓を心配し終が冷静に状況を言うと一夏達の表情が暗くなる。

「ん、んん？」

一夏達が正座をしている時に偶然かそれとも神のイタヅラか楓が目を見ました。

「「「楓！？」」」

全員が目を見開いて楓を見ると楓は目をさすりながら正座させられているメンバーを見た。

「何、やってるんですか？」
「」「反省」「」

楓の問いに全員が答えた。セシリアは赤を通り越して青くなっていた。

「何ですか？」

「・・・楓、お前はどこまで覚えてる？」

終は楓の問いを無視して聞いた。

「えっ？ え〜と、一夏さんが墜とされて、終さんが一夏さんと幕さんを運ぶところまで微かに覚えてますが」

黙って聞いていた終の表情がより一層険しくなっていく。

「？ どうかしましたか？」
「いや、何でもない」

終は楓に素っ気なく返した。

「あの、もう、その辺で。怪我人もいますし・・・」

救急箱と水分補給パックを持った山田先生が声を掛けると終は無言で大広間を出た。

「おい、終！ 待てよ！！」

終の後を一夏が追いかけた。暫く沈黙した後。

「そ、それじゃあ診察しますので服を脱いで全身を見せて下さい」

楓は立ち上がろうとすると。

「あっ・・・」

楓は尻餅を付いてしまった。そんな楓を見た箒が楓に手を貸した。

「大丈夫か？」

「あっ、はい」

楓は箒の手を借りて立ち上がった。

「ふうー」

終は旅館の窓から外を見ていた。一夏が近付いてきた。

「何やってんだよ、終」
「・・・一夏」

終は声を掛けられて一夏の方を向いた。

「何の用だ？」

終の言葉を聞いて一夏は転けそうになった。

「何の用だ？　じゃあねえよ！！　黙っていったから心配して追いかけたんだよ」
「・・・悪い」

一夏は終の顔を見て暗い表情をしていたのに気付いた。

「どうしたんだよ？　暗い表情をして」
「実は、少し気になってんだよ」

終は窓の外を見たまま言った。

「何が？」

一夏が聞くと終は一夏に向き直った。

「楓だ」

「はっ？」

一夏は予想外の言葉に啞然とした。終は構わず続けた。

「おかしいんだ。エターナルムーンはあそこまで強くない。ましてや、楓があんな容赦なく攻撃は出来なんだよ。あいつの性格上・・・更にアイツが覚えているのが俺が一夏と箒を連れてった事。しかもその記憶も曖昧だ。・・・言いたい事が分かるか？」

一夏は終が何を言いたいのか理解し頷いた。

「つまりだ。アイツが椛と言ったのは演技とかじゃあなくて・・・可能性だが多重人格だ」

一夏に終はそう伝えると何かを考え込んだ。

「だが、腑に落ちないこともある」
「何だよそれ」

一夏が聞くと終は話始める。

「椛は強かった。だから、混沌と福音の相手を同時にしても負けな
い」

「ああ、確かに」

「もしもだ。あくまで可能性だからな・・・楓自身が暴走した」
「暴走!?!」

終が言った暴走と言う単語に一夏は驚愕した。楓を知る者なら誰でも驚愕する言葉だった。

「一夏、分かっているとと思うがあくまで可能性だ。実際に起きたことが定かでない以上分からない」

終はため息を吐いて歩き始めた。

「この事はみんなには内緒な」

終が去った後一夏、一人が佇んでいた。

「
」
」

楓は海辺の砂浜で夜空に浮かぶ星を見ながら歌を歌っていた。

「
　　」

楓の黒い瞳が夜空の星の輝きを一つ一つ写していた。

「へえ、楓って、歌が上手かったんだ」
「えっ？」

楓は後ろから突然声を掛けられて後ろを振り返るとそこには水着を着た鈴が居た。

「鈴さん」
「それに楓の水着姿も可愛い」

鈴が言うと楓は顔を赤くした。

「顔を赤くして・・・可愛い」

そう言って鈴は楓の後ろから抱き付いた。

「鈴さん!?!」

鈴は楓の耳元で静かに呟く。

「本当はどうなのよ？ 不安じゃあないの？」
「・・・」

楓は黙り込んだ。鈴は抱き締める力を強くした。

「不安なら、私を頼ってよ。力になるから」

楓は知らず知らず涙を流しながら鈴の言葉を聞いていた。

「楓は色々を抱え込むからさあ、吐き出さないと何時か楓が苦しくなっちゃうでしょ」

楓は涙を我慢していた。鈴は楓に向き合った。

「だから泣ける時に泣きなさいよ。私の胸を貸してあげるから」

楓は決壊したダムのように鈴の胸で泣いた。

「ごめんなさい、鈴さん」

暫くして楓は泣き止んだ。さっきまで泣いていたから目元が真っ赤になっていた。

「良いのよ。今度も泣きなくなったら何時でも私の胸を貸してあげるわよ」

「無い胸は貸せないだろ」

二人の後ろから声が聞こえて振り返ると終と血の涙を流しているセシリア、シャル、ラウラが居た。

601

「何時の間に行ったのよ!？」

「楓がお前の胸で泣いてる途中」

セシリアとシャル、ラウラが楓に近寄ってきた。

「楓さん、私も相談に乗りますわ」

「泣きなくなったら何時でも来てよ。待ってるから」

「いつ言つのは私の役目だ。何故なら楓は私の嫁だからだ」

終はラウラにある事を聞いた。

「なあ、ラウラ・・・楓は女だから嫁は合ってるんだが、何故ずつと云ってんだよ?」

「日本では気に入った相手を俺の嫁や自分の嫁と言つ習慣があると聞いたが」

「全くねえよ」

ラウラの言ったことに終がツッコミを入れた。

「んで尊、話つて何だよ?」

「夏は箒に呼び出されて海岸に来ていた。」

「そ、それはだな」

指をもじもじさせる水着姿の箒。夏も水着姿だ。

「まず、助けてくれてありがとう」

「ああ、それが、気にするなよ」

「それと、もう一つ」

「ん？ 何だ？」

「夏が聞くと箒は下を向いた。」

「どっしたんだ？」

箒は深呼吸をして夏を見た。

「いいいい、一夏あ！！」

「は、はい……！」

いきなり大声で名前を言われて一夏は改まってしまふ。

「わわわわ私は、一夏

お前の事が好きだ！！」

暫く沈黙して一夏が箒に近付いた。

「……箒」

「夏は尊の名前を言つと尊を抱き寄せた。

「俺で良かったら／＼／」

「夏／＼／」

ここでは二つの影が一つになったと言っておく。

翌日、終はバスの中から海を眺めていた。

「・・・また何時か、来たいな。海に」

終は海から今度は車内を見る。楓を挟み言い争うセシリアとシャル、

ラウラそしてそれを見て苦笑いすれ楓。一夏と箒は手を繋ぎながらお互いの顔を見ていた。ついでに二人の顔は真っ赤になっていた。

「やっぱり、この時が俺にとっての幸せだな」

因みに鈴は二組のため別のバスに乗っていた。因みにバスに乗る時鈴の目から生気が消えていた。

「音梨楓ちゃんっている？」

「私ですが」

一番前の席にいたため楓は立ち上がった。

「へえ、貴女が、ナタル！ こっちよ！！」

女性が呼ぶともう一人別の女性がバスに乗った。

「この子がそうなの？ ヴィシヤ」
「本人が言ってるからそうでしょ」

二人の女性は楓の顔をまじまじと見た。

「え〜と、貴女達は？」

楓が聞くと二人の女性はそれぞれ言った。

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘルの操縦者よ。それでこつちが」
「『混沌の皇帝』カオス・エンペラーの操縦者。ヴィシヤス・アメルダよ」
「『永遠の月』エターナルムーンの操縦者。音梨楓です」

楓は一礼した。

「今度、合うときはダンス会場で会いたいわね」

「それと、これは私達のお礼」

そう言い二人は楓の頬にキスをした。

「ばいばい」

「また何時か会いましょう」

そう言つてバスを降りた二人。暫くして楓は頭から湯気を出しながら気絶した。

「きゅ〜」

楓が気絶した事でバスの中が騒がしくなり終はその様子を微笑みながら見ていた。

「やっぱり、こつ言つバカやってる方が楽しいな」

そうやって終は窓の外から青空を見た。

バカやってる方が楽しいな（後書き）

次回はコラボです！！

それと名前のアイデアをくれたロムスカ王さん。ありがとうございました
ました。

感想をお待ちしております。

番外編？ 柁は破壊者（前書き）

今回はコラボです

番外編？ 柊は破壊者

終「ヨツシアー！！ 番外編？だ！！！」

一夏「テンション高いな」

第「逆に高すぎる」

楓「今回のゲストはガタツクさんの『仮面ライダーDCDキバ&なのは 赤き王と白き魔王』から襟立ケイスケさんとスバル・ナカジマさん、ティアナ・ランスターさん」

終「『仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー 超DCDスピノフ』からバース（後藤）とサンドバック（海東）が来たぜ」

ケイスケ&スバル&ティアナ「『よろしくお願いします』」

後藤「俺がバースだ」

海東「ちよっ！？ 何で僕の紹介が酷いの！？」

終「眠れ」

海東「グフア！？」

一夏「理不尽だな」

篤「アイツの扱いはあれで良い」

後藤「俺がバースだ。それ以外あり得ない」

ラウラ「黙ってる」

鈴「潰すわよ」

ケイスケ「何か、ラオウのオーラが出てる！？」

スバル「凄いつ！是非、シューティングアーツの師匠に……」

ティアナ「止めなさいよ……！」

終「ティアナ……ナイスツツコミだ!!」

ティアナ「そこ!？」

海東「全く、期待しない方が……」

終「お前は黙って潰れる」

スバル「凄い……殴るだけであんな や××になるんだ。それを私に教えて下さい!!」

ティアナ「止めなさいよ!!」

ケイスケ「クロス……ゼンインコロシテヤルウ!! (訳止めるよスバル!! そんなの覚えたら俺等が死ぬ!!!!)」

スバル「ケイスケ、ティア！！　今から粉碎振動やるから受け止めて」

ケイスケ&ティア「死ねってか！？」

スバル「加減するから大丈夫！！」

後藤「俺がバースだ」

一夏「お前等・・・箒に手を出したら、死ぬぞ」　白式展開

箒「一夏に何かあったら・・・生きて帰れると思うな」　紅椿展開

ケイスケ&ティア「怖っ！！」

楓「タノシソウデスネー」

シャル「ソウダネ」

ラウラ「ホドホドニシロヨ」

セシリア「オキヲツケテ」

鈴「スブタツクロウ」

ケイスケ&ティア「無視するなあー!!!」

終「だが気にするな!!」

ケイスケ「それアंकの台詞!!」

一夏「お前等うるさい」 邪神を越えてしまったオーラ

篝「静かにしろ」 同じく

全「」「すいません」「」

後藤「俺がバースだ」

一夏&篝「あ?」

後藤「すいませんでした!!」 土下座

ケイスケ「あの人プライド無いの!？」

終「いや、あれは流石に……」

海東「土下座はないでしょ」

一夏「海東は、」

筈「黙って、」

終「眠れ」

海東「……」 血塗れ

ケイスケ「何やってんですか!?!」

終「眠らせた」

ティアナ「血塗れで寝てる人はいないですよ!?!」

一夏「すつきりしたぜ」

篤「全くだな」

スバル「これから師匠と呼ばせて下さい!?!」

ケイスケ&ティアナ「それは困るから止めるよ!?!」

後藤「俺がバースだ。だが伊達さんは最高だ! 是非俺を弟子にして下さい!?!」

ラウラ「潰すぞ」

楓「皆さん。止めないと

全「「「?」「」」

海東「シャルロットにオイル・・・」

シャル「潰れて」 アサルトライフル乱射

海東「ああああ!!!?」 穴だらけ

ライジングイクサ激情態「コロシテヤル・・・ゼンインコロシテヤルウウウウウウ!!!.....!!!!!!」

ティアナ「止めなさいよ!!!」

終「逝きやがれ海東」 海東を蹴り飛ばす

海東「人で無しいいいいいいいいいい!!!.....!!!!!!」
「.....!!!!!!」 何時の間にか復活していた

ティアナ「海東さああああああああん!!!!!!.....!!!!!!?」

海東だつた物「……………」何これ状態

ケイスケ「一体、誰かこんな事を!？」

ティアナ「アンタよ!！」

後藤「俺がバースだ。だから俺は無傷だ」

鈴「潰すわよ」

ラウラ「手伝うぞ」

セシリア「オホホホホ」

後藤「俺がバースだ!！」

海東「僕がディエンドだ」

ティアナ「海東さんが後藤さん化したあ————!!!!!!」

後藤「呼んだか？」

終「消えやがれ」

一夏「確かにな」

箒「まともな奴はいないか？ 一夏以外」

後藤「俺がバーズだ。だからまともだ」

終「絶対にないな」

楓「終、さん。そう、言わずに……ゴホッ！　ゴホッ！」

番外編？ 柁は破壊者（後書き）

感想をお待ちしています。

ガタツクさん、ありがとうございます。

特別編 強さへの渴望（前書き）

今回は楓が中心で短いです。

特別編 強さへの渴望

「・・・」

楓はただ一人アリーナに居た。

「輝け、エターナルムーン」

楓はエターナルムーンを展開し相手を想定してルシファーとポセイ
ドンを振るうが途中楓はあの日の事を思い出した。

634

「!?!」

楓は福音と混沌に落とされた記憶を微かに思い出しルシファーとポ
セイドンに落ちた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は震える手でルシファーとポセイドンを取ろうとするが取る前に
また思い出しISを解除してしまう。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は震える体を押さえるが震えるは収まらず更に震えてしまう。

「何で？ 何で震えが止まらないの？」

暫く楓は震えるだけだった。

「・・・」

楓はシャワールームでシャワーを浴びていた。

「強くなりたい」

楓は人知れず呟いた。

「強くなりたい！ 強くなりたい！！」

楓は気付いたらシャワールームの壁を強く叩いていた。

「強く、なりたい」

楓の手からは血が流れていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓の白い手からは赤い血が流れ壁から床に流れる。

「誰も、傷つけないぐらいに、強くなりたい」

楓はその場に座ると壁には赤い血が線を引いた。

「何をどうしたらこうなるの？」
「・・・」

楓はあの後保健室に行き保健の教師に手に包帯を巻いて貰っていた。

「ありがとうございました」

楓は保健室を出て暫く歩き壁を背にして座り込んだ。

「どうしたら良いの？ 私は」

そのまま楓は泣き始めた。

楓は部屋に戻った後ベットに身を投げた。

「・・・」

楓は着替えもせず目を閉じて寝ようとするがまたあの時の光景がフラッシュバックした。

「いやあ!？」

楓は飛び起きた。楓は冷や汗をかいていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は荒い息を吐きながらまた身をベットのの上に寝転がる。

「嫌だ。怖い」

「終さん」

「何だよ。手の怪我はどうしたんだよ？」

終は横目で楓の手を見て聞いたが楓は無視して終に聞いた。

「どつしたら、もっと強くなれますか？」

楓の言葉を聞いて終は溜め息を吐く。

「今じゃなくても良いだろ。それに今直ぐ強くなる必要はないだろ」

終は自分の飲みかけのコーヒーを飲むが楓は焦るように言った。

「今よりも強くないと！ 今よりも、もっと、強くないと」

終はそんな楓を横目で見て言った。

「何焦ってんだよ」

「！？ 焦って何て！！」

「だったら強くなる必要はないだろ」

「もう良いです！！」

「っつて、おい！！」

楓はその場から走り去った。

「何だよアイツ」

終はコーヒーを飲み干すと席を立ち自分の部屋に戻った。

「強く、今よりも強く」

楓はその事だけを考えていた。

「強ならないと。今よりも」

楓は上を見上げると空は透き通るぐらい青かった。ただ、月は何時しか強さを渴望していく。

人の為ではなく自らの恐怖を振り払うように強さを求める。

特別編 強さへの渴望（後書き）

感想をお待ちしております。

夏と言えばプール(前書き)

今回は短いです。

夏と言えばプール

「暑い。日本の夏は暑い」

寮の廊下を鈴は汗をかきながら歩いていった。学園の部屋にはエアコンが付いているが廊下に付いているわけがなく廊下はある意味灼熱地獄だった。(鈴に対してだけ)

「暑すぎるわよ！……！」

だが鈴は知らなかった。廊下より暑くなっている場所を

「暑い……最悪だ。エアコン壊れたし。チクシヨ……！」

終と一夏の部屋。終が居るが一夏は居ない。理由は箒の部屋に連れ込まれたため居ない。

「ああ、溶ける。俺の肉体が熱で溶ける」

終は机に突っ伏していた。只今絶賛終と一夏の部屋のエアコン故障中更に窓からも日の光が来るため部屋の温度はかなり高い。

「灼熱の部屋。灼熱の外。灼熱の一夏と箒・・・ガク」

そう言い残し終は力尽きた。

「楓、居る？」

鈴は楓の部屋の扉をノックするが全く反応がない。

「楓。ねえ、居るなら返事してよ」

鈴は楓の部屋の扉をノックするが同じく反応はなく次第に鈴は不安になっていった。

「留守？ けど何処に」

鈴はドアノブを回すと扉が開いた。

「開いてるし。鍵閉めてないのかな？」

鈴は部屋にはいると案の定な事に楓はベッドの上で

「すうー、すうー」

体を丸めて寝ていた。更に服は少し脱げていて白い肌が見えた。

「ぶっ!?!」

鈴は鼻血が出そうになるが鼻を押さえた。今の楓の体制は同姓ですら見とれたり最悪、襲いかかりそうな状態だ。

648

「危ない。もう少しで楓を襲うところだった」

鈴は寝ている楓の隣に座った。

「強く、もっと」
「・・・」

その言葉を聞いて鈴は楓の頭を撫で始める。

「もっと強くって、今でも強いのに」

鈴は溜め息を吐いた。

「ん？ 鈴さん」

「あつ、やっと起きた」

それから数分後、楓は目を擦りながら鈴を見た。

「ごめんね。勝手に入って」

「いえ、鍵を開けっぱなしにした私がいけないんです」

楓は暗い顔をして下を向いた。

「あつ、ガムシロップでも出しますね」

「間違はなく糖尿病になるわよ!!」

「なら醤油を」

「飲めるか!!」

暫く鈴は騒ぎ楓は苦笑いをした。

「で、用件は？」

「あつ、これなんだけど」

鈴はポケットからチケットを二枚取り出した。

「ウォーターワールドのチケット。一緒に行く」

楓は頷いた。鈴は部屋を出ていった。

「強くなる。もっと、もっと」

楓は自分の手を握った。

「音梨、居るか？」
「はい」

千冬の声が聞こえ楓は返事をする。千冬は部屋に入ってきた。

「何か用ですか？」

「実はこれを渡しに来た」

千冬はポケットからチケットを取り出した。

「ウォーターワールドのチケットですね」

「知ってるのか？ まあ、良い。今回の事件の一番の功労者だからな。それに息抜きでもしてこい。最近、疲れてるようだからな」

千冬はそれだけ言うと部屋から出て行った。

「ふう〜、付きましたわ」

セシリアは学園の前で背筋を伸ばした。

「お疲れのようですね。お嬢様」

セシリアに声をかけたのは彼女のメイドのチエルシーだ。

「ええ、疲れましたわ」

セシリア達に楓が近付いてきた。

「セシリアさん!!」

「楓さん!!」

楓はセシリアに近付くとチエルシーに気付き礼をした。

「初めまして。音梨楓です」

「こちらこそ初めまして。チエルシー・ブランケットです」

楓は自分のポケットからチケットを取り出しセシリアの手を置いた。

「これ、一緒に行きましょうね」

それを言うと楓は学園に戻っていった。セシリアは自分の手に置かれてるチケットを見て頬を緩めた。

夏と言えばプール（後書き）

暫くは仮面ライダーオメガを優先するのでご了承を

感想をお待ちしております。

プールの後の災難（前書き）

何やってんだろ？

プールの後の災難

「成る程、福音と混沌の事件を解決したから織斑先生からウォータワールドのチケットを貰ったけど楓は私から貰っていた」

「そこへたまたま帰ってきた私にチケットを渡した」

「はい・・・ごめんなさい」

場所はウォーターワールドの喫茶店の中楓は現在セシリアと鈴を前に顔を下に向けてビクビクしている状態だ。

「三人で楽しくできたらな、って思いまして、ごめんなさい、本当にごめんなさい」

楓は今にも泣きそうな勢いだった。

(ヤバイ、この展開をどうしたら)

(不味いですわ、このまま楓さんを泣かせたら私の精神が持ちませわ)

(ぶっ！？／／／)

妄想から戻ったセシリアは顔を真っ赤にして楓から少し目を反らす
がチラッと横目で見てしまう。

(り、理性が／／／)

セシリアは段々震えていき鈴はそんなセシリアに小声で声をかけた。

(アンタは何妄想してんのよ!!！)

(鈴さん何を!! 別に私は楓さんとのあんな事やこんな事を妄想
してませんわ!!！)

駄々漏れだ。鈴はセシリアを冷めた目で見た。

「二人とも、頑張ってくださいー!!」

楓は二人に手を振りながら応援しているがセシリアと鈴の顔に笑顔はなかった逆にお互いを睨んでいた。

(・・・何でコイツと?)(

騒ぐ周りを無視しながらお互いに敵意を出しながら始まるのを待っていた。

「それでは！ 第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レースを、開催します！」

司会の方がジャンプした。ビキニタイプの水着であるため周りからは拍手と歓声がかかるが楓は苦笑いしながら周りを見た。女性女性女性周りには女性しか居なかった。

「・・・」

セシリアと鈴は黙りながら準備体操をしながら楓の方向を見る。

（絶対に優勝してやる）

（負けられませんわ）

セシリアと鈴は楓をチラチラと見ながらしっかりと体操をする。

「頑張ってくださいねー!!」

楓は二人に笑顔で応援していると周りの女性達＋セシリアと鈴は類

を緩める。

(セシリアには悪いけど・・・ぶっ潰す)

(鈴さんには悪いですが・・・潰させて貰いますわ)

二人ともとてつもなく黒いオーラを出しながらルール説明を聞いていた。

「何でしょ？ 二人が怖い」

楓の脅えた表情が周りの女性達の理性を削り取っていた。

()(あぁ、襲いたい。この子が泣きながら許してー、って言うま
で襲いたい、ハア、ハア、ハア、ハア)()

周りの女性達の目からハイライトが消えていくのを楓は知らない。

「それでは！ よーい、スタート！！」

合図と共にスタートする二人は脚払いをかけたペアを容赦なく叩き落とした。

「やっぱり、二人が怖いです」

二人を見る楓は震えた声で言うと周りの目つきが怪しくなっていく。

「それにしても、二人共、容赦がないです」

二人は阻害してくるペアを次々と叩き落としゴールを目指す。

「ん？ あれは」

楓が見たのは体つきのよい女性のペアが目を書った。

「トップの木崎・岸本ペアはご存じの通りオリンピッククレスリング
金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！」

「・・・凄い」

楓は目を見開きながら四人を見た。

「くっ、こうなったら最後の手段。セシリア、走って!!」

「私ですか!？」

「早く!!」

セシリアは走り鈴が声をかける。

「そこで反転!!」

セシリアが振り返ると見えたのは鈴の足の裏。

「ぶっふう!?!」

女性なら絶対に上げない声を上げて鈴はゴールに付くがセシリアは武闘派ペアに当たり落ちた。

「セシリアさああああああああん!!!!!!??」

楓が落ちたセシリアの身を案じるが水柱を立てながらISを展開したセシリアが出てきた。

「私の、私の顔を、しかも楓さんの目の前で」

セシリアは鈴に攻撃すると鈴もISを展開して臨戦状態になる。

「二人共辞めて下さい!?!」

会場の殆どが鼻血の海に沈んだ。

「へっくちゅー!!」

楓は可愛らしいくしゃみが会場に響いた。

学園の門の前体をさする楓と何処か元気のないセシリアと鈴あの後優勝賞品はなし更に司会の女性に絞られた二人だった。

「今日は、もう休み、ます」

二人は頷くと楓は自分の部屋に戻って行った。

「クツチュユ!!」

楓はくしゃみをしながら部屋にはいると頭をハンマーで叩かれる痛

みが来ると脚を力が入らなくなり気を失う。

「あっ・・・」

楓は部屋に倒れて荒い息をしながら床に倒れていた。不幸にも扉が閉まってしまっていた。

「ハア、ハア、ハア、ハア」

部屋にエアコンは入っておらず部屋の温度が上がると楓の顔が段々と赤くなりより一層荒い息を吐く。

プールの後の災難（後書き）

感想をお待ちしております。

長編予告（前書き）

予告です。

ガタックさんとサザンクロスさんのキャラを許可を得て借りています。

長編予告

IS学園、ここにある異変が起きる。

「何だあれ？」

「灰色の、カーテンですよね？」

「こつち来てないか!？」

「何!？」

突如として灰色のカーテンに飲まれた音梨楓、黒谷終、織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデビツヒの九人その行き先は……

「何処、ですか？ 此処は」

見たこと無い荒れ地で楓は鈴、シャル、ラウラ以外とはぐれてしま
う。

「此処は何だ？」

同じく一人飛ばされた終は一人自分の状況を調べる。

「二人共、無事か！？」

「ああ、大丈夫だ」

「それにしても、他の皆さんは？」

また仲間とはぐれた一夏、箒、セシリアは仲間を捜す。

「これって・・・町、ですか？」

「だよな？」

「けど、これって」

「戦争の後か？」

楓達は町に辿り着いたがそこは廃墟になっていた町だった。

「何で？ こんな」

分かれて町を探索する楓達に無人IS軍団が攻撃してくる。

「ガア！？」

絶体絶命に追い込まれる楓、鈴、シャル、ラウラその危機に駆けつけたのは

「貴女は？」
「私は夕暮太陽だ」

楓達とは別の世界から来たIS操縦者夕暮太陽だった。

「面倒だな」

終の前にも現れたIS軍団そこへ来たのは

「誰だ？ お前」
「俺は月光夜明だ」

太陽と同じ世界から来たもう一人の男のIS操縦者月光夜明だった。

「お前は？」

「俺は・・・化け物だ」

夜明に自分は化け物と言い突き放そうとする終。

「何だ？ あれは」

終と夜明の前に現れた戦士、仮面ライダー。

「僕は尾上タクミ。仮面ライダーファイズ」

「仮面ライダー？」

深まる謎。

「何だ？ あれ」

一夏達の目の前には二色の仮面ライダーが現れる。

「俺は左翔太郎」

「僕はフィリップ。そして、僕達は」

「二人で一人の仮面ライダーだ」

「はっ？」

この世界の謎。ISと仮面ライダー。

「まさか！ この世界は！！」

世界の謎に近づく終、夜明、タクミ世界の謎とは

始まる世界の崩壊。終は掴んだ真実を話す。

「まだ終わりませよ。世界は」
「何故拘る？ 何故だ！！」

楓達は世界を救えるのか。

オリジナル長編。異世界編・・・始まる。

長編予告（後書き）

感想をお待ちしております。

修正しました。

特別編 一匹狼(前書き)

終メイン(?)です。

どはむいん

特別編 一匹狼

部屋のベッドに横になっている終は天井を見上げていた。

「・・・」

何もせず、何も考えずただ天井を見ていた。

「己の証か、俺には必要がない。そう考えてたんだよな」

誰に話すわけではなくただ呟くだけだった。

「俺が生きる理由って、今はどうなんだろ」

終は左腕についている待機状態のブラックファングを見た。

「黒い牙・・・昔は虐殺戦士、変わるもんだな」

終はベッドから起き上がると部屋を出た。

「夕食は楓を誘つか・・・ん？」

終が歩いていると楓の部屋の前にいるセシリアと鈴だった。

「何やってんだ？」

疑問に思った終だった。

事は数分前に遡るとセシリアは部屋の時計を見て夕食を食べようと出た後楓を誘うため楓の部屋に足を運び部屋の前で鈴と遭遇した。

「あら、鈴さんはどうして此処に？」

「アンタこそどうして此処に？」

セシリアと鈴は数秒睨み合うとお互い言葉を発した。

「楓は私が誘うからセシリアは先に行つてなさいよ」

「鈴さんこそお先に行つて下さい。楓さんは私が責任を持って連れてきますわ」

遂には火花を散らし始めた。

「何やってんだ？」

二人が向くと無表情な顔をした終が居た。

「もう一度聞く。何やってんだ？」

二人は終を見て驚いていた。

「まあ、大体分かった」

終は楓の部屋の扉を見て叩いた。

「おい楓、居るか？」

反応がなくもう一度叩いた。

「おい、居たら返事しろ」

流石に反応がないのを三人は不思議がり顔を見合わせた後ドアノブを掴み回すと鍵は掛かっておらず開いた。

「居るか？」

終が部屋の中を見る前にセシリアと鈴に床に叩きつけられた。

「楓！！」

「私と夕食を！！」

「ゴガア！？」

更に追い打ちをかけるように終は後頭部を踏まれた。

「ギヤア!?!」

セシリアと鈴は部屋の中に駆け込んだ。

「ちつよ!?!? 楓!?!」

「楓さん! 楓さん!?!」

終が顔を上げると荒い息を吐く楓を抱く鈴と楓を必死に呼ぶセシリアが目に見えた。

「ハア、ハア、ハア、ハア」

終は部屋に入ると温度が上がるのを感じた。

「なあ、部屋暑くないか？」

「確かに」

「外より暑いですわ」

鈴は楓を抱えて部屋を出ようと立ち上がった。

「早く楓を連れて行くわよ!!」

二人は頷くと保健室に向かう。

「良かったですわ。ただの風邪で」

「ええ、本当に」

「俺はある意味疲れたわ」

終、セシリア、鈴は食堂でセシリアはアイスティー、鈴は麦茶、終はブラックコーヒーを飲んでいた。

「つか、何でアンタは暑い時期に厚い飲み物を飲めんのよ」
「俺はコーヒーはブラックコーヒーの暑い物しか飲めないんだ」
「何ですかそれ」

二人は終の言葉に呆れていると地響きの音が聞こえてくる。

「何だ？ 地響きが聞こえるが」

終が食堂の入り口を見るとシャルとラウラが猛スピードで向かってきた。

「「終！！」」
「うお！？ 何だよいきなり」

終は飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになりシャルとラウラを見た。

「楓が、楓が風邪って、」

「本当なのか!?!」

「ああ、ホント」

終はコーヒーを飲むとラウラは終の胸倉を掴んだ。

「貴様! よく平然としているな!?!」

終はコーヒーのカップを置くとラウラの腕を掴んだ。

「俺に何が出来る? 戦う事しか出来ない俺に何が出来る」

終はラウラの脚を払い床に叩き付けた。

「何も出来ない奴が居て何になる？ 俺みたいな化け物が居たら何だ？ 何にもなんないだろ」

ラウラの腕を放すと食堂を出ていった。

「化け物か、やっぱり自覚してたんだよな」

終を屋上で夜空を見上げて呟いた。

「俺は化け物なんだ。アイツ等とは違う」

終は夜空を見上げて寝転がった。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

楓は部屋で荒い息を吐きながらベッドの上で寝ていた。

「・・・楓」

鈴は楓の前髪を掻き分けた。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」
「魔されてるのかな？」

鈴は楓の手をそっと握った。

「鈴さん」

「セシリア」

楓の部屋にセシリアが入ってきた。

「楓さんは」

セシリアが訪ねると鈴は静かに首を振った。

「一人に、しないで」

楓は涙を流しながら呟いた。

「俺は、一匹狼だな」

終は夜空を見ながら呟いて笑みを浮かべた。

特別編 一匹狼（後書き）

感想をお待ちしております。

買い物？ 何それおいしいの？by終（前書き）

何だろ？ 終のキャラがハッキリしないな

買い物？ 何それおいしいの？by終

昔、俺は昔は戦場にいた。

「今戦滅作戦は敵軍の・・・」

くだらない上司の話は適当に聞き流した。作戦の内容は頭に入ってる。

「今回の作戦の要はーだ。分かったな」

俺の名前が呼ばれると周りの馬鹿共は楽勝だとか抜かしてる。本当にくだらない屑共だ。

「・・・気を抜いたら死ぬだろうが屑」

俺が殺気を放ちながら呟くと辺りの奴らは静まり返った。だから屑

なんだよ

「これだけは言うておく。足を引っ張るなよ屑共」

俺はそれだけ言うと部屋を出た。部屋を出た時見たのはおそれた表情の屑共だけだった。

漂う鼻を刺すような血の臭い。響き渡る叫び声。俺はゆっくりと歩きながら辺りの民家の中を確認する。

「・・・居るか」

俺は民家の一つの扉を蹴り飛ばすと中に人が確認できた。

「ひっ!?!」

俺は無言でそいつを見た。そいつは女性で髪の色や肌の色からして日本人だ。

「・・・何故此処にいる？」

「えっ？」

「お前は、何故此処にいる」

俺は聞くとそいつは静かに言った。

「私は、内戦を止めるために」

成る程、ただの偽善者か。くだらない。何をしたいんだが

「お願い、見逃して、お腹には子供が居るの。だからお願い!!--」

確かに妊娠しているようだ。だが俺には関係ない。俺のやるべき事はただ一つ。任務を遂行する事。この村の戦滅。

「この子が産まれるまで、」

「任務の妨げになる。呪うなら自分を呪え」

俺は持っていた拳銃でそいつの頭を撃つ。辺りに血が飛び散りこの世から二つの命が同時に消えた。俺は民家を後にすると民家を出たところに老人と男が見えた。

「何だ、お前等」

男は老人を守るように立つと俺はナイフを投げナイフは男の頭に刺さった。

「ひいひい!」

俺は男を蹴り飛ばし頭からナイフを抜き老人の頭に拳銃を突きつける。

「どうやら、お前が最後だ。言い残すことは何だ」
「た、助けて」

俺は引き金を引くと老人の頭に穴が開き血が飛び散るが俺は顔色を変えず村を後にした。

「作戦の、成功を確認。これより帰還する」

俺は他の奴らと共にへりに乗り込み村を見下ろした。

「・・・屑共が」

俺はそう呟くと目を静かに閉じた。

「・・・何思い出してんだよ俺は」

終はベッドから起き上がると一夏が居ない事に気付いた。

「はあ、あのバカップルが」

終は溜め息を吐くと着替えて部屋を出た。

「ん、んん」

楓は重い瞼を開けると目に入ってきたのは見慣れた天井だった。

「体が、だるい」

楓は体を起こそうとすると腕の辺りに重みを感じてみるとそこには寝息を立ててるセシリアが居た。

「セシリアさん」

楓はセシリアを起こさないうちに起き上がるが体にあまり力が入らなかつた。

「ちょっと、なら」

楓はドアノブに手をかけたが先に扉が開いた。

「へぶう!？」

扉は楓の額にクリーンヒットした。

「セシリア交代、って、何やってんの楓？」

鈴は下でのた打ち回っている楓を見て聞いた。

「うう、鈴さん」

「ブツ!？」

楓は涙目で鈴を見ると鈴は鼻を押さえた。

「おはようございませブツ!？」

セシリアも起きて立ち上がったが楓の涙目を見て鼻を押さえた。

(ああ、襲いたい)

セシリアと鈴がリンクした。

「はあ、何で“あれ”を見たんだよ俺」

終は愚痴を言いながら食堂に入り朝食を食べていたシャルとラウラに気付き、シャルは終を見ると手を振ったがラウラは何かに夢中になっていて気付いていなかった。

「お早う、終」

「よっ、それよりシャル、ラウラはマカロニをフォークで刺そうと
しているが何だあれ？」

終は横目でラウラを見るとラウラはマカロニをフォークに通そうと
していた。

「ああ、僕がマカロニをフォークに通したのを見てラウラもやっ
てるみたい」

それを聞いた終は冷めた目でシャルを見た。

「えっ？ 何？ その冷めた目」

「・・・いや、お前の頭は常に花畑なんだな」

ガーン！！ そんな効果音と共にシャルは崩れ去り終は朝食を取り
に行った。

「よし、ってどうしたんだ？ シャルロット」
「アハハハ、僕の頭の中は花畑、アハハハ」

ラウラは何処がおかしくなったシャルを見て同情した。

「買い物？」

まだおかしいシャルは終に説明する。因みに終の朝食はサンドイッチにコーヒーと簡単な物だった。

「うん、ラウラのパジャマとか私服とかね。後は終の首をもぎ取ってさあ」

「その前にお前の首と胴体をお別れさせるぞ」

終はハデスをシャルの首に突き付けて何時でもやるぞと目が語っていた。

「うん、だから終もどうか？　アハハハ」
「いい加減元に戻れ」

終はシャルの頭を叩いた後考えて言った。

「途中から別行動を取るが、良いか？」
「別に良いよ」

終は残りのサンドイッチを口に放り込みコーヒーを飲み干した後席を立ちラウラに言った。

「ああ、ラウラ。実はお前に少し嘘ついてた」
「はっ？」

ラウラは何の事だ？と思っていると終は笑みを浮かべて言った。

「俺はお前とも違つって話だ」

それを聞いた瞬間ラウラは終の過去の事だと分かった。

「おい、どつゆつ事だ終」

ラウラが見た時には終は食堂を出ていた。

「プロジェクト、ゼロ」

終は食堂から出た後壁に寄りながら自分の携帯端末を見ていた。端末には束から『プロジェクトゼロが続いてるよ』とメールが入っていた。

「やっぱり、続けてたのか」

終はそう呟いた後端末を閉じた。

その後、ラウラは制服だが終とシャルは私服を着ていた。シャルは淡い水色を加えた白いワンピース。涼しさと軽快さを晒し出している。終は紺のティーシャツに黒のジーパンを着ていた。

「終って、暗い色の服が似合うね」

「まあ、俺の性格を考えたらな」

終はバスから外を見ていた。

「性格考えたらって……」

シャルは終の言葉を聞いて啞然とした。

「ラウラの服を買ったついでに終の服も買ったよ」

終はシャルの方を向いて言う。

「別に俺はいらな」買おうね？」「……はい」

終はシャルの威圧感に頷くしかなかった。一方ラウラは

(市街地において周りにある建物は……)

『市街地の戦争シミュレーション』をしていた。

その後は店では終は女性店員や客から質問責めにあってしまい出た後は終だけはげっそりしていた。

719

「疲れた」「ドンマイ」

「同情するぞ」

終は両肩をシャルとラウラに叩かれ終は時計を見て言った。

「俺、そろそろ時間だから行くわ」

終は走っていき二人は声をかける暇もなく行ってしまった。

その後はシャルとラウラは喫茶店の店長（女性）に進められてバイトをすることになり制服は女性がメイド服、男性が執事服を着ることになっておりシャルとラウラも制服（ラウラはメイド服、シャルは執事服）を着て店内に入るとそこには

「何やってんだよお前等」

執事服を着た終が呆れた目で二人を見ていた。

買い物？ 何それおいしいの？.b.y終(後書き)

感想をお待ちしております。

本当の名前(前書き)

終の本当の名前が明らかに!?

本当の名前

「で、何笑い堪えてんだ？」

「だって、ププ」

「ああ、くく」

シャルとラウラは終の執事服姿を見て笑いを堪えていた。

「これ以上笑うなら頭握り潰すぞ」

「頭を、握りながら・・・言わないで」

「潰れる。頭が、潰れるから、放してくれ」

終は二人の頭を握り二人の頭はミシミシと音が鳴っていた。

「放してくれ!!」

「頭が潰れちゃう!!」

「よし潰す」

終は二人の頭を握っている手に力を込め始める。

「あの、セシリアさん、鈴さん、私一人で食べられますけど」
「たまには甘えなさいよ」
「そうですね、楓さん、あ〜ん」

楓は自室でセシリアと鈴に看病と言うセクハラ(?)をされていた。

「食べれますから、大丈夫です」

セシリアの手にはスプーンに乗ったお粥。楓は何故かセシリアと鈴にお粥を食べさせられると言う拷問(?)を受けていた。

「一人で大丈夫ですから、だから」
「だから？」

「そろそろ、一人にしてくれませんか／＼」

楓は顔を赤くして二人を見るとセシリアはスプーンを持ち、鈴はタオルを持ちながら楓を見た。

「何言ってるのよ」

「そうですね。たまには私達に甘えて下さい」

「けど、私が甘えたら皆さんに迷惑がかかりますし」

楓が言うとセシリアと鈴は溜め息を吐いた。

「アンタはたまには他人に自分のわがままを言いなさいよ」

「そうですね。私達は迷惑でも何でもありませんわ」

「セシリアさん、鈴さん・・・ありがとうございます」

楓は笑顔でセシリアと鈴に礼を言うと二人はお互いの顔を見て頷きながらまた楓の世話を再開した。

「シャルは四番テーブルに紅茶とコーヒーをラウラは七番テーブルに注文を取ってこい」

終から言われたシャルは紅茶とコーヒーを乗せたトレイを片手に四番テーブルへ持っていきラウラは七番テーブルに注文を取りに行き終もトレイを片手にテーブルへ持って行く。

「お待たせいたしました。紅茶をご注文のお客様は？」

「は、はい」

自分の方が年上なのに緊張している女性客。シャルから放たれる貴公子然した雰囲気なら当然だろ。紅茶とコーヒーをそれぞれの客に差し出し、あるサービスの要不要を聞く。

「お砂糖とミルクをお入れになりますか？ よろしければ、こちらで入れさせていただきますが」

「お、お願いします。砂糖とミルクたっぷりです」

「わ、私も！」

普段ならノンシュガーノンミルクなのだが、今回は特別と言うことで一つ。お客様の注文を受けたシャルは柔らかな笑顔を浮かべた。

「かしこまりました。では、失礼します」

スプーンをそつと握り、砂糖とミルクの入ったカップを静かに混ぜ、時折聞こえるカップとスプーンが当たる音が心地良いぐら이었다。

「お待たせいたしました」

「あ、ありがとうございます」

優雅に礼をしてテーブルを離れるシャルを横目で見ながら仕事をす
る終はラウラを見た。

「水だ。飲め」

注文を取る訳ではなく水が入ったコップを音が鳴るぐらいの力で置いた。

「こ、個性的だね。君のことがしりた」

ラウラは話どころか注文も取らずにカウンターに向かい何かを言った。

「飲め」

音が鳴る位の勢いでコーヒーカップを置いた。

「あ、あのコーヒー頼んだ覚えはないんだけど・・・」
「何？ 客でないのなら出ていけ」

取り繕う暇もなく男性客はラウラと話そうと言葉を選ぶが『ドイツ

「終!?! 流石にラウラが死んじゃうよ!?!」

抵抗する力が弱まってくラウラの目は白目だけになり泡を吹き出す勢いまで強くなっていった。

「ガク・・・」

「ラウラあああ!?!?!?!」

シャルの叫びが店内に響いた。

臨時で入った二人、正確には三人だが、噂が広まっていき減るところが増えていきシャルとラウラは精神的に疲れていき他の店員達も疲れが見え始め終は客の数に苦笑いしている時、事件は起こった。

「騒ぐんじゃねえ!!！」

客は一瞬啞然としたが次に銃声と悲鳴で騒ぎになり終は静かにテーブルに置いてあるナイフを執事服の袖に隠した。

「きゃあああつ!!??？」

「騒ぐな！ 静かにしろ!!！」

「うっさいな」

強盗と分かる服装の三人の男達は手にショットガン、サブマシンガン、ハンドガンを持っていた。鞆から紙幣が覗き逃走中であることが分かり店の周りには警官達が包囲していた。

「あ、兄貴！ どうしましょう、囲まれちゃいましたが!!！」

一人の男が狼狽えるがリーダー格の男が言った。

「何、こっちは人質が居るし、何よりこれがある」

リーダー格の男は手に持っているショットガンを上に向けた。

「相手から気を逸らすな」

そう言つて終はナイフを投げナイフはサブマシンガンの銃口に入り慌てているところに終はサブマシンガンを持つてる男の腹を蹴り飛ばしハンドガンを持つてる男の顎を蹴り上げ持っていたハンドガンを掴みリーダー格の男の眉間に銃を突きつけた。

「おい餓鬼、それは玩具じゃねえぞ。こっちにわた」

終はリーダー格の男の横に放ちまた眉間に突きつけた。

「悪いが、慣れてるんだよ。お前等より、な」

終は銃を更に突きつけて男は泣きながら言った。

「た、頼む。助けてくれ」

終は笑みを浮かべて言った。

「消える。屑（人間）」

終は銃を撃たずに首を殴り付けて気絶させた。

その後は警察に見つかりと面倒なため終達は店を後にして学園へと
帰路に就いていた。

「なあ、終。お前は、一体」

「俺は、化け物だって言っただろ」

終は二人に向き直ると終は溜め息を吐いて話す。

「俺は遺伝子強化体じゃなくて、人工生命体だ」

「！？」

終の言葉にシャルとラウラは驚愕した。

「作り出された後は肉体強化、後はそのまま」

「戦場か？」

ラウラの言葉に終は頷き続けた。

「殺した数は数知れず、償うわけでもなく生きてる」
「えっ？ 何で」

シャルが聞くと終は無表情で話した。

「罪悪感がないからな」

終は更に続けた。

「命令だからやった。まあ、楽しんできた部分もあるからな」

そのまま終は学園に向かって行った。

学園の屋上で終は星を見上げながら声を出した。

「ラウラ。隠れるならもう少し上手くやれ」

「何時から気付いた？」

物影からラウラが出てくると終は笑みを浮かべながら言った。

「初めっから」

ラウラに向けて指鉄砲を構えるとラウラを撃つ要領で動かした。

「罪悪感がない理由は命令だったから、それと楽しんだ。それぐらいかな」

終は立ち上がり学園内に入っていく。ラウラは終が過ぎ去った場所を見ながら呟いた。

「何でだ？ 終。何故お前は・・・」

ラウラは夜空を見ながら叫んだ。

「私達を信用しないんだ！！」

ラウラの叫びは夜空に消えていった。

「あつ、終」
「シャルか」

終の前にシャルが来た。

「何の用だ？」

「いや、その、実は終の言葉が気になって」

終は暫く考えたら思い出したように頷いた。

「ああ、罪悪感がないって言葉か。そのまんまの意味だぜ」

終は笑みを浮かべて言うとシャルは終の胸倉を掴んだ。

「何言ってるのかわかっているの!？」

「分かっているからだよ。そうやって感情的になんなよ。だから俺はお前等人間を、屑って言うんだよ。分かるか？」

シャルは終に平手打ちをした。

「・・・だから、人間は好きになれないんだよ」

そう言い残すと終は歩いていきシャルはその場に立ち尽くした。

「お前等は俺の事を知らなすぎる。俺の名前すら。俺の本当の名前は

ゼロ。無の者
「

終、ゼロは自らの部屋に戻っていった。

本当の名前（後書き）

感想をお待ちしております。

攫われる月 前編（前書き）

早く、長編に入らないと

攫われる月 前編

終は今、空港にいた。その訳は千冬に許可を貰い終は外国に行くことにした。

「暫く、帰って来れないな」

終はそう言つと飛行機に乗る準備をした。

「
〃
〃
」

楓は学園から出ていて町への道を歩いていた。楓の服装は白いワンピースを着て手には鞆を持っていた。

「お買い物 お買い物 お買い物」

楓が人気の少ない路地を出ようとすると楓の目の前に黒いワゴン車が止まった。

「えっ？ 何」

ワゴン車から一人出ると楓を後ろから抑えて口に布を付ける。

「ん！？ んん！！」

最初は抵抗する楓だったが次第に力が弱くなり気を失った。

「・・・」

その人物は気を失った楓をワゴン車に乗せるとワゴン車はその場から走り去った。

「なあ、何でお前等そんなに不機嫌なんだよ」

一夏はセシリア、鈴、シャル、ラウラに聞くと鈴が答えた。

「楓がねえ、買い物行つたんだあ。私を置いて」

「おい。目がやばいぞ」

「オホホホ。私も置いて行かれましたわ」

「へえ、奇遇だね。僕も置いて行かれたんだ」

「楓は、私の嫁だ。なのに、なのにこれは酷い仕打ちだ」

「いや、意味が分かんねえ」

四人を一夏と篤の二人は呆れた目で見てると一夏の携帯に着信が掛かった。

「あつ、楓だ」

「「「何iiiiiiii!?!?!?」」」

楓の名前を口に出した途端四人は物凄い勢いで食いついた。一夏は電話に出た。

「もしもし。なんだよ楓。四人が寂しがってるぜ」

「織斑一夏君か？ 成る程、これは都合が良かった」

電話から聞こえた声は楓の物ではなくボイスチェンジャーで変えられた物だった。

「誰だ？ お前」

「一夏？ どうした」

筈が聞くと一夏は全員に電話が聞こえるようにした。

「何でお前が楓の携帯を持ってんだよ？」
「ああ、それは私が彼女を誘拐したからだ」

全員が目を見開いた。電話の主は更に続けた。

「それでだ。ゲームでもしないか？」
「ゲーム？」

「そつ、君が警察に頼らずクラスメートと肉親と共に彼女の居場所を探す。面白いだろ？」

「面白いだ？ ふざけんな！！ 何が面白いんだよ！？」

一夏が怒鳴ると電話の主は話を続けた。

「まあ、彼女はまだ無事だよ。信用できないならメールで送る。また後で」

そう言って電話が切られた。

「どろする？」

「どろするも何も」

「大体話は聞こえた」

全員が振り向くと千冬が仁王立ちしていた。

「千冬姉……」

「織斑先生だ。まあ、言っている暇はないな」

千冬が言った後一夏の携帯にメールが入り一夏はメールを見た。

「……これ」

一夏は他の全員にもメールの内容を見せると手足を縛られ口をガムテープで塞がれ気を失ってる楓が写っていた。

「ヤロツ……!」

一夏は飛び出しそうになるが箒に止められた。

「待て一夏！！ 場所は分かるのか!？」

「そんなの片っ端から探す!！」

「落ち着け一夏。焦ってもどうにもならん」

暫く沈黙していると一夏の携帯に着信が入る。

「もしもし」

電話に出たのは一夏ではなく千冬だった。

「おや、あなたは誰かな」

「織斑千冬。音梨楓の担任だ」

電話の主は笑いながら話を続ける。

「面白いですね。また後で電話しますよ」
「おい待て」

千冬が言つが既に電話が切られ暫く沈黙した。

『成功だ。プロジェクトゼロが成功したぞ!!』
『おお、では彼は初めての成功体ですね』
『名前は・・・そうだな、ゼロでどうだ?』
『正しく、彼にふさわしい』

「あつ？ んん？」

終が目を開けるとまだ飛行機の中だった。

「まだ着いてないのか」

終は窓から外を見ると呟いた。

「プロジェクト、ゼロ」

終の生まれた計画の名、ゼロ計画またの名をプロジェクトゼロ。

「まだ、死なねえぞ。俺はテムエ等より生きてやるよ。命を奪った俺を呪いたかったから呪え。覚悟は元から出来てる。命を、背負ってやる。罪悪感はない・・・俺は、化け物だからな」

終はそう呟いた後再び目を閉じた。

「んん？ん」

楓は朦朧とする意識の中目を開けると当たりは鉄筋が剥き出しの建物の中だった。

「ん、んん」

楓は手足の自由が利かないことと喋れないことを理解した。

「あら？ 起きたの？」
「!？」

楓が振り向くと後ろに女性が居た。

「そんなに恐がらないですよ。少し我慢してね」

女性は楓の顎を掴み自分の方に顔を向けた。

「んん!!」

楓は目を瞑ると女性は手を放した。

「フッフ、可愛いわね。あなたが欲しくなっちゃうわ」

女性は楓を一人残してその場を離れ楓は震えていた。

「……で、どうする？」

千冬達は円になって話し合つが全く解決策が思い浮かばなかった。

「取り合えず片っ端から探す」

「馬鹿者。見当も付かないのに何処を探す気だ？」

「そ、それは」

悩んでいると携帯に着信が入った。

「もしもし。私だ」

「おやおや。織斑先生ですか」

電話の主は相変わらずボイスチェンジャーを使っているがその声は何処か嬉しそうだった。

「じゃあ、始めましょう。ゲームを」
「そのルール説明は？ ルールが分からなければ出来ないだろ」

千冬が聞くと電話の主は口調を変えずに言った。

「簡単よ。私がヒントを出してあなた達が場所を答える。簡単でしょ」
「確かに簡単だな。で、ヒントは何だ？」

電話の主は笑いながら続けた。

「焦らないですよ。先ずわ、使われてない。最初のヒントはこれだから、ばいばい」

電話の主は一方的に電話を切った。

「使われてないか、廃墟だな」

「廃墟って、どんだけあるんだ？」

「終なら、簡単に聞き出しそうなんだが」

「黒谷は今は居ないぞ」

その場でまた全員が悩み始めた。

「傘、忘れたな」

終は目的地に着くとその場所には雨が降っていて終は雨を気にせず歩いていく。

「まだ、あんのかな？ 六年前だろ」

終は眩きながら傘を持たずに歩いていく。

(一体、ここは?)

楓は周囲の状況を確認するが鉄筋が出ているコンクリートの壁しか確認できなかった。

(怖い・・・)

楓は静かに目を瞑った。

「今現在ある廃墟は・・・駄目だ。数が多すぎる」

ラウラはシャル、鈴、セシリアと共に現存している廃墟を探すが数が多すぎて特定が出来なかった。

「もう少し情報があれば」

「だな。幾ら何でもこれでは特定が出来ない」

一夏と筭も悩んでいると千冬が持っていた携帯が鳴った。

「「「!?!?」「」「」
「もしもし?」
「こんにちは」

電話の相手は楓を誘拐した犯人だった。

「そろそろ、ヒントが欲しいですよ。第二のヒントは学びの場。さ
ようなら」

電話が切れると全員が廃校を探す。

「やっぱり数がまだ多い」

数の多さに毒尽くアラウラ。他の全員も芋虫を噛んだような顔をした。

全員はまだ知らなかった。この事が墮天使の怒りに触れることを誰もまだ知らなかった。

攫われる月 前編（後書き）

感想をお待ちしております。

攫われる月 後編(前書き)

うん、微妙な仕上がりだ。

攫われる月 後編

「ん、んんん！！ んん！！」

楓はその場から離れようとするが縛られているためまともに動けなかった。

「あら？ 何処に行くのかしら？」

「！？」

楓の前にまた女性が現れ楓に声をかけた。

「貴女、今の状況を分かってる？」

女性は懐からナイフを取り出し楓に突き付けた。

「ん！？」

「貴女を傷つけちゃうかもね」

女性はナイフの腹で楓の頬や脇腹を撫でる。

「先ず、これあげるね」

女性は楓の鳩尾を膝で蹴った。

「ん!?!」

楓は鳩尾を抑えようとするが縛られているため抑えられなかった。

「フフフ」

女性が楓の口を塞いでいるガムテープを剥がした。

「うう、オホ！ オホ！」

楓は咳き込み女性はナイフで楓の腕を切りつけた。

「っ！？」

楓の腕から血が流れ女性は嘲笑うように楓に語りかけた。

「痛かった？ 貴女の痛がる顔も可愛いわね」

女性は楓の頬を撫でてナイフを喉元に突き付けた。

「い、たいつ！？」

女性は楓の顎を掴み今度は二の腕の部分を切りつけた。

「痛い!!」

「痛い？ 私は貴女のその顔を見ているのが楽しいの」

女性は楓の顎を放しその場を離れた。

「づう、痛いよ。痛いよ」

楓は泣きながら眩き涙は乾いたコンクリートの上に落ちた。

「ざっぱり。変わってないな」

終は荒れ地に立つと眩き目を瞑った。

「君は、誰だい？」

「・・・」

終が後ろを見ると花を持った日本人の男が一人居た。

「君は？」

「あんたは、内戦を止めに来た奴の関係者か？」

終が言うと男は終に近付き肩を掴んだ。

「君は、知っているのか？」

「・・・名前は知らないが、俺の殺した奴に居た」

終は表情を変えず答えると男は膝を付いた。

「私の、妻だ」

男は絞り出すように声を出し終は男を見下ろしながら話を続けた。

「俺はその時、二つの命を奪った」

「二つの、命？」

男は顔を上げると終は自分の手を見ながら言った。

「そいつは妊娠していた。だから、二つだ」

男は泣きながら終に言った。

「有り難う」
「はっ？」

終が男を見ると男は終の手を握って礼を言い始めた。

「有り難う。覚えてくれて、有り難う」

「殺した奴の顔は、忘れられないんだ。不思議にな」

そう言うと終はその場を立ち去ろうとするが男は終に向き合った。

「君の、君の名前は？」

終は男を見た後去り際に言った。

「黒谷、終。本当の名前はゼロだ」

そう言うと終は男を見ずに歩いて行き途中で立ち止まった。

「まだ。覚えてる。あの時の感覚を俺は、一生忘れない。俺の罪だからだ」

終はそのまま立ち去り男は終の背中を黙って見ていた。

「駄目だ。全く見当が付かない」
「特定する要素が少なすぎる」

一夏達は楓の居場所を考えるが全く見当が付かなかった。

「はあ、一体何処だ？」
「ラウラさん。どうします？」
「走って片っ端から探そうよ」
「シャルロット。それ乗った」

四人は目から光が消えていきISを展開して飛ばうとすると千冬が容赦なく頭を叩いた。

「馬鹿者」

「「「ぐぎやあああ！！！！！！！」」」

四人は叫び声を上げて倒れ込んだ。それと同時に携帯が鳴った。

「もしもし」

「どうも、織斑先生」

携帯からボイスチェンジャーを使った声が聞こえた。

「それにしても、ここから見ても大きいわね。IS学園」

「そうか。で、音梨は、今どうしている？」

千冬が聞くと今度はボイスチェンジャーの声ではなく楓の音が聞こ

えた。

「織斑、先生」

「音梨か!？」

若干涙声ではあるが楓の声を聞いて千冬は安心した。

「後は頑張ってね」

「おい待て!！」

楓の声が聞こえたのは束の間電話が切られてしまった。

「クソッ!！」

千冬は携帯を強く握りしめた。

(もう、駄目)

楓の意識は段々と薄れていった。

「聞いてる?」

女性は楓の髪を掴み起き上がらせるが楓は気を失った。

「つまらないわね」

女性は気を失った楓を放すと楓は地面に倒れ込んだ。

「ウフフ」

女性が楓を見ると楓の髪がストレートからツインテールに変わって

いた。

「何？」

女性が後ずさりすると楓は人格が椀に変わり椀はルシファーを取り出し縄を切り裂いた。

「ねえ、遊んでよ お姉さん」

椀は女性に向かってルシファーを振り下ろした。

「うわぁ!？」

振り下ろされた場所にあったパイプは真っ二つに切れていた。

「遊んでよ 私と遊んでよ」

「ひっ!」

女性は逃げようとするが杖は女性の髪を掴み地面に叩きつけた。

「お・し・ま・い　　バイバイ」

杖がルシファーを振り下ろそうとするとルシファーの刃にワイヤーブレードが巻き付いた。

「何とか、間に合った」

杖が振り向くとシュヴァルツェア・レーゲンを展開したラウラが居た。

「邪魔、しない・・・で」

椛は気を失い倒れそうになるとラウラが受け止めた。

「逃げるなよ」

ラウラが言つと女性は鈴に取り押さえられていた。

「楓!!」

「無事ですか!?!」

ラウラは楓を抱きかかえて走り出した。

「ラウラさん!?!」

「待ってよ!?!」

「待ちなさいよ!?! 私を忘れるな!?!」

途中から来た一夏が呟いた。

「恐いな。何か、恐ろしい」

篤も苦笑いしていた。

「う、ん」

楓は朦朧とする意識の中目を開けた。

「ここは？」

「保健室だ」

楓が横を見るとラウラが居た。

「ラウラさん。っ!?!?」

楓は起き上がると腕に痛みを感じ見てみると怪我をした部分には包帯が巻かれていた。

「大丈夫か?」

「はい。大丈夫です」

楓は心配させないように笑顔を作るがラウラはそっとなんか抱き締めた。

「我慢するな」

「我慢なんて」

ラウラは両手で楓の顔を挟み自分の唇に重ねた。

「ん！？／／／」

ラウラは楓の口の中に自分の舌を入れた。

「ん、んん、ん／／／」

暫くした後ラウラは唇を放した。

「ぶは、はあ、はあ、はあ／／／」

「やっぱり良いな。こつ言つのは」

ラウラは自分の唇に触りながら言った。

「何で？ こんな事を？」

「本音を言わないからだ」

ラウラはそう呟いた後保健室を後にした。

「あんまり滞在してないし。俺」

終は飛行機の窓から外を見て呟いた。

攫われる月 後編（後書き）

人気投票を行います。

気に入ったキャラに票を入れて下さい。

一人一票までです。

感想をお待ちしております。

夏祭りへ行こう（前書き）

投票の形式を変えて一位、二位、三位でやります。

投票してくるれた皆様には申し訳ありませんが一度白紙にします。
申し訳ありません。

30日まで受け付けます。

夏祭りへ行こう

「すうー……すうー……すうー」

時間は深夜、楓は自身のベッドで寝息を起てて寝ていた。

「……」

楓の部屋に何者かが侵入した。

786

「……よし」

その者は入り口付近でガッツポーズをするとベッドに近付いていく。

「可愛いな。楓は」

その者、シャルは楓の顔を見ながら呟いた。

「ん、んん」

楓は寝返りを打つと右腕には包帯が巻かれていた。

「楓。僕が君を守るよ」

「んん、辞めて、お母さん。お父さん」

「えっ？」

シャルは楓の言葉を聞いた後楓の顔を見ると涙が流れていた。

「楓。君に何があったの？」

シャルは楓の涙を拭くと楓のベッドに潜り込んだ。

「楓。大丈夫だよ。僕が必ず守るよ」
「んん、ん」

シャルが寝ている楓を抱き締めると楓もシャルを抱き締めた。

「楓？」
「一人に、しないで」

シャルは楓の額にキスをして眠りについた。

「ああ、眠れねえ」

終は夜の学園を一人歩いていた。

「飛行機で寝すぎた」

終は頭を掻きながらある場所に向かっていく。

「やっぱり。ここが落ち着くな」

終は学園の屋上で寝転がった。

「はあ、今夜はここで寝るか」

ここから終の視点になります。

「じめんな」

屋上には俺だけ、俺は目を瞑ると思いつ返す。俺が殺した奴らを、最初は俺を作った奴ら、次からは戦争の関係者、内戦を止めに来たもの、その数、107人。

「はあ、何やってんだよ俺」

俺は自分の手を見る。何も変わらないが命を奪った手、命を奪う武器握った手は普通だったが俺は一瞬赤く見えた。

「俺を許してくれとは言わない。だが、俺のわがままで」

君達に分まで生きさせてくれ、それが言えない。

「やっぱり。言えない」

俺は気付いたら涙を流していた。唇を噛みしめると俺は呟いていた。

「許してくれとは言わない。だが、生きさせてくれ、お前達分も、俺に生きさせてくれ」

俺は空に手を伸ばすと何も掴めないが俺には何か掴めた気がした。

「俺の罪は・・・」

俺が生きて償わせて貰うぜ」

俺はそう呟いた後目を瞑った。だが、何故か俺には最初に殺した科
学者以外が・・・笑顔で居た気がした。

「何でだ？ 笑顔で居るんだ？」

俺は目を開けると満天の星空と月があった。

「ん、んん？」

翌朝、楓が寝返りを打つと

ムニ

「んあ
」

楓の手に柔らかい感覚と女子の声が聞こえたが楓は相変わらず寝ていた。

「んん、おはよ楓」

シャルは楓を見ると微笑み楓の頬にキスをすると楓は目を開けた。

「ん？シャル、しゃん？」

未だ焦点の合わない目でシャルを見て呂律の回らないままシャルの

名前を呼んだ。

「起きた？」

「ん、おはようのキスくだしゃい」

楓は目を瞑り唇を出すとシャルは楓の唇に自分の唇を付けた。

「んっ／／／」

「んっ／／／」

キスをすると楓は自分の舌をシャルの口の中へ入れた。

「ん！？ んん！？／／／」

「んん、ん／／／」

楓がシャルと口を離すと二人の口から糸が引いた。

「ななな何やってんの！？／／／」
「お早うの、キスですよ」

楓は唇を触ると首を傾げた。

（か、可愛い／／／）

シャルは楓の顔を見ると赤くなった。

「？ シャル、しゃん」

そう言つと楓はまた寝始めた。

「すうー・・・すうー・・・すうー・・・すうー」
「やっぱり可愛いな。楓は」

シャルはそう言つと髪を掻き分け布団を被せると部屋を出た。

「ん？ あれ？」

終は目を開けると青空が広がっていた。

「結局、寝ちまつたぜ」

終は跳び起きると体を捻るとゴキゴキと音が鳴った。

「あゝあ、寝れたのか分かんねえな」

終は今度は首をゴキゴキと鳴らした。

「疲れは取れたし、つか飛行機で取れてるし」

終は学園の中に入っていく。

「はあ、ついてないけど、気持ちよかったな。この季節だと」

終は一度空を見るとまた歩きだした。

「ふあ〜」

楓が伸びをしながら食堂にはいるとシャルと目が合い手を振った。

「あつ、楓」

シャルは楓の右腕に巻かれてる包帯を見ると少し暗い表情になる。

「楓、腕大丈夫？」

「えっ？ ああ、大丈夫ですよ。明日には包帯も取れますし・・・」

「けど？」

シャルが首を傾げると楓が呟いた。

「夢を見たんですよ」

「夢？」

「はい。シャルさんとお早うのキスをする夢を」

それを聞いたシャルは顔が赤くなった。

「シャルさん？」

楓がシャルの顔を覗くとシャルは別の話題を出した。

「ああ、さっきね。一夏に聞いて夏祭りがあるんだけど、一緒に行く？」

シャルの言葉を聞いて楓は目を輝かせながら頷いた。

「ハハハ、じゃあ、準備してから行こっか」
「はい！」

シャルと楓は互いに準備をするために部屋に戻った。

準備を済ませたシャルは学園前で楓を待っていた。

「お待たせしました」

「待ってないよ」

シャルが振り向くと言葉を失った。楓は青の生地にオレンジの花の模様が入った浴衣を着ていて髪は纏めていた。

「どうかしましたか？」

「・・・可愛い」

「ふえ！？／＼／＼」

シャルは眩くと楓に抱き付いた。

「可愛いな。楓は何でも似合うね」

「そんな。恥ずかしいですよ／＼」

シャルは楓から離れると手を握った。

「行こっか」

「はい。宜しく願います」

シャルは楓の手を引きながら歩いていった。

「おい終」

「楓は何処よ？」

「おっしゃって下さい」

「シャルと一緒に夏祭りに行ったぞ」

終はセシリア、鈴、ラウラに顔色一つ変えずに言つと三人は向かおうとするが終が

「今日は辞めとけ」

と、言つて三人の意識を刈り取つた。

「祭りか、来年行こ」

密かに来年に持ち越した終だった。

夏祭りへ行こう（後書き）

感想をお待ちしております。

因みに一位が5ポイント、二位が3ポイント、三位が1ポイントです。

夏祭りはある意味大変（前書き）

まだ投票を受け付けております。

夏祭りはある意味大変

「うわぁ〜」

楓は目の前の光景に目を輝かせていた。

「まるで子供みたいだね」

シャルはそんな楓の様子を苦笑いしながら見ていた。

「こつこつ言うのに来た覚えがなくて、だから楽しみです！」
「そっか、楽しもうね」

シャルは楓の手を取り歩いていく。

「わあ、凄い」

楓は途中の出店にあった水飴を見て呟いた。

「なんだ嬢ちゃん？ 買うか？」

「あつ、え」と

楓は浴衣から財布を出そうとするがシャルが先にお金を払った。

「これで二つですよね」

「丁度二個分。毎度あり」

店の人はシャルに二つ水飴を渡しシャルはそのうちの二つを楓に渡す。

「はい」

「あっ、有り難う御座います」

「気にしないで」

二人は水飴を持って歩いていくと前の方に一夏と浴衣を着た箒が見えた。

「あれって」

「一夏さんと箒さん、ですよね？」

お互いに見ると二人の方へ歩いていく。

「一夏さん、箒さん？」

「おっ、楓とシャル」

「奇遇だな。こんな所で」

四人は暫く歩き座れる場所に来た。

「えっと、水飴って、どう食べるんですか？」
「そこ!?!」

「水飴は割り箸に水飴を付けて食べるんだ」

楓は箒に言われたように割り箸に水飴を付けて口に運んだ。

「美味しいです」

シャルも水飴を食べていると楓は水飴を食べ終わっていた。

「これ、どうするんですか?」

楓は水飴の皿に使われているモナカの部分を見せた。

「それ、食べれるぞ」

「本当ですか?」

「ああ、割り箸はゴミ箱に捨てればいいし、食べてみる」

楓はモナカを口に運び食べた。

「余り、味しませんね」

三人は楓の言葉に苦笑いした。

「????」

当の本人は最後まで気付かなかった。

「どっしりますかね？」

「うん、あれは」

楓とシャルが悩んでいるとシャルは金魚すくいを指さした。

「金魚、すくいですか？」

「やってみる？」

「はい！」

楓とシャルは金魚すくいの人にお金を出すとポイとアルミのカップを渡した。

「シャルさん。金魚すくいの経験は？」

「無い」

シャルはそう言つと金魚の一匹をすくった。

「上手いですよ。シャルさん」

楓は金魚をすくおうとするがポイの網の部分が破れた。

「あっ」

シャルは楓の肩を叩いた。

「うん。楓、ドンマイ」

「あ、あははは」

楓は涙を流しながら苦笑いをした。

「落ち込まない。落ち込まない」

「有り難う御座います」

シャルは未だに落ち込んでいる楓を慰めるために辺りを見ると射的を見た。

「ちょっと、やってくるね」

「えっ？」

シャルは射的の出店の人にお金を出し景品を狙う。

（楓のために、絶対に打ち落とす！）

その時、シャルの周りから人が離れて楓も少し離れた場所にいた。

（シャルさん。凄いな）

楓がそう思ってる間にシャルは二回とも景品を落とす。

(凄いな)

そう思っていると楓に複数の男が近付いてきた。

「ねえねえ、君、俺等と遊ばない？」

「えっ？ あの、結構です」

楓は断ると男の一人が手を掴み引つ張る。

「あの、辞めて下さい」

「良いだろ。ちよっと来いよ」

そう言つて男達は楓を何処かに連れ去つた。

「あれ？ 楓」

その後景品を抱えたシャルが見たときには楓は居なかった。

「キヤア!？」

楓は人気のない場所に連れ込まれ近くの木にぶつけられた。

「な、何するんですか？」

楓は男達を見ると男達は笑みを浮かべると楓に近付く。

「別に良いだろ」

「少し遊ぼうぜ」

男達が近付くと楓は少しずつ後ずさる。

「君さあ、可愛いよね」

「嫌！ 放して下さい！！」

男の一人が楓の左腕を掴み木に押し付けた。

「本当に可愛いな」

「嫌あ！！」

楓は男を叩くと男は楓の腹を蹴り付けた。

「うっ！？」

楓は意識を手放しぐったりした。

「こいつ」

「おいおい、気失ってるぜ」

「おっ、やりたい放題じゃん」

男が手を放すと楓は地面に倒れるが少しずつ楓は目を開いていく。

「ねえ、居た!?!」

「こつちには居ねえ!?!」

「何処に!?!」

シャルは一夏と箒と共に楓を探していると人気のない場所に来ると気が数本切り倒されていた。

「なっ何だこれは!?!」

「一体、何だよこれ!?!」

一夏と箒は余りの出来事に驚愕しシャルは声が出なかった。

「うわああああああ!?!」

「助けてくれ!?!」

男達が慌てて逃げていて見てみると一人の男と椀がルシファーを持って立って居た。

「辞めてくれよ。助けてくれよ」

「私は、あなたを許さない。だから・・・あなたの命を頂戴」

椀はルシファーを振り上げるがシャルが後ろから椀を羽交い締めにした。

「辞めてよ楓!!」
「邪魔しないでよ!!」

突然椀の体から力が抜け椀は気を失いルシファーも消えた。

「楓、大丈夫だよ」

シャルは気を失っている楓の体を抱き締めた。

「僕は先に帰るよ」
「災難だったな」
「確かにな」

シャルは気を失っている楓を背負って一夏は筭の実家に泊まるらし

いからそのまま。

「じゃね、二人共」

「ああ、じゃな」

「またな」

シャルは二人と別れて帰路に就く。

「楓、ごめんね」

シャルが呟くと不意に声がかげられた。

「謝らないで、下さい」

「!?!」

シャルが楓の顔を見るとうつすら目を開けていた。

「楓、大丈夫なの？」

「一応、大丈夫です。シャルさん、重くないですか？」
「重くないよ。もう少し寝てたら」

楓は頷くと目を瞑り寝息を立てた。

「可愛いな」

シャルは夜空にボソリと呟いた。

シャルが学園に着くとシャルは楓を背負ったまま楓の部屋を目指した。

「よし、よし」

シャルは楓をベッドに寝かせるとベッドの脇に座った。

「・・・」

シャルは楓の頬を撫でていると思った。

（可愛い。襲いたいな）

シャルは気付くと楓の浴衣を脱がし始めていた。

（楓の肌って、白いな）

シャルは楓の上半身を見る。楓の胸部には晒が巻かれていた。

（本当に綺麗だ）

シャルは楓の胸を撫でた。

「ん、んん」

楓はシャルに撫でられると起きた。

「あれ？ つ！！！／／／」

「あっ、これは」

楓は自分の格好に気付き胸を隠すとシャルは冷や汗をかいていた。

「シャルさんのえっち」

「じめん」

シャルは直ぐに頭を下げた。

暫くシャルは楓と顔を合わせ辛かったのは言うまでもない。

夏祭りはある意味大変（後書き）

次回辺りから長編に入ります。

感想をお待ちしております。

誘われる八人(前書き)

異世界編、スタート

誘われる八人

音梨楓、黒谷終、織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ポーデヴィツヒは屋上で昼寝をしていた。

「やっぱり良いな。こう言うのは」

終は空を見ながら呟くと一夏が返した。

「だよな、結構良いよな」

「うん。気持ちが良い」

「テメエ等、ふざけてんのか？」

因みに箒は一夏に腕枕をして貰い終は拳を作っていた。

「少し静かにして貰えませんか？」

「楓が起きるでしょうが」

「本当だよ」

「楓の寝顔を見ていたんだ。だから黙れ」

セシリア、鈴、シャル、ラウラは終達を睨み楓は未だに寝息を立てている。

「アホかお前等は」

終はセシリア達を呆れた目で見た。

「アホって、酷いですわ」

「アホじゃないわよ」

「本当に失礼だよ」

「デリカシーと言う物がないのか」

そう言い争っていると楓は寝返りを打つ。

「んん、んん？」

楓は目を覚ますと起き上がり伸びをした。

「お早う御座います」

「何時まで寝てたんだよ」

楓は起きて挨拶をすると終は楓の額を突っついた。

「平和だな」

「そうだな」

終はその言葉を聞いて辺りを見ると異変に気付いた。

「なあ、あれって、何だよ？」

全員が終が指さした方向を見ると灰色のカーテンが見えた。

「灰色のカーテンですよね？」

「って、こっちに来てるぞー!!」

「何!？」

全員走って離れようとするが段々と距離が縮まっていく。

「このままじゃ、キヤア!？」

「楓!？」

楓が躓き倒れるとシャルとラウラ、鈴が近寄った。

「大丈夫!？」

「早く!！」

「って、来た!！」

楓、鈴、シャル、ラウラはカーテンに飲み込まれた。

「楓さん!!」

「止まるな!!」

「箒!!」

セシリアが振り向くと箒が引っ張ろうとし一夏が箒を見るとカーテンに飲み込まれた。

「みんな!？」

終も止まるとカーテンに飲み込まれカーテンは消えた。

「じじじ」

一夏が呼ぶと二人は起きて辺りを確認し一夏が一言、言った。

「ああ、何処かわかんねえ」

三人は何処までも広がる草原にいた。

「んん、ん？　ここは、何処？」

楓は起き上がり今までのことを思い返す。

「確か、灰色のカーテンが来て、飲まれて、鈴さん！！　シャルさん！！　ラウラさん！！」

楓の笑顔を三人が確認した瞬間、同時に鼻血を出した。

「？ どうかしましたか？」

（（か、可愛い））

ラウラは辺りを見て言った。

「それよりここは何処だ？」

見渡せば一面荒野だった。

終は森、一夏、箒、セシリアは草原、そして楓、鈴、シャル、ラウ
ラは荒野、それぞれの行動を開始する。

誘われる八人（後書き）

感想をお待ちしております。

ガタツクさんとサザンクロスさんのキャラは次回か、その次辺りに

遭遇する者（前書き）

今回は楓達を中心

遭遇する者

「何処だよ。ここ」

終は木々からの木漏れ日に照らされながら呟いた。

「俺、一人か・・・都合が良いな」

終は呟くと歩きだした。

(なるべく調べとくか、後々が楽だ)

終は森の中を進んでいく。

「で、どうする？　これから」

シャルの言葉に全員が暗い顔をした。

「歩いてみますか？　何か分かるかも知れませんし」

楓が遠慮気味に言うと鈴が立ち上がった。

「確かに、じっとしてるよりましね」

「だな、それより、何処へ向かう？」

ラウラの一言で楓は立ち上がり振り返った。

「取り合えず。向こうに行きますか？」

「良いわよ」

「賛成」

「行くぞ」

楓達もその場から歩きだした。

「歩くか」

「何処にだ？」

立ち上がった一夏は呟くが幕の言葉を聞いて黙り込んだ。

「と、取り合えず、歩こうぜ」

「はあ、何時まで森が続くんだ？」

終が森を歩くこと数十分、何時まで建つても森を抜ける気配がない。

「何時まで続くんだ？ どんだけ広い森なんだよ」

終を溜め息を吐いて近くの倒れてる木に座った。

「街に出ないとな」

終は空を見ると木の葉で余り見えなかった。

「荒れ地が続くな」

「それより、暑い」

「何処なんだろうね？ ここ」

「はあ、分かり、ません」

先頭からラウラ、鈴、シャル、楓、因みに三人から楓の距離が離れていた。

「大丈夫？」

「は、はい。大丈夫、です」

三人はペースを遅くするが楓は追い付けずにいた。

「休む？」

「いえ。行きましよう」

楓は息を切らしながら三人に付いていく。

「てっ、あれ！！ 街じゃない！？」

鈴が指さした方向には僅かに街の影があった。

「街だな」

「なら、街で休もうね。楓」

「は、はい」

四人は微かに見える街を目指して歩き出す。

「な、何よ。これ」

「戦争の後か？」

「一体、何が？」
「酷い」

四人が見たのは廃墟になっていた街だった。

「取り合えず、調べてみるぞ。何か見つかるかも知れない」
「じゃあ、別々で」

楓はそう言うと走って行ってしまい三人もそれぞれ別れて歩いていく。

「何だ？」
「」

楓達が街で搜索を始めた頃、街の外では赤髪赤目の少女が立っ

た。

「取り合えず、行くか」

少女はそう呟き街へ入っていった。

「何も、ありませんね」

楓は誰に言うわけでもなく近くの瓦礫に座った。

「何が、この街に」

楓が立ち上がると後ろから音が聞こえ振り向くと無人機が居た。

「えっ？」

楓が疑問符を浮かべていると無人機は楓を攻撃し始めた。

「キヤア!？」

楓は避けるとエターナルムーンを展開しゼウスを取り出し無人機を撃つ。

「・・・」

楓は土煙の場所を見ていると無人機が突っ込んでくる。

「っ!？」

楓は一瞬驚くとゼウスを仕舞いルシファーとポセイドンを両手に持ち迎え撃つ。

一方、鈴は

「たつく、ろくなもんが見つからないじゃない!!」

愚痴を言って空き缶を蹴り上げると丁度無人機の頭の辺りに当たった。

「へっ?」

鈴は暫く無人機を見ていると無人機は鈴に向かって攻撃し始めた。

「何すんのよ!!」

鈴も甲龍を展開し双天牙月を持ち無人機と対峙する。

「不味いでしょ、あれ」

シャルの目の前にも無人機が居てシャルはラファール・リヴァイブ・カスタム?を展開しアサルトライフルを握り向かっていく。

「まさか、こんな事がな」

ラウラの目の前に無人機が沈黙しているとラウラはシュバルツエア・レーゲンを展開してプラズマ手刀で無人機のコアを狙うが無人機は瞬間加速で後ろに飛んだ。

「やるな。だが、甘いな」

ラウラはワイヤーブレードで無人機の腕を縛りプラズマ手刀で無人機のコアを貫いた。

「終わりだ」

ラウラはそう言うとシュバルツエア・レーゲンを解除した。

「ふっ！！」

シャルはアサルトライフルを連射して無人機を撃つが無人機は瞬間^{イグニッション}加速で避けるがシャルも瞬間^{イグニッション}加速で近付き灰色の鱗殻^{グレイ・スケール}を無人機の胸元のコア部分に当てて引き金を引きコアを破壊した。

「何だろ？ 呆気ないな」

シャルはラファール・リヴァイブ・カスタム？を解除して歩いていく。

「ハアアアア!!!!!!」

鈴は龍砲を放ちながら無人機を追い詰めるが無人機も反撃するが鈴は体を捻らせて避ける。

「あいつとやり合ってたんだから嫌でも強くなるわよ!!!」

鈴は双天牙月を投げてそのまま無人機のコア部分を貫く。因みにあいつとは分かっていると思うが終の事だ。

「せー…」

楓はルシファーを振るい無人機が避けるとポセイドンを突き出す。

「!？」

楓は一瞬、混沌と福音に落とされた記憶が蘇り動きが止まると無人機は腕を使いポセイドンを払う。

「っ!？」

楓はゼウスを取り出し無人機のコア部分に突き付けて引き金を引いた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は冷や汗を掻きながら無人機を見下ろし振り返った。

「ぐっ!？」

楓が振り返ると同時に何かに首を掴まれて壁に押し付けられる。

「うっぐっ、も、もう、一機、ぐっ!？」

楓はもう一機居た無人機に首を絞められ徐々にその顔から血の気が無くなっていく。

「ぐあああああああ!?!?!?!」

更に首を締め付ける力が強くなるが何かが無人機の手を斬り裂いた。

「ゲホ! ゲホ! 一体、何が？」

楓が見ると赤い髪で黒いISを身に纏った少女が居た。

「あなたは、一体」

「ん？ 私か？ 私は夕暮太陽だ」

少女、太陽はバルディッシュトワイライトに装備されている大型ビームブレード、オールデリートとライオンハートを構えるとオールデリートで無人機のもう一つの腕を斬り裂きライオンハートでコアを破壊した。

「凄い」

楓は太陽を見て呟いた。太陽はバルディッシュトワイライトを解除して楓に歩み寄る。

「大丈夫か？」

「えっ？ あっ、はい」

楓もエターナルムーンを解除して太陽を見て言った。

「助けてくれて有り難う御座います。私は音梨楓です」
「さっきも言ったが私は夕暮太陽だ」

楓と太陽はそれぞれ握手をした。

遭遇する者（後書き）

と云うことでサザンクロスさんのキャラ、夕暮太陽、参上

次回は終が中心

離れていても繋がってるから(前書き)

終が中心の展開

離れていても繋がってるから

「さて、どうするか、だ」

終が見下ろしている場所には無人機が数機居た。

「一気に潰すか」

終はそう呟くと両手にオルトロスを出し右手のオルトロスを口にくわえてハデスを握る。

「・・・」

終は息を潜めていると丁度下の辺りに無人機が一機近付いてきた。

「・・・」

終は下に飛び降りるとハデスを振るい無人機を縦に切り裂くと口に
くわえていたオルトロスを手を持ち二機の無人機のコア部分に投げ
素早くケルベロスを出してもう一機のコア部分を撃った。

「ふう、おしまい」

終が四機を沈めるのに掛かった時間は数秒、終は持っているケルベ
ロスとハデスを仕舞い、二機に近付きオルトロスを持つと仕舞った。

「終わりか？」

終はそう言って振り返ると無人機が二機居た。

「ちっ!？」

終はオルトロスを取り出そうとするがそれより先に閃光が無人機の

胸のコアを貫く。

「・・・」

終はケルベロスを取り出し後ろを振り向くと白を強調したIS、レイジングウィングを纏った銀髪の男が居た。

「お前、大丈夫か？」

男は何があっても良いようにビームライフル、ウィングスターを持ち終もケルベロスを肩に担いだ。

「お前、誰だ？」

「ああ、俺？ 俺は月光夜明、宜しくな。お前は？」

「・・・黒谷終」

男、夜明は終を見るが終は夜明にまだ敵意を持っていた。

「何にもしねえから敵意を出さないでくれよ」

「だな。よく考えれば今頃攻撃されてもおかしくないからっ!？」

終はケルベロスを後ろに向けると無人機が一機居て夜明はウィングスターの引き金を、終はケルベロスの引き金を引こうとする前に“赤い何か”が”無人機を貫き無人機はギリシャ文字の を浮かべて爆発した。

「な、何だよ!？」

「・・・」

夜明は突然のことに驚くが終はケルベロスを無人機を貫いた影に向けた。

「てめえ、何者だ? 答えろ」

「お、おい!？」

敵意を剥き出しの終を止めようと夜明は終の前に立つ。

「何者かわかんねえのに、味方と決めつけるな」
「お前、厳しいな」

二人が話していると、の戦士、仮面ライダーファイズは腰のベルトに手を出し変身を解いた。

「!？ 何だ、お前」

ファイズが変身を解くと一人の少年が立っていた。

「僕は尾上タクミ、またの名を仮面ライダーファイズ」
「仮面ライダー？」

少年、タクミの言葉に二人は同時に疑問符を浮かべた。

その頃の楓達は街から出ていた。

「私達とは別の世界ね」

「信じないか？」

「いや、否定要素がない」

「それより否定できないよ」

「そう、です、ね」

楓は息が途切れ途切れで言つと全員が振り返った。

「何と言つか、背負ってやるつか？」

太陽が屈むと楓は笑顔で答えた。

三人の腹が同時になった。

「腹、減った」

「けど、食料無いよ」

「なら、調達すればいいだろ」

終はオルトロスを一本取り出すと近くの茂みに投げつけた。

「何やってんだ？」

「まさか、腹が空きすぎて」

終は何も言わずに茂みからオルトロスが刺さったウサギを持ち上げた。

「「嘘お!？」」

二人が驚いていると終は表情を変えずに言った。

「当然だろ」

この時、終の顔は生き生きしていた。

「ふう〜、食った食った」

「ある意味凄い経験だよ」

「そうか？ 蛇とかタランチュラなんか旨いぞ」

「ちよつと待てい」「」

「何だよ」

「タランチュラって、食えんのか？」

「ああ、脚の部分は蟹、尻はブドウのようだ」

「まさか、食べたことある？」

「あるだろ」

「「無いわ！！」」

ウサギを丸焼きにして食べた後そんな話を三人はしていた。

「はあ、ある意味君に憧れるよ」

「憧れる？ これぐらい当然だろ？」

「お前だけな」

タクミが言うと終が返し夜明が言った。

「あれ、タランチュラって毒なかった？」

「炙れば大丈夫だ」

夜明が聞くと終は表情を変えずに言う。二人は別の話題にするために夜明が言った。

「じゃあ、憧れてる人って黒谷にいるのか？」

「終で良い、俺も夜明て呼ぶ。勿論タクミも」

「入ってたんだ」

終は上を見上げると暗かった。

「俺は憧れや劣等感を感じたことがないからな。つか、そんな奴ら居なかったからな」

「何だろ？ この敗北感」

「奇遇だね。僕もだよ」

タクミと夜明は地面に手を突いていた。

「話を最後まで聞けよ。そう言う感情を抱かない」孤独、て話だ」

二人は終の顔を見ると終は懐かしむ様子で呟いた。

「最近、あまり感じないが、昔は孤独感しかなかった。たった一人だってな、頼れず、頼られずで寂しかったから俺はいろんな奴と出会えて良かった。そう思える」

終の話を聞くとタクミと夜明は微笑みながら言った。

「その中に、俺らもいるか？」

「そうだよ。離れていても繋がってられるから」

終は微笑みながら言う。

「当たり前で、良いか？」

「「勿論」」

終の問いにタクミと夜明は迷いなく答えた。

その頃の一夏達は

「楓さん楓さん楓さん楓さん楓さん楓さん楓さん楓さん」

まるで呪文のように呟くセシリア。

「綺麗だな」

「そうだな、この夜空は」

「俺は筭が綺麗だつて言ったんだぜ」

「なっ！？／＼／＼」

何て、甘い空気を出す一夏と筭、はっきり砂糖を吐きそうだがセシリアの存在でカオスになっていた。

離れていても繋がってるから（後書き）

と言うことで引き続きサザンクロスさんのキャラ、月光夜明が登場
更にガタツクさんのキャラ、尾上タクミも登場

次回は一夏達が中心

現れた二人で一人の探偵（前書き）

短い！！ ってツッコミはなし

現れた二人で一人の探偵

一夏、箒、セシリアは黙々と草原を歩いていた。

「「「・・・」」」

歩きながら一夏は空を見上げて呟いた。

「みんな、無事かな？」

「信じるしかないだろ」

「だよな」

二人が呟きがセシリアは黙っていた。

森の中では終が茂みの前で屈んでいた。

「なあ、終は何やってんだ？」

「さあ、けど嫌な予感がする」

タクミと夜明は冷や汗を掻きながら終を見ていた。

「なあ、タンパク質欲しいよな」

「ああ、確かに」

「野菜も欲しいけど、まさか」

タクミが終のしている所を見ると顔が青くなった。

「マジかよ」

夜明も見ると一匹のタランチュラが居た。

「まさかな」

終は笑いながら言った。

「食べるだろ。普通、なあ」

「食べるかああああ!!!!!!」

そんな叫びも虚しく終はタランチュラを捕まえた。

「以外と旨かったな」
「だろ」

その数分後には美味しくタランチュラを頂いた三人であった。

「で、腹減ったな」

「それを言うな」

一夏と箒は話をするがセシリアは暗い表情だった。

（ スッコい、話ずらい！ ）

同時に思った一夏と箒だった。

「はあ、楓さん」

セシリアは遠い目をして二人は重傷だ、と思っていた。

「でさあ、囲まれてんだけど」

「先に言え、一夏」

三人は無人機に囲まれていた。

「邪魔ですわ」

セシリアはドスの入った声で言った。

「なあ、箒、セシリアが」

「ああ、取り返しがつかないな」

そんな三人の前に一陣の風が吹いた。

「「「？」」」」

三人が不思議に思っていると“二色の仮面ライダー”が無人機を破壊していった。

「早い」

「確かにな」

その仮面ライダーは素早い動きで無人機を破壊していく。

「終わりか？」

『だね、もう居なさそうだ』

仮面ライダーから二人の声が聞こえ仮面ライダーはメモリみたいな物をベルトから抜いた。

「誰だ？」

「俺か？ 俺はハードボイルド探偵だ」

男がそう言つと一台の装甲車が来た。

「全く、君はハードボイルドだろ」

装甲車の中から一人の少年が降りた。

「ハードボイルドだ!!」

「いや、ハードボイルドだ」

「無視しないでくれませんか？」

セシリアが言つと二人はそれぞれ言った。

「俺は左翔太郎」

「僕はフリップ」

俺、翔太郎と少年、フリップが言つと翔太郎が言つた。

「それで俺達は」

「二人で一人の仮面ライダーだ」

「はっ？」

一夏達と仮面ライダーダブルが遭遇した。因みにその頃の終達は

「蛇盲い！！」

「確かに美味しい！！」

「だろ、旨いだろ。病み付きにならないか？」

「「ならねえな」「」
「なんだ」

タクミと夜明の言葉に終はがつくりと肩を落としていた。

現れた二人で一人の探偵（後書き）

ガタツクさんの左翔太郎とフリップが登場

感想をお待ちしております。

暗躍の影達（前書き）

長編のオリキャラが登場します。

暗躍の影達

森の中、終とタクミ、夜明は進んでいくが正直、疲れた顔をしている。

「腹、減った」

「言つなよ夜明。俺だつて」

「一体、どうしてこうなったの？」

「知るか。ウサギや蛇やタランチュラが居ないから、まともに食えねえな」

この三人は最近は何も食べれてない。最初の方は終がウサギや蛇、タランチュラ、近くに居たワニを狩っていたため問題はなかったが進むにつれて生物の気配が少なくなり今に至っている。

「クツソオ・・・ん？」

終が立ち止まってみると一台のトラックを守るように居る無人機を発見し目つきが変わった。

「タクミ、夜明。来い、食料があるかも知れん」
「何!?!」

終は二人を呼ぶとトラックを見て二人も目つきが変わった。そして、タクミは腰にベルトを巻き携帯、フェイスフォンの555を押しした。

【スタンディングバイ】

「ブラックファング」
「レイジングウイング」
「変身」

終はブラックファングを、夜明はレイジングウイングを展開しタクミはベルトにフェイスフォンを倒した。

【コンプリート】

一方、楓、鈴、シャル、ラウラ、太陽の五人は街に入ろうとしていた。

「食料でも調達するぞ」

「けど、太陽さん。ゴーストタウンで誰も居ませんよ」

「『それを言わない約束』」

五人も食料を調達しようと街に入るが人っ子一人居なかった。

「仕方ない。危険だが埒があかないから別れて探すぞ」

「最初から別れて探せば良かったんじゃない」

「襲われてたお前に言われたくない」

太陽の一言を聞いた楓はしょぼくれ別れて探すことになった。

先ず、ラウラは

「見つからないな」

食料を探しているはずが手にあるのは使われた銃火機の数々。

一方のシャル

「見つかるのかな？　こんな瓦礫の中」

探しながら一人で呟っていた。

そして、鈴は

「あつ、中華鍋」

食料ではなく中華鍋を見つけていた。

太陽の場合は

「ふっ！！」

瓦礫を退かしながら探していた。

「流石に見つからないな」

そう言いつつ瓦礫を退かして探していた。

楓は

「えっと、ここ、もしかしたら」

楓は飲食店後の建物に入っけいき食料を探す。

「ボロボロですね、食料がありますように」

祈りながら食料を探し始めた。

「うん、何処に」

「誰だ？」

後ろから声かして楓が振り返ると青髪で翠色の目をした女性が立っ
ていた。

「あなたは？」

「ああ、私はアリス・ウエルナ。君は？」

「あつ、音梨楓です。ウエルナさんは」

「アリスで良い」

女性はアリスと名乗り楓に聞いた。

「で、何をしているんだ？」

「えっと」

楓は答えに迷っていた。別の世界から来ましたと言っても信じて貰えないと思っていたかは迷っていた。

「まあ、良い。ちょっとこっちに来てくれ」

「あっ、はい」

楓はアリスの言う事を聞いて近付くとアリスは楓の首を掴み床に叩きつけた。

「ぐっ！？ な、何を！？」

アリスは楓の首を締めながら答えた。

「ふん。私は此処にいる奴の織滅を命令されてな。よく信じてくれて助かった。楽に潰せる」

「そんな。ぐつ!? 嫌」

楓は首を締められながら抵抗しようとするがアリスは馬乗りになり力を強めていく。

「ああ、ああああ」

楓の力が弱まるとアリスの持っている端末に連絡が入ると楓の首から手を放した。

「ん？ 何だ？ そうか、分かった」

アリスは端末を切ると楓から退き去っていった。

「ああ、あつ」

楓は手を伸ばそうとするが途中で気を失った。

その頃の一夏、箒、セシリア、翔太郎、フリップは装甲車、リボルギャリーに乗りながら話しをしていた。

「へえ、凄いですね二人は」

「ああ、前にも別の世界に行ってたな」

「ああ、あの時は凄かったよ」

翔太郎とフリップは懐かしみように話す。

「その時に会ったのが智春や操緒」

「それに奏ちゃんやニア、黒崎朱理」

「いろんな人にあったんですね」

話しているがセシリアだけは話しに入っていなかった。

「セシリア、何か・・・お前が怖いんだが」

「へえ、そうなんですか？」

セシリアの言葉に全員が恐れた。

(((怖い!!)))

リボルギャリーの中には負の感情の渦巻いていた。

「うっ、んん？」

「おっ、気付いたか？」

「たい、よう、さん？」

楓が目を開くと太陽の顔が目の前にあった。

「大丈夫か？ 倒れていたが」

「ちよっと、目眩がして」

楓は太陽に嘘を付いた。

「あの、頭に柔らかい感覚が」

「ああ、心配だったからな、膝枕をしている」

楓は太陽に膝枕をされていて楓は起き上がった。

「で、何があった？」

「入ったら目眩がしただけですから」

楓は立ち上がると建物内を歩きだした。

（大丈夫なのか？ 何か、隠してないか？）

太陽は楓の背中を見ながら疑問を感じていた。

「はぁ、私も手伝うぞ」

「あ、有り難う御座います」

二人は建物内で食料を探し始めた。

（アリスさんは、何故？ あんな事を）

楓は食料を探しながらアリスの事を考えていた。

その頃、アリスはある研究所の廊下を歩いていた。

「おい、戻ったぞ爺!!」

「ウエルナ嬢、爺は辞めたまえ。私はまだ32だ」

アリスは一人の男性と会っていた。男性は茶色の短髪に黄色い瞳だった。

「で、帰って来いって、どう言う訳だ？」

男性はモニターを操作して一人の少女を写した。

「こいつは、確か音梨楓か？」

「おお、知っていたのか？ なら話が早いな。頼みがあるんだ」

男性は不適な笑みを浮かべるとアリスに言った。

「彼女を捕らえて貰いたい」

「何故だ？ あいつを捕まえても意味はないだろ」

アリスは壁に寄りかかりながら男性に問いかけた。

「まあ、捕まえてくれればそれで結構だ」

「不本意だが、お前の頼みは聞いてやる。ベルガ・フルツト」

アリスは男性、ベルガを見て言うとその場を後にした。

「ふふふ、研究材料が手に入るな」

ベルガはモニターに写った楓を見ながら不適に笑った。

暗躍の影達（後書き）

感想を待っています。

月、捕らわれる(前書き)

何やってんだろ。

まあ、本編をどうぞ

月、捕らわれる

アリスは研究所から出るとポケットから青い指輪を取り出した。

「仕事だ。『ブレイクレオ』」

アリスは不適に笑うと指輪をポケットに仕舞った。

そんな事も知らない楓達は集まっていた。

「食料は手に入ったな」

太陽と楓はいくつかの缶詰を出す。シャルは真空パックを取り出す

がラウラは使用済み銃火器、鈴は中華鍋を出した。

「何だ？　これは」

「中華鍋」

「使用済み銃火器」

太陽は取り合えず溜め息を吐いた。

「何を探しているんだ？」

シャルは苦笑いしていたが楓は考え込んでいた。

（何で、アリスさんはあんな事を、それに何があつて）

楓は空を見ると僅かに目の前が暗くなった。

「っ!？」

頭に衝撃が走り楓はうずくまった。

「どうしたの楓!？」

「大丈夫です。少し、目眩がして」

楓は作り笑いをした。

「缶詰だな」

「缶詰だ」

「うん、缶詰」

三人は奪った缶詰を手を取りながら話していた。

「後で食うか」

「賛成異議なし」

「決まりだ。歩くぞ」

「分かった」

「行こう」

三人は森を抜けるために歩いていく。

「おっ、見つけた」

アリスは後ろに無人機を待機させ双眼鏡で楓を確認すると自身のI
Sを展開した。

「行くぞ。ブレイクレオ」

アリスのIS、ブレイクレオを展開する。ブレイクレオは両肩にレールカノン、手の部分は鋭い爪が付き脚にも小型のレーザーブレードを付けた青いIS、ブレイクレオを動かし楓達の方へ無人機と共に行く。

「で、どうしますか？ 食料は調達できましたし」

楓の問いに太陽が答えた。

「先ずはこの街を出るぞ。その後・・・予定変更だ」

太陽が振り返ると四機の無人機が佇んでいた。

「どっするっ？」

「潰すぞ」

鈴は甲龍、シャルはラファール・リヴァイブ・カスタム、ラウラはシユバルツエア・レーゲン、太陽はバルディッツシユトワイライトを展開し楓も遅れて展開しようとするがブレイクレオを展開したアリスに掴まれた。

「楓っ！？ 邪魔！！」

楓を追おうとする太陽達だが無人機がそれを阻んだ。

「放し下ろせー！...」

アリスは不適な笑みを浮かべて楓に言った。

「いや、お前が綺麗だからな」

「き、綺麗って／＼／」

アリスは両肩のレールカノンを楓に向かって放った。

「っ!？」

「ちっ!？ 邪魔だ!!」

太陽はライオンハートとオールデリートを振るい無人機に切りかかるが無人機は腕に隠されていた剣を交差させて防ぎ肩にあるマシンガンを放つ。

「ちっ!?! 何だコイツ等!?!」

鈴も双天牙月を無人機へ振るつたが無人機は受け流すように避けた。

「何よ!?! 無茶苦茶強いでしょ!?!」

シャルはアサルトライフルを連射するが無人機は左腕からビームシールドを展開する。

「離れる!?!」

三人が離れるとラウラが無人機四機に向かってレールカノンを放つ。

「やったか?」

「あれで無傷だったらシヨックだぞ」

煙が晴れると無傷の無人機四機が佇んでいた。

「嘘だろ」

太陽は芋虫を噛んだような顔をした。

「「この世界を調べる!?!」」
「ああ」

その頃、終はタクミと夜明にある提案をしていた。

「何だよ？」

「そうだよ。世界を調べるより他のみんなと会った方が」
「話を聞け」

終は意見を言う二人を黙らせて自身の考えを伝える。

「他の奴らと会っても帰り方が分からなきゃ意味がない。そう言う事だ。分かったか？」

終が聞くと二人は納得した顔をした。

「じゃあ、森を抜ける前に」
「前に？」

終が真剣な表情をすると二人は唾を飲んだ。

「お楽しみの食事タイムだ」
「「イエイ!!」」

終が缶詰を取り出すとタクミと夜明は喜んだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は肩で息をし、エターナルムーンの装甲は所々欠けて、欠けた部分から血を流し、頭からも血を流していた。

「なあなあ、大丈夫かよ？ ボロボロじゃん」

楓はルシファアを両手で握り瞬間加速で一気に近付く。

イグニッション・ブースト

「甘いよ」
「ぐっ!?!」

アリスは楓の腹に蹴りを喰らわせると脚に付いているレーザーブレードが腹に刺さり僅かに血が流れる。

「うう、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓はルシファーを握りアリスを見る。

「私さあ、あんたを傷つけるのは心が痛むから・・・さっさと沈んでよ」

アリスは両肩のレールカノンを楓に放った。

「っ!?!」

楓は受け流すように避けるが背中に衝撃が走った。

「うわぁ!?!」

「背中ががら空き」

楓は後ろを見ると満面の笑みを浮かべたアリスが見えた。

「まだ、まだです」

「諦めなよ。あんたじゃ勝てないよ」

アリスは瞬間加速で楓に近付き首を掴んだ。
イグニッション・ブースト

「ぐっ!?! あぁ」

「楽に気絶させてあげるよ。抵抗しなかったら」

楓はアリスの腕を掴み放そうとする。

「分かんないかな。あんたじゃ無理だよ。諦めな」
「ぐっ!?! うう」

アリスが力を強めると楓は気を失いエターナルムーンも解除された。

「ふう〜、終わり終わり」

アリスは楓を抱えると飛んでいく。

「ちっ!?! いくら何でも無茶苦茶だ」

太陽が舌打ちすると無人機達が四人から離れていく。

「？ 何だ」

「太陽！！ あれ！！」

太陽が鈴が指さした方向を見るとボロボロの楓を抱えたアリスが見えた。

「楓！？」

「おっ、無事だったんだ。『クロスナイト』四機相手に凄いね」

アリスが笑みを浮かべながら言った。

「楓をどうするつもりだ！？」

ラウラが言っているとアリスは楓を指さしながら言う。

「いや、こいつを連れて来いって言われたからな。そんじゃ、バイ

「バイ」

アリスは鈴、シャル、ラウラ、太陽に手を振りながらその場を離れていく。

「待て！！　っ！？　邪魔するな！！」

太陽達が向かおうとするが無人機、クロスナイトが立ち塞がる。

「クッソオ！！」

クロスナイトが離れるとアリスも居なかった。

アリスは楓を抱えながら研究所を歩いていた。

「おい爺!!」

「だから、爺は辞めろよクソガキ!!」

アリスがベルガに爺と言うとベルガはアリスに切れるがアリスはそれを無視して楓を指さした。

「これで良いだろ」

「おお、良いぞ。牢獄に入れといてくれ」

アリスはそう聞くと溜め息を吐いた。

「お前、女の子を何だと思ってんだ」

そう言いつつアリスはその場を離れる。

「たく、何考えてんだ」

アリスは研究所内の牢獄に楓を入れて首輪を付けた。

「悪いな。我慢してろ」

アリスはそう言うと牢獄を出た。

月、捕らわれる(後書き)

感想を待っています。

探る牙、変わる月（前書き）

終達が中心です。

そして、楓が！！

探る牙、変わる月

終、タクミ、夜明は森を抜けるために歩くが・・・

「駄目だ。抜ける気配がしない」

「確かに、何処まで続くんのだ？」

「抜ける前に俺達が餓死しそうだよ」

三人は休んでいるが森を抜ける気配はなく疲れていた。

「まだ食料はあるけど何時まで保つか、ギリギリな所だ」

三人は同時に溜め息を吐いた。

アリスは研究所内を歩いていると

「アリス、帰ってたの？」

後ろから声が聞こえ振り返ると赤い髪の女性が立っていた。

「エナル、居たんだ」

「酷いなあ、アリスちゃんは何時から冷たくなっちゃったの？」

「うるさい。エナル・ウォンレット」

赤い髪の女性、エナル・ウォンレットはアリスにフルネームで言われたことに驚き目を見開いた。

「珍しいわね。アリスが私の名前をフルネームで言うなんて・・・
何か良いことでもあった？」
「特にない」

アリスはその場を離れようとするがエナルが呼び止めた。

「待つてよアリスちゃん。私は聞きたい事があるの」
「何だ？ 早く言え」

エナルはアリスの隣に立つと囁いた。

「あの子、音梨楓ちゃんだっけ？ 会ってみたいのよ」

エナルがアリスの肩に手を置くとアリスは振り払うようにして言った。

「好きにすればいいだろ。そいつが死ななきゃ」
「有り難うね アリスちゃん」

アリスはその場を立ち去りエナルだけが残された。

「なら、好きにして良いのね」

エナルは不適な笑みを浮かべてそう呟くと歩きだした。

終、タクミ、夜明は相変わらず森の中を進んでいた。

「どうするだ終。早く森を抜けないと食料がヤバいぜ」
「だよなっ!？」

終はタクミと夜明の頭を掴み茂みに隠れた。

「「フンガー!？」」

無理矢理茂みに連れ込まれた二人は頭からダイブしていて終は茂みから様子を伺うように見ていた。

「何すんだ!？」

「いきなりな頭を掴んで茂みに放り込まないでよ!？」

「黙れ」

抗議する二人を黙らせて終は茂みから何かを見ていた。

「何見てんだ？」

夜明が聞き終が指さした方向を見るとクロスナイトが三機居た。

「あの時の無人機だ」

「数も三、丁度だ」

「だね、行くよ」

三人は茂みから出て終と夜明はISを起動しタクミはベルトを巻き

ファイズフォンに変身コードを入力した。

【スタンディングバイ】

「変身！！」

タクミはファイズフォンをベルトに倒す。

【コンプリート】

終はブラックファンク、夜明はレイジングウィングを展開しタクミはファイズに変身した。

「行くぞ！！」

終はハデスとケルベロスを取り出しクロスナイトの一機に近付き蹴

りを入れる。

「何で蹴り？」

ファイズは疑問に思いつつクロスナイトを殴りファイズフォンを取り103と入力した。

【シングルモード】

「ハア!!!」

ファイズはクロスナイトを撃つがクロスナイトは左腕のビームシールドで防いだ。

「前より強いな」

夜明もウィングスターでクロスナイトを撃つがクロスナイトは右腕の剣を出し瞬間加速で近付き剣を振り下ろそうとするが別の方向か

らクロスナイトがぶつかり地面に落下する。

「油断すんな!!」

「ああ・・・（何か太陽みたいだな）」

返事をした夜明はそう思いつつウィングスターでクロスナイトをも
う一度撃つ。

「ハアア!!」

ファイズはクロスナイトに向かって蹴りを放つがあまり効果がな
かった。

「堅いでしょ!?!」

「ISが蹴りで壊れたら大変だよ!!」

「早く終わらせようぜ」

夜明はウィングスターを仕舞いビームサーベル、スターライザーで

クロスナイトに切りかかる。

「取り合えず。早く・・・」

終はハデスを振るうがクロスナイトは剣で止める。

「沈めよ」

終はケルベロスをクロスナイトの胸に当てた。

「至近距離ならビームシールドは出せないぜ!!」

終がケルベロスの引き金を引くとケルベロスから放たれた弾丸はクロスナイトのコアを破壊した。

「終わったか。俺も早く終わらせるか!!」

夜明はスターライザーでクロスナイト腕を切り胸の部分に突き刺した。

「早く終わらせないと」

ファイズはデジカメ型の機械、ファイズショットにミッションメモリを入れた。

【レディ】

ファイズはファイズショットを右手で持ちファイズフォンを開きボタンを押した。

【エクシードチャージ】

ベルト、ファイズドライバーからファイズの赤い線、フォトンストームを伝いファイズショットに届く。

「うおおおおおおお！！！！！」

ファイズはファイズショットで殴る、グランドインパクトをクロスナイトの胸に当てるとクロスナイトはギリシャ文字の の字を浮かべながら爆発した。

「終わった」

「疲れたな」

終と夜明はブラックファンクとレイジングウイングを解除しファイズも変身を解きタクミの姿に戻る。

「何やってんだ？ 早く行くぞ」

「何処に！？」

タクミと夜明が聞くと終は二人を立たせてある方向を指さした。

「あつちから無人機が来たから」

「成る程な」

「何かあるって事だね」

終が頷くと三人はクロスナイトが来た方向を辿り始めた。

エナルは牢獄に続く道を歩きある牢獄の前に立つと不適な笑みを浮かべた。

「音梨楓・・・可愛いわね」

牢獄の中には未だに眠っている楓が居りエナルは牢獄の鍵を開けると中に入った。

「ふふふ。本当に可愛いわ」

「うう、ん、ん」

エナルが楓を撫でていると楓は目を開けてエナルを見た。

「誰、ですか？」

「ん？ 私、そうね」

エナルは暫く考えると両手で楓の顔を挟むように掴み自身の顔に近づける。

「？」

楓は朦朧とする意識の中エナルの顔を見た。

「ふふふ。あなたにプレゼント」

「？ んん！？／／／」

エナルは楓の顔を更に近付けて楓の唇と自分の唇を付けた。

「ふふふ。私があなたが欲しい証」

「あ……か……し？」

楓はそう呟くと気を失いエナルの腕の中でぐったりとなった。

「あゝあ、つまんないな。まっいつか、バイバイ」

エナルは笑みを浮かべながらその場を離れた後、楓が目を開くとコバルトブルーの瞳が変わっており暫く辺りを見渡していると再び目を閉じた。

探る牙、変わる月（後書き）

感想を待っています。

月、沈む

椛は黒い空間の中で目を瞑っていた。

「楓は何で人間を信じるの？」

椛のその声は何時もとは違い悲しんでいるようだった。

「けど、あなたが決めたなら私は何も言わない。けど」

椛が目を開けるとコバルトブルーの瞳になっていた。

「あなたの気持ちを利用する奴は私が消す」

「ああ……」

楓は半開きになっている目の色が一瞬コバルトブルーに変わると再び目を閉じた。

「あれだな」

「つか、廃墟だろ」

「期待はあまり出来ないかも」

終、タクミ、夜明は研究所を見つけたが廃墟になっており誰も居なかった。

「ある意味好都合だ」

「何処が？」

タクミが聞くと終は研究所の扉の前に立った。

「誰も居なきや」

終は思いっきり扉を蹴り飛ばした。

「騒ぎにならない」

「確かに好都合だな。後、良い蹴りだな」

「だろ、お前等もやってみるか？」

「早く入るよ」

タクミが二人の襟を持ち引きずりながら研究所内に入る。

「うわぁ、汚いな」

「当たり前だよ使われてないし」

タクミが呟くと夜明が返した。

「ですよ。何で固まってんだ？」

終が後ろを向いて呟いた。

「なぁ、気にしないで、良いだろ」

「はぁ、別に構わない」

終達は明るい所を見つけて入ると電子機器が並べてあった。

「よし、やるぞ」

「何を？」

二人が聞くと終はパソコンの前に座ると言った。

「ハッキングだ」

そう言って終はパソコンを操作し始める。

「で、何処に行くかな」

リボルギャリーの中で翔太郎が呟くとフリップが言った。

「取り合えずは食料の調達だ」

「そつだな」

「まずは食料ですか。で、どうしますか?」

「街に行くしかないだろ」

そう話しているとリボルギャリーの中に衝撃が走った。

「うわぁ!?!」

「箒!?!」

一夏は箒受け止めようとするが箒の下になった。

「大丈夫か一夏!?!」

「ああ、大丈夫だ」

「取り合えず外に出るぜ」

翔太郎が外に出た後一夏、箒、セシリアが続いた。

「あれは、無人機か?」

「多分な、翔太郎さん達が戦ったのと同じだ」

一夏、箒、セシリアはISを展開し翔太郎は両側にスロットがあるベルト、ダブルドライバーを腰に付けた。

「フリップ!!」

翔太郎は黒いメモリを取り出した。

「ああ、行くよ」

リボルギャリーの中でフリップは緑色のメモリのスイッチを押した。

【サイクロン！】

翔太郎もメモリのスイッチを押した。

【ジョーカー！】

「「変身！！」」

フリップが右側のスロットにサイクロンメモリを入れるとフリップは倒れてサイクロンメモリは翔太郎の付けてたダブルドライバーに現れ押し込みジョーカーを入れてスロットを倒した。

【サイクロン！】 【ジョーカー！】

電子音が鳴ると翔太郎の体は右が緑、左が黒のダブルサイクロンジ
ョーカー（以後ダブルCJ）に変身した。

「『さあ、お前達の罪を数えろ!!』」

ダブルCJが言つと一夏が一言言つた。

「格好いいな」

「私は、一夏の方が格好いいぞ／＼」

篤は誰にも聞こえないように呟いた。

『さあ、行くよ翔太郎!!』

「おお！ 行くぜ!!」

フリップの意識を『翔太郎の意識を』で表します。

「オラア!!」

ダブルC」は風を纏った蹴りをクロスナイトに叩き込む。

『やっぱり、あいつ等は強度があるからヒートメタルで行くよ』
「ああ」

ダブルC」は赤いメモリと銀のメモリを取り出しスイッチを押した。

【ヒート!】
【メタル!】

ダブルドライバーからサイクロンメモリとジョーカーメモリを抜き取りヒートメモリとメタルメモリを入れた。

【ヒート!】 【メタル!】

ダブルCJはダブルヒートメタル（以後HM）に変わりダブルHMは背中からロット状の武器、メタルシャフトに火を纏わせてクロスナイトに叩きつける。

「行くぞ白式！！」

一夏は零落白夜を発動させてクロスナイトを切りつけるとクロスナイトは機能を停止した。

「流石だな。私も行くぞ！！」

箒は雨月と空裂でクロスナイトの腕を切り飛ばすとコア部分に突き刺した。

「さあ、踊りなさい。ブルー・ティアーズが奏でるワルツで！！」

セシリアはスターライトmk?でクロスナイトを撃ちクロスナイトは後ろに避けるが一夏が雪片、箒が雨月でコアを破壊した。

「俺達も一気に行くぜ!!」

『ああ』

ダブルHMはダブルドライバーからメタルメモリを抜きメタルシャフトに入れた。

【メタル! マキシマムドライブ!】

「『メタルブランディング!!』」

ダブルHMはメタルシャフトから炎を出しながら振るう、メタルブランディングでクロスナイト二機を破壊した。

「凄い」

「何て威力なんだ」

一夏と箒の二人はメタルブランディングの威力に驚いていたがセシリアは空を見上げていた。

「楓さん」

セシリアの眩きは誰にも聞こえなかった。

楓は手足を鎖で繋がれて未だに気を失っていた。

「で、ベルガは何をやるつもりだ？」
「私を知るわけないでしょ」

楓が繋がれてる機械から電気が走ると楓が苦しみ始めた。

「何だ？」

「ねえ、ベルガ、あんた何やってんの？」

アリスが疑問に思いエネルギーが聞くとベルガは不適な笑みを浮かべた。

「何、実験に協力して貰ってるついでにだ」

「ああ、あつ」

装置が止まると楓は糸の切れた人形のように倒れた。

「あれ？ 死んじゃった？」

「生きていると思うが？」

「投げやりだな」

エネルギーが楓を抱えてベルガに聞いた。

「ねえ、この子を私の好きにして良い？」

「構わんよ」

エナルは楓を抱えたままその場を後にするとアリスがベルガに聞いた。

「で、ついでに何をした？」

「ん？ ああ、言うことを聞いて貰うようにしたんだよ」

「つまり洗脳か」

アリスが呟くとベルガは不適な笑みを作りそれを見たアリスはその場を離れた。

「さあ、私があなただを可愛がってあげる」

エナルは目が虚ろな楓を抱えたまま研究所内を歩いていた。

「ううん、駄目だ使えねえ」

終はパソコンを操作しながら呟くとタクミと夜明が終の肩越しからパソコンのモニターを見るがノイズが走っていた。

「はあ、駄目だ。長居する必要もないから行くぞ」

「収穫なしか」

「今度は情報機関係を当たろうよ」

終達がパソコンから離れると一瞬モニターに“プロジェクトA”と言つ単語が現れ消えた。

月、沈む（後書き）

感想を待っています。

激闘 前編（前書き）

何故か前後編に

激闘 前編

終、タクミ、夜明は研究所から出ようと歩いていると

「ん？ 何だここ？」

終が明かりが扉の隙間から見えおり扉を蹴り破った。

「何で蹴り破るの！？ 普通に開ければいいでしょ！！！」

「いや、何となく」

「何となくで扉を蹴り破らないでよ！！！」

「良いだろんな細かいこと」

「細かくない！！！」

三人が部屋にはいると三台のバイクが止めてあったその中の一台を見たタクミは驚きの表情で言った。

「オートバジン！？」

「えっ！？」

鈴、シャル、ラウラ、太陽は街から出て歩いていたが表情は沈んでいた。

「ねえ、太陽」

「何だ？」

「何処に行くの？」

「取り合えず歩くぞ。じっとしても始まらない」

四人はアリスとクロスナイトが去った方向を目指して歩いていく。

「ふふふ、可愛いわよ」
「有り難う御座います」

エナルと楓は二人で居たが楓の方は目に光が宿ってなかった。

「さあ、可愛がってあげる」
「わかりました」

エナルは楓をベッドに押し倒すとエナルの端末が鳴った。

「誰かしら？ ちょっと取って」
「はい」

楓はエナルの端末を取りエナルに渡した。

「有り難う」

エナルは礼を言うが楓は軽く頭を下げるだけだった。

「ん？ そう、わかった」

エナルが端末を切ると楓が聞いた。

「どうかしましたかエナル様」

「ん？ 召集、行くわよ」

「はい」

二人は部屋を後にすると歩きだした。

森の中を二台のバイクが疾走していた。

「で、何時まで森なんだ？」

「もう直ぐで出るだろ」

「やっぱりバイクは速いね」

終、タクミ、夜明はバイクを走らせて森を出ようとしていた。

「取り合えず出ることだけを考えるぞ」

終達は更にバイクのスピードを速めた。

ある部屋にアリス、エナル、ベルガ、楓と金髪の少女が居た。

「で、こいつは何？」

金髪の少女が楓を指さした。

「私達の下僕」

「へえ〜」

エナルの言葉に金髪の少女は楓を不思議そうに見た。

「エナル様。この方は？」

楓が聞くとエナルではなく金髪の少女が言った。

「私はフェルナ・ナルシエア」

「ナルシエア様」

「フェルナで良いわよ」

金髪の少女、フェルナ・ナルシエアの言葉に楓は軽く頭を下げた。

「ベルガ。さつさと用件を言え」

アリスがベルガに言っているとベルガが四人を見て言った。

「ウエルナ嬢と音梨嬢にある奴らを潰してくれ」

ベルガは端末を操作するとモニターに太陽、鈴、シャル、ラウラが写った。

「こいつ等を？」

「ああ、そつだ。良いね？」

ベルガがアリスと楓を見て言った。

「私は別に良いが」

「了解しましたベルガ様」

アリスが席から立ち楓は頭を下げて二人はその場を後にした。

「やっと森から出られた」

終達は森から出ると伸びをした。

「でも、森の次は」

「荒れ地って、やだな」

終達が出た場所は森とは違い草がない荒地だった。

「兎に角街に行くぞ。食料と情報を探しに」

三人はまたバイクに乗り街を目指した。

「あつ、待ちたまえウォンレット嬢、ナルシエア嬢」

ベルガは部屋から出ようとしていたエナルとフェルナを呼び止めた。

「何だよ？私達は別にやることないだろ」

フェルナが言うとベルガはモニターに終、タクミ、夜明を写した。

「何こいつ等？」

「どうやら、こっちは後々面倒なことをしそうな奴らだから潰しといてくれ」

ベルガが言うと二人は顔を見合わせて言った。

「ぶっ潰してやるよ」

「私も良いわ」

ベルガは二人を見て笑みを浮かべながら言った。

「任せたよ」

二人は部屋を後にした。

太陽達は歩いていけると目の前に何者かが降りてきた。

「!？」

「嘘」

「何で？」

「楓、か？」

降りてきたのはISを展開したアリスと楓だった。

「何で？」

疑問に思つ太陽達を無視して楓はルシファーとポセイドンを構えた。

「織滅します」

楓は真つ先に太陽に向かいルシファーを振り下ろした。

「っ!？」

太陽は後ろに下がりはバルディッシュトワイライトを展開しオールデリートとライオンハートを構えるとアリスに掴まれた。

「くっ!？ 放せ!!」

「やだね。あんたは私の相手をして貰う」

太陽とアリスが離れると楓は鈴とシャル、ラウラを見てルシファーとポセイドンを構えた。

「織滅します」

「そんな」

鈴達は放心状態の中ISを展開した。

「楓!!」

「目を覚ませ!!」

シャルとラウラが叫ぶが楓は瞬間加速で近付く。

イゲンニッション・ブースト

「ちっ!?! 退け!!」

「断る」

太陽は爪先に付いている小型のレーザーブレード、グリフォンで回し蹴りをすると同時にアリスも同じように回し蹴りをした。

「あいつに何をした!?!」

「さあ、考えてみな」

「貴様!?!」

太陽はオールデリートとライオンハートを同時に降り下ろすがアリスは後ろに避ける。

「ちっ!?!」

「凄いな。あんた」

アリスは両肩のレールカノンを太陽に向かって放った。

「くっ!?!」

ラウラはワイヤーブレードを楓に向かって放つが楓はルシファーでワイヤーブレードを切り裂きポセイドンを仕舞いゼウスを左手に持ちシャルと鈴に向かって撃つと二人はギリギリで避けた。

「楓、どうしちゃったのよ!？」

「しっかりしてよ!！」

鈴とシャルの声を無視して瞬間加速で近付き腹を蹴り飛ばした。
イグニッション・ブースト

「何だお前等？」

終達の目の前にエナルとフェルナが居た。

「あんだ等少し付き合つてよ」
「時間はあまりとらせないわ」

二人の雰囲気はタクミと夜明は表情を険しくし終は目つきが厳しくなり殺気を放つ。

今、激闘が二つの場所で全く違う形で起ころうとしていた。

激闘 前編（後書き）

エナルとフェルナの専用機の名前を募集します。

待っています。

激闘 後編(前書き)

後編、けど何か・・・やばい？

激闘 後編

「ふっ」

「オリヤ！！」

フェルナが自身のIS、キリングヴウノムを展開し終はブラックフアングを展開してフェルナは大剣、ドラグノフを振るい終はハデスで受け流す。

「受け流すなよ！！」

「まともに受ける馬鹿は居ねえよ」

終はハデスで受け流しフェルナをケルベロスで撃ちながら攻防を繰り返していた。

エナルはIS、フォービドウンを展開して夜明とタクミが変身した
ファイズを左腕に持ったアサルトライフルで撃つ。

「アブねえ!?!」

「うわぁ!?!」

夜明は左腕のビームシールドで防ぎ、ファイズはギリギリで避けた。

「あらあら、よく頑張るわね」

エナルは槍、ヴァジュラを握りファイズに向かう。

「えっ? つて、危ない!!」

ファイズはミッションメモリをファイズフォンから抜きオートバジ
ンの左ハンドルに入れた。

【レディ】

ファイズはファイズエッチを持ちヴァジュラを止めた。

「まあ、けど甘いわよ」

エナルはアサルトライフルを夜明に向け引き金を引いた。

「遅い!!」

夜明はウィングスターの引き金を引いた。

「荒削りだけど」

エナルは上に避けた。

「強いよね。楓」

「いや、もう反則でしょ」

「無駄口を叩くな。一瞬でやられるぞ」

鈴、シャル、ラウラは目の前にいる楓を見ると楓は左手に持ったポ
セイドンを投げた。

「ちっ!?!」

ラウラがプラズマ手刀で弾くと楓は瞬間加速で近付きルシファーを
シャルに振りかざした。

「っ!?!」

「シャルロット!?!」

鈴が双天牙月でルシファーを受け止めた。

アリスはフレイアを避けると両肩のレールカノンを放ち太陽は横に
イグニッション・ブースト
瞬間加速で避けた。

「やるな」

「そつちもな」

太陽とアリスは瞬間加速をして一気に近付いた。
イグニッション・ブースト

「ほう、面白いな」

ベルガは太陽対アリス、鈴、シャル、ラウラ対楓、終対フェルナ、
ファイズ、夜明対エナルの戦いをモニターで見っていた。

「このままでも、無意味だな」

ベルガは端末を持ちアリスとエナルに連絡を入れた。

「ん？ 連絡か」

アリスは太陽との戦闘中に端末を取り出した。

「何？ 分かった」

アリスは端末を切ると瞬間加速イグニッションブーストをして太陽から離れた。

「待て！！」

太陽はアリスを追う。

「あら？ そつ、つまらないわね」

同じくエナルも端末を切り瞬間加速イゲンション・ブーストでファイズと夜明の前から離れた。

「追うぞタクミー!!」

「分かった!!」

夜明とファイズはエナルを追いかけた。

「おい、楓」
「アリス様」

鈴達の目の前にアリスが現れた。

「最悪ね」
「二人も相手するの？」
「くっ!？」

鈴達が苦い顔をしているとアリスが口を開いた。

「帰還だ」
「了解しました」
「!？」

アリスの言葉に鈴達は驚愕し楓は頭を下げた。

「どう言うことだ？」

「言葉通りだ」

アリスと楓は三人の前から瞬間^{イグニッション・ブースト}加速で立ち去った。

「大丈夫か!？」

「太陽」

遅れて太陽が来ると鈴は泣きそうな顔になりシャルとラウラは目を伏せた。

「何も言うな。何も言うな」

太陽は三人を励ますように言った。

「だぁ！！ 何で避けてんのよ!?!」

「避けない馬鹿は居ないって言っただろ。チビ」

「誰がチビよ!?!」

「お前だ」

終はフェルナに指さすとフェルナはドラグノフを振り回すがその手を誰かが止めた。

「!?! エナル!!」

「撤退よ。フェルナ」

「何?」

終はエナルの言葉に表情を険しくした。

「あなた、良い男ね。格好いいね」

「何言ってるのよエナル!?」

「悪い興味はないな」

「つまらないわ」

終はケルベロスを二人に向けた。

「答える。さっきの言葉はどうゆう意味だ?」

「そのまま、じゃあね」

「おい、放せよ!!! 後、テメエはぶっ潰してやるううう!!!」
「!!!」

フェルナはエナルに襟首を掴まれながら連れて行かれた。

「何だったんだ?」

終は疑問符を浮かべているとファイズと夜明が来た。

「どうした？」

「いや、何か、騒がしい奴が居た」

「誰それ？」

三人はただ佇んでいた。

研究所の廊下をアリス、エナルと襟首を掴まれながら引きずられるフェルナ、楓が歩いていた。

「いい加減放せ！！ あいつをぶっ飛ばさねえと気がすまねえ！！」
「フェルナ様、落ち着いて下さい」

フェルナが騒いでいると楓が宥めていた。

「来たぞ、ベルガ」

アリスが言うとベルガは笑みを浮かべながら楓を見た。

「音梨嬢に頼み事があったね」

「私にですか？」

「ああ、これだ」

ベルガはモニターに一つの研究所を写した。

「この研究所の警備だ」

「分かりました。すぐに向かいます」

楓はその場から離れるとアリスはベルガに聞いた。

「確かここは必要ないんじゃない？」

「まあ、良いだろ」

ベルガは笑みを浮かべながらモニターを見ていた。

楓は研究所の廊下を無言で歩いていた。

「っ!？」

突然、頭をハンマーで殴られたような衝撃が走るとその場に膝を突いた。

「くっ、っ、っ」

暫く頭を抱えていると立ち上がり歩いていった。

リボルギャリーが街で止まっていた。

「なあ、フィリップ」

「どうした、翔太郎？」

街を見ていた一夏、箒、セシリア、翔太郎、フィリップは廃墟と化した街をただ見ていた。

「廃墟だな」

「そうだね」

「何でだろ？ 涙が出てくる」

「言っちな一夏」

「実際に涙が出てきますから」

五人は同時に溜め息を吐いた。

激闘 後編（後書き）

次回は堕天使が凄いことをします。

血塗れの堕天使（前書き）

今回は少しエロいしグロいです。

許して下さい。

血塗れの墮天使

太陽、鈴、シャル、ラウラはまた歩きだしていた。

「太陽、楓はどうするの？」

鈴がぼつりと呟くと全員が足を止めた。

「なあ、お前等はどうしたい？」

太陽が三人に向き直った。

「私は、楓を助きたい」

「僕も救いたいよ。守るって約束したから」

「私も同じだ」

鈴、シャル、ラウラの順で言うと太陽が言った。

「だったら起こすぞ。寝坊してる奴を」

そう呟くと四人はまた歩き出す。

楓はベルガに言われた研究所に来ていた。

「やあ、ご苦労だね」

「いえ、命令ですから」

初老の男が言っていると楓は顔色一つ変えずに言った。

「冷たいね。あの男は何故君を？」
「質問に答える意味がありません」

楓は男を見ずに言葉を返した。

(ん？ ああ、実験に協力して貰うか)

男は心の中で不適な笑みを浮かべた。

「ああ、君には第四研究室に行つて貰いたい。良いね？」
「別に構いません」

楓は言われた通りに研究室に向かった。

楓は第四研究室と呼ばれる研究室に来ていた。

「何をすればいいのでしょうか？」

楓は監視カメラに向かって言う通気口からガスが出て部屋に充満した。

「これは、一体？」

そう呟くと楓は気を失い床に倒れ込みガスマスクを付けた男達が入ってくるカメラから男の声がした。

「そいつは第一実験室に連れていけ」

それを聞いた男達は楓を連れて部屋を出て行った。

「食料が」

「見つからないのは」

「分かってたけど」

「流石にこれは」

「何かの陰謀を感ずますわ」

上から翔太郎、フィリップ、一夏、箒、セシリアが呟いた。彼等の足下には既に空けてある缶詰、だが彼等が空けたものではなかった。

「何で空いた缶詰だけ？」

「知らないよ」

一夏が疑問に思い呟くとフィリップが疲れきった声で言った。

「何かねえのか!？」

翔太郎が空き缶を蹴りあげると偶然近くにいたクロスナイトの頭の部分に当たった。

「…………へっ?」「…………」

五人の思考が停止しているとクロスナイトの存在に気付いた。

「フィリップ」

「ああ、行くよ翔太郎」

翔太郎が腰にダブルドライバーを付けて翔太郎は青いメモリを出しフィリップは黄色いメモリを出した。

【トリガー!】

【ルナ!】

「変身!!」

フィリップがダブルドライバーにルナメモリを入れ翔太郎のダブルドライバーにルナメモリが現れると押し込みトリガーメモリを入れてスロットを倒した。

【ルナ!】 【トリガー!】

翔太郎の体が右が黄色、左が青のダブルルナトリガー（以後ダブルLT）に変身した。

「何で食料がなくて!!」

『空き缶ばかり何だよ!?!』

ダブルLTはトリガーメモリを銃型のトリガーマグナムに入れた。

【トリガー！ マキシマムドライブ！】

「『トリガーフルバースト！』」

トリガーマグナムから黄色い追尾弾が複数発射されクロスナイトはビームシールドを出すが追尾弾は後ろに回りコアを貫いた。

「あゝ、食料何処だよ」

一夏の眩きで全員の腹が鳴った。

楓は一糸纏わぬ姿でカプセルの中に入れられ液体に浸かっていた。

「で、状態は？」

「異常なし。数日後には実験を開始できます」

初老の男と助手らしき男が楓が入っているカプセルの前で話し合っていた。

「しっかり管理しておけ」

「分かりました」

初老の男が立ち去ると助手の男は機械を操作し始めた。

黒い空間の中楓は一糸纏わぬ姿で浮かんでいた。

「楓、あなたは私が必ず守る」

椛が何処から音もなく現れるとそう呟き楓の頬を撫でた。

「あなたは、私だけを信じてくれれば良い。あなたを傷つける奴は私が潰す」

椛が呟くとコバルトブルーの目が楓を写していた。

「・・・」

カプセルに入っている楓が目を開くと目は何時もの黒ではなくコバルトブルーだった。

(あら、ご丁寧にエターナルムーンは外さなかったのね。まあ、良いわ)

楓の人格から権に変わると権は右手にルシファーを出すとカプセルを割った。

「なっ何だ!？」

男が驚いていると権は男に近付き男の腰を横一文字に切り裂いた。

「えっ?」

何が起ったか理解できず男は上半身と下半身に分かれて絶命すると権はその場から歩き出した。

初老の男が機械を操作している途中時計を見ると疑問を言った。

「報告時刻は過ぎているのに報告が来ない？」

初老の男は他の研究員を見て告げた。

「おい、第一保管所の様子を見てこい」
「分かりました」

研究員は扉を開けて部屋を出た。

研究員が保管所を見ると辺りが血で染まっており所々に死体が転がっていた。

「なっ何だよこれ」

研究員が後ろに下がると首が下に落ち血が噴水のように出ると椀は冷たい目で研究員を見下ろし研究員の死体を踏め付けた。

「後一人ぐらいかしら？」

椀は初老の男以外の人物を殺害していた。

「さて、こいつが歩いてきた道を辿りますか」

椀は研究員が歩いてきた道を歩いていくと血の足跡を残していた。

「遅いな。何をやっているんだか」

初老の男が咳いていると扉が真つ二つに切り裂かれた。

「なつ何事だ!？」

扉から歩いてきたのは血塗れの椀だった。

「なつ何故だ」

「知らなくて良いわよ。どうせ死ぬんだから」

椀が初老の男に近付くと初老の男は命乞いを始めた。

「た、頼む！ 命だけは助けてくれ！！」

椛はルシファアの刃を触ると初老の男の首に当てて一言言った。

「知らないわよ」

椛がルシファアを振るうと初老の男の首が飛び血が噴水のように溢れ出し椛の体を赤く染めた。

「自分でやって何だけど、汚いわね」

椛は部屋を後にした。

「翔太郎！ 見たまえ食料だ！！」
「本当かフィリップ！？」

フィリップが缶詰を持つと翔太郎達が近寄ってきた。

「本当だ。これで食料が食える！！」
「長かったな」
「ああ、長い道のりだった」
「これでようやく」
「僕等は遂に食料を手に入れた！！」

全員が思い思いに喜んだ。

「食べ物一つでこんなに喜べた」

全員が感激の涙を流したのは言うまでもない。

「うん、気持ちいい」

椛は研究所に有ったシャワー室でシャワーを浴びていた。

「さて、これからどうしましょう？ 服は取り戻したし。うん」

椛は悩みながらシャワーを浴びていると何かを思いついたような表情をした。

「出て考えればいいか」

椛がそう呟くとシャワーを止めてシャワー室を出た。

「なあ、廃墟だよなこ」

「うん、廃墟だよ」

「廃墟だな」

終、タクミ、夜明は廃墟の前で佇みながら溜め息を吐いた。

「ついてないね」

「言うなよ」

そう言い三人は廃墟とかした街に入ってしまった。

椋は研究所から出て荒野を歩いていた。

「うーん、何処に向かおうかしら？」

そう言いながら真っ直ぐ進んでいった。

「何だ？ こころは」

太陽が眩くと鈴とシャルは顔を青くしラウラは表情を険しくした。目の前に広がっている光景は研究所内で血に染まった廊下と辺りに転がっている死体の数々、数分前まで椀が居た研究所に太陽達が来ていた。

「酷い。誰がこんな事を？」

シャルと鈴は口元を手で覆いながら辺りを見ていた。

「こんな事は簡単じゃない。人物は特定できるかも知れんが、流石

「これは」

ラウラも冷静に言うが冷や汗をかいていた。

「監視カメラがあれば話は別だが」

太陽が言う。太陽達が居る場所には監視カメラがなく頭を抱えていた。この惨劇が一人の手で行われた事を知らずに

血塗れの堕天使（後書き）

感想を待っています。

読んだらせめて感想を下さい。

墮天使対三大IS（前書き）

前後編、前編

墮天使対三大IS

鈴、シャル、ラウラ、太陽は目の前の状況を見て険しい顔をしていた。

「何だ、これは」

事は数分前、研究所に入った四人は廊下が血で赤く染まり辺りに死体が転がっている惨劇を見ていた。

「誰がこんな事」

「血が固まってないから時間が経ってないし遠くには行ってないな」

シャルが呟くとラウラが状況を把握した。

「監視カメラがないから、誰がやったかは分からんな」

太陽が見渡すが監視カメラがなく頭を抱えた。

椛は研究所から程近い廃墟のビルの中で缶詰を開けた。

「缶詰って、楽だけど飽きるわね」

椛は愚痴を言いながら缶詰の中を食べ無くなると放り投げた。

「ふあゝ、そろそろ時間ね」

椛が欠伸をするとそう呟き眠りについた。

終、タクミ、夜明はビルの中で火を起こしていた。

「これで良いか」

終は枝を火の中に投げ入れながらビルの中を見渡した。

「これで雨風は凌げるな」

「けどさあ」

「食料がさあ、殆ど無いんだが」

夜明がリュックを逆さにすると缶詰が数個落ちた。

「あゝ、考えてなかった」

「おい！！！」

終達は取り合えず食料を探すことにした。

「ん、んん」

夜、楓が体を起こすとビルの中で楓は混乱した。

「えっ？ 何で、ビルの中？ 私、確か」

楓は思い出そうとするがベルガとアリス、エナルが目の前にいて何かの装置にかけられてる記憶しかなかった。

「何で、記憶が、途切れてるでしょう？」

楓が悩んでいるとビルが揺れた。

「な、何！？」

楓がビルを出るとISを展開したアリス、エナル、フェルナが上空にいた。

「よう、音梨楓」

「アリスさんと、どちら様ですか？」

「エナル・ウォンレット」

「フェルナ・ナルシエア、宜しく」

三人から距離を取ろうと後ろに歩くがビルの壁に背中が当たった。

「逃げられないぞ」

「悪いけど、潰させてね」

「恨みはないけどね」

エナルはヴァジユラ、フェルナはドラグノフを構えると楓はエターナルムーンを展開した。

「勝てるか？ 私達三人を相手に」

「・・・行きます！！」

楓はルシファーとポセイドンを握りアリスに向かうとアリスは両肩のレールカノン、エナルはアサルトライフルを楓に向けて引き金を引いた。

「っ!?!?」

楓が回避するとフェルナがドラグノフを楓に降り下ろし楓はルシファーで受け止めた。

「甘いつて」

「ぐっ!？」

フェルナは楓の腹を蹴り飛ばし楓を中心にアリス達は三角形に列んだ。

「聞きたいことがある」

「えっ？」

アリスが呟くと楓はアリスが居る方向を見た。

「お前は何処まで覚えてる？」

「それは」

楓の表情を見たアリスは理解し楓に言った。

「別に良い。その表情で理解した」

そして楓に向けてレールカノンを放った。

「うっ!?!」

突然のことに避けられず直撃した。

「私達とも」

「遊ばない?」

「!?!」

楓が後ろを向くとエナルがヴァジュラ、フェルナがドラグノフを降り下ろすのが見えて受け止めた。

「後ろがから空きだって注意したはずだ」

「うわぁ!?!」

アリスが楓の背中を蹴り付けた。

「私達は三人だぞ」

アリスは瞬間加速で近付き回し蹴りをした。

イグニッション・ブースト

「っ!？」

楓は後ろに下がるが小型のレーザーブレードで太股を切られ微量だが血が流れた。

「まだまだだ」

アリスは爪を振るい楓は後ろに瞬間加速で下がった。

イグニッション・ブースト

「だから甘い」

「ぐっ!？」

アリスはまた爪を振るい胸の辺りを切られ血が流れた。

「私達を忘れてない？」

「!？」

楓が後ろを振り向くとエナルはヴァジュラを投げてヴァジュラは楓の左肩を貫き楓ごと壁に激突した。

「ぐっ!？」

左手からポセイドンが落ちフェルナはドラグノフを楓の右肩に突き付けた。

「私達三人に勝てると思った？」

「っ!？」

「うっ、うわああああ」

「ああ、そう言えば一つ言いたいことがある」

アリスが呟き少し力を弱めた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

「お前がさっきまで居た場所で一人残らず殺された」

「!?!」

アリスが言つと楓は目を見開いた。

「誰も生き残りが居なくなてな。けど例外としてお前が居る」
「嫌、嫌だ」

楓が首を振るうがアリスは楓の顎を掴み目を見て言った。

「お前が殺したと思うが」

「違う、私じゃ、私じゃない。違いますよ」

楓は否定するがアリスは楓の目を見て溜め息を吐きながら言った。

「お前が殺したんだ。人を、しかも大勢を、な」

「嫌、嫌あああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

楓の目が段々と虚ろになっていき力が抜けたように顔を伏せた。

「やりすぎたか？」

アリスが楓の顔を覗くと楓が右腕を動かしアリスの首を掴もうとした。

「ちっ!?!」

アリスはとっさに離れると楓は左肩に刺さったヴァジュラを抜いた。

「はあ、余計な事してくれたわね」

エターナルムーンが段々と黒に変わりダークムーンへ変化した。

「ISが、変化した」

「そんな!？」

「あり得る分けないでしょ!！」

三人が驚くと楓は椀の人格へ変化した。

「誰だ? 貴様」

「私? 私は椀。宜しくね」

楳は笑みを浮かべてルシファーとゼウスを持ち三人に向けた。

「さあ、私を楽しませて」

楳の顔の上半分に黒いバイザーが付いた。

「一体何なんだ！？ お前は！！」

「別に関係ないでしょ。あなた達はどうぞせ

死ぬんだから」

「「「！？」」」

楳が言うと三人は楳の声を聞くと背筋が凍るような感覚に陥った。

「うふふふ」

椀は笑みを浮かべながらルシファーとゼウスを振り回していた。

墮天使対三大IS（後書き）

感想を待っています。

信じてるから(前書き)

前後編、後編

って、意味わかんねえ

信じてるから

杖がアリスに向かってルシファーを振るうとアリスに爪で受け止めフェルナがドラグノフの腹で杖を殴り付け杖はビルに激突した。

「呆気ないな」

「別に大したことないし」

「・・・」

フェルナはドラグノフを担ぎエナルは周りを見渡していたがアリスは煙の場所をずっと見ていた。

「！！！！」

三人が居た場所にエネルギー弾が向かってくと瞬間加速イグニッション・ブーストで急いで避けた。

「楓の身体なんだから手加減してよ」

頭から血を流しながら楯はゼウスの銃口を三人に向けていた。

「まあ、今はどうでもいつか」

楯は瞬間加速でエナルに近付きルシファーを降り下ろすとヴァジュラで受け止め楯がゼウスの銃口をエナルの腹に突き付ける。

「うふふふ」

（不味い！！）

楯が引き金を引く前にアリスが楯の背中を蹴りフェルナがドラゲノフで楯を地面に叩きつけた。

「ふっ！！」

楯は地面に激突する前に体制を立て直しゼウスを三人に向け引き金

を引き三人はその場から離れた。

「あゝあ、残念」

「おい、お前」

椀が呟くとアリスが椀を見ながら言った。

「何よ？」

「研究員を皆殺しにしたのはお前か？」

アリスが聞くと椀は不適な笑みを浮かべながら言った。

「当たり前よ。あの子は人を殺せない。だから三年前も私が・・・」

そこまで言うと椀は暗い顔をして三人が疑問符を浮かべていると椀はルシファーで三人に切りかかった。

「三年前が何だ？」

「答える意味はないでしょ。どうせ私が殺すんだから」

「悪いけど死ぬ気ないから」

「私も同じ」

アリスがレールカノン、エナルがヴァジユラ、フェルナがドラゲノフで椀を攻撃しようとするが椀はエナルとフェルナの攻撃を受け流しアリスの攻撃を避けた。

「で、そろそろ朝だけど」

椀が指を指したところから朝日が覗いていた。

「もう朝だな」

「気付かなかった」

「けど、綺麗ですね」

「最後だからずっと見てれば」

椀がルシファーを構えるとアリスは椀に背を向けた。

「悪いが今は止めとく」

アリスはそう言うとエナルとフェルナの襟首を掴んで離れると椀は地面に降り立ち膝を突いた。

「駄目、こんな所で」

椀はそう呟いた後気を失い倒れた。

「ふあゝ、よく寝た」
「食料は少ないけどね」

翔太郎が朝日を見ながら欠伸をしてフィリップが現状を告げた。

「食料でも探しましょうか」

「そうしよう」

五人は食料を探しに歩き出した。

楓Side

私は三年前までの記憶はない。さまよっていたところを束さんと終さんに救われた。

実はそれより先に見ていたことがあった。血塗れの、“知らない男女”だった。

「何処だろうね。楓は」
「だから探すんだ」

鈴、シャル、ラウラ、太陽は街を歩いていた。

「ねえ、あれって」
「「「ん？」」「」」

鈴が指さした方向を見ると“血溜まりの中にいる楓”を見た。

「楓!!」

「しつかりしろ!! 楓!!」

「何で、何でこんな!?!」

鈴達は楓に近付き太陽は辺りを見渡した。

「早く運ぶぞ!!」

「何処に!?!」

「取り合えずだ!!」

太陽が楓を抱えて走り出した。

「病院跡がよくあつたな」

鈴達は病院跡に楓を運び応急処置をしていた。

「何で、こんなに傷だらけ何だろ？」

「私が知りたい」

楓が着ていた服は左肩に穴が開き右肩は破れていた。

「流石に使えないなこれ」

太陽は服を掴み溜め息を吐いた。

「うっ、んん」

楓が目を開けると起き上がり身体に巻かれた包帯を見た。

「これって、それに私は・・・」

楓は三人の顔を見た後、大声で泣いた。

「落ち着いたか？」

「はい」

楓が泣き止んだ後鈴達は研究所での事を話すか悩んでいた。

（で、どうすんのよ？）

（いや、考えてなかった）

（止めとく？）

（関係ないし、止めとくか）

鈴達が楓に向き直ると楓は窓から空を眺めていた。

「どうしたんだ？」

太陽が楓に聞くと楓は小さく呟いた。

「私は、人殺しなんですか？」

「「「「！？」」「」「」

楓の言葉に四人は驚愕の表情になった。

「私は」

「そんな訳ないだろ」

ラウラが楓を抱き寄せ言った。

「お前が人を殺すわけがない。絶対にない」

「ラウラさん、少し、痛いです」

楓が顔をしかめるとラウラは楓から離れた。

「楓は一人にしないから、そんな事、言わないでよ」

シャルも俯きながら静かに呟いた。

「私の知ってる楓はそんな事は絶対にしない」

鈴は楓の顔を見ながら言った。

「お前を心配してる奴等はお前が人を殺したって言っても信じないと思うが」

太陽が呆れた表情で三人を見た。

「有り難う御座います」

楓は笑顔でそう呟いた。

「なあ、二人共」

「何？」

「まあ、言いたい事は分かる」

終、タクミ、夜明は大声で叫んだ。

信じてるから（後書き）

感想を待っています。

特別編 椛の気持ち、楓の気持ち（前書き）

短いですよ。今回で何時、椛が現れたかが分かります。

特別編 椛の気持ち、楓の気持ち

椛 side

私は楓のもう一つの人格、けど楓が記憶を失う三年前より前に私は現れた。

「楓・・・」

私は静かに呟いた楓に聞こえるはずなのに呟いていた。

「三年前と言いつ、今回と言いつ、楓を傷つける奴等は何でいるの？
楓が何をした？」

私は疑問に思っていた。ずっと、十二年前からずっと思っていたことだ。

「三年前から前のことは絶対に思い出させない。あの子が壊れちゃう」

あの子は繊細で些細なことでも罅が入り、何時か壊れちゃう。そんな事、させない。例え世界を敵に回しても楓を傷つける奴等は全部殺す。

「例え私の手が血で汚れても、楓は守る。私の存在理由でもあるあの子を、世界が楓を傷つけるなら」

全 部 私 が 壊 し て や

る

楓を守るのは私一人で良い」

囁かな願いだけど私は楓がいれば世界なんて滅びようがどうでも良い。ただ、楓が傷つかないようにさえすれば良い。

1059

楓side

私の記憶は三年前までしか分からない。思い出そうとしても思い出

せないことがある。

「・・・」

何で思い出せないかは分からない。けど怖いと思うと記憶がなくなり気付いたら気を失っている。

「どうしたの？ 楓」

「鈴さん。何でもありません」

笑顔で答えるけど嘘をついてる。本当は記憶がないことが怖いけど心配をかけたくはないだから言えない。

知りたい気持ちと守りたい気持ち、
記憶の真実は守りたい気持ちが
知っている。

特別編 椛の気持ち、楓の気持ち（後書き）

感想を待っています。

家族の思い出（前書き）

勘の良い人は楓の過去が見えると思います。

家族の思い出

楓、鈴、シャル、ラウラ、太陽は相変わらず街を歩いていた。

「ん？ 何だろ」

シャルが瓦礫を退かすと見つけたのは写真だった。

「これって、家族写真？」

「そうとしか見えないが」

鈴とラウラがシャルの肩から写真を見ると三人の家族が写っていた。

「瓦礫から、家族写真か」

「家族」

楓が呟くと楓の頭に映像が流れ、窓から外を見ているのと男が近付

少しして落ち着いた楓は気を失い太陽が楓を背負って歩いていた。

「なあ、大丈夫なのか？」

「分からないわよ」

「でも、何処に行くの？」

「すまん。考えてなかった」

四人は同時に溜め息を吐いた。

「けどさあ、楓、どうしていきなり」

「それが分かれば苦勞はしない」

鈴の呟きにラウラが返した。

「このままには出来ないから夜には建物に入りたくないな」

太陽の眩きに全員が頷いた。

「おとう……さん、おかあ……さん」

楓の眩きは誰にも聞こえることはなかった。

終、タクミ、夜明は街に着き食料を集めた後街を歩き回っていた。

「何か、テレビ局や、何かないか？」

「瓦礫で分からないよ」

「退かせば良いだろ」

「簡単に言っな」

三人は同時に溜め息を吐くと終は苛つきが頂点に達したのか瓦礫を蹴り飛ばした。

「だあああああ！ いい加減ムカつくんだよ！！」

「ぶつ飛ばしたああああ！！??？」

飛ばした瓦礫のあつた場所に扉があつた。

「っっあつ、あつた」

三人は啞然としながら扉を開けて建物内に入っていく。

建物内に入った三人は明かりに沿って歩いていた。

「足下だけだと暗いな」

「文句言わないでよ」

「タクミの言う通りだ。文句を言ったて仕方ないだろ」

暫く歩いていると灯りが灯っている部屋を見つけた。

「あれか？」

「そうだよね」

「鬼が出るか、蛇が出るか、どっちかな」

三人が部屋に入ると電子機器が並んでおり終はその一つの椅子に座り機械を操作し始める。

「今度は大丈夫か？」

夜明が心配そうにモニターを見た。前回はモニターにノイズが走り

何も分からなかったためそう言ったが終はそれを否定した。

「今回は大丈夫だ。頑丈なセキュリティがあるが、時間をかければ解けるから待つてろ」

終の言葉にタクミと夜明は頷いた。

夜、鈴、シャル、ラウラ、太陽は気を失った楓を建物内に運び焚き火をしていた。

「で、どうする？」

「暫くは待つてみるか。楓も起きないと行動が制限されるからな」

焚き火をしながら話し合っているとビル全体が揺れた。

「何だ!？」

「外からか!！」

四人が出ると楓が僅かに目を開くとコバルトブルーに瞳が変わって
いた。

四人が建物内から出るとクロスナイトが五機居た。

「またあれか」

「ある意味嫌な相手だ」

そう言いつつ鈴は甲龍、シャルはラファール・リヴァイブ・カスタ
ム、ラウラはシュバルツェア・レーゲン、太陽はバルディッシュユト

ワイライトを展開した。

「とつとと終わらせるぞ」

バルディッシュユトワイライトの装甲がスライドし赤い粒子が出る、モードトランザムになり、ビットが付いた。オールデリート・ハーケンとライオンハート・ザンパーを両手に持ちクロスナイトに向かい鈴は双天牙月、シャルはアサルトライフル、ラウラはプラズマ手刀でクロスナイトに向かうとその内の一機が建物内に入っていく。

「不味い!!! っ!?! 退け!!!」

追おつとする太陽だがクロスナイトが邪魔をしてクロスナイトが建物内へ入っていった。

クロスナイトが建物内を搜索しているとコアの部分を“刀のような物”で貫かれた。

「ふふふ」

クロスナイトは紫電を発しながら機能が停止した。

「さあ、絶望しなさい」

楓の人格から杖に変わりダークムーンを展開し外に向かった。

「ちっ、面倒な相手だ」

太陽が舌打ちをするとクロスナイト四機は右腕の剣を鞭のように使い距離を選ばない戦いをしていた。

「で、どうすんのよ？」

「どうするも何も、厄介だ」

そう言っているとクロスナイトの四機の内、二機の胸部分のコアを撃ち抜かれて機能を停止した。

「何だ!？」

四人が驚くと目の前に黒くなったエターナルムーン、ダークムーンを纏い、髪をツインテールにした、楓が目の前に立っていた。

「か……え……で？」

鈴が呟くと楓、否柎は頭の包帯を取ると瞬間加速で一気に近付キル
シフアーでクロスナイト二機の腰部分を切り裂き機能を停止した。

「楓!!」

四人が近付こうとすると柎はルシフアーを向けた。

「ちよつ!?! いきなり何!!」

「黙りなさいよ。この子を守れない癖に、平気で近付くな」

柎は冷めた目で鈴達を見ると太陽が聞いた。

「お前は、誰だ?」

「私は柎、楓のもう一つの人格よ」

「多重人格、か」

シャルと鈴は驚いた表情で見ていると柎は一つ呟いた。

「まあ、私が出てきたのは、あなた達が家族写真を見つけたからよ」
「何で？」

シャルの問いに椛は暗い表情をして呟いた。

「楓にとって、家族は苦痛の思い出よ。本人は忘れてるけど」
「どうゆう意味だ？」
「教えない」

椛はそう呟いた後気を失い倒れ込むと太陽が受け止めた。

「一体、どうなってるんだ？」

太陽の眩きは夜空に消えた。

「これって!?!」

終がモニターを見ているとあるキーワードを見つけると驚愕の表情を浮かべるとタクミと夜明が近寄った。

「な、何だ!?!」

「どうしたんだ!?!」

タクミと夜明が目を見つっているとモニターのキーワードを見た。

「プロジェクト、ゼロ?」

「何だ? これ」

タクミと夜明が見ていると終の表情が険しくなった。

「何で、何でこのプロジェクトが!?!」

終が言っているとタクミと夜明は終を見ていると終が呟いた。

「何でプロジェクトゼロが」

モニターにはプロジェクトゼロ、又をプロジェクトZと書かれていた。

家族の思い出（後書き）

感想を待っています。

プロジェクトゼロとプロジェクトA（前書き）

投票終了。結果発表は、何時か

プロジェクトゼロとプロジェクトA

「プロジェクト、ゼロ」

終はモニターに写っている言葉を呟いた。

「何だ？ その、プロジェクトゼロって」
「気になるんだけど」

夜明とタクミが言うと終はその重い口を開いた。

「プロジェクトゼロ、俺が“作られた計画”の名前だ」
「！？」

作られた計画という言葉にタクミと夜明は目を見開いた。

「プロジェクトゼロは、優秀な遺伝子を組み合わせ作り出す、そん

な計画だ。その中の、最初の成功体、本当の名をゼロ」
「ゼロ!?!」

終の言ったことにタクミと夜明は驚愕の表情になった。

「更に、その中で俺はより高次の存在にされた」
「どつゆつ事?」

終がタクミと夜明に向き直るとハッキリと言った。

「肉体強化、更に遺伝子もいじられてな。より強くなるために色々されたんだ」

終は遠い目をするモニターに目を向けて装置を操作し始めた。

「何か、話が付いていけないな」
「僕も同じだよ」

タクミと夜明は苦笑いしながら終を見ていた。

ビルの中で太陽とラウラは焚き火を見ていた。

「流石に、眠くなってきた」

「後、三十分だ。我慢しろ」

二人は焚き火が消えないように焚き火番をしていた。

「それにしても、楓に家族の思い出は苦痛ってどうゆう意味だろうな」

「私を知るか。知ってるのは本人か、あの椀って奴だろうな」

ラウラと太陽は眠っている楓を横目で見た。

「んん、やめて、やめて、お願い」

楓は靡されているとラウラは近付き頭を撫でた。

「楓、私が居る。だから泣くなよ」

ラウラがそう言つと楓の目から一筋の涙が流れた。

「だああああ！！！！ 全然分かんねえ。何でプロジェクトゼロが」

終は相変わらずプロジェクトゼロについて調べていた。

「ん？ 何だこれ」

終は別のファイルを開けるとプロジェクトAと書かれたファイルを見つけ閲覧し始めた。

「何だ？ 肉体改造計画？ プロジェクトA、何かヤバそうだ」

終が暫くプロジェクトAについて調べているとタクミが目を開けて終の肩越しにファイルを見た。

「お早う。ヤバそうなの見てるね」
「ああ、それとお早う」

夜明も目を開けて終に近付いてきた。

「何だこれ？　つか何見てんだ？」

「ああ、夜明か、プロジェクトAについてのファイル」

終はモニターから目を離し目頭を押さえた。

「大丈夫か？」

「ああ、徹夜だから二時間位寝れば大丈夫だ」

「て、おい」

終はそのまま眠りについた。

一夏、篤、セシリア、翔太郎、フィリップは缶詰を開けて中身を食べていた。

「久しぶりにまともな飯だ」

「そうだな。久々だな、こうゆう食事は」

「あまり食事と言つ食事をしてませんでしたね」

「それを言つな」

「セシリア・オルコット、それは言つてはいけない」

缶詰を食べ終わると今後の事について話し合い始めた。

「こつからどうすつかだ」

「確かに地球の本棚も期待できないし」

「あの、地球の本棚って」

「フィリップの頭の中には星の全てって言って良いほどの情報が詰まってるんだが」

「何度かやってみたんだが、駄目だった」

全員が同時に溜め息を吐いた。

朝日が昇り始めると鈴とシャルは目を瞑った。

「眩しい」

「朝方まで起きてることないもんね」

鈴は欠伸をし、シャルは伸びをした。

「さて、どうするシャルロット」

「そっだよね。悩むね」

二人が悩んでいると楓が静かに目を開け辺りを見渡した。

「あつ、楓。起きた？」

「お早う」

「お入浴じじいじゃいましゅ」

呂律が回っておらず目も半分開いてる状態だった。

「大丈夫なの？」

「たいしょぶれふ」

「回っていないから」

鈴とシャルは苦笑いをしていた。

「ん？ 起きていたのか？」

ラウラが目を開け辺りを見た。

「朝か、お早う」

「おしゃようこひゃいましゅ」

相変わらず呂律が回っていない楓だった。

「おはよう・・・」

「お、お早う」

「太陽？」

「何か、もの凄く眠そうだな」

ラウラが言った通り現在進行形で太陽は眠そうにしており何時もの凛々しい雰囲気も欠片もなかった。

「うにゃ〜」

今度は楓を見ると猫のように丸くなっていた。

「」「」はあ」「」

三人は同時に溜め息を吐いた。

「ふあゝ、よく寝たつて、あれ？」

終が起きて辺りを見渡すとタクミと夜明の姿が見えず不思議に思っていた。

「あつ、丁度二時間だ」

「本当に二時間で起きたよ」

終が声が出た方向を見るとタクミと夜明がトランプをしていた。

「何でトランプしてんだ？」

「暇だったから」

同時に言うと終は苦笑いをした。

「うん。よく寝ました」

「寝過ぎ」

楓が言うと鈴、シャル、ラウラが同時に言った。

「まあ、そう言っな」

「お前も言えた事じゃないからな」

太陽の言葉にラウラが言った。

「まあ、良いじゃないですか」

「良くないから、特に楓は昨日のこともあるから」

楓が笑顔で言うとシャルが溜め息を吐いた。

「ねえ、太陽」

「何だ？」

鈴が太陽にある事を聞いた。

「あんた、あの私達を襲った無人機について知ってる？」
「知らない。あんなのは見たこともないからな」

鈴が聞くと太陽は悩むように言った。

「お前達は？」

「ごめん。あれは分からない」
「そっか、すまん」

「楓を傷つける奴等は・・・全部消してやる。あの子は私の存在理由だから」

そう呟くと椀は目を開けて不適に笑った。

プロジェクトゼロとプロジェクトA（後書き）

感想を待っています。

衝撃の真実（前書き）

今回、つか何時もヤバイ。

衝撃の真実

「で、何処に行くんだ？」

ふと太陽が眩くと楓、鈴、シャル、ラウラは黙り込んだ。

「あっ、あの」

「何だ？」

「今、人影が見えませんでしたか？」

「……はっ？」「」「」

楓が指さした方向を四人が見るが誰も居なかった。

「ちつよと、見てきます」

「待ちなさいよ！！」

「何でこうなるんだ？」

楓が走つていくと四人も遅れた追い、楓が角を曲がると四人は楓を見失った。

「また、このパターンか」

太陽は溜め息を吐いて楓を別れて探し始めた。

「えっと、あれ？」

楓が後ろを見ると誰も居ないことに気が付いた。

「アハハハ、迷子になりました」

楓が苦笑いして辺りを見ていると後頭部に強い衝撃が走り楓は気を失った。

「ん、んん」

楓が目を開けると薄暗い部屋の中手足を縛られていた。

「一体、何が？」

楓が咳くと扉が開き男が入ってきた。

「あなたは？」

「お前、何が目的だ？」

男は楓の問いに答えず手に持っていた銃を楓に向けた。

「えっ？」

「答える」

男は地面に銃を向けると引き金を引いた。

「ぎゃあ!？」

楓は音に驚き目を瞑った。

「答える。お前等“ロスト”が何をしに来た？」

「ロ……スト？」

男が言ったロストと言う言葉に疑問符を浮かべた。

「とぼけるな。お前がロストの一員だと分かっているんだ」

「ち、違います。間違いです」

楓が涙目で言うと男は再び地面に向かって銃の引き金を引いた。

「そんな嘘は通じないぞ」

「嘘じゃありません。信じて下さい」

楓は震えた声で男に言うと男は楓に向かって銃の引き金を引いた。

「っ!?!」

銃弾は楓の左腕を掠った。

「弾が少ないからな。早く言え」

「し、知りません」

「本当に、知らないんです」
「ちっ」

男は舌打ちをすると楓の腹を思いっきり蹴った。

「うっ!?!」

楓は一度目を見開くと力が抜けたように目を閉じた。

終、タクミ、夜明は建物を出ると終は空を見上げた。

「どうした?」
「いや、何処でも、空が青いな」
「どうしたの? いきなり」

「何でもない。行くぞ」

終が歩き出すとタクミと夜明は終の後を追った。

「何だよこれ」

翔太郎は目の前の惨劇に芋虫を噛んだような顔をした。

「血が固まってる」

「大分時間が経っていますね」

「誰がこんな事を？」

「いくら何でも、酷すぎる」

翔太郎だけではなく一夏、篝、セシリア、フィリップも顔をしかめ

た。

楓、椀一人の手によってなった惨劇とは知らずに見ていた。

「そっちはどうだ!？」

「駄目だ」

「こっちも駄目」

「一体何処に？」

上から太陽、ラウラ、シャル、鈴の順番で言った。

「何処に」

四人は楓を探しているがまるで楓が消えたように手掛かりが掴めず

焦っていた。

「もっと、別の場所を探そう!!」

「ああ、そうするぞ」

四人はまた別れて楓を探し始めた。

「ちっ
」

暗い空間の中、椛は舌打ちをした。

「やっぱり、人間なんて、ぶっ潰してやる!!」

椛は今まで見せたことがないような顔をして言った。

「あの両親と言い。あの屑共と言い。あの男と言い。どいつもこいつも、楓を傷つけるな!!」

椛は暗い空間の中、叫んだ。

楓が目を開けると瞳がコバルトブルーに変わっており人格も椛に変わっていた。

「潰してやる。全部潰してやる」

椛はそう呟くとルシファーを手に出し縄を切り裂いた。

「楓を傷つける奴は許さない」

椛はルシファーで扉を切り裂いた。

「なっ何だ!？」

男が叫ぶと椛はルシファーで男の腰部分を切り裂いた。

「ふふふ、楓以外消してやる」

椛はそう言い建物内から出た。

「ん？ 楓!？」
「何!？」

鈴が楓を見つけると走って近付いていきその後をシャル、ラウラと追うが太陽はあることに気が付いた。

(何で？ ルシファーに血が付いてるんだ?)

桜はルシファーを鈴に向かって突き刺そうとするといち早く気付いたシャルが鈴を突き飛ばし自信も後ろへ飛んだ。

「あゝあ、残念」
「楓？ 何、言ってるの？」
「桜か」

太陽は鋭い目つきで椀を見た。

「正解。流石？」

椀は笑みを浮かべながら四人を見ると太陽がある事を聞いた。

「両親の思い出が楓にとって苦痛とはどうゆう意味だ？」

太陽が聞くと椀はルシファアの刃を見ながら言った。

「そのままの意味よ。分からない？」

椀は指を立てて四人から目を離すと言った。

「それに楓を傷つける奴は全部私が潰す。それに、楓の両親は私が殺したし」

「「「「!?!?」「」「」」

椀の“楓の両親を殺した”と言う言葉に四人全員が目を見開いた。

「虐待って、知ってるわよね」

「まさか」

ラウラが呟くと椀はクスクスッと笑いながら言った。

「そう楓は自分の両親に虐待されてたの」

椀によって衝撃の事実が伝えられた。

衝撃の真実（後書き）

次回、桜によって詳細が明らかに

読んだら感想を下さい。

複雑な心境（前書き）

何となくやばい。

複雑な心境

椛は四人を順に見て口を開いた。

「楓は虐待されてたの。まあ、初めは寂しさを紛らわすためだけに五歳位から虐待が始まった」

四人は黙って椛の話聞いていた。

「初めは外に出して貰えない寂しさから私が生まれたけど後に楓への虐待が始まった」

「外に、出して貰えない？」

ラウラは椛の外に出して貰えないと言う言葉に疑問を持った。

「ええ、楓は全くと言って良い程外に出されなかった。六年前に一度抜け出した時を除いて」

「それで、私が楓に会った時」

楯はダークムーンを展開すると鈴は甲龍、シャルはラファール・リ
ヴアイブ・カスタム、ラウラはシュバルツェア・レーゲン、太陽は
バルディツシュトワイライトを展開した。

「抵抗しないでよ。殺り難いのよ」

楯は笑みを浮かべたままろシファアを四人に向けると鈴は双天牙月、
シャルはアサルトライフル、ラウラは身構え、太陽は両手にオール
デリートとライオンハートを構えた。

「さあ、遊びましょうよ」

左手に持ったゼウスで鈴、シャル、ラウラの三人を撃ちろシファア
で太陽に切り掛かると三人は避け太陽はオールデリートとライオン
ハートを交差さして防いだ。

「やだね。本当に」

「!?!?」

権は太陽にゼウスを向けると鈴が双天牙月で権に切り掛かり権が離れるとシャルが権に向かってアサルトライフルを撃ち権はゼウスを仕舞いポセイドンを回すと防ぎラウラは権に向かって蹴りをしようとすると権はルシファーでラウラの蹴りを防いだ。

「邪魔よ」

権はポセイドンを仕舞いラウラの脚を掴むとラウラに向かってルシファーを振り下ろそうとする。

「させるか!!」

「ちっ!？」

太陽が権に向かってフレリアを権に投げ権はラウラを放し後ろに下がるとラウラは権に向かってレールカノンを撃った。

「やったか？」

太陽が眩くと煙の中から無傷の椛が現れた。

「頑丈だな」

「誉め言葉として貰うわ」

相変わらず椛は笑みを崩さず言つと瞬間^{イケニッション・ブースト}加速で近付く。

「ふっ!!」

「くっ!!」

椛はルシファーを太陽に向かって振るいゼウスを出し鈴とラウラを撃ちシャルの腹に蹴りを入れた。

「きゃあ!?!」

「ちっ!?!」

「うわあ!?!」

太陽はオールデリートとライオンハートでルシファーを受け止めて

るが次第に押され始めた。

「ぐっ、ぐううう!!」

「終わりよ」

椛は太陽に向かってゼウスを向けるが椛は突然意識を失った。

「うお!？」

椛から楓の人格に戻り太陽は慌てて楓を抱えた。

「太陽!？」

「一体どうしたの!？」

「分からない」

「取り合えず治療だ」

「そうだな」

四人は楓を抱えてその場を離れた。

終、タクミ、夜明は廢墟の街を歩いていると終が歩みを止めた。

「どうしたんだ？」

「気になってな」

「何が？」

終は振り返ると走り出した。

「おい！？」

「一体何なのさあ！？」

慌てて二人も終の後を追った。

ラウラは楓の左腕に包帯を巻いていると鈴が呟いた。

「何かさあ、複雑だよね」

鈴の呟きに全員が黙り込んだ。

「私にあったのが、虐待から逃げたのって、複雑だよ」

鈴は泣き出し始めた。

「……鈴」

「だってさあ、会ったのが、会ったのが楓が虐待から逃げる時に会

「だから忘れるもの当然だよ」

鈴は泣きながら言った。

「けど、思い出したんでしょ。だったら楓にとって、鈴は大事な人なんだよ」

シャルも涙目になりながら鈴に語りかけた。

「そうだ。忘れてたのにお前の事を思い出したのはお前が大切だったからだよ」
「ラウラ」

ラウラも微笑みながら鈴の肩を叩いた。

「自信を持て。お前が大切だったから思い出したんだ」
「太陽」

太陽も鈴に近付き励ました。

「みんな、有り難う」

鈴は涙目のまま三人に礼を言った。

終は装置を操作し何かをしていた。

「何やってんだ？」

「さあ、僕が知りたい」

夜明とタクミは終の行動に疑問符を浮かべていた。

「おい。ちょっと来てみる」

終が二人を呼ぶとモニターには“ロスト”と言う文字が写っていた。

「ロスト？」

「何だこれ？」

タクミと夜明が疑問思うと終が話し始めた。

「ロスト、何かの組織なんだが、全く不明な点が多いんだ」

「それ、組織なの？」

「確かに、そう思うな」

終が説明するとタクミが疑問に思い夜明が言った。

「更に言うと、ロストがプロジェクトゼロ、プロジェクトAを計画

した」

「成る程。思ったんだが、お前の世界にプロジェクトAはあるのか？」

「ない」

夜明が終に聞くと終は即答した。

「ない？」

「プロジェクトゼロならあるが、プロジェクトAはない」

終は険しい表情のままモニターを見ていた。

「ん、んん」

楓が目を開けると目の前に鈴の顔があった。

「あっ／＼／＼ おっお早う？」

「何で、疑問系なんですか？」

楓は体を起こしながら言った。

「大丈夫？ その、例えば左腕」

「えっ？ あっ、大丈夫です」

鈴に言われて楓は左腕を確認し微笑みながら答えた。

「良かった」

鈴は楓を見て安心したように呟いた。

「鈴さん？」

「本当に良かった」

鈴はそのまま楓に抱き付き鈴は啜り泣いていた。

「ロストについては、あまり良い情報がなかったな」

終達は一通りロストについて調べたが有力な情報はなくその場を離れた。

「でも、何で急に調べよと思ったの？」

「ああ、俺も不思議に思ってた」

タクミと夜明が言うと終は不適な笑みを浮かべながら言った。

「何となくだ」

そう言うとまた歩み始めた。

複雑な心境（後書き）

感想を待っています。

ファーストとセカンド(前書き)

オリキャラまた登場

ファーストとセカンド

楓が目を覚ました頃、シャル、ラウラ、太陽は街を歩いていた。

「ねえ、太陽、柊は何で僕等を殺そうとするのかな？」

シャルが言うと太陽は少し考えた後、言った。

「推測だが、楓自身が一人になる事を恐れてる」
「本当か？」

ラウラが聞くと太陽は頷き続けた。

「単独行動をした後は私達によく私達と居ようとする」
「確かに、そうだよね」

太陽が言った後、シャルが頷いた。

「だから、お前達を殺した後、楓は孤独を埋めようとする。椛は自分を楓の孤独を埋める道具にするつもりだろ」

「自分を？」

「私はあいつじゃないから分からないがな」

太陽が歩み始めるとシャルとラウラは太陽を追った。

「楓を何にも繋がりが無い奴らには渡さない」

椛は黒い空間の中、ひっそりと呟いた。

「何にも繋がりが無いのに、楓と繋がりがあつたようにしないでよ」

椛は無表情になった後、笑みを浮かべた。

「ふふふ、楓、あなたは一人になれないからだから安心してね」

椛は手を広げて上を向くと目を瞑り呟いた。

「楓が人間じゃなかったら、私は遠慮なく出来たのに」

椛は溜め息を吐きながら言った。

終、タクミ、夜明は廃墟を出た後、終はずっと黙り込んでいた。

「なあ、何でずっと黙ってたんだ？」

「あつ？ 悪い。ちよっとした考え事だ」

「考え事って、ロストの事？」

「正解」

終は歩みを止めると二人に話した。

「この世界を知るには、ロストについて知ってることを纏めてみるぞ」

終は指を四本立てた。

「ロストは四つの部隊で出来てる。低い順からクローバー、ダイヤ、ハート、スペード、更に最上級の階級、ジョーカーだ」

終は説明をするとタクミが言った。

「更に言うと、謎だらけの組織」

タクミが言うとタクミは夜明を見て夜明が言った。

「更に、プロジェクトA、プロジェクトゼロを確立したのがロスト。こんぐらいだな」

夜明が言うと全員が頭を抱えた。

「全然分かんねえな」

全員が溜め息を吐くと空を見上げた。

楓は鈴と共に廃墟を歩いていった。

「あつ、シャルさん！ ラウラさん！ 太陽さん！」
「「「楓！？」「」」

三人が振り返ると楓が走ってきた。

「大丈夫なの？」
「はい。大丈夫ですよ」
「なら、良かったが」
「心配をかけすぎだ」

三人は楓の姿を見ると微笑み鈴がつまらなそうな目をして歩いてきた。

「楽しそうよね」
「えっ？ えっと、鈴さん」
「ああ、楽しいぞ」
「うん。楽しい」

「ラウラさん。シャルさん。何を言ってるんですか？」

楓が呟くと鈴の表情が無表情になり二人に言った。

「何が言いたい？ 自慢？」

「「自慢」「

鈴は右腕に装甲を展開し二人に向かおうとした。

「ぶっ飛ばすっ！！」

「待って下さい鈴さん！ ストップです！！」

楓が鈴を羽交い締めにし太陽はそんな光景を見て溜め息を吐いて
た。

ベルガは装置を操作しながらモニターを見ていた。

「おいベルガ。何を見てるんだ？」

「ウエルナ嬢か？ 興味深かったからね。つい調べ込んでしまったよ」

ベルガはアリスに目を向けずに言った。

「はあ、私は無視か？」

「それにしても面白い」

アリスはベルガの肩越しからモニターを見た。

「何だこれ？」

「音梨嬢のデータさ。まあ、見て分かるように彼女は

人間もどきだ」

「人間もどき、か」

ベルガの言葉をアリスは返すとその場を離れた。

「本当に、可哀想だな。人間もどきと知らずにいるとは」

部屋にはベルガの笑い声が響いた。

一夏、箒、セシリア、翔太郎、フィリップはリボルギャリーの中話

していた。

「そろそろ誰かに合流したいな」

「まあ、いい加減合流してもおかしくないな」

一夏が言つとフィリップも言った。

「でも何処にいるんだろうな？」

「分かったら苦労しませんわ」「そうだな」

翔太郎が言った後、セシリア、箒の順番で言った。

「本当に何処だろ」

一夏は上を見ながら呟いた。

終達が歩いていると目の前に少年が立ち止まった。

「なっ!?!」

「嘘だろ」

「・・・」

目の前に居たのは終を幼くした感じの少年だった。

「初めまして。僕はファースト」

少年、ファーストは表情を変えずに言った。

「成る程、プロジェクトゼロの、か」

「正解。碎け、バーストブレイド」

ファーストはIS、バーストブレイドを展開すると終はブラックフ
アングを展開すると夜明もレイジングウィングを展開しタクミもフ
アイズに変身した。

「行くよ」

「来いよ」

ファーストは大剣、終はハデス、夜明がウィングスター、ファイズ
がファイズエッチを構えると一気に駆け出した。

楓達が歩いていると上から人が降りてきた。

「終か？」

ラウラが見たのは終にそっくりの少年だった。

「違う。俺はセカンド。宜しくな」

少年、セカンドは不適な笑みを浮かべて楓達を見ると真面目な表情になった。

「潰せ、ブラストクロウ」

セカンドがIS、ブラストクロウを展開すると両手にマシンガンを持つと楓はエターナルムーン、鈴は甲龍、シャルはラファール・リヴァイブ・カスタム？、ラウラがシュバルツエア・レーゲン、太陽がバルディッシュトワイライトを展開するとセカンドは五人に向かってマシンガンを撃った。

二つの場所で同時に戦いが始まった。

椛は目を瞑りながら膝を抱えていた。

「何時でも行けるからね。楓」

椛が目を開けるとより一層、瞳がコバルトブルーに輝いた。

ファーストとセカンド（後書き）

感想を待っています。

戦いの後（前書き）

何時も思う。読者の方は楓と終、どっちが主人公に見えますか？

この小説の主人公、楓なんだけどなあ

戦いの後

「ちっ」

「ふっ」

終が舌打ちをするとファーストは大剣を片手で振るい終が後ろに避けると夜明はウィングスターで撃つがファーストは大剣で防ぎファイズがファイズエッジで切りかかるがファーストは体を捻り避けた。

「やるな」

「誉め言葉として貰う」

ファーストはそう言うで大剣を終に振り下ろすと終はハデスで防ぐとファーストを抑えた。

「!?!」

「タクミ! 夜明!」

「任せろ!!!」

夜明がウィングスターでファーストを後ろから撃ち終が放すとファイズはファイズフォンのエンターキーを押した。

【エクシードチャージ】

ファイズエッジにエネルギーが行くと切りかかる、スパークルカットをファーストに向かって放った。

「やったか？」

スパークルカットがファーストに直撃する直前に終はファーストを放し離れると見ているとファーストは大剣を回しながら無傷の状態で出てきた。

「マジかよ」

「最悪だね」

「無駄口を叩くな」

終は再びファーストに目を向けるとハデスを仕舞いオルトロスを逆手に握り三人はファーストに向かっていく。

セカンドは笑みを浮かべながらマシンガンを五人を撃ちラウラはAICを発動しマシンガンの弾を止めると楓は上からセカンドに向かってルシファーを振り下ろすとセカンドはマシンガンを交差して止めて楓の腹を蹴り飛ばすと鈴が双天牙月、太陽がオールデリートとライオンハートをセカンドに向かって降り下ろすとセカンドは後ろに下がりシャルが後ろからセカンドに向かってアサルトライフルを撃つとセカンドもAICを発動した。

「何!？」

「残念だったな」

セカンドのIS、ブラストクロウの装甲がスライドし機関銃が覗き一斉に放った。

「逃げないと蜂の巣になるぜ」

鈴、シャル、太陽の前にラウラが立ちAICを発動すると楓が後ろからセカンドにルシファーを振り下ろそうとするがセカンドは楓の頭を掴んだ。

「うわあ!?!」

「舐めんな」

セカンドは手に力を入れていくと楓は振り放そうとする。

「うっ、あああああああ」

「」「」「楓!」「」「」

「潰れる」

セカンドが笑みを浮かべていると楓は頭を握っているセカンドの腕を持つとセカンドの腕は音を立てて折れた。

「ぐわあああああああ！？」

セカンドは叫び声を上げながら機関銃を撃つのをやめて地面をのたうち回り始めた。

「てめえ！！」

「うるさい。目障りよ」

楓の目がコバルトブルーに変わり人格も椀に変わると椀はルシファーをセカンドに向かって振り下ろすとセカンドは地面を回りながらルシファーを避けるとセカンドの居た場所にルシファーが来ると地面が砕けた。

「逃げないでよ。殺りづらい」

椀は無表情のままセカンドに向かっていくとセカンドは椀の横腹を蹴り飛ばした。

「潰れやがれ!!」

セカンドは機関銃を椀に向けて一斉放射し椀が居た場所に煙が立った。

「やめる!!」

太陽がライオンハートをセカンドに向かって振り下ろそうとするがセカンドは片手でマシンガンを撃ち太陽は慌てて避けると機関銃が止まり煙が晴れると穴だらけの建物の壁があった。

「はっ、微塵になって消えたか」

セカンドが笑みを浮かべているとセカンドは後ろから蹴り飛ばされて壁に激突した。

「あんたアホ？ 気を抜いてるなら死にたいのよね」

煙が晴れると頭から血を流したセカンドが出てきた。

「糞、アマ」

「ふっん、なら消えなさい」

椀は左手にゼウスを持ちセカンドに向かって撃つと何者かがセカンドを抱えて離れると椀は横目で見ると終に似た、金髪の少年が居た。

「大丈夫か？ セカンド」

「サードか、別に」

セカンドは金髪の少年、サードから目を離すとサードはセカンドの頭を撫でると椀達を見た。

「セカンドが失礼しました。私はサード、以後お見知り置きを」

サイドは椀達に礼儀正しく頭を下げた。

「なら、消えてくれない？」

椀がゼウスをサイドに向けるとサイドは椀達に背中を向けた。

「今回はセカンドを連れ帰ること。それだけですから」

サイドはセカンドを抱えてその場を離れると椀は追おうとするが太陽に腕を掴まれた。

「邪魔よ」

「悪いな。行かせないぞ」

太陽が椀を見ていると椀は目を閉じて太陽に向かって倒れ込んだ。

「おっと、またか」

太陽は気を失った椀、楓を抱えると地面にそつと楓を寝かせた。

「太陽、楓は？」

「大丈夫だろうな」

鈴、シャル、ラウラ、太陽は静かに眠っている楓を心配そうに見つめた。

終はオルトロスを高速で振るいファーストは大剣でオルトロスをずつと防いでいた。

「・・・」

ファーストは終達から距離を取った。

「何だ？」

「帰還ですから。またの機会に」

「あつ、待って!!」

ファーストを追おうとしたファイズを終が制止した。

「終？」

「やめとけ」

終はブラックファングを解除するとまた歩み始め夜明もレイジングウイングを解除しファイズも変身を解き終の後を追った。

「最近はここで会うこと、少ないわよね。楓」
「そう、ですね」

黒い空間の中楓と椀はお互いを見ていた。

「久しぶりで嬉しいけど、早く起きた方が良いわよ」
「あの、お礼が言いたくて」
「お礼？」
「はい」

暫くした後楓を椀を見て言った。

「居てくれて、有り難う御座います」

楓はそれだけ言うと段々と透けていき椀の前から消えると椀は静かに涙を流していた。

「有り難うか。こちらこそ、有り難う」

椀は静かに微笑んだ。

「だから、目的は絶対に果たす」

椀の目は真っ直ぐ前を向いていた。

戦いの後（後書き）

感想を待っています。

人気投票結果発表（前書き）

人気投票の結果発表、皆様、ご協力有り難う御座いました！！
位は、あいつが！！
—

人気投票結果発表

終「さあ、人気投票結果発表だ」

一夏「まあ、少ないけどな」

篤「あまり、知られてもなかったからな」

ファースト「早く始めろ」

セカンド「待ってたんだ」

ラウラ「何でいるんだ？」

サード「いや、出番が少なそうだからね」

鈴「ノリノリね」

シャル「テンションが高いよね」

フェルナ「だから早く始めるよ」

エナル「待ってるんだけど」

アリス「五位から発表だ」

全「」「鬼進行だ!!」「」

アリス「さあ、五位は、こいつだ」

フェルナ「今の所現最強の墮天使、椛!!」

椛「へえ、けど五位ね」

終「因みに票数は一票」

シャル「あれ？ じゃあ」

セシリア「残りは」

ラウラ「0か？」

終「ああ、そう言うことだ」

エナル「次は四位」

フェルナ「白き原作主人公、織斑一夏！！」

一夏「俺か！？」

箒「良かったな一夏！！」

終「一夏は二票だったけどな」

ファースト「どうでも良いから三位」

セカンド「さっさとやるぞ」

サード「三位は青き狙撃主、セシリア・オルコット!」

セシリア「良かったですわ」

箒「納得できない」

全「「はっ?」「」

箒「たかがサブキャラが、一夏より上だと!? 何を考えているんだ!」

セシリア「サブキャラ!」

終「次行くぜ」

全「「おい!」「」

終「次は二位」

アリス「二位は十票だ」

全「「一気に増えた!?!?!」

ファースト「三位は銀色の天使、この小説の主人公の」

フェルナ「音梨楓!?!」

楓「わ、私ですか!?!」

一夏「良かったな!?!」

篤「いや待て、一位は誰だ?」

サード「発表しましょうよ」

セカンド「一位は、作られた存在、銀髪、赤目」

ラウラ「私か!？」

鈴「マジ!？」

シャル「嘘だ!!」

アリス「黒き牙、黒谷終!!」

ラウラ「そっちか!？」

終「俺か、まさかな」

サード「今の心境は?」

終「まさか、一位とは思わなかったな」

楓「おめでとう御座います、終さん!!」

終「今回は本編だ」

全「お楽しみに!!」

ベルガ「私、オリキャラなのに、忘れられてないか？」

次回をお楽しみに!!

ベルガ「なあ、作者、どうなんだ？」

疑問ですが、皆さんは楓と終、どっちが主人公に見えますか？

ベルガ「無視するなよ!？」

椛「最後の最後で目立つなモブキャラが」

ベルガ「ぐうへえ!？」

人気投票結果発表（後書き）

感想を待っています。

暴走する月（前書き）

意味が分からなくなり続けてるかも？

暴走する月

楓は太陽に背負わされており太陽の後ろを鈴、シャル、ラウラの順で歩いていった。

「なあ、私が変わろうか？」

ラウラが太陽に羨ましそうな目をしながら言った。

「いや、何が危なそうだ……主に楓が、お前等二人もだぞ」
「「ギク!？」」

太陽は三人に不審者を見る目で言うと三人は冷や汗をかいていた。

「たい、よう……さん？」
「起きたか」

楓が目を開けたのを確認すると太陽は楓を降ろした。

「大丈夫か？」

「今の所は大丈夫です」

太陽は楓の頭を乱暴に撫でた。

「うにゃ!？」

「我慢するなよ」

太陽はそう言つと歩き楓達も後を追った。

一夏達はリボルギヤリーに乗って移動していて一夏と箒は寄り添いながら眠っていた。

「翔太郎、僕は彼等の行動に腹が立つよ」

フィリップは恐竜のようなメモリ、ファンゲメモリを持ち翔太郎に言った。

「子供かよ」

翔太郎はフィリップを呆れた目で見た。

「呆れますわ」

セシリアはスターライトmk?をフィリップに向けていた。

「すまない。僕に向けなくてくれ頼む」

「引き金を引かせて下さい」

「やめろ、フィリップの頭が吹き飛ぶ」

「怖いことを言わないでくれ翔太郎」

フィリップは翔太郎に言うとセシリアはスターライトmk?を仕舞った。

「ふあゝ、眠くなってきた」

「子供かよ」

あくびをする終にタクミと夜明は呆れた目で見ながら言った。

「取り合えず、まだ歩くぜ」

終は先に行くと二人は溜め息を吐きながら後を追った。

楓達はまた廃墟に來ると太陽は溜め息を吐いた。

「流石に期待できないぞ」

太陽の言葉に鈴、ラウラは頷き楓とシャルは苦笑いをしていた。

「けど、困まれてませんか？」

辺りを見渡すとISを展開した女性達に困まれていた。

「何でこうなる」
「私を知るか」

溜め息を吐きながらISを展開する楓達、次の瞬間一人が銃の引き金を引き楓達が避けると壁に針が刺さった。

「針？」

「毒針だ」

鈴が疑問符を浮かべると女性の一人が言った。

「マジ？」

「抹殺する」

女性達は銃を撃つと楓達は避ける。

「後ろが空いているぞ？」

楓の後ろに女性の一人が銃を構えていた。

(間に、合わない)

楓は目を瞑るが何も来ないことに不思議に思っ
て目を開けると目の前にシャルが居た。

「シャル、さん？」

「良かった。楓が、無事で」

シャルが倒れそうになったのを楓が受け止めるとシャルの背中に針が刺さっていた。

「何、で？」

「えへへ、失敗、しちゃった」

シャルは苦笑いするが楓は目の焦点が合わず何かを呟いていた。

「私の、所為？」

「違う、よ」

「シャルロット！？ 無事か！！」

ラウラが近くに来るとシャルを抱えて楓を見ると楓は下を向いていた。

「楓？」

ラウラが楓の名前を言っが楓は何も答えずにいるとラウラの目の前から消えた。

「消えた！？」

「ギヤアアアアアア！？」

ラウラは叫び声が聞こえた方を見ると切り裂かれた女性とそれを踏みつけてる楓が居た。エターナルムーンは何時もと違い血のように赤く染まりブラッドムーンに変わっていた。

女性の一人が逃げると楓はゼウスを女性に向けて引き金を引くとエ
ネルギー弾は女性を跡形もなく消し去った。

「ああ、ああ」

楓に女性達は向かっていくがある者はルシファーで切られ、ある者
は首を折られ、ある者はゼウスの弾で胸に穴を開けられた。

「これって」

「地獄絵だ」

楓は一人残った女性を見ると女性は命乞いを始めた。

「お願い助けて！！ 解毒剤あげるから助けて！！」

女性は緑色の液体が入ったカプセルを差し出すが楓は容赦なく女性

の首を切った。

「なっ!?!」

「嘘、だよな」

啞然としている二人にラウラが近付いた。

「解毒剤はない、のか?」

ラウラも楓を見てみると三人と楓の目があった。

「ああ、アアアア!?!」

「!?!?!?!」

楓は雄叫びを上げながら三人に近付くと太陽はすぐに離れて液体が入ったカプセルを持った。

「ラウラ!!」

「何だ!?!」

「私達で食い止めるぞ!!」

「私は!?!」

鈴が言うと太陽はカプセルを鈴に渡し鈴はその場を離れ楓は太陽に向かってルシファーを振り下ろすと太陽はオールデリートとライオンハートで受け止めた。

「目を覚ませ!!」

ラウラが楓を後ろから羽交い締めにするが楓は振り解きラウラをルシファーで切りつけた。

「ラウラ!?! いい加減にしろ!!」

太陽は力を込めて楓の腹を殴ると楓は建物の壁に激突した。

「やりすぎだろー!!」
「すまん」

ラウラが太陽に言っていると瓦礫の中からISを解除した楓が出てきた。

「私、何を？」
「楓!!」

ラウラが楓に近付くと楓はラウラの傷を見た。

「えっ？ ラウラさん、傷」
「ん？ ああ、掠り傷だ」

ラウラは微笑みながら言っていると楓はもう動かない女性に目を向けた。

「あれ、もしかして、私が？」
「・・・」

ラウラが俯くと楓は頭を抱えた。

「私が、私が殺した。私が」

「楓？」

「どうした？」

ラウラと太陽が楓を見ると楓は涙を流していた。

「ああ、アアアアア!!!」

楓は泣き叫んだ。

暴走する月（後書き）

感想を待っています。

対決、ベルガ・フルット(前書き)

凄いことになった!?

対決、ベルガ・フルツト

「あんだ、本当に大丈夫？」

「ああ、掠り傷だ」

「全く見えないが」

怪我したラウラに鈴が応急処置を行っていた。

「シャルは大丈夫か？」

「少し寝れば大丈夫よ。それより楓は？」

「一緒に筈だが」

ラウラが後ろを振り向くと顔が青くなり鈴と太陽も後ろを向くと楓の姿がなかった。

「あれ？」

ラウラの顔はひきつっていた。

楓は暗い顔をして街から離れていた。

（嫌われた。絶対、嫌われた。だって、傷つけた。私がラウラさんを、傷つけた）

楓が思考に浸っていると突然頭痛が楓を襲った。

「ぐっ!？」

楓は頭を押さえてうずくまると暫くして顔を上げた。

「一体、何が？」

楓は立ち上がるとまた歩みだした。自分の目が赤に変わってることも知らずに

終、タクミ、夜明は研究所の前に立っていた。

「こじって」

「研究所だな」

タクミと夜明が話し合っていると終は研究所の扉を蹴り飛ばした。

「何やってるの!?!」

慌てるタクミに終は一言、言った。

「さっさと行くぞ」

そう言うと終は研究所に入っていくタクミと夜明は顔を見合わせた後終の後を追った。

終、タクミ、夜明は研究所の廊下を歩いていると部屋に着き部屋にはベルガが居た。

「おや？ 客か」

「誰だてめえ」

夜明がベルガに言うとベルガは三人に向き直り言った。

「私はベルガ・フルット。君達は、いややめとこつ」
「何？」

終が身構えるとベルガは笑みを浮かべてISを展開した。

「死に行く者の名前を聞く程、暇ではない。行くぞ、ダークスパイダー」

ベルガはIS、ダークスパイダーに付いてる八本の銃口を三人に向けてと終はブラックファング、夜明はレイジングウィングを展開しタクミはファイズに変身した。

「さあ、始めようか？」
「そうだな。一気に行くぞ」

終はオルトロスを逆手に持ち、夜明はスターライザーを持ち、ファ

イズはファイズエッジを持った。

「では、行くよ」

ベルガは三人に向かってグレネードを放つと終はオルトロスで弾を切り裂いた。

「舐めんなよ？ 爺」

「君もか、ブルータス」

「何でブルータス？」

「知るか」

終が爺と言うとベルガはブルータスと言いファイズがツツコミを入れた。

楓は一人歩いていた。

「何処に、行けばいいんだろ？」

楓は虚ろな目で歩みを進めていると小さな街が見えた。

「・・・」

楓は誘われるように街の中へ入っていった。

「・・・」

楓は建物越しからある光景を見ていた。

「ギヤアアアアアア！？」

「うわああああああ！！！」

街の人間がクロスナイトと女性達が纏ってるIS、ポイズンガンナ
ーで虐殺していた。

「・・・」

ある者はクロスナイトの剣で切り裂かれ、またある者はポイズンガ
ンナーからの放たれた銃弾によって頭や胸を撃ち抜かれて辺りには
血の臭いが立ちこめた。

「帰還する」

女性の一人が言うと女性達とクロスナイトが去っていくと楓は虚ろ
な目のまま死体達に近付いていき子供の死体を見ると楓は目を見開
いた。

「何、やってたの？ 私、この人達を、見殺しにした？ 私が、私
が、殺した。私が殺したんだ」

ベルガはダークスパイダーの足の一本を終に向けると変身を解かれたタクミと夜明が目を見開いた。

「終!!」

「逃げろお!!」

「畜生」

タクミは立ち上がるとその姿を徐々に変えていく。

「タクミ!?!」

夜明が叫ぶとタクミの姿は灰色の狼、ウルフオルフェノクに変わり終を抱えて脚力を生かして離れた。

「タクミ、お前」

「黙ってて、ごめん。言うに言えなかったんだ」

ベルガは不適な笑みを浮かべた。

「ほう、怪物か、面白いね」

ベルガが笑っているとベルガの横が吹き飛んだ。

「何だね？」

ベルガが見ると終がケルベロスを構えており終はベルガに言った。

「ふざけんな。誰が化け物だ！？ タクミは化け物じゃねえ！！
尾上タクミって言う一人の人間だ！！」

「人間？ 何を言う、怪物ではないか」

「違う！！」

今度は夜明が叫んだ。

「人間と思えば、人間だ!!!」

夜明が言つと終、タクミと夜明自身も立ち上がった。

「一体、何処にそんな力が!?!」

「人間の力は、思いだ!!!」

終が叫ぶとタクミはファイズに変身して腕時計型の機軸、ファイズアクセルからミッションメモリを抜きファイズフォンに付けた。

【コンプリート】

ファイズは赤い線が銀に変わり、装甲が動き、ファイズアクセルに変わりスイッチを押した。

【スタートアップ】

ファイズアクセルは目に見えない速度でベルガに向かい終はケルベロス、夜明はウィングスターでベルガを撃った後ファイズアクセルが連続で攻撃した。

【3・・・2・・・1、タイムアウト】

ファイズに戻るとベルガを見るとダークスパイダーが砕けたが無傷の状態で居た。

「嘘!?!」

「悪いが時間だ」

ベルガはスイッチを押すと研究所が揺れ始めた。

「まさか!?!? ベルガ・フルット!?!」

終が見ると既にベルガは居らず終、ファイズ、夜明は研究所を脱出

した。

対決、ヘルガ・フルット（後書き）

感想を待っています。

謎、深まる（前書き）

短い。本当に短い。

謎、深まる

「危うく、爆死するところだった」

終は瓦礫と化した研究所を見ながら言った。

「爆死はしたくないからな」

「確かにね」

タクミと夜明も苦笑いしながら言っていると立ち上がり歩き出した。

楓は街から歩いて水辺に付くと水面に近付いた。

「・・・」

楓は水辺に静かに近付くと顔を洗い始めた。

「!? 何、これ？」

楓が水面を見ると目が赤くなった自分の顔だった。

「何で、赤くなってるの？」

楓は目を見開いて顔を見ていた。

「!?」

楓は後頭部を掴まれ顔を水の中に入れられた。

「ゴボ!? ガバ!? (駄目、息が・・・)」

楓の抵抗する力が弱まり目を瞑るとまた目を開けるとコバルトブルーに変わっていた。

「ん!!」

「うわぁ!?!」

人格が椀になると後頭部を掴んでる手を掴み前に投げた。

「一体何?」

「ちっ!?!」

男は懐からナイフを取り出すと椀を刺そうとするが

「がっ!?!」

男が胸の辺りを見ると椀が左手に持っているポセイドンが突き刺さっていた。

「面倒なのよ。あなたみたいなの」

椀はポセイドンを横に動かすと男は血を流しながら水辺に倒れ込んだ。

「本当に疎かよねッ!？」

椀は頭を押さえると膝を付いた。

「一体、何が!？」

椀はそこまで言つと気を失い倒れた。

鈴、シャル、ラウラ、太陽は必死に楓を探していた。

「そつちに居た!？」

「ううん。そつちは？」

「駄目だ」

「一体何処に？」

四人はまた楓を捜すために走り出した。

その夜、楓の顔に水が掛かると楓は静かに目を開いた。

「一体、何が？ ひい！？」

楓が辺りを確認すると目の前に男の死体がありそれを見た楓は後ろに下がった。

「な、何で？ 何で？」

楓は頭を抱えた。

「！？ ゴホ！ ゴホ！」

楓は胸を押さえて苦しそうに咳きをした。

「何で、苦しい」

楓は胸を押さえながらうつずくまった。

「カハツ!？」

楓は目を見開くと倒れ込んで冷や汗をかきながら空に手を伸ばすが途中で気を失った。

一夏達はリボルギャリーを降りて屋敷の前にいた。

「何だ？ この屋敷」

「一応、調べてみる価値はある」

「で、どうするんだ？」

「入るしかないだろ」

「ええ、気を付けないといけませんね」

「夏達は屋敷の中へ入っていった。」

謎、深まる（後書き）

感想を待っています。

月明かり（前書き）

タイトル、意味が分からない。

月明かり

一夏、箒、セシリア、翔太郎、フィリップは屋敷の中を歩いているとピアノの音が聞こえた。

「ピアノ？」

「はっ！？ まさか」

ここからは箒の妄想です。

箒は静かなピアノの音を聞きながら赤いウェディングドレスを着てバージンロードを歩いていた。

「一夏」

「綺麗だぞ。箒」

彼女の目の前には白いスーツを着た一夏、神父の格好をした終が待っていた。

「さあ、始めるか」

祝いの席を見るのはセシリア、鈴、シャル、ラウラ、楓、IS学園のクラスメート、千冬が居た。

「お幸せに。 篝さん」

「ああ、有り難う」

楓が笑顔で言うと篝も笑顔で返すと終が式を進め最後

「では、誓いのキスを」

終がそう言つと一夏と箒はお互いに見つめ合った後、ゆっくりと唇を付けた。

(一夏／＼／)

箒は顔を赤くしながら幸せな顔をしていた。

「なあ、フィリップ」

「翔太郎、見てはいけない。絶対」

「箒さん。場所を考えて下さい」

「箒／＼／」

一夏は顔を赤くし他のメンバーは呆れていた。

「えっ？ あれ、何故一夏以外、引いているんだ？」

箒が気付いたときには一夏以外が箒から離れていた。

「行こう。この二人は置いて」

「ええ、行きましょう」

「ああ、悪い」

セシリア、翔太郎、フィリップは歩いていくと一夏と箒も後を追った。

エナルは静かにピアノを引いていた。

「はあ、安物じゃ、駄目ね」

エナルはそう言いながらピアノから離れると扉から一夏、箒、セシリア、翔太郎、フィリップが部屋に入ってきた。

「あら？ お客さん。ごめんなさいね、来客の予定はないの」
「いや、実は」

一夏が言う前にエナルは一夏にアサルトライフルを撃った。

「アブねえ!?!」

一夏に弾が当たる前にファングメモリが防いだ。

「何するんだ!?!」
「別に、やるわよ」

エナルが構えると一夏達も構えた。

「フォービドウン」

エナルはIS、フォービドウンを展開すると一夏は白式、箒は紅椿、セシリアはブルー・ティアーズ、翔太郎はダブルドライバーを腰に付けるとフィリップの腰にも現れると翔太郎はジョーカーメモリ、フィリップはファンゲメモリを構えた。

「変身！！」

翔太郎がジョーカーメモリを入れるとフィリップのダブルドライバーに現れ深く入れファンゲメモリも入れてスロットを倒した。

【ファンゲ！】 【ジョーカー！】

フィリップの体がダブルが攻撃的な姿に変わったダブルファンゲジョーカー（以後ダブルF）へ変身した。

「来い」

エナルはヴァジュラを構えて一夏は雪片、箒は雨月と空裂、セシリ
アはスターライトmk?を構えダブルFJも身構えた。

「うう、ん、私、確か」

楓は起き上がると水辺の流れに沿って歩き出した。

「何処に、行けば、良いんだろ？」

楓は歩きながら月を見ると赤く輝き楓の目もより一層赤く輝きだした。

「うおおおおおおお！！」

一夏は雪片をエナルに振るいエナルはヴァジュラで受け止めた。

「行くよ。翔太郎」

『ああ！！』

フィリップの意識を「」、翔太郎の意識を『』で表します。

「うおおおおおおお！！」

フィリップは野生的な動きでエナルに向かるとエナルはヴァジユラで受け流しセシリアがスターライトmk?でエナルを撃つとエナルは後ろに行きアサルトライフルを構えるが箒は雨月と空裂でエナルを攻撃した。

「ちっ」

エナルが舌打ちをするとダブルFJはファンゲメモリ部分の突起物を一回弾いた。

【アームファンゲ！】

ダブルFJの腕から牙のような物が出るとエナルに走っていきエナルは上に行くとダブルFJはエナルの脚を掴み動きが止まると一夏が雪羅のエネルギー爪を振るうがエナルは弾くとダブルFJを振り落とし一夏達を見た。

「はあ、私はエナル・ウォンレット。覚えておいてよ。ニッ、爆破するから」

「「「へっ!?!?」「」」

エナルがスイッチを押すと屋敷全体が揺れ始めて一夏は翔太郎を抱えて全員屋敷を出るために出口を目指した。

「うわぁ、跡形もないや」

一夏は苦笑いしながら屋敷の残骸を見ていた。

「危うく爆死するところだった」

「爆死はやだからね」

「良かった。間に合って」

「爆死したら、笑えませんか」

全員疲れた表情で呟いた。

楓は湖の周りの木に座っていた。

「何処に行けば、良いんだろ？」

「だったら地獄に堕ちろ」

「えっ？　ングー！？」

楓が後ろを振り向く前に口を塞がれると湖に投げ込まれた。

（また、何処が、上？　ああ、息が、出来ない）

水の中から楓は月明かりに手を伸ばしたが流れに身を任せて意識を失った。

月明かり（後書き）

感想を待っています。

二重の月（前書き）

楓に変化が到来。

二重の月

楓は流された後近くの岸に倒れていた。

「・・・ゴホッ！　ゴホッ！」

楓は肺に溜まった水を吐いた後起き上がり辺りを見渡した。

「じじは、一体」

楓は近くに建物を見つけると建物目指して歩き始めた。

終、タクミ、夜明は焚き火をしながら地面に寝そべっていた。

「なあ、タクミ、夜明」

「何だ？」

「どうしたの？」

終が二人を呼ぶと終はこう言った。

「星って、何で光ってるか知ってるか？」

「「はっ？」」

突然のことにタクミと夜明は啞然としたが終は続けた。

「星の一つ一つが世界で、光ってるのは心なんだってよ」

「何でいきなり？」「ああ、確かに何でだよ」

終は横目で二人を見ると視線を星空に戻した。

「何となく、お休み」

「えっ？ ちょっと」

「駄目だ寝てる」

終が眠りについたらのを見た二人も寝ることにした。

楓は冷えた体をさすりながら建物の前まで辿り着いた。

「何か、ない、かな？」

楓は建物内へ歩いていった。

「うう、頭、くらくら、する」

楓は頭を押さえながら建物内を歩いているとハーモニカの音色が聞こえた。

「はー、もに、か、の、音？」

楓はハーモニカの音につられるように歩く。

アリスは一室で目を瞑ってハーモニカを吹いていた。

「・・・」

吹いている途中にアリスの目から一筋の涙が流れた。

「おかしいな。涙が出てくるなんて」

アリスはハーモニカを吹くのをやめると目を拭った。

「はあ、で、そろそろ出て来い」

「何時、から？」

扉の影から楓が出てくるとアリスは楓を見るとポケットから待機状態のブレイクレオを取り出した。

「さあ、やるぞ。ブレイクレオ」

アリスはブレイクレオを展開すると身構え楓もエターナルムーンを展開した。

「さあ、行くぞ」

楓はルシファーとポセイドンを構えるとアリスは楓に向かっていく。

終、タクミ、夜明は焚き火を囲みながら眠っていると三人の男が近付いてきた。

「・・・」

一人の男が頷くと二人も頷き棒を三人に振り下ろそうとするが何か落ちる音がして見てみると終に棒を振り下ろそうとした男の腕が落ちていた。

「う、うわあああああ！？」
「うるせえな」

終はハデスを片手に持ち男達を睨み走り出した。

「追うぞ」
「おお」

腕を落とされた男は自分の腕を持つと他の二人と共に終を追いかけ始める。

「追い詰めたぜ。餓鬼」
「アホか？」

終の後ろは岩があり男達は笑みを浮かべるが終は表情を崩さなかった。

「さあ、地獄に堕ちろ」

終が言う腕が落とされた男の首を切り落とし二人が啞然していると残りの二人の首を終は切り落とした。

「恨むなどは言わねえ。恨むなら恨め、背負ってやるよ」

終はハデスを仕舞い戻っていった。

「うわぁ!?!」

楓はアリスと戦うがアリスは楓の腹を蹴り飛ばし楓は壁に激突し煙を上げた。

「諦めな。私には勝てないよ」

アリスが言うと煙の中から楓がルシファーを構えてアリスに突っ込んでいくがアリスはワイヤーブレードを楓の脚に巻き付けた。

「きゃぁ!?!」

脚を掴まれたことにより後ろに引っ張られ地面に叩きつけられた。

「私が、勝てない、理由は、ありませんよ」

楓はルシファーを杖にして立ち上がるとアリスを見る。

「だったら、そんな口が言えないように叩き潰す」

アリスはワイヤーブレードを楓の首に巻き付けた。

「うっ！？ うわあああああ」

アリスはワイヤーブレードを引つ張り楓は地面に寝そべった状態で引きずられた。

「ふん」

「ゴホッ！」

アリスは楓の腹を蹴り更に上上がった楓の背中に踵落としをして地面に叩きつける。

「ぐっうう、うう」

アリスはワイヤーブレードで楓の首を絞めていきレールカノンを楓に向けた。

(このまま、死んじゃうの、かな)

楓がそう思い目を閉じた。

黒い空間、楓の精神世界に楓は白いワンピースで居た。

「楓、起きて」

「えっ？」

楓が目を開けると椀が黒いワンピースで楓の目の前で微笑んでいた。

「椀さん」

「久し振り。それと、諦める気？」

椀の表情が険しくなると楓は一度目を伏せた。

「私は、どうすれば？」

「やりたいように、やりなさい。それだけ。私も手伝うから」

「有り難う、御座います」

楓が礼を言くと椀は微笑んだ。

「終わりだ」

アリスは楓にレールカノンを放とうとするがその前に楓がワイヤーブレードを切り裂いた。

「何!？」

アリスが楓の目を見ると右が赤、左がコバルトブルーに変わっていた。

「どうなってるんだ？」

エターナルムーンの色も銀と黒、スクーターも右が銀、左が黒のI S、デュアルムーンに変わった。

「一体何なんだお前は？」

「私は、音梨楓です。それが私です」

楓はルシファーとゼウスを構えた。

「ちっ、ここは引いた方が良さそうだ」

アリスはスイッチを押すと離れ建物が揺れると楓は壁にゼウスを向けて引き金を引き外に出た。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は建物の外に出ると息を切らしデュアルムーンも解除され目も赤に戻っていた。

「何だろ、苦しい。うっ!？」

楓は胸を押さえるとその場に倒れ込んだ。

二重の月（後書き）

感想を待っています。

負担（前書き）

何だろう？ 何か、すごく危ない表現がありそうだな。

負担

鈴、シャル、ラウラ、太陽はひたすら歩いていた。

「はあ、何か、今一盛り上がらない」

「僕もそう思った」

「何か、沈んだ感じだ」

「そんなお前等と居る私は何だ？」

四人は愚痴を言いつつしつかりと歩んでいく。

「
「
「ふあ〜
「
「

終、タクミ、夜明は同時に欠伸をした。

「よく寝た」

「気持ちいい朝だね」

「ああ、何か、ぐっすり眠れた」

上から終、タクミ、夜明の順番で言つと立ち上がり道なき道を歩く三人だった。

「で、何処行く？」

「駄目だこれ」

三人は溜め息を吐きながら取り合えず歩いていった。

「ゴホッ！　ゴホッ！　ゴホッ！」

楓は咳き込むとゆっくり体を起こした。

「朝、何時間、気を失ってたんだろ？」

楓は胸を押さえながら辺りを見渡し立ち上がった。

「どっ、じゃっっ。」

楓は胸を押さえながら歩きだした。

「何だこじっ？」

太陽は目の前にある建物を見て疑問符を浮かべていた。

「入ってみる？」

「そうしよう。何か分かるかもしれないし」
「だな」

鈴、シャル、ラウラは建物内へ向かうと太陽も後を追った。

「迷路かここは」

太陽が眩くとラウラと鈴は頷きシャルは苦笑いをしていた。建物内は複雑に入り組んでいるため迷路のようになっていた。

「ん？ 何か聞こえるぞ」

「ああ、確かに」

「何の音？ これ」

「ヴァイオリン？」

鈴達はまるで包み込むかのようなヴァイオリンの音を聴きその元へ向かった。

フェルナはヴァイオリンを弾いていた。その音は優しくもあり寂しくもあった。

「はあ、別の弾ころかな？」

不意にフェルナはヴァイオリンを弾くのを中断すると扉が開き鈴、シャル、ラウラ、太陽が部屋に入ってきた。

「へえ、不法侵入だよ」

「すまん。まさか所有物とは思ってなくてな」

フェルナは四人に向き直り自身のIS、キリングヴェノムを展開し大剣、ドラグノフを肩に担いだ。

「さあ、どうしようかね」

鈴、シャル、ラウラ、太陽はそれぞれ甲龍、ラファール・リヴァイブ・カスタム？、シュヴァルツエア・レーゲン、バルディツシュトワイライトを展開した。

「始めようか」

フェルナは四人に瞬間加速で近付いた。
イグニッション・ブースト

(駄目だ。もう、保たない)

楓は静かに目を閉じると再び目を開けるとコバルトブルーになっており人格も椀になっていた。

「あれは、やっぱり表に出てる方に負担が多き。暫くは私が表にしていることになりそうね」

椀はそう呟き服に付いたほこりを払うと歩き出した。

鈴、シャル、ラウラ、太陽対フェルナの戦いは数で鈴達が勝っているがフェルナはドラグノフを上手く扱い四人を圧倒していた。

「このままでは埒があかない」

ラウラはプラズマ手刀でフェルナに向かうがフェルナはドラグノフで受け流すと近くにいた鈴の腹に蹴りを入れてシャルにぶつけると太陽に向かいドラグノフを振り下ろし太陽が避けるとドラグノフは床を砕いた。

「どれだけの馬鹿力だ!？」

「私は力が強いから、それにキリングヴェノムもパワーが強いISなのよ」

フェルナはキリングヴェノムに指を指して言った。

「」説明どうも!..!」

太陽は瞬間加速でフェルナに近付きオールデリートとライオンハートイグニッション・ピストを振り下ろすがフェルナはライオンハートをドラグノフ、オールデリートを素手で止め太陽の腹に蹴りを入れた。

「ちっ!？」

太陽はフェルナにフレイアを投げるがフェルナはドラグノフで弾いた。

「流石に違うな」

太陽が上に上がると鈴は龍砲、ラウラはレールカノンをフェルナに放ちフェルナはドラグノフで受け止めるがシャルがフェルナを掴むと盾殺し（シールド・ピアス）を撃ち込むがフェルナは直ぐにシャルを蹴り飛ばして後ろに下がった。

「四対一は、キツいな」

「それでもここまでやるお前は何だと言うんだ？」

フェルナは不適な笑みを浮かべた後スイッチを押した。

「? 何だ？」

太陽が疑問に思っていると建物全体が揺れ始めた。

「まさか!？」

太陽はフェルナの居た場所を見るがフェルナは居らず四人は急いで建物を出た。

楓の精神世界では楓は目を開けると辺りを見た。

「ここは、確か」

楓は立ち上がると妙に体が軽かった。

「体が、軽い」

「当たり前よ。あなたの精神世界だから」

声がした方向を見ると椋が立っていた。

「椋さん」

「体の具合はどう？」

椋が楓に聞くと椋は楓の体を触り始めた。

「あの、椋さん？」

「何？ うふふ」

楓が椀に聞こうとすると椀は不適な笑みを浮かべて今度は胸を揉み始める。

「も、椀さん！？／／／」

「前より、大きくなってる？」

「そ、そんなことひゃあ！？／／／」

椀は楓の胸からへそにかけてゆっくりと指を滑らせていく。

「椀さん、駄目！！／／／」

「え、楓とのスキンシップなのに」

椀はふてくされた顔で楓の顔を覗くと楓の顔は赤くなっていた。

「あら？　もしかして、もっとやりたい？」

「ちっ、違いますよ！？／／／」

「お顔が真っ赤よ」

「ひゃあん！？／／／」

否定する楓の太股を椀はゆっくり撫でた。

「また次のお楽しみにしてるわね」

「えっ？ んん！？／／／」

椀は啞然とした顔で向いた楓の唇を自分の唇で塞いだ。

「んん、ぴちや、くちゆ、ちゆぱ／／／」

「くちゆ、ぴちや、ちゆぱ、ぷあ／／／ 御馳走様」

「椀さん／／／」

「次のお楽しみだから」

そこまで言つと楓は目を瞑った。

「んん？ あれ？」

楓が目を覚ますと洞窟の中にいた。

「何か、楽になった」

楓はそう呟いた後再び歩きだした。

負担（後書き）

感想を待っています。

集結 ロスト（前書き）

ロスト集結

集結 ロスト

アリスは廊下を歩いてしていると途中でエナルと会った。

「ヤッホー。アリスちゃん」
「エナル、か」

アリスは一瞬エナルを見ると再び前を向くと歩きだした。

「ちつよ!?!? 無視しないでよ!?!」

エナルは慌ててアリスを追いかけた。

「相変わらずね」
「フェルナ。何が言いたい」

フェルナは壁に寄りかかっておりアリスは横目で見た後フェルナに

聞いた。

「で、どれ位集まってるんだ？ “エース”達は」
「あんた等二人を除けば全員居るよ」

フェルナが言うとアリス、エナル、フェルナは部屋に入った。

「やあ、久しぶりだね」
「ベルガ、生きていたのか？」
「ああ、生きていたさ」

椅子が五つある一つにベルガが座っていると三つにアリス、エナル、フェルナが座った。

「おっ、集まったな。結構結構」

「サード」

扉からファースト、セカンド、サード更にもう一人男が入ってきた。

「“キング”随分遅かったな」

「ふん。どうだって良い。始めるぞ」

キングと呼ばれた男は椅子に座ると影から一人の女性が静かに出てきた。

「“樁”」

「何でしようか？」

椿と呼ばれた女性は静かにキングの隣に来た。

「で、今回はどうなんだ？」

「いや、全員居るかの確認だ」

キングは全員居るのを確認すると席を立った。

「椿、サイド、戻るぞ」

「はっ」

「了解。それと、ファースト、セカンド、皆様をお送りしとけ」

「了解」

「ああ」

キング、椿、サイドはその場を去った。

「あゝあ、いい加減面倒なんだが、“一夏”」

サードは笑みを浮かべながらキングを一夏と呼んだ。

「だったらお前等はどうしたい？ “終”、“筈”」

「懐かしいねえ。その名前」

「ええ、何時ぶりだろうな」

キングはサードを終、椿を筈と呼んだ。

「まだ働いて貰うぞ。我ら“ロスト”の為に」

「ああ」

そう言うと三人は再び歩きだした。

集結 ロスト（後書き）

感想を待っています。

恨みのセカンド(前書き)

恨みは人を変える要因

恨みのセカンド

楓は辺りを見渡しながら歩いていた。

「見つけたぞ」

「・・・」

楓の目の前にポイズンガンナーを纏った女性達とクロスナイトが現れると楓は静かにエターナルムーンを展開した。

「何だ？ 随分静かにしているな」

楓は何も言わずにルシファーを構えるとクロスナイトの一機を切り裂いた。

「ふふふ、そう来ないとな」

ポイズンガンナーを纏った女性達は銃を一気に楓に向けて撃つと楓は上に飛び一瞬見えなくなると再び降りてきてダークムーンに変化しており一人の腹を蹴り付けルシファーで切り裂いた。

「ちっ!?!」

クロスナイトと女性の一人が人格が椀になっており容赦なく切り裂いた。

「ちっ!?! 悪魔が」

女性の一人が椀に向かってそう呟いた。

終、タクミ、夜明は人里離れた集落に付くとクロスナイトに人々が

襲われていた。

「助けないと!！」

「ああ!！」

タクミと夜明が向かおうとするが終が止めた。

「おい!？」

「何で止めるの!？」

「冷静に考えて、リスクを冒す意味はないだろ」

終は特に気にも留めず呟いた。

「ふざけんな! 黙って見てろって言うのかよ!？」

「見殺しにしろって!？」

「悪いな。そう言うことだ」

終はそう言うがずっと人々を見ていた。

(何だ？ 何だこの感覚は？)

終は胸がつつかえるような感覚があり子供が襲われそうになるのが目に入り体が動いた。

「やああああめえええろおおお!!!!!!」

終はブラックファンングを展開しクロスナイトを切り裂いた。

「何だ？ リスクは冒さないんじゃないのか？」

「はっ、忘れた」

終は笑みを浮かべるとファイズがファイズショットでグランドインパクトを放った。

「どうしたの？ こんな事をするなんて」

「気の迷いだ」

終はそう呟くとファイズ、夜明と共にクロスナイトの織滅に入った。

「
　　」

椛は鼻歌を歌いながらポイズンガンナーの操縦者である女性達の死体の上に座っていた。

「ごめんね楓。やっぱり不安だったから」

椛はその場から離れた。

「あゝ、マジでミスった」

「でも良かったと思うよ」

「ああ、俺もそう思う」

終は頭を掻きながら歩きタクミは満足したような顔をして夜明は笑みを浮かべていた。

「あんまり目立ちたくないんだ」

終は溜め息を吐きながら歩いていく。

「うっ、んん」

楓が目を覚ました場所は川の辺だった。

「あれ？ 何で、こんな所に」

楓は辺りを見渡したが人影はなく再び歩くことにした。

それから少し離れた場所ではセカンドが楓を睨んでいた。

「潰してやるよ。屈辱を与えてから潰してやる」

セカンドは自身の手を力強く握った。

恨みのセカンド（後書き）

次回はセカンド対楓&栞です。

感想を待っています。

セカンドの狙い(前書き)

セカンド戦、楓がメインじゃなくて鈴達四人がメインだ

セカンドの狙い

楓が歩いていると目の前にセカンドが現れた。

「あなた、あの時の!？」

「ブラストクロウ」

セカンドはブラストクロウを展開しマシンガンを両手に構えた。

「潰してやるよ」

セカンドはマシンガンを楓に放つと楓はエターナルムーンを展開してマシンガンを避ける。

「逃げんなよ!! テメエをぶつ潰すんだからな!!!!」

セカンドはマシンガンを放つが楓は避けながらゼウスを出しセカン

ドに向けて撃つがセカンドは瞬間加速イグニッション・ブーストで横に避けた。

「遅いんだよ!!」

「っ!?!」

セカンドは楓に向けて撃ち続けるが楓は森の中へ入っていった。

「逃がすか!!」

セカンドも楓を追うために森へ入っていった。

楓は木々に隠れながらセカンドの銃撃を避けるがセカンドは木もお構いなしにマシンガンを撃つ。

セカンドは持っていたマシンガンで楓の首を殴った。

「ぐっ!？」

楓が意識を失うとエターナルムーンは解除されセカンドは木を退かし楓を抱えると何処かへ飛んでいく。

「どれぐらい歩いたっけ？」

「わかんない」

「流石に疲れてきたな」

「休むか」

鈴、シャル、ラウラ、太陽がその場に座ると四人の目の前にセカンドが降り立った。

「よう、覚えてるか？ 俺のこと」

セカンドは自分に指を指して四人を見ると四人は戦闘態勢に入っていた。

「おいおい。話を聞けよ」

「話だと？」

太陽は険しい顔をしながらセカンドを見るとセカンドは端末を四人の元に投げると端末からは楓がある一室に監禁されてる映像だった。

「なっ!？」

「何よこれ!？」

「お前等の仲間だぜ。良かったな」

「何したの？」

ラウラは驚愕し鈴は怒鳴るとセカンドは表情を変えずに言つとシヤ

ルは鋭い目付きでセカンドを見た。

「まあ、地図もあるから来いよ」

セカンドが立ち去ると四人は端末に書かれてる地図を頼りに走っていく。

「うっ、うっ」

楓が目を開けると四方がレンガで囲まれ入り口が見当たらない部屋だった。

「何、ここ」

楓は上を見ると天井に光が見えた。

「あそこが、出口、どうやって」

楓が頭を悩ましているとレンガの隙間から水が流れていることに楓は気付いてなかった。

セカンドが机に向いていると壁が破壊され中からISを展開した鈴、シャル、ラウラ、太陽が現れるとセカンドは笑みを浮かべた。

「早かったな」

「悪いが早く終わらせるぞ」

鈴が双天牙月、シャルはアサルトライフル、太陽はオールデリート、ライオンハートを構えてラウラは身構えた。

「さあ、始めようぜ。命懸けのゲームを」

セカンドの眩きは四人には聞こえなかった。

「登れ、っ!?!?」

楓が壁を登ろうとするが脚に痛みが来て見てみると腫れていた。

「エターナルムーン、は無理ですね」

楓は部屋の広さを見てISの展開が無理だと判断した。

「はあ、ひゃあ!？ 冷たい」

楓が足元を見ると水に脚が浸かっていた。

「水かさが増えてる!？」

楓が四方の穴から水が出ており段々と増えていた。

「このままじゃ」

楓の頭に最悪のビジョンが浮かんだ。

ラウラはワイヤーブレードとプラズマ手刀を出してセカンドに向かうがセカンドはブラストクロウの装甲をスライドさせて中からいくつものガトリングを出した。

「ラウラ！！」

「ちっ！！」

太陽がラウラの名前を叫ぶとラウラはAICを発動してセカンドの一斉射撃を防ぐ。

「この！！」

鈴は龍砲、シャルはアサルトライフルでセカンドを攻撃するがセカンドは射撃をやめて後ろに飛ぶと太陽がライオンハートとオールデリートを構えていたがセカンドはマシンガンを太陽に向けると太陽は直ぐに離れた。

「楓は何処にいる！？」

「俺を倒したら言っつてやる」

セカンドは笑みを浮かべながら四人を見ていた。

「水が」

水位は楓の膝辺りまで来ていた。

「どつすねば、誰か、助けて」

楓は一人呟いていた。

セカンドの狙い（後書き）

感想を待っています。

しゅめんとついで言葉（前書き）

楓と鈴、シャル、ラウラ、太陽と合流、他のメンバーも何時合流させるか

いめんと言ひ言葉

「どつしょう。水が」

水位は楓の腰の部分まで来ており部屋の高さは推定二メートル位、後数分で楓は溺れる。楓は焦るがエターナルムーンは広さを考えたら部分展開、壁を登ろうにも脚が腫れており登れない状態だった。

「誰か、助けて下さい」

楓は手を祈るように組んだ。

「ちっ！！」

ラウラは鈴、シャル、太陽の前に立ちセカンドが全身のガトリングを放つのをA I Cで止める。

「これじゃキリがないわよ!!」

「分かってる! だが防ぐので精一杯だ!!」

「無駄口を叩くな!!」

「言い争ってる場合!?!」

四人は言い争っているがセカンドはお構い無しにガトリングと今度はマシンガンを放った。

「アイツさあ、体力無さそうだから、多分今頃溺れてるぜ」

セカンドはまるで楽しみのように言うと四人は険しい顔をしてセカンドを睨んだ。

「くっそ」

太陽は芋虫を噛んだような顔をして呟いた。

現在の水位は楓の脚が地面から離れて浮かんでおり天井が近くなっていた。

「あぶ、はあ、はあ、助けて、誰か」

楓は今は浮かんでいるが何回か沈みかけていた。

『楓、私に変わってくれる？』

「椛さん、どうして？」

『お願い。あなたを死なせたくない。助けるから』

楓は顔を閉じた後、沈みまた目を開くとコバルトブルーに変わり椛へ人格が変わった後椛はゼウスを出し天井を撃ち抜き上がると

天井に穴が開いており椀はその穴から外に出るとダークムーンを展開して飛んで行った。

「もう溺れたかな？ アイツ」
「ふざけんな！！」

セカンドが笑みを浮かべながら言うと鈴は向かおうとするがシャルと太陽に抑えられた。

「放しなさいよ！！」
「待つて鈴！！」
「飛び出したいのはお前だけじゃないんだ！！」

セカンドが笑みを浮かべているとセカンドの床が吹き飛んだ。

「なっ!?!」

「「「「!?!?!」」」」

セカンドや鈴達は驚いて穴の部分を見ると“黒い何か”が出てくるとそれはセカンドに向かっていき腹に蹴りを入れ飛んだ後、それはセカンドに向かって銃を放った。

「楓、だよな?」

「あら? あなた達、生きてたんだ」

「椋の方が」

シャルが聞くと椋は鈴達を冷たい目で見て太陽は苦い顔をした。

「良かった。楓が無事で」

ラウラは目から出た涙を拭った。

「無視すんな!!」
「」「」「黙れ!!」「」「」

セカンドは飛び出したが五人に殴られて壁に激突した。

「あら？ 意外と気が合うのかしら？」
「さあな、知らん」
「あんたとは気が合いたくない。楓となら気が合っても良いけど」
「ああ、確かに」
「楓は僕のだ」

シャルが言うと鈴、ラウラ、椀はシャルを見て一発触発な雰囲気を出すがセカンドが瓦礫を飛ばし五人はそれを見た。

「てめえ等、ふざけんじゃねえ!!」
「お前だろつが」
「確かにな」
「そうよね」
「うん。ちよつとイライラするよ」
「ええ、楓を浚ってしかもその前に楓に怪我もさせてるし」
「何!?!」
「本当!?!」

「治療しないと!！」

「無視すんなって言ってんだろぅが!！」

セカンドは向かおうとするが椀はゼウス、鈴は龍砲、シャルはアサルトライフル、ラウラはレールカノンをセカンドに向かって放ちセカンドは壁を打ち破って外に飛んで行った。

「後宜しくね」

「ちよっと!？」

椀は目を閉じて倒れようとするが鈴が抱えダークムーンスも解除された。

「畜生、アイツ等」

セカンドは体を引きずりながら歩いているとセカンドの目の前に椿とソードが居た。

「椿！？ ソード！？」

「何やってたんだ？ セカンド」

二人が居ることにセカンドが驚くと椿は刀を取り出すとセカンドに近付き切り裂いた。

「かつ！？ そんな、何で」

セカンドはそう呟いた後地面に倒れて辺りを血で染めあげた。

「流石は椿、全く落ちてないな」

「あなたに言われても嬉しくないですが。それにしても、良かったんですか？」

「何が？」

サードはセカンドの亡骸を転がしていると椿が聞いた。

「セカンドの穴はどうするんですか？」

「ああ、別に大丈夫だよ。俺とファーストで」

「そうですか、っ!？」

椿が向くとサードの顔が目の前にありサードは自分の唇を椿の唇に付けた。

「なっ何を!？」

「スキンシップ。まあ、キングは二度と出来ないけどな」

「それは、言うてはいけません」

サードと椿は暗い顔をした後帰路についた。

「ん、んん」
「起きたか？」

楓が目を開けると目の前にラウラの顔があり後頭部に柔らかい感覚があった。

「あの、これって」
「ああ、膝枕だ」
「／／／」

ラウラが言っていると楓が顔を赤くした後、起き上がりラウラは楓の顔をじっと見た。

「？ ラウラさん」
「ん？ 何でもないぞ」

ラウラは笑顔で言った後楓の頭を撫でた。

（何故、目が赤に？ 一体何があつたんだ。楓）

ラウラは頭を撫でながら思っていた。

「ラウラ！ あんた何やってんの！？」
「そうだよ！ ズルいよ！！」

楓とラウラが向くと鈴とシャルが走って向かってきていた。

「あっ」

楓は突然頭を伏せると三人は不思議に思った後太陽が来た。

「久しぶりだな。楓」
「太陽さん」

太陽は楓に近付き太陽が手を出すと楓は目を瞑ったが頭を撫でられていた。

「えっ？」

「お帰り。あの三人、ずっと心配してたぞ。お前のこと」

楓と太陽は未だに言い争っている三人を見た後楓の目から涙が出た。

「ん？ 楓、何で泣いているんだ？」

「どうしたの？」

「相談に乗るよ」

三人が近付くと楓は三人を見ると泣き出した。

しめんと言ひ言葉（後書き）

感想を待っています。

破壊の王（前書き）

キングの専用機の名前が出ます。

破壊の王

「あの、鈴さん」

「何？」

「重くないですか？」

「平気よ」

鈴は現在楓を背中に乗せていた。

「自分で歩け」

「どの口が言うっ？」

鈴が目を細めて言うと楓は黙り込んだ。

事は数分前に遡る。

楓、鈴、シャル、ラウラ、太陽は暫く休んだ後移動しようとするが

「っ!?!?」

楓は移動しようにも脚が腫れていて歩こうにも歩けず、歩けたとしても普段より遅くなるのは分かりきっていた。

「大丈夫?」

「あっ、はい、っ!?!?」

「大丈夫じゃないでしょ」

鈴は楓を見ながら溜め息を吐いた。

「背負おうか?」

「大丈夫ですから、っ!?!?」

鈴は溜め息を吐きながら楓を背負った。

「鈴さん？」

「文句は言わないでよ」

鈴が歩いていくとシャル、ラウラは羨ましそうな顔をし太陽は苦笑いをしながら歩いた。

太陽はそれを思い出していると楓の頭が前後に動いていることに気付いた。

「なあ、どうしたんだ？ 楓」

「えっ？」

太陽に呼ばれて楓は向いたが目が半分閉じていた。

「眠かったら寝とけ」

「なら、お言葉に甘えて」

楓は目を閉じると直ぐに寝息を立てた。

「大分疲れてたのか？」

「らしいな。この様子からすると」

「可愛い」

「誰が変わりなさいよ」

鈴はそう言つとシャル、ラウラは無視して楓の寝顔を見ていると太陽は苦笑いしていた。

終、タクミ、夜明は歩いていたが終はずっと不機嫌だった。

「何で不機嫌なのさあ？」

「うるせえ」

「どれだけ不機嫌なんだよ」

タクミが聞くと終は不機嫌な顔で答えると夜明は苦笑いしていた。

「本当にどれだけ助けたのが不機嫌なんだよ」

「俺達は情報集めが目的なんだ。下手に目立つと面倒なんだよ」

「例えば、こんな風に？」

タクミに言われて終と夜明が周りを見るとクロスナイトに囲まれていた。

「これが嫌なんだよ」

「あゝ、分かる」

「確かに嫌だね」

三人は溜め息を吐きながら戦闘態勢に入った。

「すうー、すうー、すうー」

「静かな寝息立てるね」

「「ジュルリ」」

「なあ、二人が怖いんだが」

楓は相変わらず寝息を立てているが鈴は残念そうな顔をするがシャルとラウラは涎を垂らし太陽は苦笑いしていた。

「ねえ、変わって」

「「ヤダ」」

「即答か」

鈴が言うとシャルとラウラは即答し太陽は呆れていた。

「ふにゅ、んん」
「「「「あつ、起きた」「「「」

四人が同時に言つと楓は殆ど目が開いてない状態だった。

「「ぶつ!?!」「」

楓の顔を見たシャル、ラウラは鼻を抑えた。

(ヤバい、理性が抉られる)(ああ、母性本能を直接やられるよ)

二人は楓を見ながら涎を垂らしていた。それを見た太陽は細い目をした。

(ああ、シャルとラウラが懐かしく感じる)

太陽は遠い目をしていた。

「何か、終が八つ当たりに近い戦いだっただな」
「確かに、言える」

終はクロスナイト達の上に乗っていた。

「ムカつくぜ。本当にムカつく」

そう言いながら終達はまた歩きだした。

ある一室にキング、椿、サード、ファーストが居た。

「キング、僕の命令とは？」

「ああ、音梨楓を潰しとけ」

「了解しました」

ファーストはその場から出ていくとサードはキングに聞いた。

「なあ、どつするんだ？」

「アイツを見てると苛つく」

キングはそう言いその場から離れた。

「やっぱり、あれですかね」
「ああ、あれだな」

サードと椿は悲しそうな顔をしながら呟いた。

キングは廊下を歩いていると昔の事を思い出す“ 血溜まりに沈む最愛の人の顔”

「ちっ、ムシヤクシヤする」

キングはそう呟きながら自らの右腕の“黒い”ガントレットを見た。

「破壊するぞ」「ゼロ」

キングはそう言いながら歩いた。

破壊の王（後書き）

感想を待っています。

覚悟（前書き）

楓が毎回、酷い目に遭う

覚悟

鈴、シャル、ラウラ、太陽は眠っている楓を横目で見た後建物内を
搜索し始めた。

「それにしても、何だろうな？　ここは」

「さあ、知らないわよ」

「色々見てみれば分かるかもね」

「ああ、で、何だこの扉は」

ラウラは重そうな扉の前に立つと扉を開けて入ると鈴、シャル、太陽も続いて入った。

それを遠くから見ているファーストに気付かずに。

「何もないな」

太陽が眩くと扉が音を立てて閉まった。

「あれ？ 閉まったわよ!？」

「見れば分かる!！」

「何で!？」

四人は扉を押すがびくともせず天井からガスが出ると四人は眠りについた。

「んん、あれ？」

楓は目を開けて辺りを見渡すが鈴達の姿が見えなかった。

「皆さん、何処ですか？」

「知りたい？」

楓が後ろを見るとファーストが立っていた。

「終、さん？」

「バーストブレイド」

ファーストは楓の問いに答えずIS、バーストブレイドを展開し大剣を構えると楓も慌ててエターナルムーンを展開した。

「排除する」

ファーストの大剣と楓のルシファーが音を立ててぶつかり合った。

「ん、んん」

四人が起きると入っていた部屋とは別の部屋にいた。

「何よこじ」

「冷凍庫？」

「さらっと恐ろしい」と言っつな

すると段々と体感温度だが下がっていくのが分かった。

「ねえ、寒くなつてない？」

「実際寒くなつてる」

四人は体を擦りながら身を寄せ合つ。

「一体どつなってる?」

吐く息も白くなっていった。

「きゃあ!?!」

楓はファーストに押されると左手にゼウスを取り出し引き金を引くがファーストは軽く避けて大剣を振り下ろすが楓はルシファーで受け止めた。

「皆さんは、何処!?!」

「早くしないと、凍えるね」

「!?!」

楓は慌てて離れようとするがファーストは思いっきり腹を蹴り飛ばした。

「ぐう!?!」

ファーストは蹴り飛ばすと大剣を回し楓を見るとルシファーを杖にしながら立った。

「退いて、下さい!?!」
「断る」

ファーストは楓に切りかかったが楓は避けるとその場を離れるがファーストは後を追った。

「一体、何処に!?!」

楓は飛んでいると一つの扉を見つけて中を覗くと鈴、シャル、ラウ、太陽が身を寄せ合っていた。

「皆さん!?!」

四人は楓の声に気付いて扉を見た後楓は扉をルシファーで叩き切ろうとするがその前にファーストが楓を蹴り飛ばした。

「ぐう!?!」

楓は壁に激突するとファーストは大剣で切ろうとするが楓はルシファーで受け止めた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、邪魔しないで下さい!?!」
「従う義理はない」

楓はポセイドンを出して突きを放つがファーストは避けると楓を真上に蹴り飛ばし楓は天井に激突した。

「がつ!?!」

次にファーストは落ちてくる楓の背中を蹴り楓は地面に激突した。

「うう!?!」

地面に横たわる楓を踏みつけて力を込めた。

「ああああ!?!」

ファーストは楓を蹴り飛ばし楓が壁にぶつかった後近付いて首を掴んだ。

「がつ、ああ!？」

ファーストは楓の首を掴んでいる手の力を強めていく。

「どうなっているんだ!？」

ラウラは叫んだが扉に付いている窓しか外の状況を確認できず状況が分からなかった。

「寒くて、もう、駄目」

「僕も、もう、保たない」

「くっそお」

「くっ」

鈴、シャル、ラウラ、太陽は段々と意識が薄れていった。

「そろそろ、凍死したかね」

「そんな、筈」

楓はないと言い切れなかった。時間が経っており下手をしたら本当に凍死してるかも知れない、そんな考えが楓の頭をよぎったが直ぐに振り払った。

「うつ、ああああ!!」

「!?!」

楓はファーストの横腹を蹴った。

(椛さん!!)

『 どうしたのよ楓? 』

(力を貸して下さい!!)

『 分かった。死なせたくないから 』

楓が目を閉じ再び開けると右が赤、左がコバルトブルーに変わりエターナルムーンもデュアルムーンへ変化するとファーストを上蹴り飛ばしその後下に叩き落としファーストが立ち上がると蹴り飛ばすとファーストを壁を突き破り外へ吹き飛んだ。

「 皆さんっ! ? 」

楓は扉へ向かおうとすると体から力が抜ける感覚がしたが無理矢理動かし扉の前に立つとルシファーで扉を切り裂き四人を運んだ。

「くっそ」

ファーストはボロボロの体を引きずりながら歩いていると大剣を取り出した。

「敗北に、意味はない」

ファーストは大剣で自身の首を切ろうとしたがサードに止められた。

「サード」

「帰るぞ。ファースト」

ファーストは頷きサードは“白い”ブラックファンクを展開しファーストを抱えてその場を後にした。

太陽が起きると次にラウラ、シャル、鈴の順番で起きた。

「あれ？ 確か」

シャルは思い出そうとしたが

「皆、さん」

全員が向くとバケツを持った“顔色が悪い”楓が居た。

「ちよっ!?!? どうしたのよ楓!?!?」

「水、持ってきました」

楓は笑ったが無理をしているのは目に見えていた。

「大丈夫なの楓!？」

「ご心配なく」

「そんな顔で心配するなって言われても、説得力がないぞ」

「だい、じょ、うぶ、です」

「楓!？」

楓は喋っている途中に気を失うとラウラが慌てて受け止めた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓はラウラの腕の中で荒い息を吐いていた。

「どろじょろ!？」

「太陽!！」

「私に分かるわけがないだろ!!」
「楓! 楓!!」

四人は楓の状態を見て慌てるが楓は苦しそうに息をしていた。

覚悟（後書き）

感想を待っています。

襲撃

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は荒い息を吐きながら眠っていた。

「楓、大丈夫？」

シャルは楓の手を握っていた。

「大丈夫なのかな？」

鈴はタオルを水で濡らし楓の額に置いた。

「換えの水を持ってきたぞ」
「けど、何時まで居るのは危険だが、移動しようにも出来ないからな」

ラウラと太陽はバケツに入った水を持ってきた。

「はあ、はあ、ごめん、なさい」

楓は息を切らしながら四人に謝罪した。

「謝らなくて大丈夫だよ」

「そうよ。ゆっくり休んでね」

楓は頷くと静かに眠りについた。

終、タクミ、夜明は川原で休んでいた。

「はあ、疲れたな」

「確かに、歩きぱっとなしだったからね」

「ああ、本当に疲れたよ」

終達は溜め息を吐きながら入れ物に水を入れていた。

「最近は大変だよな。こんな世界だけどそう感じる」

「ああ、分かる」

終の言葉に二人も納得し頷いた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

「楓、大丈夫だ」

ラウラは楓を背負っていた。

「ねえ、どじするの？」

「どじするって、言われても」

シャルが聞くと鈴は俯いた。

「取り合えず、病院跡とか探してみるか」

鈴達は太陽の言葉に頷くが一つの影が付いていることを知らずに。

病院跡に着いた鈴達は取り合えず楓をベッドに寝かせていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

相変わらず荒い息を吐く楓だが大分落ち着いていた。

「大分落ち着いてきたな」

「だからと言って油断は出来ないぞ」

ラウラはホツとしたが太陽は未だに険しい顔をしていた。

「楓、大丈夫だよな」

「そつだと信じたいわよ」

鈴とシャルは暗い顔をしながら楓の手を握っていた。

「い、め、ん、なさい。わ、た、し、の、所、為、で」

楓が呟くと鈴とシャルはより力強く楓の手を握った。

「はあ、何でこんな事になってるんだろ？」

フェルナは溜め息を吐きながら病院跡を見ていた。

「おい、フェルナ」

「アリス、エナル」

「やっぽー！！」

「私は無視か？」

フェルナの後ろからアリス、エナル、ベルガが歩いてくると、アリスはブレイクレオ、エナルはフォービドゥン、フェルナはキリングヴェノム、ベルガはダークスパイダーを展開した。

「さあ、シヨ一の始まりだよ」

ベルガは不適な笑みを浮かべた。

四人が眠っている楓を見ていると病院跡が揺れた。

「な、何だ!?!」

「外だ!?!」

四人はISを展開して外へ出た。

「来たか」

アリス、エナル、フェルナの三人が向くとISを展開した鈴、シャル、ラウラ、太陽が来ておりアリスとエナルは太陽に向かい、フェルナは残りの三人に向かった。

「ハア！！」

「ふっ！！」

「くっ！！」

エナルはヴァジュラを投げアリスはレールカノンを太陽に放つが太陽は避けるとフレリアを二人に投げるが二人はフレリアを避けた。

「うらああああ……!!」

フェルナはドラグノフを三人に向かって振り下ろすと三人は避ける
とフェルナは鈴とシャルを蹴り飛ばすとラウラはプラズマ手刀でフ
エルナに切りかかるがフェルナはドラグノフで受け止めた。

ベルガは病院跡の中に入ると楓を見つけるとダークスパイダーの脚
を楓に向けてエネルギー弾を放とうと溜め始める。

「ふふふ、終わりだよ。さらばだ。良い研究材料」

ベルガが放とうとする前に楓は目を開けるとコバルトブルーになっており人格が椀に変わると椀はダークムーンを展開してベルガを蹴り飛ばした。

「な、何！？」

「お久しぶり。屑」

椀はルシファーを構えるとベルガに切りかかりベルガは脚からエネルギーブレードで受け止めると椀はベルガを蹴り飛ばした。

「消える！！」

ベルガはエネルギー弾を放ったが椀は避けるとゼウスを出しベルガを撃った。

「うわ！？」

ベルガは避けたがダークスパイダーの八本ある脚の内、二本が消し飛んだ。

(何、これ！？)

椀は目の前が一瞬霞んだ。

(まさか、デュアルムーンの影響！？ でも、何で)

椀は切りかかってきたベルガをルシファーで受け止めるとポセイドンで振り払った。

(このままじゃ、不味い。私は兎も角、楓が保たない)

椀が考えているとベルガがエネルギー弾を放った。

「お前等の目的は何だ!？」

太陽はオールデリートとライオンハートをアリスとエナルに振るうがエナルはヴァジュラで止め、アリスは避けた。

ドーン!!

「何だ!？」

太陽が病院跡を見ると楓の寝ている部屋が爆発した。

「なっ!？ 楓!！」

太陽は向かおうとするがアリスとエナルが阻んだ。

「邪魔だあああ！！！！！」

太陽のバルディッシュユトワイライトから赤い粒子があふれだした。

「邪魔しないでよ！！」

「退いて！！」

「くっそ！！」

鈴、シャル、ラウラは爆発音が聞こえるとフェルナを突破しようとするがフェルナはそれを許さなかった。

「悪いけど、そうは行かないんだよね」

フェルナはドラグノフを回しながら三人を見ていた。

「くっ、はっ」

椀は煙の中から落下しているとベルガが椀の首を掴んだ。

「ぐっ!?!」

「さあ、悪いが消えたまえ」

ベルガはダークスパイダーの脚を椀の頭に向けるとエネルギー弾を放とうとするが椀はルシファーでダークスパイダーの脚を突き刺した。

「ふふふ、残念ね」
「貴様」

ベルガは拳を作り椀の腹を殴りつけた。

「ガハツ!?!」
「口の聞き方には気をつけたまえ」

ベルガは次に椀の腹に膝蹴りを入れた。

「ぐあ!?!」

ベルガは次に椀の首を力強く締め始める。

「あつ、ぐつ!?!」

柁は力無くルシファーを手放すと太陽がオールデリートとライオンハートでベルガに切りかかった。

「ちっ!？」

ベルガは直ぐに柁を太陽に投げつけると太陽は柁を抱き抱えた。

「はあ、一端引くか」

「引かせると思つか？」

「無茶は止めたまえ」

ベルガが言つと後ろにアリス、エナルが来た。

「そいつを守りながら、三対一で勝てるかね？」

太陽は直ぐにライオンハートを下ろすと三人は飛んでいき途中でフエルナと合流したのかよりスピードを速めた。

「余計、な、事、しないで、よ」

椋はそこまで言つと気を失い太陽の後ろから鈴、シャル、ラウラが来て楓を見ると慌てたのは言うまでもない。

襲撃（後書き）

感想を待っています。

超特別編 黒谷終の華麗？なる一日（前書き）

人気投票で一位を取った終の特別編

時間軸は異世界編前

超特別編 黒谷終の華麗？なる一日

「ZZZ・・・ZZZ」

終は自分と一夏の部屋の自分のベッドで寝ており寝返りを打った。

ムニユ

「んん」

「はっ？」

終は手に当たった感覚と声で眠りから覚めると自分の横に水色の髪の毛の終より年上の少女が下着姿で居た。

「何やってんだよ。楯無」

「えへへ、久々の終の匂い」

「おい」

終はベッドから起き上がると少女、更識楯無を見た。更織楯無、
I S 学園二年で生徒会長である。

「はあ、何で居るんだよ」

終が言つと楯無は自分の指を唇に付けた。

「じゃ、やる？」

「はっ？」

終が疑問符を浮かべると楯無は終の肩を掴んだ。

「何だ？」

「いや、あれだよ、あれ」

「まさかな」

終が冷や汗をかくと楯無は笑みを浮かべたが目は獣の目だった。

「逃げる!!」

「あ、待ってよ!!」

終はすぐさま部屋を脱出すると楯無を終の後を追った。

「はあ、はあ、はあ、危うく、喰われるところだった」

終は冷や汗をかきながら辺りを見渡していた。

「あれ？ 終」

「簪、久しぶりだな」

終は更識簪に挨拶をした。簪は楯無の妹だ。

「どうしたの？ 血相かいて」

「お前の姉が原因」

終が言うと簪は納得した顔をした。

「しめん」

「いや、良いよ」

「／／／」

終が微笑むと簪は顔を赤くした後終は着替えに部屋に戻った。

終は戻った後は楯無に遭遇せず外に出ていた。

「あ、うめえ」

終はメンチカツ片手に町を歩いていった。

「御馳走様、ん？」

終はメンチカツを食べ終わると複数の男に囲まれた少女を見たが周りは避けていた。

「はあく、飯食った後にムカつく物見せんな」

終は走っていく。

「あの、退いてくれませんか？」

「そんな事言わずにさあ」

「俺達と遊ぼうよ」

男達は汚い笑みを浮かべながら少女を囲んでいると男の一人の顔面に終が跳び蹴りを入れた。

「グヘエ!？」

「」「」「」

少女と男達は終が突然現れた事に啞然としていた。

「飯の後に変なもん見せんな」

終はドスが入った声と鋭い目付きで男達を見た。

「んだてめえ!?!」
「ぶち殺すぞ!?!」

男達がナイフを懐から出すと終はオルトロスを展開した。

「な、何だあれ!?!」

「ISか!?!」

「何で!?!」

「黒谷終、目標を駆逐する」

終は何処ぞのガンダムマイスターの台詞を言うと男達のナイフをオルトロスで叩き切った。

「まだやるか? 今度は命を叩き切る」

終がオルトロスの光らせると男達は慌てて逃げ出した。

「あ、あの!?!」

「ん？」

終は後ろを見ると少女を見た。

「有り難う御座います！！」

「ああ、別に良いよ。最近さあ、一夏が、ああ友達ね」

「一夏さん！！」

「って、知ってるの？」

終が聞くと少女は頷いた。

「あ、名前まだでしたね。五反田蘭です。あなたは？」

「黒谷終。そろそろ行くね」

「えっ？」

「いや、昼だし」

終が時計に指を指すと時計の針は午後十二時を回っていた。

「お礼もしたので、家に来ませんか？」

「定食屋か」

終は辺りを見渡していると蘭がトンカツ定食を持ってきた。

「トンカツ定食です」

「有り難うって、何で胡麻が付いてるの？」

「えっ？」

蘭は終の言葉を聞いて啞然としていた。

「あの、胡麻、擦らないんですか？ ソースにかいたりしますが」
「へえ〜」

そう言って終は高速で胡麻を擦り始めた。

「・・・」

終は高速をソースと和えてトンカツにかけて無言で食べた。

「うん。美味しい」

「／／／」

終は蘭に向かって微笑むと蘭は顔を赤くした。

「本当に、美味しい」

終はトンカツは食べ進めていった。

「世話になったな」

「いえいえ、また、来て下さい」

「ああ、また来るよ」

終はそのまま帰路についた。

「格好いいな、終さん」

蘭は終の後ろ姿に見とれていた。

終は夜、IS学園の食堂で珈琲を飲んでた。

「ふう、これこそ」

「祝福の一時って？」

「そうそうって、えっ？」

終が後ろを見ると楯無が居た。

「た、楯無！？」

「さあ、私の部屋に、」

「行かねえ」

「即答！？」

終はそのまま部屋に戻った。

超特別編 黒谷終の華麗？なる一日（後書き）

感想を待っています。

ブレイブファンゲ(前書き)

終のブラックファンゲに変化が!!

ブレイブファンク

「・・・」

楓はまるで死んだように眠っていた。

「楓、何で」

シャルは楓の手を握り暗い顔をしていた。

「守るって、言ったのに、しゅめんね」

シャルの目から涙が出た。

終、タクミ、夜明の三人はクロスナイトとファーストに囲まれていた。

「見つけた」

「ちっ」

終が舌打ちをすると終はブラックファンゲ、夜明はレイジングウイングを展開しタクミはファイズに変身するとファイズと夜明はクロスナイトに向かい終はファーストと対決した。

終はハデスを振るいファーストは大剣で受け止めた。

「ぶっ！！」

「くっ!？」

終は力付くでファーストは飛ばすとファーストは体制を立て直し終に切りかかると終は片手でハデスを持ち受け止めるとケルベロスをファーストの腹に当てるとファーストは終を蹴り距離を取った。

「いい加減、面倒だな」

終はハデスとケルベロスを上に投げオルトロスを出すとそれも上に投げて呟いた。

「ブレイブファング」

終が呟くとハデス、オルトロス、ケルベロスが変形しオルトロスとケルベロスは長刀になりハデスの刃が左腕に付きブラックファングは赤に変わった。

「!？」

「行くぜ」

終が消えるとファーストは辺りを見渡すがいきなり背中を蹴り飛ばされて後ろを見ると終が長刀を回していた。

「ちっ」

「はあああ！！」

終は長刀を思いっきりファーストに振り下ろしファーストは大剣で止めるが大剣が真っ二つに折れた。

「退く」

ファーストはその場を離れると終は地面に降りてブレイブファングを解除した。

「はあ、はあ、はあ、疲れた」

終は空を見上げて呟くと後ろからタクミと夜明が走ってきた。

「大丈夫か終!？」

「一人だったけど!！」

「疲れたから寝る」

そう言って終は眠った。

楓は静かに目を開くと目の前に鈴、シャル、ラウラがうたた寝をしていた。

「皆さん」

楓は立とうとするが尻餅を付いた。

「あっ」

「ん？ 楓、起きた……の……か？」

鈴、シャル、ラウラは目を覚ますと楓が尻餅を付いていて脚を開いた状態だった。つまり、M字開脚の状態だった。

「あっ／／／」

楓はそれに気付いて脚を閉じた。

「」「」「」
「……」「」「」

その場に気まずい雰囲気 flowed。

「皆さんのえっち」

楓は身を披らせて三人を見ると三人は顔を赤くして目を反らした。

ブレイブファンゲ(後書き)

感想を待っています。

悪夢（前書き）

うん。大変だぜ

悪夢

楓が目を開けると辺り一面火の海だった。

「何、これ？」

楓は辺りを見るが火が燃え上がる一方で生存者の気配がなかった。

「これは、一体きやあ!？」

楓は何かに躓きそれを見ると

「嘘、セシリア、さん？」

楓の目に映ったのは血塗れのセシリアだった。

「何で？ 何で」

楓が別の場所を見れば鈴、シャル、ラウラ、終がセシリアと同じように血塗れで倒れており一夏と算は手を繋いだまま倒れていた。

「誰、が？」

「あなただよ」

楓が後ろを見ると少し小さい楓が笑みを浮かべていた。

「これやったの、ゼーんぶ、あなた」

「違う」

「違うよ」

小さい楓は楓の顎を掴んだ。

「あなたがみんな、殺しちゃったんだよ」

「私じゃ、ない」

「思うのは勝手だけど、事實は、あなたが殺した」

「いやあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

楓は頭を抱えて叫んだ。

楓は慌てて起き上がり辺りを見渡すと建物内で鈴、シャル、ラウラ、太陽が眠っており初めて夢だと気付いた。

「はあ、はあ、はあ、あれは、一体」

楓は汗を拭いてまた眠りについた。

終は起きるとタクミと夜明も眠っているのを確認すると跳ね起き辺りを見渡した。

「そろそろ朝か、随分寝たな」

終は首をゴキゴキ鳴らした。

「ん？ ああ、お早う」

「ああ、お早う。タクミ」

「ん？ 朝か」

「よう、夜明」

夜明も起きると三人は移動を開始した。

楓は暗い顔をしながら一人で空を見ていた。

『どうしたの？ 楓』

「桜さん」

桜が楓に話しかけた。

『悩んでいるようだけど』

「・・・何でも、ないです」

楓はそう言い建物内に戻った。

悪夢（後書き）

感想を待っています。

感じる恐怖

楓、鈴、シャル、ラウラ、太陽は歩いていたが楓は四人から距離を取っていた。

(ねえ、僕等楓に何かやった?)

(お前等、まさか)

(違うからな。違うからな)

(ええ、違うわ。もっと場所を選ばわよ)

三人の台詞を聞いた太陽は溜め息を吐いた。

「あの、少し顔洗ってきますね」

「お、おい！ って、もう行ったか」

楓はその場から離れていった。

楓は水辺で顔を洗っていた。

「はあ、はあ、はあ、あの夢は、一体、何？」

楓が水辺で顔を洗っていると物陰から椿が鞘に入った刀を楓の首に叩きつけた。

「うっ!？」

楓は気を失うと椿は刀を抜き楓の首に突き付けた。

「・・・」

椿は楓を見下ろし首に刀を刺そうとしたが自分の胸にルシファーが突き付けられていた。

「何か用かしら？」

「貴様、一体何者だ!？」

「椀よ。楓のもう一つの人格の」

「二重人格、か」

椿は椀の首から刀を離すと椀のルシファーを離した。

「それにしても、物好きね。この子を殺そうとするなんて、命知らず?」

「悪いな。こつちにも事情があるんだ。その命、貰い受ける!」

椿は刀を振るうと椀もルシファーで応戦した。

「ちっ!？」

「あらあら、つまらないわね」

椿と椀はお互いに刀をぶつけ合うが椀の方が勝っていた。椿と椀はお互いに刀をぶつけ合うが椀の方が勝っていた。

「さあ、終わりにっ!?!?」

樫はルシファーを振り下ろそうとしたが突然頭を押さえ始めた。

(何、これ!?!?)

樫は一度地面に倒れたがルシファーを杖にして立ち上がった。

「終わりだ」

樫は樫の首に刀を当てようとしたが樫はルシファーで刀を弾いた。

「ぐっ、あああああああ!?!?!?!?」

柩は頭を押さえて倒れた。

「本当に、終わりだ。音梨楓」

椿は楓を仰向けにして胸に刀を当てたがワイヤーブレードが椿の持っている刀に巻き付いた。

「……」

「貴様、何者だ？ 楓に何をした？」

椿が見るとシュバルツェア・レーゲンを展開したラウラが居た。

「ふっ！！」

椿は力付くでワイヤーブレードを振り解きその場から立ち去った。

突然のことに驚くラウラだが楓は睨り泣いていた。

「怖いんです」

「えっ？」

「私、誰かを、傷つけそうで、怖いんです」

楓の声が震えておりラウラは静かに聞いていた。

「皆さんを、傷つけそうで、私、どうしたら」

「私が受け止める」

「えっ？」

楓が顔を上げるとラウラが優しく微笑んでいた。

「私が楓の気持ちを受け止める。だから、安心しろ。必ず守る」
「うつ、うわあああああああ！！！！！」

楓は大声で泣いていた。

終、タクミ、夜明は道なき道を歩いていたが終とタクミ、夜明の距離が離れていた。

「終、お前、早すぎる」

「そうか？」

「そうだよ」

終の歩くペースは二人を置いて行くほど早かった。

「何でそんなに早いんだ？」

「爆睡したから、だな」

「そう。じゃ、行こう」

終達はまた歩みだした。

「落ち着いたか？」

ラウラが楓に聞くと楓は静かに頷いた。

「なあ、楓」

「何ですかっ!？」

楓がラウラを見るとラウラは楓の唇を自分の唇で塞いだ。

「ん……んむ……んぐ／＼／」
「んん……ん……んむ」

ラウラは自分の舌で楓の舌を舐め回した。

「ぶはあ、私の気持ち、気付いてくれたか？」

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ／＼／＼」

「やりすぎたか？」

ラウラが言うが楓は顔を赤くして息を切らしていた。

「行こうか？」

「あっ、はい」

ラウラは楓に手を貸して鈴達のもとに戻っていった。

「・・・」

セシリアは突然持っていた木をバツキと音を立てて折った。

「うわぁ！？ とうしたんだよセシリア」

一夏がセシリアに聞くと目が笑ってない笑顔で言った。

「何でもありませんわ」

それを見た一夏達は絶句した。

「うふふふ（楓さんに会ったら、先ずは、お久しぶりのキスを）」

セシリアを見ていた一夏達は恐怖を感じた。

「何だろう。凄く、歪んだ感情を感じる」
「何それ？」

終が突然空を見て呟くとタクミ、夜明は不思議に思っていた。

「あっ、戻ってきた」

「本当だ。それにしても、遅かったね」

「確かに、遅かったな」

「色々あったんだ」

「はい。」心配をお掛けしました」

楓は頭を下げたが四人と共にまた歩きだした。

感じる恐怖（後書き）

読んだら感想下さいキラ!!

うん。気持ち悪!!

予感（前書き）

今回はこれからのストーリーの主要人物が現れます。

予感

「ふうー。大体回復したわね」

椛は精神世界で手を握ったり開いたりしていた。

「デュアルムーン。やっぱり危険ね。使わせないために、全部消してやるわ。うふふふ」

椛は狂気じみた笑顔を浮かべてこれから自分がやるうとしていた事を想像していた。

楓が空を見ていると鳥が飛んでおり羽根が落ちてくると楓は手を広げてそれを掴んだ。

「・・・鳥の、羽根」

楓はまた空を見ると青空が広がっていた。

（自由、の、羽根）

楓は羽根を地面に落とすと空に手を伸ばした。

「どっしたのよ。楓」
「鈴さん」

楓が振り向くと鈴が居て微笑んでいると楓は鈴と一緒にシャル達の元に戻っていった。

「あゝ、何だろ。翼が欲しいな」

「おいおい。いきなりなんだよ」楓が振り向くと鈴が居て微笑んでいると楓は鈴と一緒にシャル達の元に戻っていった。

「あゝ、何だろ。翼が欲しいな」

「おいおい。いきなりなんだよ」

「確かに、何で？」

終が呟くと夜明とタクミは不思議に思っていると終は空を見上げながら言った。

「いや、自由に飛びたいな。そう思ってな」

終は空を微笑みながら言うと立ち上がり三人はまた歩きだした。

「はあ、最悪だ」

「言うなよ。翔太郎」

「何か、泣きたい」

「泣くなよ。一夏」

「ストレス発散ですわ」

一夏達の前にクロスナイトが数体現れると一夏達はISを展開し翔太郎とフィリップはダブルに変身した。

「『うおおおおおおお！！！！！！！！！！！』」

「『はああああああああ！！！！！！！！！！！！』」

ダブルはクロスナイトを蹴り一夏は雪片でクロスナイトを切り篋も雨月、空裂で切りセシリアはスターライトmk?で打ち抜いている

とクロスナイトの一体が箒を攻撃しようとしたが雪片によって切り飛ばされた後雪羅のエネルギー爪でクロスナイトを突き刺すと一夏はもの凄い形相でクロスナイトを見た。

「てめえ等、俺の箒に何しようとしてんだ？」（）（怖っ！？）（）
「お、俺のって、恥ずかしいぞ。一夏／＼／」

一夏がドスの入った声で言うとセシリア達は脅え、箒は顔を赤くした。その後数秒でクロスナイト達は跡形もなく消された。

楓達の世界でIS学園が見えるビルの屋上に一人の男が居た。

「獣達の戦いが、世に終わりをもたらすとき、暗き空より女神が舞い降りる。光と闇の翼を広げ、祝福へと導く『贈り物』と共に」

男はそう言った後IS学園を見下ろしていった。

「ゼロ。お前はそっちの世界で生きていけるか？」

それだけ呟くと男は屋上を離れた。

「!？」

場所は戻り終はいきなり振り返った。

「どうした？」

「何でもない。進もう」

夜明が聞くと終は歩きだしタクミと夜明は顔を見合わせた後終に付いていった。

予感（後書き）

男の意見はファイナルファンタジークライシスコアのジェネシスを金髪、青目にした感じだ。

感想を待ってます。

動き出す歯車（前書き）

男は長編終了後に出番が増えます。

動き出す歯車

終、タクミ、夜明は歩いていると終はタクミが押しているオートバジンを見た。

「なあ、オートバジンって、ファイズエッジしかないのか？」
「いや、他にも色々あるよ」

タクミが言うと三人は止まりオートバジンの説明を受けること数分。

「成る程」「
「うん。まあ、あまり使わないけど」

タクミが説明した後終は地面に寝そべった。

「深淵の謎 それは女神の贈り物 我等は求め 飛び立った さま
よい続ける心の水面に かすかなさざ波を立てて」
「？」
「」

突然何かを言い出した終にタクミと夜明は不思議に思った。

「零」

終の最後の眩きは二人には聞こえなかった。

「・・・」

楓はポーツと空を見上げていた。

「どうしたんだ？ 楓」

「・・・ラウラさん。何でもないです」

ラウラが聞くと楓は心ここに有らずと言った感覚で返した。

「楓？ どうしたんだ？」

ラウラは心配そうに楓の背中を見ていた。

「君よ 因果なり 夢も誇りも すでに失い 女神ひく弓より 人
でに矢は放たれて いざ語り継がん 君の犠牲 世界の終わり
知れず水面をわたる風のごとく 緩やかに 確かに」

男は林檎を持ちながらIS学園を見下ろし林檎を一口食べた。

「君よ 希え 命はぐくむ女神の贈り物を。さあ、女神の贈り物を求めろ。祝福の贈り物を、俺達なら出来る。ゼロ」

男は林檎を上に入れてまた食べた。

一夏は不意に空を見上げると羽根がゆっくりと落ちと来ると一夏は羽根を目で追って羽根は地面に落ちた。

「・・・」

一夏は羽根が落ちると顔を上げた。

「・・・」

一夏が空を見たとき鳥一匹も居なかった。

「何だったんだ？」

一夏は下に目を向けると羽根は何処かへ飛んでいった。

歯車が動き出した。静かに、確かに

動き出す歯車（後書き）

感想を待っています。

三色の羽根（前書き）

プロジェクトゼロの成功体は終だけではなかった。

三色の羽根

「なあ、終」

「何だ？ 夜明」

「あれ何だよ」

「あれ？ ああ、あれか」

「一体何なのあれ？」

夜明の突然の問いに終は思い出したように頷きタクミが聞いた。

「あれは、俺の嘗ての相棒、零がよく言っていたんだ。だから頭に染み着いてな」

終は苦笑いすると二人もつられて苦笑いした。

「惜しめない祝福とともに 君は女神に愛された 世界を癒す 英雄として。ゼロ、いや、黒谷終。忘れてないよな。クリムゾンファング」

男、零は赤い翼にレイピアを装備したIS、クリムゾンファングを展開するとその場から飛び去り零が居た場所に赤い羽根が舞い落ちた。

「三人の友は戦場へ 一人は捕虜となり 一人は飛び去り 残った一人は英雄となった」

「英雄か、何か凄いな」

「飛び去る、か」

「ああ、一人は捕虜、一人は放浪、残りが英雄」

終が空を見上げると黒い羽根がゆっくり落ちてきた。

楓、鈴、シャル、ラウラ、太陽は歩いていたら楓は何も言わずひたすら歩いていた。

(おい、楓はどうしたんだ?)

(分かんないわよ)

(それだったら苦労もしないよ)

(ああ、確かに)

鈴達は楓の背中を黙ってみた。

その頃、楓は精神世界で椀と向き合っていた。

楓は悲鳴に似た叫びをあげた。

「復讐にとりつかれたる我が魂 苦悩の末たどり着きたる我が願望
は 我が救済と 君の安らかな眠り」

終は手を上にはげると立ち上がり二人と共に歩き出した。

「
・・・
」

楓は不意に空を見上げた後楓の目の前に白い羽根が舞った。

「楓。どうしたんだ？」
「
・・・
」

楓はラウラの問いには答えず首を横に振りまた歩き出した。

三色の羽根（後書き）

プロジェクトNと楓の関係は？
終と零の過去は？

それは何時か

感想を待っています。

プロジェクトノヴァ（前書き）

大変なことになってしまった。

プロジェクトノヴァ

楓は歩いていると突然俯いた。

「楓？」

「どうしたの？」

「具合でも悪いのか？」

ラウラが近付くと楓でルシファーを取り出しラウラを切るつもりがラウラは間一髪避けると四人は身構えた。

「楓、一体何を！？」

「ぎくんねん。椀でした」

「椀、何のようだ。急いでるんだが」

椀は笑みを浮かべると自分の唇に指を当てて言った。

「取り合えずさあ……………全員死んでくれない？」

「……………！？」

椛は狂気じみた笑みを浮かべたまま言ったが四人はその笑みに恐怖を感じた。

「あれ？ 怖い？ クスクスクス」

椛がダークムーンを展開すると鈴は甲龍、シャルはラファール・リヴァイブ・カスタム？、ラウラはシュバルツェア・レーゲン、太陽はバルディツシュトワイライトを展開した。

「楽しませてよね？ アハハハハハ」

椛は狂気じみた笑みを深めていった。

終は立ち止まるといきなりハデスを取り出した。

「「えっ!?!」」

タクミと夜明は終の行動に驚いたが終はハデスの刃に光を反射させると呟いた。

「ハデス、ブレード」

終が呟くとハデスが鎌から剣に姿を変えると終はハデスの腹に額を付けた。

「夢を持って」

「「?」」

終はハデスから額を放すと突然呟いた。

椛はラウラが放つレールカノンを受けながら笑いながら近付く。

「ちっ!?!」

太陽は振り下ろされたルシファーをオールデリートとライオンハートを交差させて防いだが椛に腹を蹴られると鈴が龍砲を椛に放ったが椛は体を回転させてルシファーで切り裂いた。

「強すぎでしょ!?!」

「口じゃなくて手を動かせ!?!」

鈴が言うとラウラが言いシャルがアサルトライフルで撃つが椛はそのままシャルに向かう。

「シャルロッド!?!」

鈴は双天牙月でルシファーを受け止めたが椛は鈴の頭を掴みラウラ

に向かって投げつけるとシャルを蹴り飛ばすとポセイドンを取り出し太陽に向かってポセイドンを投げつけた。

「くっ!？」

太陽はポセイドンを避けると椀は太陽の首を掴んで投げ飛ばした。

「終わり? だったら止め」

四人は椀を見たが椀はいきなり目を見開いて頭を押さえた。

「うっ、があ、ぐう、ああ」

椀はそのまま気を失い四人は慌てて近付いた。

「何で邪魔するの？ 楓」
「.....」

椀が悲しそうに言うと楓は俯いた。

「何で？ 私達、いや、あなたは選ばれた存在。プロジェクトN、プロジェクトノヴァによって創られた最強の存在。あんな奴らに構わないで良いわよ」
「けど、私」

楓が何かを言おうとするが椀が楓の唇に指を当てた。

「あんな奴らに構わないで.....私だけを見て、私があなたを守るから、だから私だけを見て」
「椀さん」

椛は悲しそうに楓に言つと楓は静かに椛を抱き締めた。

「楓、ずっと一緒に居て、私を見て」

椛が言つと楓は静かに頷いた。

「深淵の謎 それは女神の贈り物 我らは求め 飛び立った さま
よい続ける心の水面に かすかなさざ波を立てて」

零は空の上から夕日を見て言った。

「待っているぞ。ゼロ。いざ語り継がん 君の犠牲 世界の終わり
人知れず水面をわたる風のごとく 緩やかに 確かに」

零は不適に笑いながら進んでいった。

プロジェクトノヴァ（後書き）

桜はただ楓が好きなお女です。

感想を待っています。

暴走スイッチ（前書き）

終の暴走

暴走スイッチ

「ちっ、囲まれた」

終、タクミ、夜明が周りを見るとクロスナイトに囲まれており終と夜明はISを展開してタクミはファイズに変身した。

「行くぞ!!」

「仕切るな!!」

「関係ないでしょ」

夜明はウィングスターでクロスナイトを撃ち抜いていきファイズは殴り飛ばし終はハデスをブレードにしてクロスナイトを叩き切った。

「はああ!!」

終は体を回転させてクロスナイトを切るともう一機のクロスナイトが終を殴り飛ばした。

「がつ!?!」

「終!?!」

二人が終に駆け寄り寄ろうとするが終から異常な殺気が放たれていた。

「ブチ・・・・・・・・殺す!?!」

終は瞬間加速でクロスナイトに近付くがそのスピードは異常なほど速かった。

「ブチ壊れる!?!」

終はハデスを振り下ろしクロスナイトは剣を交差させて止めようとするが剣ごと切られ更に終はケルベロスを乱射してクロスナイト達のコアを破壊すると最後の一機を殴って破壊した。

終はいきなり殴り飛ばされて反応できず頭を強打した。

「あれ？ このパターンは」

「記憶を失うのが定番だよな」

二人が冷や汗をかいていると終がムクリと起きあがった。

「あゝ、大丈夫か？ 終」

「ここは、何処だ？ 俺は、一体」

「記憶を失った！？」

二人があたふたしていると笑い声が聞こえてみると終が腹を抱えて笑っていた。

「えっ、何で笑ってんの？」

「お前等の反応が面白かった」

「使徒再生して良い？ 良いよね」

タクミがもの凄い形相で終を見ておりそれを宥めるのに数分かつた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、疲れた」

「誰のお陰だ」

終と夜明は息を切らしているとタクミが聞いた。

「あれも演技？」

「いや、あれは違う」

あれとは終が圧倒的な強さでクロスナイトを破壊したやつだった。

「演技じゃねえよ。あれは暴走スイッチが入ったんだ」
「暴走スイッチ？」

二人が疑問に思っていると終は自分の頭を指で突っついた。

「俺達の頭の中には暴走スイッチがあるんだ」
「俺達？」

終の発言に夜明は疑問に思った。他に誰が居るんだ？ と思っていた。

1445

「俺ともう一人、零にだ」

二人は終の発言に納得した表情をした。

「たまに入るんだよ。暴走スイッチが」

二人は考えた。つまり終は何時も暴走する危険性があると、当の本人は空を見上げていた。

暴走スイッチ（後書き）

感想を待っています。

合流（前書き）

やっと合流した。

合流

鈴、シャル、ラウラ、太陽は楓を背負いながら歩いていた。

「楓」

シャルは心配そうに楓の手を握るが楓は目を瞑ったままだった。

「全く起きないな」

「何だよ」

「知る訳ないだろ」

太陽が楓を見て呟くと鈴が疑問を言いラウラが即答した。

「はあ、楓。僕が守るって言ったのに、なのに」

「シャルロット。だったら私もだ。何が私の嫁だ。まともに楓を守ってやれないのに」

「ホントね。私達、何も分かってなかったわね」

三人が暗い顔をすると太陽も黙り込んでしまい暫く沈黙した。

「はあああああああああ」

セシリアは深海に届くぐらいの溜め息を吐いた。

「どうした？ セシリア・オルコット」

「いえ、何でもありませんわ」

フィリップが聞くとセシリアは返すとまた溜め息を吐いた。

「大丈夫じゃないな」

「確かにな」

一夏は箒に膝枕をして貰いながらセシリアを見た後箒を見た。

「ん？ 何だ一夏」

「いや、綺麗だなって思ってたよ」

「全く。お前は／＼／」

一夏が言つと箒は顔を真っ赤にした。因みに翔太郎はそんな二人を見て自分達が訪れた世界の一人の少女のことを思いだしていた。

（はあ、会いたいな。けどどうやって行くんだ？ 朱湊、会いたい）

翔太郎は一夏と箒の二人を見て羨ましがっていた。

「カオスプロジェクトZ、俺とゼロを作り出し、カオスプロジェクトNは完全はモンスターを作り出した」

零は林檎を口に含みながら呟き資料を見ていた。

「さあ、楽しみにしているぞ。女神の贈り物を」

零は不適に笑い林檎を食べた。

鈴達は歩いているとクロスナイトに囲まれた。

「こんな時に」

【サイクロン！】 【ジョーカー！】

フィリップが倒れて翔太郎の体に装甲が纏いダブルCJに変身するとクロスナイトに指を指す。

「『さあ、お前の罪を数えろ！！』」

ダブルCJはクロスナイトを殴り飛ばし一夏は雪片と雪羅でクロスナイトを切り筋は雨月、空裂でクロスナイトを切るとセシリアはスターライトmk?で撃ち抜きダブルCJはヒートメモリのスイッチを押した。

【ヒート！】

ダブルCJはサイクロンを抜いてヒートメモリを入れた。

【ヒート！】 【ジョーカー！】

ダブルHJはヒートメモリをマキシマムスロットに入れた。

【ジョーカー！ マキシマムドライブ！】

「『ジョーカーグレネード！！』」

ダブルHJの右手に赤い火、左手に紫色の火を纏うとダブルHJは半分になり交互に殴った。

「終わりだな」

『ああ、終わったね』

一夏達がISを解除するとダブルHJも変身を解いて翔太郎とフィリップになると鈴達と向き合った。

「お前等、誰だ？」

「俺は、いや俺達は」

「二人で一人の探偵だ!!」

鈴達と一夏達が合流すると少しだが楓も目を開いたが直ぐに閉じた。

合流（後書き）

感想を待っています。

世界と出来事（前書き）

さあ、大変だ

世界と出来事

「成る程。大体分かった」

リボルギャリーの中で自己紹介をした翔太郎、フィリップ、太陽が
周りを見ると

「フフ。楓さん」

「セシリア、あんたそろそろ離れなさいよ」

「そっだよ。離れてよ」

「さもなくば。強制的に離れさせるぞ」

「今まで一緒に行らしたから良いじゃないのですの」

まだ眠っている楓に抱き付いているセシリアを羨ましそうな目で見
る鈴、シャル、ラウラそして一夏の胸を枕にして眠っている篤、そ
れを微笑みながら見て篤の髪を掻き分けている一夏。

「いい加減離れなさいよ」

「そっだよ。離れてよ」

「強制的に離す」

「良いですわ。二度と口が聞けないようにして差し上げますわ」

「お、おい!!! こんな狭い場所で」

ISを展開しそうな勢いのセシリア達を見た翔太郎は止めようと思
ったが

「お前等黙れ。箒が起きるだろ。後暴れたら肉片にするぞ」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

一夏がセシリア達を睨み付けるとセシリア達は黙り込み物凄い威圧
感を放つ一夏を見ていた翔太郎、フィリップ、太陽も黙り込み一夏
はまた箒の髪を掻き分け始める。

(こっちの一夏はある意味最強だ)

この時全員に“一夏はある意味最強”説が経ったのは言うまでもな
い。

「ねえ、楓。あいつ等のことほっとこごうよ」
「けど、椋さん」

楓と椋は精神世界で向き合っていた。

「私達が本気を出せば世界を好きなように出きる」
「けど、そうなる確証は、ないんですよ」
「それを証明するの。私はあなた以外要らないから、だから傷付かないように世界を消そう」
「私は、そんな事」

椋は楓に世界を消すように言うが楓は迷っていた。楓はそんな事自体考えたこともなかった。

「楓がやらないなら私がやる。二度とあなたを傷付けない。そんな事をする奴なんて消されても文句は言えないわよ」
「そんな事、きつとないですよ」
「そんな訳ない。あいつ等何時も愚かなのよ。変わるはずない」

「きつと、変わりますよ」

「ないわね。変わってたらこんなこと考えないわ」

楓は栞に人は変われると言つが栞はそれを否定していた。

「でも、私」

「楓は優しいからね。だから私がやる。終わった後に出てくれば良い」

「やめて下さい。栞さんは本当は優しいから、そんな事やめて下さい！！」

楓が力強く言つが栞はそんな楓を見て栞は楓を抱き締めた。

「心配する必要はないわ。私が楓を守る。それは絶対に変わらない。それと」

栞は楓の耳元で囁いた。

「デュアルムーンは使わないで、確かに強いけど楓が壊れちゃう。」

私のダークムーンで充分あなたを守れる」

デュアルムーンは強力だがそれだけ負担がかかる。

「けど私は」

「確かにエターナルムーンとダークムーンは性能は同じ。けど必ずあなたを守ってみせる」

桜は楓を抱き締める力を強くした。

「……」

終、タクミ、夜明はある建物の前に居た。

「テレビ局とか」

「ああ、確かに」

「なら話が早い。入るぞ」

三人はテレビ局らしき建物内に入っていった。

「それにしても、散らかってるな」

「見て分かる」

終の眩きにタクミと夜明は突っ込みを入れた。入って数分歩いてい
るが特に何もなく辺りを見渡していると光が漏れている部屋を見つ
けて中に入った。「成る程、これは助かる」

三人が見た物は数多くのパソコンだった。終はその一台を操作し始

めた。

「楓、私は楓を大事に思ってる」

椀が言うと楓は頷いた。

「大切だから、私色に染めたい」
「えっ、ひゃあ!?!?!」

椀は楓の耳に自分の舌を入れた。

「も、椀さん!?!?!」
「言ったでしょ。楓を私色に染めたいって」

次に椛は楓の耳を甘咬みをして乳房を揉んだ。

「んん、椛さん、そこは駄目／＼」

「いや、私色に染めるまでやめない」

椛は楓の太股を撫でてそして楓を押し倒す形になった。

「じゃあ、頂きます」

「ひああああん／＼」

楓は椛に体の至る所を舐められた。

「ん、これは」

終はパソコンを操作していてある記事を見つけた。

「これは、まさか!？」

終は画像に写った自分と一夏がISを展開している状態で握手をしている状態を見た。

「おい二人共!!」

「ん、どうした」

「うん。何？」

終は自分の考えを二人に話した。この世界は自分達の世界に似ている世界だが全く違う世界。この世界ではロストが現れる前にモンド・グロツソの優勝者の名前が織斑一夏、その前が黒谷終。二人共総合優勝、ブリュンヒルデの称号を獲得していたことをその後ロストが現れたことも伝えた。

「えっと、つまり一夏がブリュンヒルデになった後にロストが現れたって事か」

「ああ、そうなる」

「でも何でだろ？」

三人は疑問に思いながらその場を後にして合流することにした。

鈴はまだ眠っている楓の頬を触ってみた。

（おお！ マシユマロみたいに柔らかい！！）

一人興奮しているとシャルも楓の頬を触った。

（柔らかいな。和んじゃうよ）

シャルは楓の頬を触りながら気持ちよさそうにしているとラウラは思い切つて楓の太股に触れた。

（ああ、この感覚、癖になりそうだ）

ラウラは楓の太股を触りながら目を瞑っていてセシリアは楓を抱き枕に眠っていた。

「何だろ。あそこだけ百合が見える」

「幻覚だ。そうに決まっている」

フィリップが言うと太陽は思いつ切り現実逃避をし一夏と箒は

「なあ、一夏」

「何だ？ 箒」

「帰ったら、子供は何人欲しいか？」

「ぶっ！？／／／」

第の爆弾発言に一夏は顔を真っ赤にして翔太郎はそんな二人を見て

(青春してるな)

かなり違うことを思っていた。

世界と出来事（後書き）

感想を待っています。

決戦へ（前書き）

決戦前

決戦へ

「んん、んん？」

楓は目を開けるとセシリアの顔が目に入った。

「セシ、リア、さん？」

楓は首を傾げると抱き締められていることに気付くが瞼が重くなる
と再び目を閉じた。

「んん？ ふんあ」

翔太郎は欠伸をすると起きて辺りを見ると自分以外が寝ていることに気が付いたが今更眠れないので起きることにしたがその後にはフィリップと一夏が起きた。

「ああ、お早う。翔太郎。織斑一夏」

「お早う御座います。翔太郎さん。フィリップさん」

「ああ、お早う二人共」

三人は取り合えず挨拶をすると辺りを見た楓を抱き枕にして眠っているセシリア、楓に寄り添うな形で眠っている鈴、シャル、ラウラ、相変わらず寝息を立てている楓。気持ちよさそうに眠っている太陽。そして、一夏の膝を枕にしている筈。

「うん。織斑一夏。君はムカつくね」

「ええ!?!」

フィリップの言葉に一夏は驚いた。

終、タクミ、夜明は歩いていると少し休んだ。

「取り合えず何処に行くの？」

「まあ、感で歩く」

「感でよ」

タクミが聞くと終が返し夜明が苦笑いした。

「何か凄いな。感で動くなんて」

「ああ、そして、囲まれたぞ」

三人が辺りを見るとクロスナイトとファーストが居た。

「ファースト」

「名前、覚えて、たんだ。驚いたよ」

終はブラックファンクを展開し夜明もレイジングウイングを展開するとタクミはファイズギアを腰に巻きファイズフォンを取り出した。

【5 . . . 5 . . . 5 . . . スタンディングバイ】

タクミはファイズフォンを上にした。

「変身!」

【コンプリート】

タクミはベルトにファイズフォンを差し込むとフォトンブラットがタクミの体を包み込みファイズに変身するとオートバジンのハンドルにミッションメモリを入れてファイズエッジを持ちクロスナイトに向かい夜明もスターライザーでクロスナイトに突っ込んで行き終はハデスをブレードにしてファーストに向かいファーストは大剣を取り出しハデスにぶつけて火花を散らした。

リボルギャリー内では楓を除く全員が起きた頃だった。

「何時まで寝てんだろうな」

「さあ、僕に言われても」

翔太郎が楓を見ながら言うとフィリップも首を傾げた。

「で、近くで騒ぎが起きているが」

「マジかよ」

翔太郎達はその騒ぎの元へ向かった。

「ふっ！」
「はっ」

終とファーストはお互いの武器をぶつけ合うと火花を散らし後ろに下がると終はハデスを仕舞いオルトロスを出し逆手に持つと素早く腕を動かしファーストを攻撃するがファーストは大剣を盾にして防ぎ終はオルトロスの柄の後ろ部分を合わせると弓形の剣になりファーストに切りかかるがファーストは大剣を使い弾いた。

「ちっ」
「終わりだ」

ファーストが大剣を振り下ろす前にファーストの大剣に向かって荷電粒子砲が放たれた。

「これって、雪羅・・・一夏!？」
「何だよ。どうゆう顔してるんだよ。終」

終が振り返ると左腕を前につきだした一夏が目に入った。

「はあああああ!!」

「ぐっ!?!」

「箒!!」

次に紅椿を纏った箒がファーストに切りかかりファーストは大剣で防いだ。が勢いを殺せず弾き飛ばされた。

「諦めんなよ、終!!」

「・・・分かってる」

一夏は雪片で雪羅、箒は雨月、空裂、終は合体させたオルトロスツインソードを構えた。

「さあ、ここから本番だ」

終は目の前にいるファーストに向かって言った。

「流石にキツいね」

「確かに、体力が保たないな」

ファイズと夜明はクロスナイトの多さに苦い顔をしていた。

「情けないな。夜明」

「た、太陽!？」

『諦めるな。仮面ライダーファイズ』

「ああ、その通りだ」

「仮面ライダー、ダブル」

ファイズと夜明の元に太陽、ダブル、セシリア、鈴、シャル、ラウラが来るとセシリアはスターライトmk?でクロスナイトを正確に打ち抜き鈴は双天牙月、ラウラはプラズマ手刀でクロスナイトを切りシャルはアサルトライフルでクロスナイトを撃ち太陽はオールデ

リートとライオンハートでクロスナイトを切り裂きダブルはクロスナイトを殴ったりしていた。

「一気に行くっ！」

ダブルはジョーカーメモリをマキシマムスロットに入れファイズはファイズポインターにミッションメモリを入れて右足に付けてエンターキーを押した。

『エクシードチャージ』

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

ファイズはクロスナイト向かい円錐で拘束して同時に飛んだ。

「『ジョーカーエクストリーム！！』」

ファイズはクリムゾンスマッシュ、ダブルはジョーカーエクストリームをクロスナイトに叩き込み夜明と太陽はスターライザーとオー

ルデリート、ライオンハートでクロスナイトを貰いた。

「「「はああ！！」」」

三人はファーストに向かってオルトロスツインソードと雪片、雨月、空裂で攻撃したがファーストは大剣で防ぐが一夏と箒が前に出て攻めるがファーストは大剣で防いでいたが終はオルトロスツインソードを構えるとオルトロスツインソードが黒く光りファーストに向かって一夏と箒は飛び退くと終はファーストを横一閃で切り裂くと大剣ごと装甲に切り傷が付いた。

「ちっ、どうして」

「さあな、何で強いのか、分からないんだよ」

終はオルトロスツインソードを肩に担ぎファーストを見るとファーストはその場から飛び去ったが終は地面に落ちているUSBメモリ

を手を取った。

「成る程な。本拠地が分かるな」

「マジか!？」

終が咳くと一夏は驚き箒も目を見開いていた。

「じゃ戻ろっぜ」

「? ああ」

終は一夏と箒の後に付いて行った。

リボルギャリー内では取り合えず自己紹介が終了しUSBメモリを元に終、太陽、フィリップが調べていた。

「よし。ここから北北東三キロ」
「すぐに向かおう」

リボルギャラリーを向かおうとすると楓が目を開けた。

「皆、さん？」
「「「「「「「「「
楓^{さん}！？」「「「「「「「

楓が目を開けると一夏達は驚き目を見開いた。

「ここは」
「リボルギャラリーの中だ」
「リボル、ギャラリー？」

楓に取り合えずの説明をした後リボルギャラリーを北北東三キロ地点に向かった。

決戦へ（後書き）

感想を待っています。

PV十万突破記念と言つ息抜き(前書き)

タイトルの通りです。

PV十万突破記念と言つ息抜き

楓「祝、PV十万突破記念!!」

全「「「いえ〜い!!」」」

楓「何だかんだでPV十万突破ですね」

セシ鈴シャラウ（）（）か、可愛い。ジュルリ（）（）

篝「何か、恐ろしいことが」

一夏「ああ」

終「さっさと進めるぞ」 オルトロスツインソード装備

全「「「はい」」」

終「今回はPV十万突破記念と言う息抜きだ」

一夏「何時も大変だったからな」

箒「主に楓な」

楓「はい。何度か死にかけました。」

ラウラ「酷い世界だ」

鈴「そうよね」

シャル「楓を狙うなんて」

セシリア「守れなかったのは誰ですの？」

鈴「シャルラウ」「……」「」

楓「落ち込まないで下さいね。」

終「所ですよ。アニメISのオープニングのあれ、一夏が飛び出すあれ」

一夏「ああ、あれか」

篤「それがどうしたんだ？」

終「あれ、遅れたら」

終妄想

一夏が海に向かって飛び出しそのまま落ちていき

終「水死体として発見された」(ああ、皆さん何を!?)

一夏「怖っ!!」(ああ、そこは、駄目です!!)

篤「何故そうなる!?!」(ひゃあ、気持ち良く、なっちゃいますよ!!)

終「何となくだ」(あー!?!?)

一夏「何となくで殺すな」 雪片装備

終「はい」

楓「ひびっ、びびっ、びびっ、酷いですよ」

セシ鈴シャラウ「……」

終「……話題を変えるがオープニングで鈴はあまり目立ってないよな。最後」

鈴「それは言っな」

終「で、鈴が目立つ方法は空に写る鈴」

鈴「待って、何か嫌な予感がするんだけど……」

一夏「鈴」

第「貴様の事は忘れん」

セシリア「私が楓さんと結ばれるのを」

シャル「僕だよ……」

ラウラ「いいや、私だ」

鈴「あんた等、何の嫌がらせ？」

楓「えつと、ごめんなさい」

鈴「楓は謝る必要ないでしょ」

終「さあ、ここからが本番で」

零「取り合えず今後の説明でもしてろ」

楓「どちら、様ですか？」

零「……今後の本編」

一夏「おい」

第「異世界編はそろそろ完結だな」

終「戻るための戦いになるのか？」

楓「それは今後の本編で、では皆さん」

全「「「ばいばい!!」「」」

零「またな」

PV十万突破記念と言つ息抜き(後書き)

感想を待っています。

決戦の時（前書き）

さあ、決戦です。

決戦の時

「ここが敵の本拠地か」

「デカいな」

一行は巨大な建物の前に立っていて終が確認すると一夏はその大きさに啞然としていた。

「進むかって、言いたいところだが」

「ああ、後ろからの歓迎か」

全員が後ろを向くと遠くから見て分かる程のクロスナイトが大軍で来ていた。

「ちて、一仕事しますか」

楓、終、一夏、篤、セシリア、鈴、シャル、ラウラがESを展開し
よじとすが

「お前等は先に行け」

「ここは僕達が食い止める」

翔太郎、フィリップがダブルドライバーを腰に付けた状態で前に出た。

「ちょっと!?!」

「無茶ですわ!!」

「けどやるしかないだろ」

鈴とセシリアが止めようとするが太陽が前に出た。

「太陽!?!」

「何を考えてる!?!」

「勿論、食い止める事」

シャルとラウラが驚いたがタクミがファイズギアを腰に巻いた状態で前に出る。

終は溜め息を吐いて建物の入り口に向いた。

「行くぞ」

「ああ、分かった」

終の言葉に一夏達も入り口に向いてESを展開して突入すると夜明と太陽はレイジングウイングとバルディッシュユトワイライトを展開しタクミは赤いファイズブラスターフォームに変身して翔太郎とフイリップは真ん中にクリスタルサーバーのあるダブルサイクロンジョーカーエクストリーム（以後ダブルCJX）に変身した。

「行くぜ」

『ああ、食い止めよう』

「必ずあいつ等の後を追うぞ」

「約束もしたしね」

「したのか？ まあ、行くぜ!!」

夜明は両手にウイングスターを持ち太陽はオールデリート、ライオンハートを持ちファイズブラスターフォームはファイズブラスター

をブレイカーモードにしてダブルCJXはプリズムソードとビツカ
ーシールドを持ってクロスナイトの軍勢に突っ込んでいった。

楓達は建物内を飛んでいると前方に二つの影が見えて止まった。

「お前、あの時のか」

「覚えてたんだ。あんたをぶっ潰せる」

「フェルナ、少し落ち着け」

「アリスの言う通り。落ち着きましょう」

アリス、エナル、フェルナが九人の前に立ちはだかった。

「取り合えずどうするか」

「お前等は先に行け」

そう言っただけに出たのはラウラだった。

「ラウラ、お前」

「僕もいるよ」

「私もいるからね」

「私を忘れないで下さい」

「シャルさん、鈴さん、セシリアさん」

ラウラに続いてシャル、鈴、セシリアが前に出た。

「皆さん」

「早く行け。何とかするから」

「心配しないで大丈夫だから」

「そうそう、すぐに追いかけるわよ」

「鈴さんの仰るとおりで」

「・・・分かりました。必ずですからね」

楓、終、一夏、箒は先に進んでいった。

「それにしても余裕そうだな」

ラウラはアリス達に目を向けた。

「何、すぐに終わらせる」

「ただし、私達が勝って」

「あなたが負けるけどね」

アリスは身構え、エナルとフェルナはヴァジュラ、ドラグノフを構えた。

「行くよ。みんな」

「ええ、勿論ですわ」

「偶に息が合うわね」

「ああ、偶にな」

ラウラ達もアリス達にぶつかっていった。

四人は進んだ所で二人に向き合っていた。一人はサード。もう一人は椿だった。

「俺、か？」

「ああ、俺は黒谷終だ」

「まさか、お前も」

「ああ、私は篠ノ之箒だ。宜しくな」

サードは白いブラックフアング、エターナルフアングを纏い。椿は白い紅椿、白椿を纏いサードはルシファーとハデスを構え椿は雪片雨型と空裂を構えると終は右手にオルトロスツインソード、左手にハデスブレードを構え箒は雨月、空裂を構えた。

「終さん、箒さん」

「お前等、先に行けよ」

「ここは私達が」

「俺も!!!」

「信じろよ。俺達を、それに」

終はサードを見るとオルトロスツインソードの刃先を向けると箒は

椿を見て雨月、空裂を構えた。

「異世界の自分達の尻拭いは自分達でする」

「・・・分かった。それと終。箒に手を出したら」

「分かってるからな！？ それより怖いから！！」

楓、一夏は先に進んで行くと終はオルトロスツインソード、ハデスを持ちながらサイドに向かい箒も椿に向かって行った。

楓と一夏は扉の前に立つとルシファーと雪片で扉を破壊した。

「騒がしいな」

楓と一夏は目の前にいる男を睨んだ。

「取り合えず、待っていたぞ」

男、キングは二人に向かって威圧感を放っていた。

「お前、何だよ」

一夏がキングを見るとキングは一夏を見て鼻で笑った。

「俺はお前だ」

「まさか、一夏さん？」

「ああ、織斑一夏」

キングが一夏を見ていった後楓が聞くとキングは返し右腕のガントレットに触れた。

「破壊せよ、ゼロ」

キングは漆黒のIS、ゼロを展開して片刃の剣、バスターソードを持った。

「俺がお前達を破壊するか、お前達が俺を止めるか、どっちだ？」

キングがバスターソードを二人に向けると楓はルシファーとゼウスを構えて一夏は雪片と雪羅を構えた。

決戦の時が来た。

決戦の時（後書き）

感想を待っています。

それぞれの戦い（前書き）

色々和不味いかな？

それぞれの戦い

「『『『『うおおおおおおおおお！！！！！』』』』」

地面を走る二つの影と空を飛ぶ二つの影。地面の影はファイズブラスターフォームとダブルCJX。空の影は不屈の翼、レイジングウイングを纏った夜明と黄昏の戦斧、バルディツシュトワイライトを纏った太陽。ファイズブラスターフォームはファイズブラスターブレイカーモードでクロスナイトを切り肩にあるブラッティキャノンを放ちダブルCJXはプリズムソードでクロスナイトを切りクロスナイトの攻撃をビツカーシールドで防ぐ。夜明は両手に持ったウイングスターでクロスナイトを撃ち抜いていき太陽はオールデリート、ライオンハートでクロスナイトを切り裂いていく。

「それにしても数が多い」

『まあ、知っててやってるんだけどね』

翔太郎が悪態を言うとフィリップが苦笑いしながら言った。

「だったら、早く終わられましょーう」

ファイズブラスタースターフォームはクロスナイトを切りつけながらダブルCJXに言った。

「ああ、早く終わらせて追っぞー!!」

太陽はクロスナイトを一気に切り裂いて近付いてきたクロスナイトを蹴り飛ばした。

「だよな！ そうなると無駄口叩かないでやるぞー!!」

夜明はスターライザーでクロスナイトを切り裂いたり貫いたりしていた。

「はあああー!!」

「ふん!!」

ラウラのプラズマ手刀とアリスの爪がぶつかり二人は同時にレールカノンを放った。

「オラア!!」

「やああ!!」

鈴の双天牙月とフェルナのドラグノフがぶつかり合い火花を散らした。

「いっけえ!!」

「ふっ!!」

アサルトライフルを乱射するシャルだがエナルはヴァジュラを回して全て防いだ。

「ブルー・ティアーズ!!」

「「「!?!?!」」」

セシリアはブルー・ティアーズを使い三人を攻撃すると後ろに下がったがそれぞれ追撃を喰らった。

「厄介だな」

「確かに」

「どうする?」

アリスにはラウラ、エナルにはシャル、フェルナには鈴、そのサポートをセシリアがしてセシリアに向かおうとしても三人が向かって来るため難しかった。

「何でこんな時にベルガが居ないのよ」

「用事があるようだが、多分サボリだ」

「はぁ、自覚がないわね」

三人は今ここに居ないベルガの愚痴を言っていたがラウラ、シャル、鈴がそれぞれ向かう。

サードの使うエターナルファンクはエターナルムーンとブラックファンクを合わせて作り、白椿も白式と紅椿を合わせて作られていた。

「流石に、ヤバいな、これ」

「確かに、だが、負けられないぞ」

「分かっている、さっさとあいつ等の元に」

「行くー!!」

終はオルトロスツインソードとハデスブレード、箒は雨月、空裂を構えるとサードはハデスとルシファー、椿は雪片雨型と空裂を構えて向かった。

「うおおおおおおお!!!!!!!!!!!!」

二人は先に行った一夏と楓の後を追うため己の出来る事をしようと力強く武器を振り下ろした。

楓は後ろからゼウスを撃とうとしたがキングは振り向くことなく楓の腹を殴った。

「ぐっは!?!」

楓が壁に激突するとルシファーを杖にして立ち上がり荒い息を吐いていた。

「くっ!?!」

「その程度か?」

「まだまだだ!?!」

一夏は左腕でキングを殴ると荷電粒子砲を放ったがキングは不安定な体制のままバスターソードを振り荷電粒子砲を切り裂いた。

(またか)

「その程度か、織斑一夏」

「舐めるなって、言ったら?」

キングはバスターソードを構え一夏は雪片を構えるとキングの後ろで楓がルシファーを構えていた。

「諦めの悪い奴らだ」

「諦めたら」

「あいつ等に顔向け出来ないんだ」

キングは呆れながら言つと楓と一夏はより強く雪片とルシファーを握った。

「ふん。なら、叩き潰すまでだ」

キングは余裕の笑みを浮かべながら二人を見ていると瞬間加速で近付くと腹を殴り一夏に近付くとバスターソードを振り上げると一夏は雪片を振るい弾くと左腕の雪羅を向けるがキングは一夏の雪羅を蹴り上げ楓は後ろからルシファーを振り下ろしたが逆に掴まれ投げ飛ばされた。

「どつした？　なあ」

キングはバスターソードを肩に担ぎながら二人を見た。

「まだに、決まってるんだろ!!」

「そう、ですよ!!」

二人はお互いの刃をキングに向けるとキングもバスターソードを強く握り締めた。

それぞれの戦い（後書き）

感想を待っています。

止める(前書き)

そろそろ終わり、だと思う。

止める

「くっそ」

夜明は膝を突きながらクロスナイトの大軍を見ていると横で太陽もオールデリートとライオンハートを杖にして立ちファイズやダブルCJXは肩で息をしていた。

「疲れたな」

『ああ、幾ら何でも多すぎる』

「流石に、体力が、保たない」

夜明は再びクロスナイトの大軍を見たが初めて大して変わってなかった。

「どうすんだよ。これ」

夜明が再び立ち上がるとそれに釣られて太陽達も立ち上がった。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

ラウラ達は肩で息をしながらアリス達を見ていた。アリスがセシリアに向かいワイヤーブレードを放ちながら攻撃しているため段々と押され始めていた。

「さて、どうするか。だな」
「ちっ!?!」

ラウラはレールカノンを撃ったがアリスもレールカノンを撃って相殺した。

「その程度？」
「まだまだよ!?!」

セシリア達が居た場所は爆炎に包まれた。

「くっ!?!」

「大丈夫か?」

「ああ、大丈夫だ」

終と篤はサードと椿を見たが二人は余裕の表情で二人を見ていた。

「たく、強いだろ」

「確かに」

「強くて当たり前だから。ブリュヒルデだし」

「IS学園の生徒会長をした」

「マジ」

終と箒はサードと椿の意外な過去に驚いた。

「で、どうする？ 黒谷終」「諦める訳ないだろ」

終はサードに向けてオルトロスツインソードを向けると箒も雨月と空裂を椿に向けるとサードと椿も自分達の武器を向けた。

「終わりにしてやるよ」

サードが呟くとサードはファンゲクラッシャーを発動し椿も零落白夜を発動させた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」
「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

一夏と楓は肩で息をしていた。当のキングは二人を相手してるにも関わらずバスターソードを肩に担ぎながら二人を見ていた。

「その程度か？」

「まだ、だよ」

一夏の姿を見たキングは鼻で笑いながらバスターソードを構えたが楓はあることを聞いた。

「何で、こんな事をするんですか？」

「・・・・・・・・」

楓の問いにキングは黙って耳を傾けた。

「どうしてですか？」

「世界が、俺の大切な人を奪った」

キングは静かに問いに答えると二人は目を見開いた。

「世界は俺の大切な人、音梨楓。お前だ」
「わ、たし？」

キングは楓の名前を言うとバスターソードの刃先を楓に向け楓は驚いた。一夏も啞然としていた。

「そつだ。世界はお前を俺から奪った。その報いぐらい受けて貰うのは当然だ」
「当然じゃねえよ」

一夏はキングを睨みながら言った。

「そんな自分勝手な事でこんな事すんなよ！！」
「お前は分からないのか！？俺なら分かるだろ！！」
「知るかよ！！そんな自分勝手な事言ってるな！！」

一夏はより強く雪片を握りキングを見ると楓もルシファーを握る力を強くした。

「何を言っても分からないか、なら貴様等を破壊する!!」

「来い！ 俺が止める!!」

「私も手伝います!!」

三人は同時に武器をぶつけ合った。

止める(後書き)

感想を待っています。

戦いの終わり（前書き）

決戦はこれで終了、けど、これは決戦。

戦いの終わり

ダブルCJXはプリズムソードでクロスナイトを切り裂くとビツカーシールドで後ろにいたクロスナイトを殴った。ファイズブラスタ―フォーム（以後ファイズB）はファイズブラスタ―でクロスナイトを切ると飛行ユニットで上に上がり降りてクロスナイトを切り裂いた。夜明はウィングスターを放ちながら移動しスターライザーに持ち帰るとクロスナイトを切っていく。太陽も同様にクロスナイトを切っていく。

「フィリップ、どうする？」

『ビツカーファイナルイリュージョンを使いたいが、あの数では』

ダブルCJXの左側の目が光るとフィリップに聞いたが左側、フィリップは苦い顔をした。

「だったら僕が時間を稼ぎます」

「私も付き合っぞ」

「なら、俺はあれをやる」

ファイズBはファイズブラスタ―を握る力を強めるとクロスナイト

を切っていき夜明はウィングスターで確実に撃ち抜きながら一カ所に集めると太陽はクロスナイトを一体一体切っていくとダブルCJXはビツカーシールドにサイクロンメモリ、ヒートメモリ、ルナメモリ、ジヨーカーメモリを入れた。

「『ビツカーファイナルイリユージョン!!』」

ダブルCJXがビツカーファイナルイリユージョンを使うと同時に三人は一気離れると大半のクロスナイトが飲み込まれるが何体か残っていると夜明はクロスナイト達の前に立ちスターライトフルバーストを放ちクロスナイトを織滅した。

「追いかけるぜ」

『ああ、勿論だ』

「早くしましょう」

「分かった」

「急ぐぞ」

ダブルCJX達は建物内に入っていった。

「とつとと行くぞ」

「そうね」

「皆さん、お話はじつまでですわ」

「うん。行くじつ」

「待て」

四人をアリスが呼び止めるとエナルがメモリースティックを投げ渡した。

「何これ？」

「管理室に行つて使えれば分かる。場所は左を曲がった突き当たり」

「……………恩に着る」

そう言つて四人は管理室に向かつていった。

「くっそ」

サードがフアングクラッシャーを発動させたハデスを振るえば終もハデスを振るい今度はルシファーを振るえば終はオルトロスツインソードで弾いた。

「やるな。俺」

「お前もだろっが」

終はハデスで切りかかったがサードはルシファーでハデスを弾くと終の手からハデスが遠くに飛んだ。

「ちっ!？」

終はサードから距離を取りハデスを手に持った。

「し、終!?!」

「ちっ、覚悟は出来てる」

「サード!?!」

サードの前に椿が来ると椿は涙目だった。

「頼む、サードは、サードは殺さないでくれ」

「椿、お前」

「勘違いするな」

終は溜め息を吐きながらオルトロスツインソードを下ろした。

「俺は、いや俺達は帰るために戦ってたんだ。お前等を殺す気はない」

終がそう言つとサードは鼻で笑い終を見た。

「俺とは違うな」

「多分、違っただろうな」

終と等はそのまま飛ぶとサードは椿を見て呟いた。

「強いな、あいつ等」

「ああ、確かに」

サードと椿は暫く終達が飛んでいった方向を暫く見ていた。

キングがバスターソードを振り下ろすと一夏は後ろに下がり楓が切りかかるがキングは体を軸にバスターソードを振り回した。

「ぐわあ!?!」

キングはその体制のまま一夏を蹴り飛ばした。

「!?!」

一夏は左腕を突き出し雪羅から荷電粒子砲が放たれたがキングはバスターソードを下から上に振り荷電粒子砲を切り裂いた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

キングが後ろを向けば楓はルシファーを杖にして脇腹を抑えながら肩で息をされていて前を向けば一夏は雪片を強く握っていたが肩で息をしていた。

「諦めが悪いな。お前等は」
「諦めたく、ないんです」

キングが呆れながら言つと楓は強い意志が籠もつた目でキングを見ていた。

「なら、叩き潰す」

キングはゆっくり楓に近付くが楓はその場から動けなかった。一夏も楓も疲労でその場から動けず楓はキングからの威圧感もあり動けずにいるとキングは楓の目の前に立った。

「終わりだ」

「楓!! くっ!?!」

一夏は動こうとしたが脚が震えて動けず楓も振り下ろされるバスターソードがスローモーションのように迫ってくるのを確認すると目を瞑った。

「・・・・・・・・あれ？」

何時までも痛みが来ないことに疑問を感じた楓は目を開くと精神世界にいた。

「何で、ここに」

「私が呼んだのよ」

楓が振り返るとそこには椀が立っていた。

「椀さん、私に、力を貸して下さい!!」

「・・・・・・・・」

楓が言うと椀は黙って楓を見ていた。

「椛さんの力が必要なんです！ だから「分かった」……」
椛さん

「但し、条件付き」

楓は椛が断らなかつた事に嬉しかったが条件と聞いて首を傾げた。

「簡単だから安心して。私を椛って呼んで欲しい」

「後は、タメ口ですか？」

「分かつてるじゃない。その通り」

楓はその事に俯いたが椛は楓の頭を撫でた。

「今すぐじゃないし、ゆっくりで良いから………お願いね」

椛の言葉に楓は頷いて返した。

キングが後ろを向いたときには既に遅かった。一夏は雪片と雪羅をキングに向かつて振り下ろすとキングのIS、ゼロは解除されるとキングはバスターソードを持って床に膝を突いた。

「何故だ、何故だ。何で俺が負けた」

「一人だからだよ」

キングが顔を上げると既にISを解除した楓と一夏が居た。

「何、だと」

「一人じゃ、出来ないことがあります。けど、誰かがいれば、ゴホ

！ゴホ！」

「誰かがいれば何とかなる」

咳き込んだ楓の背中をさすりながら一夏が言うとキングは一夏に近付くような仕草をした。

「？ 何だよ」

「俺の全て、お前にやる」

「これって」

キングはバスターソードを一夏に渡した。

「そう言う事だ」

「あ、待て!？」

一夏は追おうとしたが肩で息をしている楓が心配になり留まった。

「一夏!!!」

「無事か!?!」

「箒、終!?!」

全速力で終と箒が来ると終は一夏を抱え箒は楓を抱えた。

「ふん。俺は、どうしたら良かったんだ？」

キングはカプセルに入っている女性、楓を見ながら呟くと機械を操作した。

「俺が、やりたいようにさせてくれよ」

「だったら俺も付き合っぜ」

「私もだ」

キングが振り向くとサードと椿が居てキングの隣に座った。

「あいつ等と戦って、良かった」

サードが呟くと椿も微笑んだ。

「ああ、好きな人が居て、幼なじみが居て、友が居た。何処で間違っただろうかな」

「俺が間違えた。こんな事にお前等を巻き込んだ」

「良いよ。最後ぐらい笑おうぜ」

三人は微笑みながら話し合っていると建物が爆発し始めた。

「みんな、無事か」

「何とかな」

終が辺りを見ると一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、夜明、太陽、タクミ、翔太郎、フィリップが地面に座っていた。

「それにしても、助かった」

「ああ、本当だ」

セシリア、鈴、シャル、ラウラが管理室で見つけた情報は建物内に爆弾が仕掛けられていることが判明し連絡を入れ急いで脱出した。

「終わった、のか？」

「それより、楓が眠っているんだが」

一夏が言つと筈が眠っている楓とそれを見ているセシリア達を見た。

「ふふふ」

ベルガは笑みを浮かべながら機械を操作し造られているISを見た。

「さあ、フィナーレだ」

ベルガの笑みが狂気じみていく。

戦いの終わり（後書き）

感想を待っています。

最終決戦（前書き）

最終決戦の開始ですよ。

最終決戦

「ん？」

楓が目を開けるとリボルギャリー内で一夏、箒、セシリア、鈴、シヤル、ラウラ、終、タクミ、翔太郎、フィリップ、夜明、太陽が寝ていた。

「まだ、この世界に」

楓は次目覚めたら戻っていると思ったが実際は戻っていなかった。気分転換に楓は外に出ると日がまだ昇りかけだった。

「んん、気持ちいい」

『早起きは三文の特、ってやつね』

「椋さん、あつ」

楓が椋の名前を言つと言われたことに気付き口に手を当てたが椋は笑いを堪えていた。

『今じゃなくて良いわよ。じゃ、ゆっくりね』

そうやって椀の音が聞こえなくなると楓は空を見上げると何かがあるの凄いいスピードで飛んでいくのが見えた。

「あれは、一体？」

時間も時間なので楓は再び眠ることにした。

それから数時間、全員でどうやって元の世界に帰るかを話し合っていた。

「何時になつたら戻れんだろうな」

「僕等は土さんのお陰で帰れたけど」

「それに、俺達も智春のお陰だったしな」

「ああ、帰れる確率は少ないね」

その場の空気が暗くなった。

「あの、少し良いですか？」

楓が気まずそうに手を挙げると全員の視線が楓に向けられた。

「さっき、西の方向に、何かがもの凄いスピードで飛んでいったんですが」

楓の言葉に終は頷いた。

「なら、西に行くか。手掛かりがそれしかないし」

全員も頷き手掛かりを探すために西へ向かった。

「何だ、ここ？」

数時間移動し見つけたのは巨大な研究所だった。

「何でよりもよって、ここ？」

「知らねえ、早く行って早く帰る」

全員は辺りを警戒しながら研究所に入ると後ろから四つの影が後を付けた。

全員が建物内を歩いていると終が後ろを向いた。

「いい加減出て来いよ」

終が言った後物陰からアリス、エナル、フェルナ、ファーストが出てきた。

「お前等!?!」

一夏達は四人を見ると身構えたが終だけは表情を変えなかった。

「何のようだ?」

「この先にはベルガが居る」

「で、何だ?」

終は無関心なまま聞いたがファーストが呟いた。

「ベルガを止める」

「・・・は？」

終は疑問に思った。終だけではなく全員が疑問に思った。

「どうゆう意味だ？ それ」

「ベルガが何を考えているか分からんが、止めないと大変なことになるかもしれないな」

終達は首を傾げたが楓は一回頷いた。

「なら、一緒に行きます？」

楓が言っているとアリス達は頷き終達は溜め息を吐いた。

楓達はある一室に着くと椅子にベルガが座っていた。

「やあ、元気だったかい？」

「ふざけるな。何を考えている？」

ベルガは笑みを浮かべていったがアリスはベルガを睨んだ。アリスだけではなく終を除いた全員が睨んだ。

「取り合えず、全部お前が仕組んだ事か？」

「良く分かったね。正解だよ」

ベルガの発言に全員が驚いた。自分達のしてきた事が全てこの男の

掌で踊らされていたと言う事に目を見開いていたが終だけは納得した顔をした。

「話が上手すぎだ。まあ、疑問を感じなかった俺も駄目だったんだけどな」

「ああ、恐怖と絶望のカウントダウンは、既に始まっているんだよ」
「なら、それを私達が阻止します」

楓の言葉に全員が戦闘態勢に入った。

最終決戦（後書き）

感想を待っています。

「俺等を」
「忘れるな」

夜明と太陽がベルガの後ろからスターライザーとオールデリート、ライオンハートを振り抜くがベルガは振り返る事なくエネルギーブレードを出し二人を弾き飛ばしそれと同時に楓がルシファーで突きを放つがベルガはルシファーの刃を持ち止めた。

「後ろが」
「がら空き」
「よー!!」

鈴、フェルナ、ファーストはそれぞれの武器で切りかかるが脚に阻まれた。セシリア、シャル、エナルが遠距離で攻撃したがエネルギー弾によって消されると楓を投げ飛ばしラウラが受け止めた。

「動き良すぎるだろ。あいつ」
「何か仕掛けがあるな」

終が言つとアリスが答えた。

「どうしたのかね？ 早く来たまえ」

「お前に言われたくないんだよ」

終はブレイブファンクに変化させてハデスのブレードの状態で逆手に持ちファンククラッシュャーを発動させた。

「ふん。勝てるかな？ 君は」

「やってやるさー!!」

終はオルトロスツインソードとハデスを高速で振るうがベルガは軽く受け流していった。

「無駄だつて言っただろ」

「ちっ!？」

終は舌打ちをすると一度離れた。

「どっするっ。」

「どっするって、言われても」

全員苦い顔をしたがファーストはアリス達に言った。

「少し、力を貸して欲しい」

「は？」

ベルガは終を見下したように見ていたが横からエネルギー弾が放たれると脚からエネルギーブレードが現れて打ち消した。

「無駄だっって言っているだろ」

「無駄じゃない」

ファーストが終の横に來るとコードをブレイブファンクに繋げた。

「な、何だそれは!？」

終のブレイブファングはブラックファングに戻ると更に黒が増し背中に二メートルぐらいの黒い羽が生えたとアリス、エナル、フェアル、ファーストのESが解除された。

「お前等、まさかシールドエネルギーを」
「だったら」

「夏達も楓が近付くとシールドエネルギーの全てをエターナルムーンにやるとエターナルムーンはより白くなり背中からは白銀の翼が生えた。」

「一体、これは」
「分かりません」

二人が驚いていると二人を中心に風が吹いた。

「風だ」

『ああ、確かに風だ』

ダブルCJXが呟いているとダブルCJXのクリスタルサーバーが金に変わりダブルゴールドデンエクストリーム（以後ダブルGX）に変わるとファイズBも赤が黒に変わり辺りにキャノン砲が付いたファイズキャノンフォーム（以後ファイズC）へ変わった。

「な、何だそれは!？」

ベルガは突然の変化に驚きを隠せなかった。

「行きましょう」

「ああ、楓」

「何ですか？」

「お前が決めるよ」

「はい!!--」

終が言うと楓は力強く頷いた。

「一体、お前達は何なんだ!？」

「さあな、分かるか」

「けど、負けませんよ」

楓達はベルガを力強く見た。

白と黒の力（後書き）

感想を待っています。

戦いの終わり（前書き）

最終決戦終了、次回は異世界編最終回

戦いの終わり

「何なんだ。何なんだそれは!？」

ベルガは目の前で起きた事に混乱していた。エターナルムーンやブラックファングが変化する事はベルガも知っていたが目の前の光景は目を疑った。

「何だ、これ？」

「暖かい」

より黒くなり背中には右に大きな黒い翼が生えたブラックファングを終を見て驚き、純白になり両側に生えた同じく純白の翼があるエターナルムーンの翼に触りながら呟く楓。一夏達も驚きで声が出なかった。

「終さん、これって」

「いや、俺にもさっぱりだ」

終は考え込むとオルトロスツインソードをベルガに向けた。

「お前をぶつ潰す!!」

「ほざけ!!」

ベルガはエネルギー弾を連射したが終はそれを全て避けてカオススパイダーの脚を一本切り飛ばした。

「貴様!？」

「よそ見してて良いのか？」

ベルガが振り向くとレイジングウイングをモードメサイアウイングを纏った夜明がカオスパイダーの脚を二本を切りつけるとモードトランザムの状態のバルディッシュトワイライトを纏った太陽が切り飛ばした。

「まだだぜ!!」

『その通りだよ』

「行きましよう!!」

ダブルはビッカーシールドに四本のメモリを入れファイズはファイズプラスターのエンターキーを押した。

【サイクロン！ マキシマムドライブ！ ヒート！ マキシマムドライブ！ ルナ！ マキシマムドライブ！ ジョーカー！ マキシマムドライブ！】

【エクシードチャージ】

ダブルとファイズはゴールデンファイナルリユニョジョンとクリムゾンスマッシュキュノンでカオススパイダーの脚を吹き飛ばすと楓はルシファーで切りかかるがベルガは楓にエネルギー弾を撃つが楓は一気に加速をした。

「何!?!」

「（椀さん）……………はああああああああああああああああああ……………!」

楓は残っているカオススパイダーの脚を全て切り裂くとベルガはルシファーを持っている楓の手を掴みルシファーを奪い取ると楓を投げ飛ばした。

楓がそう呟くとISは解除され気を失ったが倒れる前にラウラが支えた。

「終わったんだな」

終も倒れそうになり一夏が支えた。

「ふん。明日は晴れるな」

「ああ、確かに」

楓を除く全員が空を見ると青空が広がっていた。

戦いの終わり（後書き）

感想を待っています。

さよならは言わねえ(前書き)

異世界編最終話

さよならは言わねえ

「んん、んん？」

楓が目を覚ますとラウラに抱えられていた。

「ラウラさん」

「楓、起きたか！？」

ラウラが聞くと楓は静かに頷いた。

「良かった。本当に良かった」

楓が頷くとラウラは安心した表情で楓を力強く優しく抱き締めた。

「楓さん！？」

「起きてたの！？」

「大丈夫!？」

セシリア、鈴、シャルも来ると安心しきった表情をした。

「ラウラさんは少し離れて下さい!！」

「そうよ! 離れなさいよ!！」

「ええい、うるさい! 少し黙れ!！」

「全く、騒がしいよ」

と言いながらシャルは楓に抱きついていた。

「「「何をしていますの(るのよ)(いるんだ)!?」「」」

「抱き締めただけだよ」

「抱き締められてますノノノ」

セシリア、鈴、ラウラが言うとシャルが平然と言い楓は顔を赤くしていた。

「やっと起きたな」

言い争っているとき、終、一夏、箒、タクミ、翔太郎、フィリップ、夜明、太陽が来た。

「あれ？ アリスさん達は」

「あいつ等なら、別れるのが寂しくてどっか行った」

「言っていないからな」

終が言った直後アリス、エナル、フェルナ、ファーストが来た。

「あれ？ もう一人の人は？」

「さあ？ どっか行ったよ」

楓がベルガについて聞くとアリスは首を傾げながら言った。

「まあ、取り合えずはアリス。お前等、プロジェクトAって、知ってるか？」

「何故今聞く？」

「すっかり忘れてた」

アリスに聞かれると終は頭を掻いて言うとアリスは溜め息を吐きながら話した。

「プロジェクトAは、元の人間を肉体改造する計画だ」

「それを発案したのが」

「ベルガよ」

アリスの説明に終が頷き発案した人物を思い浮かべるとフェルナが言った。一夏達は殆ど話についていけてなかったが太陽とフィリップは納得したような顔をしていた。

「それが私達よ」

「成る程な。ファーストはプロジェクトゼロだな」

「正解」

アリス、エナル、フェルナはプロジェクトA、ファーストはプロジェクトゼロによって生み出された存在だった。

「で、楓。お前何か隠してるんじゃないか？」

終が楓に聞くと楓は静かに頷いた。

「なら俺は兎も角、四人には話せよ」

終が言った四人はセシリア、鈴、シャル、ラウラの四人だと楓は気付いた。

「いや、お前も聞いておけ」

終の肩を叩きながら翔太郎が言いフィリップ、タクミ、夜明、太陽は無言で頷き終も無言で頷くと楓、終、一夏、篤、セシリア、鈴、シャル、ラウラ以外は離れていった。

「えっと、皆さんは私が記憶喪失って事、知ってますか？」

「えっ！？」

「あつ、そう言えば言っでなかった」

楓が言うとシャル、ラウラが驚きその反応を見た終が思い返した。

「私は記憶喪失で、それで過去の事は一切覚えてないんですが、ただ一つだけ分かった事があって。私が二重人格だって事が」

楓の発言に鈴、シャル、ラウラは暗い顔をし終は表情を変えず一夏達は驚いていた。

「多分ですが、皆さん、一度は会ってますよ」
「臨海学校、福音と混沌か」

全員思い返すと確かに途中で楓が現れたが様子の違うことには気が付いていた。

「私のもう一つの人格は、椛さんって言います」
「自分の人格にさん付けって、お前らしいけど」

楓が椀の名前を言うと終はさん付けしている事苦笑いをした。

「それで、椀さんは」

『それは私から話すわ』

椀の声が聞こえると楓は頷き人格を椀に変えた。

「お前が、椀か？」

「それ以外誰が居るのよ」

終が聞くと椀は不機嫌そうに言った。

「それより、何でお前が出てきた？」

「私の目的、知りたい？」

椀がそう言つと全員頷いた。

「私は楓以外のものを消し去る。それが目的」

「消し去る。随分身勝手だな」

「私の為じゃない」

椛が言うと全員が疑問符を浮かべた。

「楓の為に、それだけ」

「楓を言い訳にするな」

椛が言うとラウラは椛を睨んだ。

「なら、大切な人を傷つける物は私にとってみれば意味なんてないのよ。楓を守りたいから、でも」

椛は話している途中終達を見ると不機嫌な顔のまま言った。

「あなた達は楓を守ってくれそうね」

椛がそう言つと気を失い鈴が慌てて受け止めた。楓の胸を掴みながら

（あっ、ラッキー）

鈴はそう思いながら指を動かすと確かに柔らかい感覚が伝わる。

「ん、んん／＼／」

一方の楓は眠りながら顔を赤くしていてセシリア、シャル、ラウラは不自然に思った。

「鈴さん？」

「何やってるのかな？」

「返答によつては、覚悟しろ」

「わ、私は楓の胸なんて揉んでないわよ！！ あっ」

暫くして箒は唇を離すと一夏に聞いた。

「落ち着いたか？／／／」

「落ち着けねえよ／／／」

今度は一夏から箒にキスをした。

「よお」

「話は終わったのか？」

終は取り合えずアリス達の元に来た。

「ああ、それと俺達はそろそろ帰るみたいだ」
「そうだな」

終は空を見上げると一夏達を大声で呼んだ。

「おーい！ ちょっと来い！！」

終に呼ばれて楓も目を覚ました状態で全員が来た。

「どうしたんだよ？ いきなり」

「いや、そろそろ帰れると思ってな」

終が呼んだ理由は別れの時が近付いていると言いたかったのだ。

「今まで世話になった」

「君達の事は、忘れないよ」

「みんな、元気で」

翔太郎、フィリップ、タクミの目の前に灰色のオーロラが現れタクミ達が灰色のオーロラに入ると灰色のオーロラは消えた。

「俺達もか、また会おうな」
「忘れるなよ。私達の事を」

夜明、太陽の前に灰色のオーロラが現れ通り抜けるとまた消えた。

「ありがとな」
「お陰で助かったわ」
「忘れないでよ」
「じゃ」
「ああ、じゃあな」
「こちらこそな」
「お元気で」
「忘れんじゃないわよ」
「うん。忘れないよ」
「ああ、その通りだ」
「皆さん、ありがとございました」

終は頭を掻いて言った。

「さよならは言わねえ。また会おうだ」

終が言った後灰色のオーロラが現れ全員がその中へ飛び込んだ。

「行ったな」

「そうね」

「あっ、殴るの忘れてた」

「忘れてて良い」

アリスは空を見た。彼女達の物語は、ここから始まる。

さよならは言わねえ(後書き)

次回はもしかしたらコラボかも？

感想を待ってます。

番外編 声優ネタは案外使いやすい(前書き)

今回はキュアノアさんとのコラボです。

番外編 声優ネタは案外使いやすい

終「終わったな。オリジナル長編」

一夏「ああ、終わったな」

箒「色々あったが、何とかなっただな」

楓「それではゲストです」

セシリア「キュアノアさん著のリリカルキュアライダー学園から！
」

鈴「ハトプリメンバーの登場よ！！」

つぼみ「よろしく」

えりか「ヤッホー！！」

いつき「こんにちは」

ゆり「どうも」

楓「皆さんお久しぶりです!!」

終「確かに久しぶりだな」

いつき「前は僕達の所に来たもんね」

えりか「その時はダイスオーやったわよね」

終「ああ、乾巧を椀が追いかけて回したんだよな」

ゆり「ええ、無茶苦茶だったわね」

一夏「俺等抜きで話するな」 超究極神オーラ全開

つぼみ「取り合えずこれ持ってきたぜ」 モバイルーツとゴーカイ
セルラーとレンジャーキー

シャル「どうやって持ってきたのさ」

ラウラ「あまり聞きたくないが」

終「早速やるか」

終「まずはゲストからつぼみ」

つぼみ「豪快チェンジー!!」

カクメンライダク、クウガ!!

クウガ「よし」

一夏「あれ？ レンジャーじゃない」

ゆり「仮面ライダーやプリキュア、ウルトラマンのも入ってるのよ」

終「そう言う事か。豪快チェンジ！」

ウルトラマン、ゼーロ！！

ウルティメイトゼロ「ウルトラマンゼロって、声優ネタじゃねえか」

えりか「その前にウルティメイト！？ 何でさあ！？」

いつき「声優ネタだから、じゃない？」

篤「多分そうだろ」

一夏「豪快チェンジ！！」

ア〜バレンジャ〜！！

アバレブラック「アバレブラック！！」

ゆり「こっちはアバレンジャーね」

セシリア「次は私が。豪快チェンジ!!」

キュゥア、ホワイト!!

キュアホワイト「私も声優ネタですわ」

つぼみ「私達と同じプリキュアになってるし」

一夏「どうでも良いし、箒なってみるよ」 箒にモバイルーツとレ
ンジャーキーを渡す

箒「あ、ああ。豪快チェンジ!!」

シンケンジャ〜!!

シンケンピンク「ほう、こうなるのか」 シンケンマルを振り回し
ている

えりか「振り回すな〜!!」

一夏「文句言うな」 えりかに雪片を突きつける

えりか「何で!？」

一夏「箒に文句言ったからだ」

いつき「色々と凄いね。彼」

箒「私の彼氏だからな」

ゆり「それは関係なんですよ」

楓「次は私がやってみますね。豪快チェンジ!！」

カ〜メンライダー、アギト!!

アギト「何でアギトなんでしょうか?」

全「「記憶喪失繋がり」」

終「さて、そろそろ時間だ」

全「「ええ!?!?!」

終「またな」

えりか「待ちなさいよ！ 何それ!?!」

終「うん。帰れ」

つぼみ「何か言ったか？」 終の首を絞めてる

終「ゴボ、ゴボ、ゴボ」 泡を吹いてる

いつき「泡吹いてる；」

ゆり「白目剥いてるわよ」

終「チーン」 昇天

一夏「終！？ な〜む〜」

えりか「助けないの！？」

一夏「あいつ死なないから」

終「あ〜、死にかけた」

ハトプリメンバー「「「生きてる！？」「」「」

一夏「あいつは死なないんだ」

終「死ぬわ！！ お前は俺を何だと思ってる！？」

「夏」……………さあ？

終「分かんねえのかよ!!」

終「で、そろそろ時間だ」

ゆり「今日はありがとうね」

いつき「また遊びに来てよ」

えりか「またね!!」

つぼみ「その時は黄泉の国に送る………音梨楓を」

全「……そつち!?!?!」

キュアノアさんのリリカルキュアライダー学園は大人気連載中!!

番外編 声優ネタは案外使いやすい(後書き)

感想を待っています。

不幸な日だってある(前書き)

不幸なのは誰？

不幸な日だってある

異世界から戻って数日が過ぎたが異世界で何日間過ごしていたがこちらでは数時間しか経っていなくまだ夏休みだった。

「すうー、すうー、すうー」

楓は自分の部屋で薄着の寝間着を着て眠っていた。異世界での疲れが一気に出たのか帰ってきた時には部屋に戻ると寝間着を着替えてベッドに横たわると直ぐに眠った。

「んん、ん、すうー、すうー、すうー」

楓は何時も通りだった。裸のラウラが共に寝ていること以外は普通だった。

「んん、えっ／＼／」

楓は目を開けるとラウラが目に入り裸である事に一瞬で気付き顔を赤くした。

「んん、ああ、おはよう楓」

「おはようございますってその前に服を着て下さい！！！！」

楓がラウラに言つとラウラは楓を抱き締めた。

「ら、ラウラさん！？ は、恥ずかしいですよ！！！！」

楓はラウラから離れようとするがラウラは力強く楓を抱き締め楓の胸が押しつぶされていてラウラは楓の耳を甘噛みした。

「ひゃ！？／／／」

ラウラはそのまま楓を押し倒しキスをした。

「ん！？／／／」
「ん／／／」

ラウラは楓の口の中で舌を動かし楓の舌をしっかり捉えていた。

「んん、ん！？／／／」

楓はラウラの舌から逃れようとするがラウラの舌は楓の舌に絡みつき起き上がるにもラウラが乗っているため起き上がれなかった。

「ん、んん／／／」
「ん、ぷはぁ」

唇を離れた後銀色の糸が二人を繋ぐように暫くして切れた。

一夏と箒は食堂で食事を取っていた。食堂には二人しか居なかった。

「なあ、一夏」

「ん？ 何だよ箒」

食事を食べていた箒が突然一夏を呼んだ。

「その、何だ。お前が食べてる野菜炒め、少しくれないか？／＼／」

箒の顔が若干赤い事に気が付いた一夏は野菜炒めを箸で摘んだ。

「はい。あゝん」

「あ、あゝん／＼／」

筭は箸に摘まれている野菜炒めを食べると自分が食べていた焼き魚を箸で摘んだ。

「ほら、あ〜ん／＼／」

「ん、あ〜ん」

一夏はそのまま食べた。暫く二人は楽しく食事を取っていた。

一方屋上では終が青空の下昼寝をしていると近づく影が一つあった。

「終、今ならやり放題よね？」

「やったら命はないぞ」

「うひゃ!?!」

寝ていると思っていた終が突然声を出し楯無は驚いた。

「で、何のようだ？ 生徒会長さん」

終はその場から跳ね起き楯無を見た。

「そ、そんなに見つめ「見つめてない。そう言う風に思っな」・・・

・・・ひ、酷い。言ってた途中なのに」

「変な事言つてると殴り飛ばすぞ」

「殴るのは無し!!」

「ちっ」

「舌打ち!?!」

終は再び楯無を見た。不機嫌な表情で

「随分不機嫌だね」

「誰の所為だ。誰の」

楯無は話を誤魔化そうとしていた。

「えっと、良い天気だね」

「誤魔化すな」

無理であった。楯無は終が本気を出せば生徒会長なんて余裕になれるんじゃないかと思った。

「なる気はないからな」

「心読んだ!!」

前言撤回、本気を出さずになれる。絶対に。楯無はある意味終の将来がどうなるのか気になり暫く目を離し再び見ると………終が居なかった。

「て、居ないし!?! 何処行ったの!?!」

屋上に楯無ただ一人が残された。

「はあ、どつするか」

終は一人コーラを飲んでいた。

「暇だ」

そんな事を呟き歩き出そうとすると誰かに手を掴まれた。

「ん？」

振り返ると簪が終の手をしっかりと握っていた。

「あの、簪さん？ 何掴んでるんですか？」

あまりに突然すぎて思わず敬語になったが簪はそのまま終を引っ張っていった。

「おいおいおいおい。何処に連れていく!？」
「秘密」

簪の口元が僅かにつり上がった。

「で、何これ？」

終は簪の部屋で縄で縛られソファーに座らせられた。

「いや、これ見よ」

そう言って簪が取り出したのは特撮系のDVDだった。

「何で見るのに、縛るの？」

「逃げないように」

「いやいや、見るのに逃げないだろ！？ 普通！！」

簪がさざりと言った事に終は反論したが簪は見る準備をして終の隣に座ると終に抱き付いた。

「何故抱き付く？」

「・・・何となく／＼／」

簪は微笑みながら終と共にDVDを見た。

「面白かったな」
「良かった」

見終わった後も終は相変わらず縄で縛られていたがそこはもう諦めてると思っていたが

「頼むから縄外して」

諦めてはなかった。簪は苦笑いしていると終は縄を噛み切ろうとした。

「外してあげようか？」
「マジ!？」

終は暫く叫んでいた。

「はあ、今日は災難でした」

「私は良かったがな」

げっそりした楓と肌がツルツルになったラウラが暫く歩いているとセシリアと鈴、シャルが歩いてきた。

「楓何かげっそりしてるよ？」

「本当ね。どうしたの？」

「アハハハ、何でもありませんよ」

「説得力がありませんわ」

「　　」

げっそりした楓にセシリア、鈴、シャルが聞きラウラは上機嫌で歩いていると

一夏と筭の耳にも届いたが二人も無視することにした。

翌日、げっそりし生きてるか分からない終と肌がツルツルになり若返った感じの簪と悔しそうな顔をした楯無が目撃された。

不幸な日だってある(後書き)

感想を待っています。

平和な者達と不幸な者達（前書き）

タイトル通りに平和な人達に不幸な人達の物語。

平和な者達と不幸な者達

終はげっそりした表情で食堂でコーヒーを飲んでいた。

「はあ、旨いな」

終の表情は虚しさを感じさせる程の物だったが誰も見なかった事にした。

「あれ〜？ そんな表情をしてどうしたの？」

楯無が声を掛けるが終は無視をした。

「ねえ、無視しないでよ」

終は楯無を無視し続けコーヒーを飲んでいた。

「コーヒーが旨い」

「だから無視しないで!」

無視し続ける終に遂に楯無は叫んだ。終がげっそりしている理由は一夏が筭とデートする事になり張り切りすぎて五時に起き終も起きたのだが、否起こされデートの時間までデートについて一夏が語り出し終はそれを最後まで聞きげっそりしていた。

一方、その本人達はと言うと

(早く来すぎたかな?)

一夏は待ち合わせ場所に向かいながらそんな事を考えていた。

(早く来すぎたかもな)

一方箒も待ち合わせ場所に向かって歩いていると丁度一夏と箒の顔があつた。

「「あつ」」

二人はお互いの服装を見た。一夏は薄い水色の服にグレーのズボン。箒は白いシャツにグレーのスカートを履いていた。二人はお互いに顔を赤くした。

(結構可愛いな。箒は／＼／)

(一夏の私服、見れて良かったな／＼／)

一夏は箒に手を差し伸べた。

「行くつぜ。箒」

「ああ、そうだな」

箒は一夏の手を取り目的地に向かっていった。

一夏と箒が来たのは巷で有名な遊園地だった。

「まず何に乗る？」

「そうだな。あれはどうだ？」

箒が指さしたのはコーヒーカップだった。一夏は箒の手を引っ張り
コーヒーカップに乗った。

「良いな。こう言っの」

「ああ、そうだな」

次に二人が向かったのはジェットコースターで一夏と箒はノリノリで乗ったが

「「うわあああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」」

余りに迫力があつたのか降りた後二人は少し青ざめていた。

「色々あつたな」

「ああ、そうだな」

夕方頃二人は観覧車に乗り一番上に着くと一夏は夕日に照らされて

いる筈に見とれていた。

「どうした？ 一夏っ！？／／／」

筈が一夏の方に向くと一夏は筈にキスをした。

「／／／」

離れた後二人はお互いに顔が赤かった。

「なあ、一夏／／／」

「な、何だ？ 筈／／／」

筈は一夏に軽く唇を近付けると一夏は筈を抱き締めてキスをした。

その後部屋まで逃げきった楓と終はベッドの上で深い眠りについた。

平和な者達と不幸な者達（後書き）

感想を待っています。

花火・・・・・・けどその後は怖かった(前書き)

最後は終に関係あり

花火………けどその後は怖かった

「花火、ですか？」

「つか、いきなり何だよ」

丁度楓と終が食堂に居る時一夏が声を掛けた。

「ああ、やるかって思って」

「だったら箸を誘えよ」

「もう誘ってある」

「行動速!!」

終は箸を誘う事を一夏に言ったがすでに箸は誘ってあり行動の早さに終は驚いた。

「で、どうするっ」

「別に暇だから良い」

「私もですけど、セシリアさん達を誘って良いですか？」

「ああ、別に良いぜ」

楓は食堂を出るとセシリア達を花火を誘いに行った。

「それよりあいつ変わったな」

「ん？」

終は楓の背中を見ながらそう呟くと一夏が首を傾げた。

「いや、学園に来る前は東さんが何やっても、少し距離を取ってるって感じがあつてな。ここに来てから本当に変わったよ」

終は表情は変えないがどこか嬉しそうに言っていた。

一夏が楓達を誘ったのが十二時でそれから約九時間が経った。

「で、私服は俺と一夏だけかよ」

終はそう言っで周りを見ると楓、篤、セシリア、鈴、シャル、ラウはそれぞれ浴衣を着て終と一夏は私服だった。

「うん」

「どうした一夏？」

「いや、後二人来るんだが」

一夏が辺りを見渡していると二人の男女が近付くと終はその顔に見覚えがあった。

「あれ？ 確か、蘭？」

「あつ、終さん！？」

「えっ？ 知り合いなの？」

一夏と蘭と共に来た男、弾は同時に言っで終と蘭は頷いた。

「ちょっとあつてな」

「ええ、ちょっと」

「「？」」

齒切れの悪い返事に一夏と弾は疑問符を浮かべた。

「あの、そろそろ始めません」

四人が楓を見ると既に両手に花火を持っていた。

「既にやる気満々!?!」

終と弾は言ったが一夏と蘭、箒達も始める準備をしていた。

「俺等、取り残されたな」

「ああ、お互い苦労するな」

終と弾も花火を持つと一夏は蠟燭に火をつけると皆思い思いに花火を火をつけた。

「おお、凄いな」

「わあ〜」

楓と終は花火に関心の声を上げた。

「終さんって、花火知らなかったんですか？」

「ああ、あまりこう言うのはしたことがないからな」

終は次に花火を持つと空中に投げ一回転させると落ちてくると同時に掴んだ。

「「「おお〜」」」

一夏達は感心したが楓は花火をずっと見ていた。

「綺麗」

楓は静かに眩き花火を見ていた。

暫く花火をしていて段々と数が減っていき全員は最後に線香花火をしました。

「おお、結構良いな」

「ああ、まして、あっ！？」

終が眩くとラウラが答えようとしたが線香花火が落ちた。

「ふふん　　」
「んんんのは」

鈴は自慢げに言っていたがラウラと同じように落ちた。

「そう話しているからですわ」

セシリアが線香花火を見たとき既に落ちていた。

「ど、ドンマイ」

シャルも落ちており次に弾、一夏、蘭、箒と落ちていったが楓と終は最後まで線香花火が続いた。

「楽しかったな」

「またやりましょう!」

「ああ、またな」

「じゃな、一夏」

「おお、元気だな」

楓達は学園に帰り弾達も帰った。

「おにい」

「ん？ 何だ蘭」

蘭が呟くと弾は聞き返した。

「私、多分終さんに惚れた」「……………マジで」

弾は蘭の呟きに少し唾然とした。

「何でさあ」

終は学園に戻ると簪と楯無が終を正座させていた。

「ねえ、今日はどこ行ってたの？」
「どこだって」答えて……「……」夏達と花火に行きま
した」

終は簪の目を見ると素直に答えた。その間楯無は終を嗅いでいた。

「お前は犬かよ」

終が呆れながら言ったが楯無は目を見開いた。

終はその夜、二度と体験する事無い恐怖を感じたとか。

花火・・・けどその後は怖かった(後書き)

感想を待ってます。

生徒会長長楯無登場（前書き）

何故か不味い事になりそうだ。主に文化祭

生徒会長長楯無登場

IS学園では夏休みも終わり体育館で全校集会が始まるうとしていたが終は頭を抱えていた。

「どうした？ 終」

「嫌な予感しかしないし、周りが女子だと落ち着かねえ」

「ああ、分かる。箒が居たら変わってたのに」

「首へし折るぞ」

ビュン！！ ガッ！！

「・・・・・・・・」

終が話してる時一夏の首をへし折ろうとすると終の目の前に真剣が突き刺さった。

「すまん。私の物だ」

「箒、俺を殺す気か？」

「楓さん」

「確かあんた」

「部活」

「入ってなかったな」

「ふえ？」

楓が振り向いてみるとセシリア、鈴、シャル、ラウラを中心にした女子の大軍隊がそこには居た。

「えっと、何ですか？ これは」

「私と同じ部活に入りますよね？ 楓さん」

「私とよね？ 楓」

「僕とでしょ？ 楓」

「お前は私の嫁だ。だから私と同じ部活に入れ」

「「是非とも我が部に」」

「.....」

セシリア、鈴、シャル、ラウラと女子の大軍隊からの勧誘に楓は正直困惑していた。どれかに入れば残された部に悪いと楓は思っていた。正直お人好しすぎる。

「一夏、止めて来い」
「当たり前だ」

一夏は箒の肩を叩きバスターソードを手に持った。

「終」

「あつ！？」

終が一夏に呼ばれて振り向くとバスターソードの刃先を突きつけた。
れた。

1656

「箒に危害加えたら命がないと思え」

「……………」

（一夏、お前が恐ろしいと思うのだが、気のせいかな？）

一夏が放つ殺気に終と楯無は黙り込み千冬は冷や汗をかいていた。

生徒会長榎無登場（後書き）

感想を待っています。

出し物は出せる範囲の物で（前書き）

文化祭の出し物を決める血戦？

出し物は出せる範囲の物で

一組では学園祭の出し物を決めるために話し合っていた。

「で、どうするか」

一夏は一瞬終を見たが終は少し眠っていた。楯無とのやり取りに疲れたらしい。一夏は出し物が書かれた紙を見た。

(えーと、黒谷終とのポツキーゲーム、織斑一夏とのホストクラブ、黒谷終と織斑一夏との王様ゲーム……けど最後の、音梨楓とのSMゲームって、まさかと思うが、考えるのはやめておこう)

色々と考えた一夏だが考えることをやめてそれを見ていた筈が一夏の肩越しから紙を見ると最後の部分を見た。

(SMって、まさか)

箒は一度妄想を試してみた。

ここからは箒の妄想です。

危ない服で手を縄で縛られていた。

「うう、何ですか、これ？」

涙目で縛った変態（鈴）を見ていた。

「（ぶっ！？ か、可愛すぎるわよ（色々やってみない？ 例えば
これとか）」

鈴が手に持ったのは鎖と蝋燭。変態（鈴）は笑みを浮かべながら近づく。

（もつやめよう。考えるだけで頭が痛くなる）

箒はある程度妄想をするとすぐに中断した。

（採用されたら大変なことになりそうだな。主に楓が）

そんな事を考えていた箒を余所に一夏は出し物が書かれた紙を終に持っていた。終は取り合えず起きていた。

終は今にも暴れ出しそうだったが一夏はバスターソードを取り出した。

「お前等、今の内に決めなかったら……どうなるか分かるよな？」

「「「サーイエツサ！」「」」

箒以外の全員が一夏の殺気で縮こまった。

「一夏、格好いいぞ／＼」

「おかしいだろ！？ おかしいぞ箒！！」

終が突っ込むが一夏がバスターソードを終に突き付けた。

「あの、一夏さん？ それは一体？」

「終……の悪口言ったら抹殺するぞ」

一夏の殺気に終は冷や汗を掻き殆どの女子は脅えていた。

「一夏さん、凄く怖いですよ」

楓は一夏を見て教室の端でガタガタと震えていた。

「じゃ、出し物はメイド喫茶で」

「「「ちっ。SMじゃなかった」「」」

「私が嫌です。そんな恥ずかしい事／＼」

楓が顔を赤くして上目使いで見ていると女子の殆どが鼻血の海に沈んだ。

「はあ、大変だったぜ」

終は溜め息を吐くと窓から外を見た。

「獣達の戦いが 世に終わりをもたらすとき 冥き空より女神が舞
い降りる 光と闇の翼を広げ 至福へと導く>贈り物<と共に」

IS学園前に赤いコートを着た男が居たが男はそのまま離れていっ
た。

出し物は出せる範囲の物で（後書き）

感想を待っています。

謎の影（前書き）

次回はどのような事やら

謎の影

「はあ、色々と疲れた」

終は部屋に戻り扉を開けると

「お帰りなさい。ご飯にする？ お風呂にする？ それとも」

ボタン！！ と力強く終は扉を閉めると頭を抱えた。

「おいおい、何の間違えだ？ 何故裸エプロンの楯無が、何故だ」

再び終は意を決し扉を開けようとノブに手をかけ開けた。

「お帰りなさい。私にする？ 私にする？ それともわ・た・し？」
「……………今すぐこの世からおさらばするか？」

右手にブレードのハデス、左手にオルトロスツインソードを持ちドスの入った声で言った。

「いっやーん　こわーい」

「……………本当に抹殺するぞ」

終は両手に握った凶器を楯無に向けると後ろから殺気を感じ振り向くとそこには……………素晴らしい笑顔だが恐怖を感じさせる表情の簪が立っていた。

「簪、さん？」

「楽しそうだね……………終」

「どっからそうなった!？」

終は反論したが状況的に絶体絶命。部屋には楯無、廊下には簪と挟まれた状態で居た。

(ああ、俺の人生終わったな)

楓は静かに素早く扉を閉めて表札を確認した。音梨、間違えはないはずだが扉を少し開けて中を覗いた。

「何を間違えた？」

頭を抱える裸エプロン姿のラウラが居たが楓は頭を抱えた。

（あれ、違いますよね？ 違いますよね？）

楓が考えを張り巡らせて悩んでいると

『楓』

椀が話しかけてきた。

(栞さん？)

『 楓、実は私、暫く眠るけど、大丈夫よね？ 』

(はい。大丈夫ですよ。今まで助けて貰いましたから、休んで下さいね)

『 ……ありがとう 』

暫くすると自分の中にある何かがゆっくり沈んでいく感覚がしたが楓は扉を開けた。

「 待っていたぞ。私にするか？ 私か？ それとも私か？ 」

「 選択肢が一つしかない事は聞いて良いですか？ 」

楓は取り合えず裸エプロン姿のラウラを避けてベッドに座り込むと風呂に入る準備を شدした。

「 何だ風呂か？ 」

「 そうですね。それより部屋に戻らなくて平気ですか？ 」

「 平気だ。何故ならお前は私の嫁だからな 」

「 ……理由になつてません 」

そう言いながら楓は風呂に入っていった。

楓は風呂から出てくるとベッドに座ったがラウラに後ろから抱き付けられた。

「ラウラさん！？／＼／＼」

「汗を掻いたらまた風呂に入ろう。二人でな」

ラウラは右手で楓の胸を掴み左手で楓の太股を撫でだした。

「ラウラさん、やめて下さい！！／＼／＼」

「断ると言ったら？ どうする？」

暫くラウラは楓の体を撫で回した。

「はあ、はあ、はあ、ひ、酷いですよ、ラウラさん／＼」
（ああ、理性が削られていく。ジュルリ）

色々と危ない格好になった楓をラウラは涎を垂らしていた。

「燃え尽きた。真っ白な灰に」

楯無と簪の二人を部屋に帰らせた終は 日の ヨーごとく燃え尽きていた。

一方、終と同室の一夏は

「なあ、一夏」

「何だ？ 箒」

一夏は箒に部屋に居た。

「織斑先生は、これを何と言うか」

「ああ、それなら大丈夫だ。俺が千冬姉に頼んだから（を脅した）」

「一瞬、脅したに聞こえたぞ」

「………気にするな」

一夏と箒は甘い夜を過ごした。

「ふふふ」

全体的に色気が出ている少女がIS学園を見下ろしていた。

「ふふふ。あなたの恐怖と絶望を味わって貰うわ」

去り際に学園を見た。

「音梨楓。ふふふ」

少女はその場から去って行った。

謎の影（後書き）

感想を待っています。

再会

文化祭当日、一年一組の喫茶は大好評だった。一夏と終は執事服を着て接客をし、楓達女性陣はメイド服を着て接客をしていた。

「多い」

それが終の言葉だった。客達の目的は執事服を着た一夏達ではなく、ましてや箒達でもなく

「いらっしやいませ」

一人だけ妙に違うメイド服を着た楓（天使）が目当てで来ている客の方が多かった。

「ご注文は何に致しますか？」

「えっ？ ああ、えっと」

さっきまで楓に見とれていた客の一人に楓が注文を取りに行くとその客は半分パニック状態だった。終の場合は

「お客様、ご注文は何に致しますか？」

見事な接客をされていてそれも驚きだった。

「ふう、あいつまだ気付かないのか」

終はチラッとだけ楓を見た。皆と同じメイド服だが背中には何故か天使の翼があった。

「さて、次々」

終は特には気にせず接客に当たった。

「いらつしゃいませ。何に致しますか？」

それを知らずに接客をする楓をセシリア、シャル、ラウラが嫉妬の眼差しで客を見ていたのは……言つまでもない。

そんなこんなで接客していると楓が水を置くとそのテーブルの男性客に手を掴まれた。

「ねえ、君、可愛いね」

「えっ？ あの、離して下さい」

男が掴むと楓は遠慮気味に言ったが男は離さなかった。

「いや、実はアイドルのプロデューサーやってんだけど、君やって
みない？」

「結構です。お願いですから離して下さい」

楓は嫌そうな顔をしているが男はそれを無視して話を続けた。

「君ならトップアイドルになれると思うんだよ。やってみようよ」
「離して下さい！」

大きい声ではなかったが周りの客や終達は騒がしさに向くとセシリア達、クラスメートや女性客などが楓の腕を掴んでいる男に殺気を放ったが気付いてない様子に終は呆れながら向かった。

「お客様。迷惑なりますのでやめてくれませんか？」

男はゆっくり終を見たが終の顔は殆ど阿修羅になっていた。

「ん？ 何、君には関係ないだろ」

「迷惑になるのでやめて下さい。後周りから何をされても知りませ

んよ」

終に言われて周りを見ると女性達が自分を殺気の籠もった目で見て
いる事に気が付いた。

「えっと、これって」

男が戸惑っている笑顔のシャルが近付くと終が男と楓を離し自ら
も避難した。

「お客様。いい加減にしませんと、吹き飛ばしますよ」

笑顔だが部分展開されたのは灰色の鱗殻グレー・スケールを見た男は汗を掻きながら
無言で金を置き逃げるように出て行った。

(ふう、人が死なずに済んだ)

終の予想では下手をしたら人が死ぬと考えたが死なずに済んだ事に

安心した。

終が接客するためにテーブルに向かうと終の見慣れた顔があった。金髪に青い目、何より赤いコートを着た人物が座っていたが終は普通に接客をした。

「お客様。ご注文は」

その客は本を読んでいて終の声に気付き本を閉じた。

「そうだな。アイステイーでも貰おう」

「アイステイーが一つな」

終は注文を聞くと数分でその客の席にアイステイーを持ってきた。

「アイステイーです」

「ああ」

客は一度終を見て鼻で笑った。

「何だ？ 似合うか？ これ」

「あまり似合っていない気がするが。ゼロ」

「黒谷終だ。零」

男客、零は終の事をゼロと呼んだが終は気にすることなく返事をした。

「そうか。だが、俺がどう呼んでも変わらないだろ」

「色々面倒なんですね。それにどうゆう風の吹き回しだ？」

「わざわざ来てやったんだ。他に言うことはないのか？」

「悪いな。まっつっつたくない」

「そうか。サボらずやれ」

「誰の所為だ。誰の」

終はそう言つと接客に戻り零は静かにアイステイーを飲んでいた。

「ふっ、変わったんだな。あいつ」

零はまた本を開き読みながらアイステイーを飲んでいった。

零が本を読み終わると同時にアイステイーもなくなり支払いをしに向かい五百円を置いた。

「あの、お釣り!」
「取っておけ」

クラスの女子が言ったが零はそのまま喫茶を後にすると終は零の背中を見た後鼻で笑い仕事に戻った。

「またな。相棒」

最後に終はそう呟き接客を再会した。

終は接客をしている途中物音が聞こえそこを見ると謝っている楓と怒鳴っている男客が目に入った。

「おいどうなんだ!？」

「すいません!！」

「すいませんじゃねえ!！」

男客がテーブルを叩くと楓は肩を震えさせた。

「おい、聞いてんのか!？」

終はそれにイラつき仕事のことなど頭に入っていないかのように男客のテーブルに向かっていった。

「おい」

「あん？ 何だおめえ？」

「他の客の邪魔だ。さっさと失せろ」

終は男客を睨みながら言うと男客は少し脅えたように言い返した。

「俺は客だ!! んな事言っつて良いのか!？」

「迷惑になる奴に接客する気はない。それに周りに迷惑なんだよ。だからとつと失せろ」

男客は逃げるように喫茶を出ると楓は膝を突いた。

「楓さん!？」

すぐにセシリア達が楓に近付き肩を抱いた。

「大丈夫？」

「休んでる？」

「いえ、大丈夫です」

楓は接客に戻ろうとしたが終が止めた。

「やめとけ、顔真っ青だぞ。休んでおけ」

「行こう。楓」

終が言うとシャルが楓を連れてその場を後にした。

(どじなることやら)

心配していた終だが客達はさっきの男客への文句の言い合いになっており終は苦笑いした。

さっきの男客はIS学園から程近い路地にいた。

「おい、金は？ 仕事してやったんだ」

男は目の前にいる少女に言うど少女は男の前にバッグを投げると男はバッグを開けたが何も入ってなかった。

「何も入ってねえじゃねえか！？」

「わざわざ証拠は残さないわよ」

少女は手に持った刀で男の切った。

「はあ、全く。まあ、やってくれたことはありがとう」

少女は男の死体を踏みつけるとその場を後にした。

再会（後書き）

感想を待っています。

灰被り姫(シンデレラ)(前書き)

シンデレラ達の登場、戦わなければ生き残れないboy終

灰被り姫（シンデレラ）

「おい楯無、これなんだ？」

「……………」

楓、終、一夏は王子のコスプレをさせられていた。そしてその原因の楯無を見ていた。

「いや、ちょっとね」

こうなっている訳は数時間前に楯無から劇に出て欲しいと言われ拒否する間もなく楓、終、一夏は連れて行かれこうなっている。

「あの、俺達台詞とか知らないんですけど」

「大丈夫。基本アドリブで」

「アドリブで大丈夫なんですか？」

楓は楯無の言葉に不安を覚えたが今更止めることも出来ないの溜め息を吐いた。

「はい。王冠被ってね」

「マジで」

楯無から渡された王冠を三人が被ると向かう。

三人が舞台に立つと歓声が鳴り響き楯無が劇を始める。

『昔々ある所にシンデレラと言う少女が居ました』

「普通だな」

「いやいや、何想像してたんだ？」

ボソツと呟いた終に一夏は苦笑いをしながら聞いた。だが、すぐに絶望に変わった。

「……………」
「ひゃあああああああああああああああああ……………」
「……………」

突如鈴から投げられた中国の手裏剣、飛刀を楓は間一髪屈んで避けた。

「ぬわあああああああああああああああ……………」
「……………」

丁度終にも向かったため終は体を反らして避けた。

「鈴、お前俺を殺す気か!？」
「あつ、居たんだ」
「おい!？」

鈴の発言に終は怒鳴ったが辺りを見ると様々な武器を持った女子達に囲まれていた。

「逃げる」

「分かてる」

「何でそうなるんですかぁー!?!?」

三人は女子達から逃げるように走るがそれを逃がす訳がなく追われる。

「別れるぞ!?!」

「分かった………つて、オペラ!?!」

別れる前に楓、終、一夏は避けると終は王冠に手を掛けた。

「こんなのやってられるか!?!」

終は王冠を外そうとするが楯無のアナウンスが流れた。

『王子にとって国とは全て、その重要機密の隠された王冠を失うと、自責により電流が流れます』

揺れていた。

終は逃げていたが途中女子二人が持っていた刀を奪い追ってくる女子達の武器を破壊していきながら逃げていた。

(楯無後でぶっ潰す)

そんな事を軽く考えながら自分の身体能力を利用して逃げていった。

「おっと」

「ここまでだよ」

目の前には簪と女子達、自分の手にあるのは刀二本、だが終には不安はなかった。

「ふっ、色々ある中で、こんな事、幾らでもあったよ!!」

終は左手の刀を右で持ち女子達に向かうと次々に刀を奪い右で三本、左で三本、口で一本の計七刀流にすると凄まじい早さで女子達の武器を破壊していきその様子からは阿修羅が見えていた。

一夏の場合は箒以外は来なかった否、来れなかった。理由は一夏が目で『来ないよな?』と脅し更に箒が『邪魔だ』と目で語り来れなくなった。

「「「「怖い」」」」

そんな二人を見ている女子達は震えていた。

楓は女子達から走って逃げていたが流石に数が多く何時捕まるか分からない。楓は角を曲がると女子達も曲がったが楓の姿はなかった。

「あれ？ こつち曲がったよね」

「ああ、その筈だ」

「じゃ、何で居ないのよ」

「それは分かりませんわ」

楓を追っていた女子達はお互いに顔を見合わせた。

「ライバルは」

「少ない方が」

「後々有利だよね」

「そうなるな」

それを気に女子達はお互いに戦い始める。楓はと言うと物陰に隠れ
じっとしていたが遂に眠りだした。

終は七刀流から二刀流に変え確実に女子達の武器を壊していったが
女子の数名が拳銃を発砲すると終はそれを片方の手を使って切り裂
いていき反対方向から来た弾も切り裂いていきそれを見ていた者は
全員が啞然とし終は足下にある弾の残骸を蹴り上げた。

「「「っ!?!」「」」

女子達の注意が弾に行くと終はその場から走って逃げていった。

「終は逃げたか」

一夏は終を横目で見て状況を確認した。目の前には箒と怯えてる女子。

「（普通に行ける）……………箒」

「何だ？ 一夏」

「俺の事好きか？」

「ブツ！？／／／」

いきなり言われた箒は顔が完熟トマトのように真っ赤になった。

「あ、当たり前だ／／／」

「なら、俺の頼みを聞いてくれ」

「何だ？ 言ってみろ」

「逃がしてくれ」

「良いぞ」

一夏の頼みに箒が即答すると女子が驚いたが一夏は逃げる前に箒に近付きキスをした。

「ありがとう」

「／／／」

一夏に微笑みながら礼を言われたが箒はキスされた事に頭がショートしていた。女子達は駄目だこれとは感じた。

「すうー・・・すうー」

物陰で眠っている楓とその周りには鼻血の海に沈んだ女子達を見た楯無は苦笑いしていた。

「駄目だこれ」

そう呟いてシンデレラは鼻血の海に沈んだ者達以外平気だったが終
と一夏は楯無に対しての怒りはまだ収まっていない。

灰被り姫（シンデレラ）（後書き）

感想を待っています。

亡国企業（前書き）

ヤバいオリキャラ登場。

亡国企業

「ふう、何とかなっただな」

一夏は箒を初めとした女子達から必死(?)に逃げた後制服に着替えて自動販売機を向かっていたが突然足を止めて雪片を出し後ろに向けた。

「付けて来るのが下手だし、殺気ぐらい隠せよ」

「何だよバレたのかよ」

物陰から女性が出てくると一夏は鼻で笑いながら言った。

「俺の友達に殺気とかそういうのに敏感な奴が居てな。大体は分かる」

一夏は学園に入った当時から終に鍛えられたため殺気などに敏感になっただけだ。

「なら、テメエの白式を寄越せ!!」

「悪いが、させるが!!」

女性は背中に蜘蛛のような脚があるアラクネアを展開し一夏は白式を展開させた。

「来い」

「舐めるな。餓鬼」

一夏は女性に向かっていった。

「ふう」

楓は取り合えず適当な所に座り一息ついていた。

「ねえねえ、お姉ちゃん」

「ん？」

楓が前を見ると帽子を深く被り楓より少し年が下の少女が話しかけた。

「ちょっと来て欲しいの」

「えっ？」

楓は少女に手を掴まれると少女は楓を引っ張っていった。

暫く少女は楓を手を引っ張っていると突然足を止めた。

「？ どうしたの」

楓が心配そうに言うと少女は口元に笑みを浮かべながら告げた。

「私、お姉ちゃんの過去知ってるよ」

「!?!」

楓は少女の言った事に驚愕した。自分の過去は楓が一番知りたかった事だったが何故この少女が知っているのか分からなかった。

「不思議そうな顔をしてるね。知ってるのは当たり前だもん」
「嘘」

少女は帽子を外すと楓は自分の目を疑った。少女は楓と同じ顔で少し幼さがあるが楓と同じ顔だった。

「だって私、あなたから作られたもん」
「私、から？」

少女は笑みを浮かべながら言つと楓は意味が分からないと言つた顔で返した。

「そう。私はあなたを元に作られたの。分かるでしょ。私はあなたのクローンよ」

「何で、どうして？」

「私に勝つたら教えてあげるよ」

少女は自分のISを展開すると背中にスクーター、腰に体を成すビットと背中に二つのビットに赤い色のIS。

「私の愛機、エターナルブラッド」

「・・・エターナルムーン!!」

楓もエターナルムーンを展開し両手にルシファーとポセイドンを持つと少女のエターナルブラッドからビットが二人を囲むように動く

とビットから電流が流れドームのようになった。

「!？」

「ふふふ。これでは逃げられない。ゆっくり殺し合える。ふふふ」

少女の笑みに楓は恐怖して手が震えだした。

「何怖がつてるの？ 私と同じような風でしょ」
「えっ？ 一体、何を」

楓が聞く前に少女が刀を楓に向かって振り下ろした。

「っ!？」

楓は振り下ろされた刀をルシファーで受け止めた。

「言ったでしょ。私はあなたから作られたの、だからあなたも同じ」
「私は、私は」

少女はそう言ったが楓は首を振っていた。

「否定しないでよ。楽しもう。私とあなたの殺し合い」

少女は狂気じみた笑みを楓に向けると楓は恐怖を感じた。

一夏は雪片を女性に振るうが避けられた。一夏はバスターソードを背負っている状態だが女性とは互角に戦っていた。

「糞が!!」

「うるせえよ！！」

一夏は女性に向かっていくが寸前で避けられた。

「で、お前何者だ？ っと！！」

一夏が雪片を振ると女性は避けて一夏を見た。

「はっ！ 『亡国企業』の一人、オータム様だ！！ 覚えておけよ

お！！！」

「いちいちうるさい！！！」

オータムはアラクネアの脚の先から銃口を出すと一夏はそれを横に避けた。

「ちっ、ちょこまかと」

オータムは舌打ちをすると一夏の振るった雪片を横へ避けた。

「どっちがだよ！ お前の方がちょこまかしてるだろうが！！」

一夏も舌打ちをしながらオータムに向かっていく。

（上手く行けば、勝てるな）

内心一夏は冷静に考えながら雪片を振るっていた。

「ついでに、お前を誘拐したのは俺達の組織だ！！」
「ほう」

一夏は冷静に見えて頭に血が上っていた。

「なら、ぶっ潰すまでだ」

一夏は殺気と共にドスの入った声でオータムに言つと零落白夜を発動した。

「だったらどうするよ!?!」

「叩き潰す!?!」

一夏は真っ直ぐオータムに向かっていく。

「直線で来る奴が居るか!?! 馬鹿が!?!」

オータムはアラクネアから糸を出すと一夏は避けきれず糸に絡まった。

「チクシヨ!?!」

「愛機にさよならを言えよ」

オータムルは一夏に向かっっていくが何か切れる音がするとオータムは音の発生源を探したが見つからず困惑しているとオータムの横の壁がガラガラと音を立てて崩れると鬼の形相の終がオルトロスツインソードとハデスブレードを持っている状態で居た。

「終!？」

「よづ。一夏」

終はオルトロスツインソードを肩に担ぐとオータムを睨んだ。

「ダチが世話になつたな」

「!？」

オータムは終から放たれた殺気に一歩引いた。

(何だよこいつ!？ こんな殺気、感じたことがねえ!！)

オータムは終を睨んでいたが手が震えていた。

「ねえ、終、壁を壊されるのは困るんだけど」
「気にするな。それと一夏を頼む」

終はオータムを睨んだまま後ろに居た楯無に言つと楯無は溜め息を吐きながら一夏の方に向かった。

「くっそがあ！ 全員ぶっ潰す！！」

そんなオータムを見ていた終は鼻で笑いハデスブレードで別の壁を指しオータムが見ると壁が切り裂かれると赤いレイピアを持った零が入ってきた。

「何だテメエ！？」
「VIP」

オータムが零に聞くと終と零が同時に答えるとオータムだけではな

く一夏、楯無も呆れた。

「さあ、始めるか」

終の言葉で終、零、オータムが構えた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓は肩で息をしながら目の前の少女を見ていた。少女は平然としながら刀を振るっていた。

「あれ？ もう限界？ つまらんない」

「うっ、ぐうう」

「ふふふ。楽しいわね」

少女は楓が苦しむ様を楽しげに見ていると楓がゼウスを取り出し向けたが少女はそれを取り暫くゼウスを見た。

「へえ」。あなたはこうゆう風に使っ？」

少女はゼウスを楓に向け放った。

「あぐ！？　グハ！？　ああ！？」

楓は目に涙を浮かべるが少女はそれを見てより楽しみようにゼウスを放ち更に刀で楓を何度も切りつけた。

「うぐっ、あゝ」

「あれ？ 終わり？」

楓の反応が薄くなつていくと少女はゼウスを遠くに投げると楓から脚を退けた。

「あなたは、誰？」

楓は力を振り絞り起き上がるようにするが起き上がれず力無く倒れた。

「私？ そうね。亡国企業のAって名乗っておくね」

少女、Aは笑顔で答えるが楓は返事は出来ずにただAを見ているだけだった。

亡国企業（後書き）

オリキャラ、A。見た目は楓を幼くした感じ、楓と違い黒髪黒目。性格は残忍で人を痛めつける事を楽しむ。自称楓のクローン。

次回、黒き牙と赤き牙

もしかしたらタイトルが変わるかも

修正しました。

黒き牙と赤き牙（前書き）

今思った。やっぱり終は人外。

黒き牙と赤き牙

「テメエ等、本当に何なんだ!？」

「こいつが言っただろ。VIPだ」

「お前もノリノリだっただろうが」

「そんな事はない」

「嘘付け」

オータムが聞くと零は終を見て言い終は反論したが零はレイピアの刀身を撫でて言うと言つと終は零を睨んだ。

「で、どうする、か。だよな」

「気絶されるんだろ」

「当たり前だ」

「ゴチャゴチャ言ってるじゃねえ!!」

ついに痺れを切らしたのかオータムはマシンガンを撃つが終はオルトロスツインソードとハデスブレードで弾を全部切り落とした。

「なっ!？」

「こんぐらい朝飯前だ」

「変わらないな」

オータムは終が弾を切り落とした事に驚き零は地面に落ちた弾の残骸を見た。

「つか、常人から見たら普通じゃねえだろ」

「言ったら負けだよ。一夏君」

呆れた目で見る一夏と諦めた表情で見ている楯無を無視し終と零は構えるとオータムに向かって走り出した。

「糞があー!!」

オータムはアラクネアからワイヤーを出したが終は零は左右に飛ぶとまた向かった。

「お前が左半分やれ。右半分は俺がやる」

「ああ、分かった」

終は右、零は左に動くとオータムは零にマシンガンを向けたが終にアラクネアの脚の右半分を切り落とされた。

「なっ！？ 何時の間に！！」

「お前がマシンガンを向けようとした時に切り落とした」

「野郎」

「こっちはいいのか？」

オータムが左を見ると左側の脚も零によって切られていた。

「流石、剣術は凄いな」

「後はお前に負けるがな」

終は関心の声を上げたが零はオータムを見た。

「ちっ！？」

オータムが舌打ちをすると肩を叩かれ振り向くと零落白夜を発動した一夏が物凄い笑顔で居たがオータムには悪魔の微笑みが見えた。

「礼だ」

一夏がオータムを切ると終と零がオータムの腹を蹴り飛ばし壁にぶつかると壁が音を立てて崩れた。

「壁壊さないでって、大変なんだから」

「まあ、悪いな」

終はオルトロスツインソードを肩に担ぎオータムに近付いていく。

「ちっ」

「色々聞かせろ。お前等の事をな」

終はハデスブレードをオータムに突きつけて聞いた。

「ここは退くしかないか」

オータムがアラクネアから離れると終は慌てて下がりそれに気付いた楯無が自分のIS、霧纏の淑女を展開し両肩にあるアクア・クリスタルから出ている水を四人の前に出すとアラクネアは爆発したが四人は無傷で済んだ。

「最後の最後でこれか」

「コア、壊れたかなあ？」

終が溜め息を吐いていると楯無が首を傾げたが終が否定した。

「わざわざ置いていくか？ 普通は持つていくだろ」

「その前にお前は相変わらず化け物か？」

「二メートル合ったのを何事もなかったのように下がったしな」

終と一夏達の距離は二メートル位合ったが終は後ろに下がる時に終は一夏と零の前に居た楯無を飛び越えて戻っていたからだ。

「本当に化け物か、お前」

「平然と言ってるなよ」

平然と言つゝ一夏に終は若干落ち込んでいた。

「あぐ、ああ」

楓はAに髪を捕まれ持ち上げられると楓はつめき声を上げたが特に何も出来ず虚ろな目で見ていた。

「あれ？ どうしたの？ 最初の威勢は何処？」

「まだ、終わって、ない、ですよ」

「アハハハハ。もっと遊ぼうね」

Aは楓に向かっていき先ず刀でポセイドンを弾きルシファーで切りつけた。

「ああ!?!」

支えを失った楓は前のめりに倒れ込む前にAに切られるとそのまま膝を突いた。

「どつする?」「そのままじゃ、保たないよ」

楓がAを見上げる前にAに蹴られて仰向けに倒れるとAに胸元を踏まれた。

「かつ、ああ」

「ふふふ。あなたの苦しそうな顔、そそるね」

Aは踏みつける力を強めていき楓は目を見開き足を退かそうとするが段々と意識が遠退いていった。

「ふふふ。バイバイ。お姉ちゃん」

Aがルシファーを振り下ろそうとするがレーザーによって弾かれ見てみるとスターライトmk?を構えたセシリアが見えそしてビットに向かう鈴、シャル、ラウラが向かうがビットからバリアが張られた。

「くっ!?!」

「バリアって!?!」

「くっ、楓!?!」

ラウラが楓の名前を叫ぶと楓は虚ろな目でラウラ達を見たがエターナルムーンが解除されると楓は意識を失った。

「貴様ツ！ 楓に何をした!?!」

ラウラはAに向かって叫んだがAは特にラウラ達をみる事無く楓を見ていた。

「ふうくん、何だこの程度ね」

Aの言葉に四人は怒りを覚えた。

「あなた、よくもッ!!」

「楓を傷つけたわね!!」 「許さない!!」

「覚悟しろ!!」

Aはその様子に笑みを浮かべたがAに通信が入った。

「あれ？ オータム、どうしたの？」

「悪いA。ミスった!!」

オータムから連絡が入るとAは頷いた。

「じゃ引き上げよっか」

「すまねえ」

「良いよ良いよ。楽しめたし」

連絡した後Aはビットを戻しその場から立ち去った。

「くっ」

Aが立ち去るとラウラは楓を抱えた。

「ラウラ待って!」

「置いて行くな!」

「お待ちになって下さい!」

ラウラの後をシャル、鈴、セシリアが追いかけた。

（くっそ、楓）

ラウラは自らの腕の中で弱々しく息をする楓を見て自分の力不足に
歯痒く思った。

黒き牙と赤き牙（後書き）

感想を待っています。

頼ってくれ(前書き)

おまじなむせら

頼ってくれ

楓はラウラに運ばれ保健室のベッドで眠っていた。

「くっ」

「私達が目を離さなければ」

「仕方ないって言いたくないけど、少し無理だっただったわよ」

「僕等、守れなかったね。楓の事」

眠っている楓をセシリア、鈴、シャル、ラウラは暗い表情で見っていた。

「お前等!!」

「無事か!?!」

「一夏、箒」

一夏と箒が慌てて保健室に入りシャルが二人を見た。

「大丈夫、なのか?」

「命には別状はない。絶対防御のお陰だが」
「だが？」

「意識不明。何時目覚めるか分からないって」

「そうか」

「あれ？ 終さんはどちらへ？」

入ってきた一夏と箒に楓の状態を説明するとセシリアが終の居場所を聞くと一夏と箒が同時に言った。

「生徒会室」

「えっ？」

「何かあったのか？ あいつは」

二人の答えにセシリア、鈴、シャルが驚愕しラウラは終が何かしたと感じた。

その頃終は楯無に生徒会室に呼ばれ仁王立ちする楯無の前で正座をしていた。

「何で呼ばれたか分かる？」

「壁を壊したからだろ。緊急事態なんだ。仕方ないだろ」

「仕方ないで壁壊さないでよ」

終の言い分に楯無は頭を抱えた。

「それより壁を壊せる方が凄いですよ。生身で」

「そうだね」

生徒会室に終、楯無の他に三つ編みで眼鏡を掛けた少女、虚とのんびりした少女、本音が終のした事に驚いていた。

「後はあいつ等の目的だけだ」

「一夏の方は白式の強奪、だが楓の方はわかんねえ」

生徒会室で四人は暫く頭を抱えていた。

その後はラウラ、シャル、鈴、セシリアの順番で現在は夕方でセシリアが楓の手を握っていた。

「楓さん、私が頼りないばかりに」

セシリアは俯いていると手を握り返され見てみると楓が目を開けた。

「楓さん、良かったですわ」

「セシリアさん、ご心配をお掛けしました。それと、すみません」

「謝らないで下さい。私達も、楓さんから離れていた事で」

「セシリアさん」

セシリアは少し俯いていると楓の目を見て抱き締めた。

「セシリア、さん？」

「このままで居させて下さい」

セシリアは楓を力強く抱き締めた。楓を離したくないと言う感情から楓を抱き締めると言う行動に出ていた。

「楓さん」

「何ですか？」

「何処にも、行かないで下さい」

「・・・はい」

セシリアが小さな声で言った事に楓も小さく頷いた。

「すみません突然」

「いえ、別に平気ですよ」

セシリアは申し訳なさそうに言ったが楓は微笑みながら言った。

「ですが楓さん、平気ですか？」

「はい。今は特に大丈夫です」

楓は笑みを浮かべるとベッドから立ち上がった。

「楓さん、暫くはお休みになって下さい」

「大丈夫ですよ。少し部屋で休めば平気ですから」

楓はセシリアが止めているにも関わらず部屋に戻っていった。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

夜中零時過ぎ、全員が寝静まった頃楓は何かに魔されていた。

「私はあなたのクローン」

「あなたも私と同じような風でしょ」

「アハハハ」

「嫌!!」

楓が起き上がると震え嫌な汗を掻いていた。

「あの人、確か、某国企業の、A、さん？」

楓はタオルを手に取り汗を拭いているとAに付いて思い出していた。Aに言われた事を思い出しているとAが自分のクローンと言う事を否定したかったが否定する要素がなく悩んでいた。

（私は、一体、一体、何？）

それから楓は寝付けずにいた。

「大丈夫？ 楓」

「えっ？ あっ、はい」

翌朝、楓は鈴と廊下を歩いていたが楓は何処か暗かった。

「休んだら？ 流石に顔色悪いし。無理しない方が」

「平気ですから、じゃ、行きますね」

「あっ、楓！！」

楓はそのまま教室に向かって走っていた。

「音梨、お前は休め」

「えっ？ どうしてですか？」

教室に入った楓は千冬に休めと言われて困惑していた。

「当たり前だ、お前は何を考えている。先日の疲労などがあるからだから休め」

「ですけど」

「休め」

楓が何かを言う前に千冬がそう言った。

「オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ。音梨を自室に連れていけ」

千冬から言われてセシリア、シャル、ラウラは啞然としていたが頷いた後楓の手を引いて楓の部屋に戻っていった。

四人は廊下を歩いていたが会話はなく沈黙が流れていた。

「なあ、楓」

「は、はい」

ラウラが言つと楓は少しビクついたが返事をした。

「私達はお前の味方だからな。どんな事があっても守ってみせる」
「ラウラさん」
「うん。次は絶対に守るよ」
「シャルさん」
「だから私達を頼って下さい」
「セシリアさん」

楓はセシリア、シャル、ラウラの目を見て少し嬉しそうにした。

（楓大丈夫かな？ 酢豚作ってあげよう。喜ぶと良いな）

鈴も楓をセシリア、シャル、ラウラと同じように大切に思っていた。

「……」

「返事がない。ただの屍か」

「織斑静かにしろ。そして篠ノ之は自分の席から何故離れている」

「愛の力です」

「理由になっていないだろ」

終は机に突っ伏し一夏はそれを見て言い筈は何故か一夏の近くに居て千冬は溜め息を吐き他の者は呆れていた。教室に入った楓は千冬に休めと言われて困惑していた。

「当たり前だ、お前は何を考えている。先日の疲労などがあるだろ。

だから休め」

「ですけど」

「休め」

楓が何かを言う前に千冬がそう言った。

「オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ。音梨を自室に連れていけ」

千冬から言われてセシリア、シャル、ラウラは啞然としていたが頷いた後楓の手を引いて楓の部屋に戻っていった。

四人は廊下を歩いていたが会話はなく沈黙が流れていた。

「なあ、楓」

「は、はい」

ラウラが言つと楓は少しビクついたが返事をした。

「私達はお前の味方だからな。どんな事があっても守ってみせる」

「ラウラさん」

「うん。次は絶対に守るよ」

「シャルさん」

「だから私達を頼って下さい」
「セシリアさん」

楓はセシリア、シャル、ラウラの目を見て少し嬉しそうにした。

(楓大丈夫かな？ 酢豚作ってあげよう。喜ぶと良いな)

鈴も楓をセシリア、シャル、ラウラと同じように大切に思っていた。

「.....」

「返事がない。ただの屍か」

「織斑静かにしろ。そして篠ノ之は自分の席から何故離れている」

「愛の力です」

「理由になっていないだろ」

終は机に突っ伏し一夏はそれを見て言い筈は何故か一夏の近くに居て千冬は溜め息を吐き他の者は呆れていた。

頼ってくれ(後書き)

感想を待っています。

悪夢を見る月（前書き）

少し不味いかもな。

悪夢を見る月

楓は部屋に戻ると何時の間にか眠っていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

楓の夢の中にはAが笑みを浮かべながら向かい刀を振り下ろす所で目が覚めた。

「最近、ずっとこんな夢ばかり」

楓は汗を拭きながらベッドから降りるとずっと荒い息を吐いていた。

「……最近、何でこんな夢ばかり、もう、嫌。椀さん」

楓はベッドに倒れ込むと自分のもう一つの人格の名を呼んだが返事はなかった。

(それに、私のクローン、私も、同じ風なら・・・きっと誰かを、傷つける)

楓は悩んでいた自分が何者なのか、何をしていたのか、その手掛かりはAなのだが楓はAに会えば間違いなく恐怖で戦えなくなる。

(怖い。Aさんが、自分が、自分の過去が)

楓がそんな考えに浸っていると扉を叩く音が聞こえて時計を見ると何時の間にか九時を回っていたが食欲もなかったが扉を開けると鈴がタツパーを持って立っていた。

「鈴、さん」

「お腹空いてると思って、食べる？」

楓は鈴の問いに頷いて部屋に招いた。

「ほら、酢豚。まだ何も食べてないでしょ？」
「あつ、はい。いただきます」

楓は箸を取り出し酢豚を食べた。

「美味しい？」

「はい、美味しいですよ」

楓は酢豚を口に運んでいたが鈴は楓の目から涙が出ている事に気が付いた。

1763

「楓？」

「美味しいです。なのに、涙が止まらないんです」

楓が泣いていると鈴は静かに抱き締めた。

「鈴さん」

「泣きたかったら泣いて良いから」

楓はその言葉を聞くと鈴の胸で大声で泣いた。

安心したのか鈴の胸で泣いた後楓は静かに眠っていた。

「泣き疲れちゃったか、まあ、あんなだけ泣けばね」

鈴は楓の頭を一回撫でると部屋を出た。

「ラウラさん、どうして？」

「いや、ただ単に来たら楓が魘されていた。それだけ、っ！？／／」

ラウラが言い切る前に楓がラウラに抱きついた。

「今は、こっぴどせて下さい」

ラウラは何も言わずに楓の頭を優しく撫でた。

「私、怖いんです」

ラウラが楓の頭を撫でていると楓が呟いた。

「怖い？」

「はい。私が、私の過去が怖いんです。過去に何をしたか分からない

い、そんな私が、どうしようもなく、怖いんです」

楓の言葉を聞いたラウラはより力強く楓を抱き締めた。

「すまない。今までその事を気付いてやれなくて、すまない」
「ラウラさん」

それからはラウラはただ黙って楓を抱き締めた。

「私に出来る事があれば言ってくれ」
「ありがとう、う、う、ざい、ます」
「当たり前だ。お前は私の嫁だ」

暫くラウラは楓を抱き締めながら頭を撫でていた。

「そろそろ寝るか」

「あっ、はい」

そう言ってラウラは部屋の明かりを消すと楓の隣で寝ようとしていた。

「ラウラさん。何をしているんですか？」

「不安だろうと思って、添い寝だ」

楓は苦笑いしながら取り合えず眠りについたがラウラは楓の寝顔を見ている。

「楓、楓は楓だ。だから安心しろ」

ラウラは楓の寝顔を見ながら楓の上になった。

「ん、んん？」

違和感を感じた楓が目を開けるとラウラの顔が見えた。

「ラウラさっ!?!?!」

楓の言葉はラウラが楓の唇を自分の唇で塞いだ事で遮られた。

「ん／／／ん／／／」

「ん／／／」

ラウラは舌を絡ませて楓の腕を掴んで抵抗できないようにしてラウラは舌を絡ませていく。

「ぶはあ／／／」

「はあ／／／はあ／／／はあ／／／」

ラウラは唇を放すと楓は焦点が合っていない目でラウラを見た。

「ラウラさん、どうして、何ですか？／＼／」

顔を赤くしながら聞いた楓に対しラウラは楓の胸を撫でた。

「んん！？／＼／」

楓は身を縮こまらせるがラウラはゆっくり楓の顎を取った。

「不安なら私が忘れさせてやる。ん・・・」
「ん・・・／＼／」

ラウラは今度は舌を絡め両手は楓の体を撫で回すような動きをした。

「んん、ん・・・／＼／」

「ん・・・んふっ／＼／」

ラウラが放すと楓は荒い息を吐いて天井を見上げていた。

「忘れられそうか？」

ラウラの問いに楓は一応頷いた。

「なら、もう少し激しくても良いな」

「!????!!?!?!?!?／＼／」

ラウラはそう言うと楓の寝間着のボタンを一つずつ丁寧に外し楓から下着を外しまたキスをすると胸を揉みだした。

終は自室で眠っていると何かを抱きつかれている感じがして目を開けるとパジャマ姿の簪が終に抱きついていた。

「あれ？　一夏は何時の間に簪になっただんだ？」

終はもしかしたら夢かもと頬を抓ったが痛みがあり現実だと気付いた。

「何で」

「んっ、んっ」

終が考えていると簪が目を開けた。

「まだ・・・夜」

「その前に何でいる？」

寝ぼけた目で言う簪に終は取り合えず聞いてみた。

「終の隣で寝たかった」

そう言うと簪はまた眠りについた。

「オンドウルルラギッタンディスカー！？」

それが終の叫びだった。因みに一夏は簪に連れ込まれ簪と一緒に寝ていた。簾と同室の女子は色々諦めていた。

悪夢を見る月（後書き）

楓がラウラに何をされたかご想像にお任せします。

後、感想を待っています。

生徒会副会長

ある日、全校生徒が体育館に集められた。そこには楓の姿もあった。

「何だろうな」

「さあ、私には分からんが」

「重要な事だとは思いますが」

それまで騒がしかった体育館が楯無が現れると静かになった。

「本日集まって貰ったのは、長年空席だった生徒会副会長が決まりました」

楯無の言葉でまた体育館が騒がしくなり一夏はある事に気が付いた。

(そう言えば終が居ないけど、どうしたんだ?)

「生徒会副会長は期間限定でレンタル部員をします」

「はあ、だから嫌なんだよ」

楯無の言葉を聞いて終は溜め息を吐くと女子達は騒ぎ出すが一人だけ不機嫌な表情だった。

（何で生徒会に？ 何でお姉ちゃんの近くに？）

楯無の妹の簪だった。簪は姉である楯無にコンプレックスを抱いているがそれは別の時に話そう。更に簪は終に好意を寄せているため楯無に嫉妬していた。楯無も終に好意を抱いているために今回の企画を立てたのだった。二人の好意を終は気付いていなかった。そしてもう一人終に好意を抱いている者が居て、一夏の友人の五反田弾の妹、五反田蘭だが蘭はまだ中学三年、来年には高校でIS学園志望だ。

（はあ、この先大変だな）

終は生徒会副会長になった事で大変になると感じたが本当に大変なのは楓達が二年になった時つまりは来年だが、本人は全く気付いていない。

「良いですか？ 生徒会副会長はレンタル部員を期間限定でしますのよ」

「もう分かったから、そろそろ勘弁してくれよ虚」

「楽しそうだね」

「何処がだよ」

終に生徒会副会長の仕事の説明をする虚とそれを見ている本音。二人の家、布仏家は更識家に使えていて虚が楯無、本音が簪の専属のメイドだ。

「と言うより何で俺が副会長何だよ」

「まあ、仕事頑張って」

「お前に言われたくない」

楯無の言葉を聞いた終はそう言つとレンタル部員として部活に向かうのだった。

「終どうなんだろうな？」

楓、一夏、篝、セシリア、鈴、シャル、ラウラは廊下を歩いていると一夏が聞いてみた。

「確かに気になるな」

「まあ、別に平気でしょ」

「やたらと死なないからな」

「それは違つと思ひますが」

取り合えず全員終がどうゆう事をしているのか気になるらしい。そ

「取り合えず俺は何をすれば良い？」
「そうね」

終は部長らしい人物と話していた。部活名はファッション部、シンデレラ衣装などの服を作ったのはこのファッション部だ。そして終の後ろではフラッシュ音が絶えず鳴っているが終は気にせず話を続けた。

「まあ、服着て」
「はっ？」

部長の言葉を聞くと終は啞然とした。何故服を着るのか分からなかったが取り合えず言うことを聞いた。

「で、何着ればいいんだ」
「これ全部」
「えっ？」

終は正直自分の耳を疑った。終の目の前には山積みになされた服の数

一夏の問いに終はほぼ死んだ魚の目で答えた。

(大丈夫じゃねえな、これ)

一夏は苦笑いをしながら終の様子を見ていた。

終が死んだ魚の目をしている頃楓は風呂に入りシャワーを浴びていた。

「ふう」
「」

シャワーからであるお湯は楓の髪を濡らし楓が風呂場についている鏡を見れば楓の目は学園に来る前の黒ではなく血のように赤い色映る。

「・・・・・・・・」

楓は鏡に映っている赤い目を触るが変わる事なくそこには楓の赤い目が映る。

（どうして、私の目は赤に、どうして？）

そんな疑問を感じつつ楓はシャワーを止め体をバスタオルで拭きそのままバスタオルを体に巻いて風呂場を出た。

「あっ、楓、お邪魔してるね」

楓が風呂場を出て見たのはシャルの姿で楓は今の自分の格好を見られて顔を赤くしていた。

「ど、どうしたんですか？／＼／」

楓は両腕で胸を隠しシャルに少し背中を向ける状態だった。

「取り合えず話がしたくて」

「じゃ、着替えますから、待っていて下さい／＼／」

楓は服を掴もうとするがそれより前にシャルが楓をベッドに押し倒した。

「きゃあ!?! シャ、シャルさつ!?!／＼／」

楓が身に着けていたバスタオルはシャルが楓を押し倒した衝撃で外れ楓をシャルの前で生まれのままの状態にした。

「へえ、可愛いね。楓って」

「は、放して、下さい／＼／」

楓は恥ずかしさから顔を赤くするがシャルはお構いなしに楓に深いキスをした。

「んん！？／＼／」

暫くしてシャルは楓の唇から自分の唇を放した。

「楓って、やっぱり可愛い」

シャルは暫く楓の部屋から出てこなかったと言う。

生徒会副会長（後書き）

感想を待っています。

気晴らしへ(前書き)

タイトル通りです。

多分

気晴らしへ

「あゝ、どっか行くか」

IS学園生徒会副会長黒谷終は基本的にあれをやるうと思ったたら行動するタイプでとっても自由な性格だ。自由な性格だ。大事な事なので二度言いました。

（でもどうするか。楯無は絶対に連れていけない、簪も、やめとくか）

思考を張り巡らせた終の答えは一人で外に出ると言うものだった。楯無と出ようものなら振り回され簪は自分で専用機を作ろうとしているのを終は知ってるため誘わない。つまり終一人で外に出る事になる。

（気晴らしにはなるか）

終が外に出る理由は気晴らしの為に終は部屋に戻り着替えをし

学園を出た。

楓は部屋でバスタオルを掛けた状態で眠っていた。

「ん、あれ？」

その隣でシャルが目を擦りながら起き上がりバスタオルを掛けただけの楓を見て鼻を押さえた。

（ああ、鼻血が）
「ん、んん」

シャルが鼻を押さえていると楓がうっすらと目を開けた。

「あつ、楓。おはよう」

「おは、よう、うじやいましゅ」

寝起きで呂律が回らず半開きの目でシャルを見て起き上がった。

「ぶっ！？／＼／」

今の楓の状態は何も着てない状態でバスタオルを掛けていただけが起き上がった事でバスタオルが取れほぼ全裸状態。シャルはそんな楓を見て鼻血を流した。

「うにゅ」

楓は目を擦り小さく欠伸をするとシャルに向かって倒れ込み楓の胸がシャルの胸に当たった。

「かかか楓、いいい幾ら僕等が、楓の純潔を戴いていないからって、

「そそそそんな！！／／／」

楓がシャルに寄りかかって眠っていることにシャルは動揺していた。

「ふにゆ」

動揺しているシャルをよそに楓は気持ちよさをうつつに眠っていた。

「お買い物ですか？」

楓は服を着替える途中で鼻にティッシュを詰めてるシャルから買い物に誘われた。

「うん。一緒に行かない？」

「別に良いですよ。私も行きたかったので」

楓が服を着替え終わるとシャルは立ち上がった。因みにシャルは楓の着替えを終始見ていた。

「じゃ、何を買う？」

「そうですね。アクセサリー何かを買いたいです」

楓は遠慮気味に言ったがシャルは笑顔で楓の手を取り学園を出た。

終は私服で町を歩いていた。終の私服は黒のＴシャツにジーパンで襟首にサングラスを掛けていた。

（来たは良いが、どうするか）

終は歩きながら頭を抱えていると

「終、さん？」

「あつ、蘭」

偶然にも蘭と会った。蘭は終を見つけると近付いた。

「終さんは今日はどうしたんですか？」

「ん、気晴らし」

終は軽く伸びをし空を見ていると蘭が終の手を握った。

「だったら私と買い物しませんか!？」

「買い物？」

「はい!!--」

蘭に言われた後終は暫く考えたが蘭を見た。

「別に良いぞ」

「本当ですか!?!」

「ああ、これと言って用事はないからな」

「だったら早く行きましょー!!」

「つて、ちよっ」

蘭は終の手を引っ張ったまま走った。

「着きましたね」

「うん。そうだね」

楓とシャルも街に着いた。楓の私服は薄いオレンジ色のTシャツに

その上に白い半袖のジャケット、そして淡い青色のスカート姿。シヤルは白いYシャツにミニスカート姿で居た。

「じゃ、行くっ」

「あっ、はい」

シヤルは楓に手を差し伸べ楓がその手を取ると歩いていった。

(どろすっか)

終は今の現状に悩んでいた。これはある意味ヤバいかもしれない何故なら蘭が終の腕に抱きついていているからだ。

「なあ、蘭」

「何ですか？ 終さん」

「少し離れないか？ 歩きづらいく、周りの視線も痛い」

終の言った通り周りの視線も痛かったが蘭は別に気にしなかった。

「別に良いじゃないですか」

「君が良くて俺が良くない」

終は溜め息を吐いたがその表情は満更でもなかった。

「何にしょつか」

「そうですね」

その頃楓とシャルはアクセサリーショップでアクセサリーを見ていた。

「色々ありますね」
「本当にそうだね」

二人が入ったアクセサリーショップは種類が豊富で選ぶのに苦労していた。

「どんだけあんだ？ これ」
「私に言われても」
「あれ？」

聞き覚えのある声が聞こえそつちを向くと終と蘭がアクセサリーを見ている。

「あれって」
「終さんと、確か、蘭、さん」

啞然と見ている二人に終も気がついたのか手を振った。

「終、聞くけど、ロリコン?」

「何故そこに行く。全然違うし」

「じゃ、どうして」

「気晴らし、だそうです」

蘭のその言葉を聞いた二人はある意味納得した。あの生徒会長なら、とシャルは思ったが口には出さなかった。蘭のその言葉を聞いた二人はある意味納得した。あの生徒会長なら、とシャルは思ったが口には出さなかった。

「で、お前等は?」

「あつ、買い物に」

終は頷くとそれぞれ別れた。

「それにしても種類豊富だ」

終は種類の多さに若干呆れながらアクセサリを見ていた。

「選ぶのが困りますね」

「確かに、あつ、これなんか俺にどうだ？」

そう言つて終が蘭に見せたのはドクロのシルバーアクセだった。はつきり言つて悪趣味なアクセサリだった。

1802

「それは、流石に」

「そうか？」

「止めといた方が」

「だな」

蘭に言われて終はドクロのアクセサリを元に戻し再びアクセサリを選びを再開した。

(おっ、これ蘭に似合うかな)

終はアクセサリーを手に持った後蘭を見てアクセサリーに視線を戻した。

(終さん、何なら喜んでくれるだろ?)

蘭も蘭で終にどつゆつアクセサリーが似合うか探していた。

(種類多すぎると)

シャルはアクセサリー選びで種類の多さで悩んでいた。

(どれも良いかな)

シャルはアクセサリーを手にとってみたりしていた。

(楓は、何をあげたら、喜ぶかな?)

シャルは楓の喜ぶ顔を見たいためにアクセサリー選びには必死だった。

(シャルさん、何が似合うかな?)

楓は買い物に誘ってくれたシャルの為にアクセサリーを選んでいった。

(最近、やっぱり心細いな)

楓は最近椀が出てこない為心細くなっていた。それもその筈、楓にとって椀はある種の心の支えであった為出てこない事は楓に不安を与えていた。

（今は、楽しめますか）

楓は再びアクセサリー選びを続けた。

「あゝ、あつと言っ間か」
「そうですね」

終と蘭はベンチに座り夕日を見ていた。

「今日はありがとな。お陰で気分が晴れた」

「それは誘った甲斐がありました」
「あっ、ちよっと待ってる」

終はポケットから袋を取り出した。

「何ですか？ それ」

「ん、ちよっと目瞑ってる」

蘭は疑問符を浮かべながら目を瞑り終は袋を開けそれを蘭の首に掛けた。

「良いぞ」

終の声で蘭は目を開けると首に十字架のペンダントが掛けられていた。

「あの、これって」

「付き合ってくれたお礼だ」

「言ってくれば、何時でも付き合います／＼」
「ありがとう」

終は蘭の頭を撫でた後学園に帰っていった。

「今日は楽しかったですね」
「うん。そうだね」

楓とシャルは学園に帰る前に公園のベンチでアイスを食べていた。

「美味しいですね」
「そうだよね」

楓がアイスを食べている光景にシャルは見取れていたが自分のアイ

スを食べた。

「ねえ、楓」

「何ですか？」

アイスを食べ終わった後シャルが楓の名前を呼んだ。

「これ」

「えっ？ これって」

シャルは楓に星の形のペンダントを渡した。

「付き合ってくれたお礼」

「ありがとうございます。なら、私も」

楓もシャルに花卉の形のペンダントを渡した。

「良いの？」

「はい」

「なら、ありがとう」

楓もシャルに渡しお互いペンダントを首に掛けた。

「似合うよ」

「あ、ありがとうございます／＼」

そのまま二人も学園への帰路に就いた。

「なあ、篝」

「何だ？ 一夏」

その頃一夏と篝は部屋で話していた。

「休み取れたら、家に来るか？」
「そうだな。行ってみいな」
「だったら、何時か行こうぜ」
「ああ、分かった」

一夏と箒は手を繋いで部屋を出た。

鈴が食堂に来てみると楓とシャルが仲良くしているのを目撃した。

(ええ！？ 何でシャルロットと楓が!!！)

暫く唾然としていた鈴だが楓の元に向かった。

「あつ、鈴さん」

「鈴」

「ヤッホー、楓、シャルロット」

鈴は楓の隣に座ると食事を食べ始める。

「今日は二人共仲が良さそうね」

「はい。今日はシャルさんと買い物に」

「へえ、そうなんだ」

鈴はシャルに嫉妬した後雑談をしながら食事を食べる。

鈴は楓の部屋に向かっていた。

(ふうふう、何か楓の部屋って、始めてくるような)

鈴はそんな事を考えながら扉を叩いた。

『どちら様ですか？』

「あつ、楓、私」

『鈴さん？ 今開けますね』

暫くすると楓が扉を開けて鈴を招き入れた。

「どつしたんですか？ 急に」

「ちよっとね」

楓が鈴に背中を向けると鈴は楓の背中に抱き付いた。

「り、鈴さん！？ / / /」

楓は鈴が突然抱き付いた事に驚きながらも振り解こうとするが鈴は力強く楓に抱き付いていて離れなかった。

「ねえ、楓」

「何ですか？」

「楓にとつて、私は何？」

「えっ？ お友達ですよ」

それを聞いた鈴は少しムスツとしながら楓の耳を甘噛みした。

「ひゃ！？／／／鈴さん、そこは、駄目です／／／」

「何が駄目なの？」

「ひゃああ！？／／／」

鈴は楓の耳を甘噛みしながらベッドへ押し倒した。

「っ！？／／／」

「楓って、やっぱり可愛いね」

そう言い鈴は楓の体の至る所を舐めだした。

気晴らしへ（後書き）

感想を待っています。

楓、セシリア、絶体絶命（前書き）

タイトル通り絶体絶命です。

楓、セシリア、絶体絶命

「今日はいい天気ですね」

「そうですね」

楓とセシリアは公園のベンチでサンドイッチを食べていた。理由はセシリアが散歩に行きましょう。楓がはいで二人は散歩へ、実に分かりやすい。

「今日はどうしてお散歩に？」

「いえ、良いお天気だったので・・・（本当は楓さんと外に出たかっただけですわ）」

セシリアの欲望がだだ漏れだがセシリアは気にせず話を続けていた。

「セシリアさん、最近は大変ですね」

「そうですね。けど終さんも大変だと思えますわ」

「生徒会副会長ですからね」

「正直、大変そうですね」

サンドイッチを食べ終わった二人はベンチから立ち上がり歩きだした。

楓とセシリアは路地を歩きながら他愛のない話をしていた。

「それにしても終さんが生徒会副会長は驚きましたわ」

「私も驚きました」

二人は笑いながら道を歩いていると背後から数人の人影が近寄った。

「ウグツ!?!」

「楓さん!?! グツ!?!」

楓とセシリアは首にスタンガンを当てられ二人は何処かへ連れて行

かれた。待機状態のエターナルムーンを残して。

「たく、セシリアたら目を離れた隙に楓を連れて何て、あれ？」

鈴は路地を歩いていると地面に落ちてるエターナルムーンを手にとった。

「何でこれが？」

鈴は辺りを見渡すが楓の姿はなく走り出した。

「うっ、うっ」

セシリアが目を開けると薄暗い部屋の中で隣で楓も眠っていた。

「楓さん!! 楓さん!!」

「うっ、うっ、セシ、リア、さん？」

「ご無事ですか楓さん!？」

「あっ、はい」

二人は辺りを見てみるがどこかの部屋以外分らなかったが扉を見つけて開けようとするが鍵が掛けられていて開けなかった。

「閉まってますわね」

「セシリアさん、少し、寒くないですか？」

セシリアが楓の方を見てみると楓は体をさすっていた。セシリアも段々と寒くなるのを感じた。

「何故、急に」

「セシリアさん、寒いです」

楓とセシリアは体をさすりながらセシリアは鈴にプライベートチャンネルを開いた。

「ん？ 誰だろ？」

鈴はプライベートチャンネルを開くとセシリアからだった。

「あつ、セシリア。今どこ？ 楓がエターナルムーンを落としてて
『鈴さん、私達、閉じこめられましたわ』
「はっ？」

鈴はいきなり何を言うのと思いながらセシリアの話聞いた。

「で、どうゆう状況？」

『部屋の中なのですが、場所も分かりませんし、寒くなってますわ』
「寒くなってる？」

『恐らく、冷凍庫だと思いますわ』

「だとすると使われてない冷凍庫ね。すぐ探すわ」

『お願いしますわ』

鈴はプライベートチャンネルを切ると走り出し終にプライベートチャンネルを繋いだ。

『どうした鈴？』

「終！ 今すぐに使われない冷凍庫の場所教えて！！」

『ああ、分かった』

終が鈴の甲龍にデータを送ると鈴はプライベートチャンネルを切った。

（待っててね！ 楓！！）

「うう、セシリアさん、大丈夫ですか？」

「楓さんこそ大丈夫ですか？」

楓とセシリアの吐く息は白くなり二人共寒そうだった。

「ふう、ふう」

「楓さんしっかりして下さい」

セシリアは楓の体をさすった。

「楓さん、少し辛抱して下さい」

「はい。大丈夫です。セシリアは、大丈夫ですか？」

楓の唇は少し青くなっていた。

「楓さん、唇が青くなってますわよ」

そう言いセシリアは楓に覆い被さる形で抱き締めた。

「少し、暖かいです」

楓の顔色も少しは良くなったが気休めにしかならず何時まで保つか分からない状態だった。

（鈴さん、早くして下さい）

セシリアは楓を抱き締めながらそう思った。

「何処よ一体!？」

鈴が楓とセシリアが閉じこめられている冷凍庫を探していたが見つかる心配がなく苛ついていると終からプライベートチャンネルに連絡が来た。

「何よ!？ こっちは忙しいの!！」

『そう言わずに地図の場所に行け』

終はそう言っているとプライベートチャンネルを切り鈴は地図が指し示す場所へ向かった。

遡る事、数分前終は鈴から聞かれた事が気になり人工衛星のカメラをジャックし冷凍庫周辺を調べると楓とセシリアが冷凍庫に入れられる映像を発見し鈴にプライベートチャンネルを繋ぎ場所を教えた後終は楓とセシリアを浚った者達が居る場所へ向かった。

終が来たのはどこかの廃墟で終は首を鳴らしながら入りある部屋の前まで来ると話し声が聞こえた。

「それにしても良い仕事だったな」

「ああ、あの女を冷凍庫に閉じ込めるだけで千五百万、最高だぜ」

「三人で分ければ五百万、序でに居た奴も閉じ込めたいし暮らせるな」

終は三人の話から考えると三人は誰かに依頼され楓と偶然一緒だったセシリアを誘拐、冷凍庫に監禁したと考えた後部屋に入った。

「成る程、話は分かった」

「何だデメエ!?!」

三人は終の突然の登場に驚き二人がナイフで終を切ろうとするが終は軽く避けると二人を地面に叩きつけ意識を刈り取るとナイフを両手に持った。

「この餓鬼!!」

残った一人は銃を取り出したが終は特に反応せず見ていると発砲したが終はナイフだけで弾を切っていき撃ち終わると終はそいつの意識を一瞬で刈り取った。

「はあ、お前等の罪状は拉致監禁、殺人未遂だ」

終はそう言つとナイフの指紋を拭き取り二人の手に握らせた後一回外に出た。

セシリアは楓を抱き締めながら助けを待っていた。

「楓さん、もう少しの辛抱ですわ………楓さん？」

セシリアが楓を見てみると楓の唇は青くなり目も虚ろだった。

「楓さん？ 楓さん！！」

セシリアは楓の体を揺すったが反応がなく非常に不味い状況だったが扉が開きセシリアが扉の方を見ると鈴が居た。

「やっぱり当たってたんだ」

「鈴さん！？」

鈴は二人を抱えると冷凍庫から外に出た。

「大丈夫？ セシリア」

「私よりも楓さんの方が」

「そうね。セシリア、自分で歩ける？」

「何とか歩けますわ」

「じゃ、自分で歩いて、私が楓を抱えるから」

「分かりましたわ」

鈴が楓を抱えると学園へ戻っていった。

「ふう」

「本当に大丈夫なの？」

「私は兎も角ですわ」

「そうね。暫くすれば目を覚ますって言われてもね」

セシリアは温かい飲み物を飲みながら隣で静かに眠っている楓を見た。鈴も楓を見た後楓の頭を撫でた。

「大丈夫よね。楓」

さっきまで冷たかった楓の肌は今は人並みに暖かくなっていた。

「んっ、んんっ」

鈴が楓の頭を撫でていると楓は目を開けた。

「楓！？ 大丈夫！！」

「楓さん！！」

セシリアと鈴が寄ると楓は頷き二人は安心したような顔をした。

「もう少し、寝て良いですか？」
「うん。分かった」

楓の問いに鈴が答えると楓は再び眠りについた。

「癒されますわね」
「そうね」

セシリアと鈴は楓の寝顔を見ながら癒されていた。

終は生徒会室で自分の仕事をしながら考えていた。

（あいつ等は誰に依頼されたんだ？ 警察には何か分かったら連絡して貰うように言ったんだけどな）

終は警察からの連絡を待っていると終の携帯に連絡が来ると終はそれに出た。

「はい、もしもし。警察ですか？ なっ！？」

終は警察からの連絡に驚いた。何故なら護送中、楓とセシリアを誘拐した犯人が逃げ出しその後遺体で発見されたと言う連絡だった。

（何が、どうなってんだ？）

終は頭を抱えた。

楓、セシリア、絶体絶命（後書き）

感想を待っています。

キャノンフットボール・ファスト(前書き)

キャノンフットボール・ファスト開催

キャノンフットボール・ファスト

「楯無あの野郎」

終は生徒会室で生徒会の仕事をしていた。普通は楯無がする仕事も終が何故かしていた。仕事の内容は今度行われる、キャノンフットボール・ファストに関する事だった。

「後で何か奢らせる」

終の中で楯無に対して財布の中身が無くなるまで奢らせようとしていた。

「キャノンフットボール・ファスト、ねえ」

終は資料を見た後自分のIS、ブラックファンングを見た。

「キャンノンフットボール・ファスト、ですか？」

楓は教室でクラスメイト達とキャンノンフットボール・ファストについて話していた。

「うん。近々あるし、どう？」

「何がですか？」

「練習とかしてるって聞いているの？ どうなの？」

「まだ、何も」

そんな事を話した後楓は部屋に戻っていった。

寝静まった頃楓が目を開けて辺りを見れば自分しか居ない暗い部屋。窓から外を見れば少しの星と月が見えるだけで他は何もない。楓はキャノンフットボール・ファストについて考えた。キャノンフットボール・ファストはISで行うレースで安全だが楓は胸騒ぎを感じていた。

(何で、胸騒ぎが)

楓は不安に感じながら再び眠りについた。

キャノンフットボール・ファスト当日、二年のレースが終わると楓達はスタートラインに立ちセシリア、鈴、シャルは高速移動用のパッケージを使い一夏は背中に背負ったバスターソードを取り出し剣の腹に額を当てた後また背負った。

「一夏、それ使わないの？」

鈴が一夏に聞くと一夏は頷きながらこう続けた。

「これは使わない。向こうの俺の生きた証だ」

一夏が言つと楓達は別世界へ行つたことを思い出した。そこで会つた人物達、そして楓と終は話していないが別世界から帰つた後また別の世界に行きそこで仮面ライダーに再び出会つた。楓と終が最初に別世界で会つた仮面ライダーとは違つたが確かに仮面ライダーだった。だがそれと同時に楓達はその世界に生きる人達の生きざまを見た。

「（あいつ等、どうしてるかな）・・・お前等、そろそろ始まるぞ」

終は別世界で会つた者達を思い出しながら集中し他の全員も光速機動用ハイパーセンサー・バイザーを付け集中するとレースが始まりトップを終が行きそれを楓達が追つた。

「あいつやっぱり速いな」

一夏は終の背中を見て眩いた。終のブラックファングは専用機持ちのISSの中で一番の性能である事は全員が知ってる。更に終の感覚も常人より優れているし身体能力も学年、いや学園の中ではトップである為それをフルで使いトップに立っていた。

(気持ち良いな。風が)

トップの終はそんな事をお構いなしにただ風を感じていたがレースである事を思い出すと深呼吸をした後ケルベロスを持ち箒に向けた。

「悪いな、勝負だから恨むなよ」

そるに気付いた箒が避ける前に終は引き金を引くと一夏が雪片で弾を弾いた。

「一夏」

「俺は自分が惚れた女は守る。どんな事があってもな」

一夏の目を見た終はオルトロスを出しセイバーを発動すると一夏も雪片を構えた。

「相変わらずか？」

「お前もな」

終と一夏はレースそっちのけで戦い始めた。

「何をしているんだ」

終と一夏はどんどん抜かれていきラウラに抜かれた時ラウラは不思議そうな目をした。

二人を置いてレースをしている女子達は楓と篤がトップを争いセシリアや鈴、シャル、ラウラもトップになるうとしていた。

（（（絶対にトップに）））

セシリア、鈴、シャル、ラウラの通称百合四天王（命名終）はお互いに火花を散らしていた。理由はキャノンフットボール・ファスト開始前の事。

百合四天王は楓の事でまた争っていた。

「ラウラさんとシャルロットさんは楓さんと寝たのですから
別に良いでしょうが」

「僕と一緒に寝ても変わらないでしょ」
「それに楓は私の嫁だ」

どうやら今回は誰が楓と寝るかで争っているらしい。正直誰でも良
いと一夏、篝、終がこの場にいたら言っただろう。

「だったら、今度行われるキャノンフットボール・ファストで優勝
した人が楓さんと寝るとはどうですか？」

これに全員納得してキャノンフットボール・ファスト当日を向かえ
たのだった。

そんな事を知らない楓はトップになろうとして篝もそうしていた。

「くっ」

「箒さん、速いですね」

「お前もな」

だがそのトップ争いはセシリア達を焦らせた。あくまでセシリア達の誰かが優勝すれば楓と寝れると言う話だが箒、ましてや楓が優勝すれば水の泡セシリアはスターライトmk?、鈴は双天牙月、シャルはアサルトライフル、ラウラはプラズマ手刀を出して向かう。

「ハッ!!」

その前に楓がゼウスを出し箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラに向かって撃ち避けた後セシリアとラウラはスターライトmk?とレールカノンで楓を狙い鈴、シャルは龍砲、アサルトライフルで箒を狙い放つと楓はポセイドンを出し防ぎ箒も衝撃砲と弾丸を紅椿のスピードで避けた。

終がオルトロスセイバーを振り下ろせば一夏は雪片で防いだ後終の腹を蹴り荷電粒子砲を放てば終は体を捻りオルトロスセイバーで切り裂いた。

「うおおおお！！！」

「ふん」

一夏が雪片を振るい終はオルトロスセイバーで防ぎもう一本で一夏を狙うが一夏は雪羅からエネルギークローを出し防いだ後離れた。

「やるな」

「お前のお陰だな」

終はオルトロスセイバーを強く握り一夏も雪片を強く握った。

セシリアは箒を狙い撃つが箒は避けた後雨月と空裂を構えて向かうが鈴が箒に向かって双天牙月を振るうと箒は防いだ。

「やるじゃん!!」

「伊達に剣道をしてると思うな!!」

楓はルシファールとポセイドンを交互に振るうがラウラはプラズマ手刀で防ぎ離れるとシャルがアサルトライフルで狙い撃った。

「ッ!?! 皆さんあれ!!」

楓が指さした方向にはエターナルブラッドを纏ったAとブルー・テイアーズに似てより青色が濃くなったISを纏った女性が居た。

「サイレント・ゼフィルス!?!」

セシリアが青色のIS、サイレント・ゼフィルスを見て言うときサイ

レント・ゼフィルスの操縦者とAは唇が釣り上がった。

キャノンフットボール・ファスト（後書き）

次回『音梨楓、死す』

つててどどゆゆ事!?!?

感想を待っています。

音梨楓、死す（前書き）

前回キャンボール・ファストにフットを付けました。間違いです
が直しません

そして私は謝らない！！

グチャグシヨブシャ！！

椀「馬鹿作者でごめんなさいね。本編をどうぞ」

音梨楓、死す

エターナルブラッドを展開したAとサイレント・ゼフィルスを纏った女性が楓達を見下ろしていた。

「ねえ、M。私は音梨楓をやるから後よろしくね」
「ふん」

嬉しそうなAに対してMと呼ばれた女性は表情を変えずにライフル、『スターブレイカー』を構える。Aは刀を構えて楓に一直線に向かい掴むと離れ追いかけてようとしたセシリア達の行く手をMがスターブレイカーを撃つ事により阻害した。

「くっ」
「どこを見ている」
「それは」
「こっちの台詞だ」

Mの後ろから終がオルトロス、一夏が雪片を振るうがMはしゃがんで避けた。

「行きますか」
「ああ」

終と一夏はオルトロスと雪片を構えてMを見た。

楓はAから離れるとルシファーを構えた。

「へえ、やる気なんだ。そこなきや」

楓は何も言わなかった。楓はAへの恐怖心で一杯だったがそれを押し殺していた。

「ふふふ。私達に相応しい場所を用意してあげる」

楓は一度倒れたが立ち上がりAを見た。

「ふう〜ん。その目は気に食わないなあ〜」

Aは笑顔を崩さなかったが刀を地面に叩き付けると地面が砕けた。

「すぐに変えてあげる」

Aは瞬間加速で楓に近付き刀を振り下ろしたが楓はルシファーイグニッション・ブーストを使って受け流した。

「やるようになったんだ」

「ハアアア!!!」

「けど」

Aは楓が振り下ろしたルシファーを避けずに片手で止めた。

「えっ!?!」

「私の方が上だったね」

Aは刀を振り下ろしエターナルムーンの装甲が少し砕けた。

「まだまだだよ。あなたの苦痛に歪んだ表情を見たいから」

Aは狂気じみた笑みを浮かべた。

「騒ぎすぎたあああ！……！」

終と一夏はサイレント・ゼフィルスのビットとMが放つスターブレイカーの弾幕から逃げていた。理由はさっきまで戦っていた事の騒ぎすぎ等達も助けようとするがビットが邪魔で助けられない。

(私は一夏を助けたい。紅椿、頼む、絢爛舞踏を)

箒が思うと紅椿から金色の粒子が溢れ箒は絢爛舞踏が発動したと分かる。一夏の元に向かった。

「一夏!!!」

「箒!?!」

箒が白式に触れると白式のエネルギーが回復した。

「よし。終!!!」

「分かってる! ハデス、ブレード!!! ファングクラッシャー!!!」

終はハデスを出した後ブレードにした後ファングクラッシャーを発動しMに切りかかる。

「甘い」

「どつちが」

Mがスターブレイカーを向けると終は瞬間加速を使いイグニッション・ブースト一気に近付いて振るったが避けられた。

「終わりだな」

「・・・それはどうかな？」

Mの後ろから一夏が零落白夜を発動した状態で雪片を振り下ろした。

楓とAの戦いはAが圧倒していた。エターナルムーンはボロボロになり楓自身も体の至る所から少し血を流していた。

「そう言えば、あなた自分の過去知りたいんだよね」

「それが何ですか？」

Aの言葉に楓はルシファーを握る力を強めた。

「教えてあげる」

「っ!？」

楓自身の過去は楓が一番知りたい事だった。それを聞いた楓は少し力を緩めた。

「ふふふ。プロジェクトノヴァって知ってる？」

「プロジェクト、ノヴァ？」

楓はいきなりAに言われたプロジェクトノヴァと言う単語を繰り返した。

「知らないよね。あなた記憶喪失だから。プロジェクトノヴァはあなたが作り出された計画の名前」

「作り、出された？」

楓はAの言葉に戸惑った。自分が作り出されたどうゆう事か知りたかった。

「あなたはプロジェクトノヴァが作り出した失敗作」

「失敗、作？」

「ええ、本来あなたは理性なんて無いような物なのに、理性があり、そんな性格になった」

Aは楓を指差しながら言った。

「けどね。親しい人が目の前で死ぬと一気に理性は無くなり目に写るもの全てを破壊するまで止まらない」

「嫌・・・」

Aの言葉に楓は首を振って否定した。

「否定したって、私の言っている事は事実だから。けどあなたみた

「ちっ」

Mは舌打ちをすると一夏と終を見た。

「外した」

「ああ、ギリギリで交わされたな」

Mはあの時ギリギリで零落白夜が発動した雪片を交わしていた。

「くっ」

「一夏!!--」

「終!!--」

一夏と終の周りに箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラが来て全員構

えた後サイレント・ゼフィルスのビットが戻りMもスターブレイカーを構えた。

「あれ？ まだ続いてた？」

終達は声がした方を見ると全員目を疑った。

「楓？」

「嘘」

「楓さん？」

「楓！ 返事をしろ！！」

「無駄だよ。多分死んだから、はい」

Aは楓を投げるとラウラがキャッチし楓の息を確認するて微かに息をしていた。

「まだ、楓は生きてる」

「何だ。残念だな」

Aの言葉を聞いたセシリアとシャルはスターライトmk?とアサル
トライフルを構えた。

「もう疲れたから帰る。後、死んだのは体じゃなくて心かもね」

Aはそう言い残すとMを掴んで飛んでいった。

「早く楓を運ぶぞ!!」

終がA達が去ったのを確認すると全員頷き楓を運んだ。微かに開か
れた瞳からは光はなかった。

音梨楓、死す（後書き）

感想を待っています。

正直楓は精神的にAに殺されました。

狙われる月（前書き）

タイトルは気にするな！！

って事で

狙われる月

セシリア、鈴、シャル、ラウラはベッドで体に包帯を巻いて静かに眠ってる楓を見ていた。

「楓、大丈夫かな」

「楓さん」

「私達、駄目だね」

「守れなかったな」

四人は眠ってる楓を見て悲しい顔をしていた。楓の怪我はそれ程は酷くすぐ目が覚める筈と言われていたが楓が目を覚ます様子はなかった。

「何で、何で目を覚まさないのよ」

「分かりませんわ」

「僕達、口先ばっかだね。大切な人すら守れないし」

「ああ、嫁だと言っているにも、守れないじゃ、意味がないな」

四人は楓を見て苦い顔をした。

「入るぞ、つて大丈夫か？」

「終さん、一夏さん、箒さん」

終が声を掛けるとセシリアが振り向き一夏と箒も居る事に気が付いた。

「大丈夫か？」

「食事を持ってきたから、食べとけ」

終、一夏、箒は四つのトレーを持ってくると置くが四人は手を付けようとしなかった。

「食べねえと保たねえぞ」

「関係ないだろ」

「関係なくないだろ。お前等が倒れたら楓が悲しむだろ」

「うるさいわよ」

「お前達の責任じゃないだろ」

「責任とかそう言うのじゃないよ」

「ただ守れなかった自分達が、情けないだけだ」

終達三人はセシリア達四人を見て辛くなった。

「誕生日、か」

終が聞くと箒が頷いた。

「一応、伝えようと思ったからな」

「楓とあの四人は無理だろ」

「そうだな。お前は？」

終は暫く考える動作をした。今この場に居るのは終と箒だけだった。

「パス。俺は誕生日にどうゆう事すれば分からないし、事態も事態

だからな」

「そうか、すまない。こんな時に」

「こんな時だからこそ、お前があいつの側に居てやれ」

終は篝の肩を叩きその場を去った。

そして夜、一夏は自販機で飲み物を買っていた。誕生日の主役なのだが自分から志願した。

(蘭が終が来ないって知ると凄い落ち込んだな)

一夏が振り返り蘭が篝の口から終が来ないと聞いた瞬間orzとなっていた。

（あれは驚いたな）

一夏は人数分の飲み物を買つと何処かからか殺気を感じた。

（あそこか）

一夏は雪片を出して手に持つと殺気がする方向に向けた。

「出て来いよ、分かってんだ」

一夏の言葉を聞いた殺気を放っていた主は物陰から出ると一夏は驚愕した。

「ち、千冬姉・・・なのか？」

「違う。私はお前だ。織斑一夏」

「俺だと？」

一夏はその言葉を聞くと雪片を握る力を強めた。

「今日は世話になったな」

「お前、サイレント・ゼフィルスか」

「ああ、よく分かったな」

「殺気とかが敏感な奴が居て、その影響だ」

「ほう、そうか」

「で、お前は誰だ」

一夏はMに雪片を向けるとMは静かに言った。

「私は、織斑マドカだ」

(何？ マドカ何て知らねえし、織斑？ それに千冬姉に似てるし)

一夏が考えているとMは拳銃を一夏に向け発砲しそれを突如誰かが切り裂いた。

「終!?!」

「よお。モテモテだな、一夏」

両手にオルトロスを握っている終だった。

「終、どうして」

「気分転換に学園の外で散歩しようとしたら偶然、な」

「偶然って、本当は付けてきたのか？」

「俺は男を尾行する趣味はない」

一夏は終を見て冗談交じりに言い終は苦笑いしながらオルトロスをMに向けた。

「お前、何で一夏を狙った？」

「ッ!？」

終はMに殺気を放つとMはその殺気に驚き後ずさった。

(何だコイツ、何でこんな濃い殺気を)

終の目を見たMはサイレント・ゼフィルスを展開すると飛んでいっ

た。

「ちっ、逃げられたか。平気か？ 一夏」
「あ、ああ」

一夏は少し唾然と気の抜けた返事をした。

「さて、俺は帰るぜ。じゃな一夏」
「待てよ終。お前を来いよ」
「いや、俺は別に」
「良いから来いよ」

終はそのまま一夏に連れられて一夏の誕生日に参加させられた。余談、蘭が終始終にべったりだった。

楓の居る部屋は窓が開いていて風が吹き抜けるとカーテンが揺れ月明かりが部屋に差し込み二人の人物が照らされていた。一人はその部屋で眠っている楓とその楓を見下ろしているAだった。

「へえ、寝顔以外と可愛い」

Aは楓の髪を掻き分け頬をなぞり首に触れると手を止めた。

「柔らかい肌に、綺麗な髪に、細い首、簡単に締められそうだね」

Aは楓の首を掴み力を強めると楓の顔は息苦しいのか少し歪むがAは手を離し首筋に口付けをした。

「何時か、あなたを私の物にするね」

Aが笑みを浮かべていると部屋の扉が開きラウラが入ってきた。

「お前、楓から離れる!!」

ラウラはAを見ると凄じ剣幕でAに飛び掛かりそうになるがAが楓の首に手を当てる止まった。

「物分かり良いね。あなたにとって人質になるからね」

「お前、何者だ」

ラウラがAを睨んでいるとAは顎に手を当てると笑みを浮かべる。

「亡国企業のAだけど、アリスって名乗っておくね」

Aはアリスと名乗ると窓から外へ出た。

「ッ!?!」

ラウラは窓の外を見るとAはエターナルブラッドを展開して飛んで

いた。

「くっそ」

ラウラは苦い顔をして楓を見ると楓は静かに眠っていた。

Aはビルの屋上から星を見ていると後ろからMが近付いてきた。

「ご機嫌だな」

「ん、Mどうしたの？」

「何でもない」

MはAの隣に立つと同じく星を見た。

「で、お前はどうした？」

「欲しいのが出来たんだ。多分気に入るよ」

「で、その欲しいのは何だ？」

「音梨楓」

Aは口元を釣り上げるとMは驚いた表情をした後聞いた。

「何でだ」

「ふふふ。秘密」

AはMに笑みを向けた後そそくさとその場から離れMも付いて行った。

狙われる月（後書き）

感想を待っています。

月、復活（前書き）

月の復活

月、復活

楓は自分の精神世界で沈んでいた。

「もう……どうでも………良い」

楓が諦めの言葉を呟くと沈め早さが早くなり暗闇に沈んでいく。

「駄目、行かないで。楓」

楓の手を桜が掴んだ。

「……どうして?」

「馬鹿ッ!」

楓が諦めた目で桜を見ると楓の頬を叩いた。

「.....」

楓は叩かれた頬を触り椀をゆっくり見た。

「何で、何で諦めるの！？ 私に何で言わないの！？ あなた一人じゃないでしょ！？ 私を、頼ってよ」

椀は泣きながら楓を優しく強く抱き締めた。

「あなたが居なくなったら、私はどうすれば良いのよ！？ 楓！！」
「あつ、あぁ」

椀のその言葉を聞くと楓の瞳に光が戻り涙が溢れた。

「ねえ、私を頼ってよ。私がお姉ちゃんになるから、だからお願いよ。楓」

「あり、が、とう、ッ！？」

楓がありがとうございますと言い切る前に椛が楓の唇を自分の唇で塞いだ。

「それ以上は言わせない」

椛は唇を楓の唇から離し楓の目を見ると楓は頷いた。

「もみ、じ」

「うん、何？ 楓」

楓が椛の名前を呼ぶと椛は楓の頭をゆっくり撫でた。

「椛、ありがとう」

「どういたしまして、楓」

楓に礼を言われると椋は楓に軽く口付けをした。

「ありがとう。本当に、ありがとう」

「楓、良かった」

楓と椋は知らず知らず涙を流していた。

「ちょっと、離しなさいよ!!--」

「引っ張るな!!--」

「煩い。D A M A R E」

終は鈴とラウラを引きずり連れてきたのは食堂で既に一夏、箒に連れて来られた（拉致された）セシリアとシャルが座っていた。

「はい座れ」

二人は座らされると終は食堂内の調理場に向かった。

それから数十分後、終がパエリア、カルボナーラ、ビーフシチュー、ドリアを持ってきた。

1882

「なあ、終」

「何だ一夏？」

「正直お前凄いな」

「まあ、取り合えずその四人、食え」

終はセシリア、鈴、シャル、ラウラを指差しながら言った。

「僕達は別に」

「食え」

「お腹は空いていませんわ」

「食え」

「大丈夫よ。別に空いてないし」

「食え」

「いや、だから」

「K U E」

終の笑顔（目は笑っていない）を見たセシリア達は素直に終の作った料理を口にした。

「美味しいですわ」

「そうね」

「うん。とっちも」

「温まるな」

「当たり前だ。ろくに食ってないんだからな」

セシリア達四人は食事もなくに食べずに楓を見ていた。それを知っていた終は料理を四人に食わせようとして一夏と箒に協力を得た。

「何だろ、涙が」

「ええ、おかしいですわ」

「料理、美味しいのに」「何故だ、何故涙が、止まらないんだ」

涙を流す四人を見た終は溜め息を吐きながら呟いた。

「七人で楓を見に行くぞ」

一夏と箒も笑顔になりながら頷いた。

「そっちの方があいつも喜ぶしな」

「ああ、そうだな」

四人が頷き終は微笑みながら一夏と箒を見ると肩を抱き合っていてそれを見た終は後悔した。

四人が食事を食べ終わった後楓が眠っている部屋に行き楓の様子を見ていた。

「相変わらず、だったな」

「ああ、確かにな」

相変わらず楓は眠っておりセシリア達が心配そうに手を握っていた。

「何か、切ないな」

「ああ、何にも出来ないが、ホントに歯がゆいな」

「・・・・・・・・」

一夏と箒の会話を聞いていた終は力強く手を握っていた。

(結局、戦う事しか俺には出来ないのかよ)

終が手を開くと血が滲んでいた。

「椀、私は、後どれ位で目が覚めるのかな？」
「多分近くに目覚めるわ」

楓と椀は精神世界で何時目覚めるかを話していた。

「ねえ、楓。今度はちゃんと守るから、絶対に、ね」
「うん。ありがとう、椀」

楓と椀は微笑みながら手を繋いだ。

「あれ？」

「どうしたの？ 楓」

「何か、体が軽くなったような」

「あっ、そろそろ起きるのね。頑張ってるね、楓」

「うん。分かった」

楓は浮遊感を感じながら意識が目覚めていく。

「・・・・・・・・」

楓は目を覚ますと勢い良く起き上がると体に痛みを感じた。

「ッ!?!?」

楓は体を見ると包帯が体に巻かれていた。

「これ、あの時の」

楓はゆっくり立ち上がり体を少し動かした。

「ッ！？ まだ、痛い」

楓は少し涙目になりながらベッドに腰掛けた。

(何時まで、眠っていたんだろ?)

楓は痛みを堪えながら部屋を出た。

「ッ！ 痛い」

楓は歩く度体に走る痛みを耐えながら歩いていった。

「どろし、あつ」

楓は歩いていて途中で足に力が入らなくなり倒れなかった。楓が倒れる直前にラウラが受け止めていた。

1889

「あつ、ラウラ、さん」

「楓。大丈夫、なのか？」

楓はラウラの顔を見るとラウラは驚いた顔をしながら楓に聞くと楓は静かに頷いた。

「良かった」

「ヒヤア!？」

ラウラが楓を抱き締めると楓は体の痛みと共に悲鳴を上げた。

「本当に良かった。本当に」

「ラウラさん、痛いです」

「あっ、すまない」

楓は涙目になりながら体を押さえるとラウラが楓を抱き抱えた。お姫様抱っこで

「ラウラさん、恥ずかしいですから／＼」

「怪我は軽いて言っても、全治四週間だからな。私が運んでやる」

ラウラは楓を抱えたまま歩き出した。

「あの、私って、何時まで眠っていたんですか?」

「ああ、二週間は眠っていたな」

「二ッ!? いった」

楓は驚いて体を動かそうとすると痛みが走りラウラも楓が落ちない
ように抱え直した。

「まだ眠っていても大丈夫だ」

ラウラの言葉を聞くと楓は頷きゆっくり目を閉じた。

月、復活（後書き）

感想を待っています。

終と簪（前書き）

これはある意味ネタバレです。

終と簪

「あつ、あの。シャルさん」

「何？ 楓」

「降りしてくれませんか？ 歩けますし」

「駄目。まだ危ないもん」

楓は学園の廊下をシャルにお姫様抱っこされた状態でした。

「けど、恥ずかしいですし、当たってます／＼」

楓はシャルに抱かれているためシャルの胸が当たっていた。

「楓、当たってるんじゃないんだよ・・・当ててるんだよ」

「！！！！？？／＼」

シャルの言葉に楓は顔を完熟のトマトのように赤くした。

「楓たら、可愛いな」

「はあ、たくあの野郎」

終は溜め息を吐きながら学園の廊下を歩いていた。楯無は生徒会室で気絶していた。

「仕事を押し付けんなよ。大変なんだしよ」

終はぶつぶつ呟きながら廊下を歩いていた。

「独り言？」

「ああ、って」

終が後ろを見ると簪が立っていた。

「簪……」

「ねえ、終……今、暇？」

「ああ、暇だな」

「買い物……一緒に行こう」

「分かった。じゃ着替えてくる」

そのまま終は着替えに部屋を目指した。

終は着替えた後簪と一緒に街に居た。

「それにしても、どうして俺なんだ？ 本音でも良かっただろ」

「終と、行きたかったから／＼／」

「顔赤いが、熱でもあるのか？」

「ただただ大丈夫だよ！！／＼／」

簪の顔が赤くなつたので終が簪の額に手を当てると恥ずかしそうにして終の手を引いた。

(何なんだ?)

(・・・終の鈍感)

終は疑問符を浮かべながら簪は不満に思いながら歩いた。

「何だよ。いきなり引つ張って」
「別に・・・」

簪が何か言つ前にぎりゅうううううううと簪の腹が鳴った。

「……………腹減ってんのか？」

簪は顔を赤くしながら頷いた。

「どこ行くか……………あそこで良いか？」

暫く見渡していた終が指さした場所は喫茶店だった。それに簪は頷き二人は喫茶店で昼食を取ることにした。

喫茶店に入った二人は注文し食べていた。簪はオムライス、終はパスタを頼んでいた。

簪はボソツと言つと黙々とオムライスを食べ終も疑問に感じながら
パスタを食べる。

終と簪は食事を食べた後街を歩いていた。

「色々あるんだな」

「そうだね」

二人は暫く歩いているとアイスクリーム屋を見つけ立ち止まった。

「食べるか？」

「うん。食べよう」

二人はアイスクリーム屋に行き簪はバニラ、終はチョコ味のアイスクリームを舐めながら歩いていった。

「ねえ、終」

「何だ？」

アイスクリームを食べながら歩いていると簪が終に声を掛けた。

「終、暗い表情をする時……あるよね」

それを聞いた終は簪の手を引いて近くのベンチに座った。

「なあ、簪。俺が戦場に居た事、知ってるだろ」

「うん。聞いた事があるから」

「実は、俺の名前……本当はゼロって言って、人工生命体だ」

簪は終の話を黙って聞いていた。

「その時言われたんだ。お前は兵器だ。何も考えるな、ただ目の前の物を破壊しろって、な。だから俺は幸せじゃいけないって思う時があるんだ」

終が話してる間にアイスクリームを食べ終わり夕日を見ながら話していると簪は終に抱き付いた。

「簪……」

「終は……幸せで良い。だって、苦しんだから……だからその分……幸せで良いから」

「………ありがとな」

終は微笑みながら簪の頭を撫でて夕日を見た。

学園に戻った二人は部屋に帰る前に終は簪を呼び止めた。

「簪・・・今日はありがとう」

「どういたしまして」

二人は微笑みながら部屋に戻った。

（幸せになって良いか、俺が）

終は夜一人で屋上から夜空を見上げていた。

簪はシャワーを浴びながら終の事を考えていた。

(終、やっぱり私は・・・あなたが好き)

簪は終の事を思うと頬を赤くした。

シャルは楓を抱き抱えながら楓の部屋に向かっていた。

「シャルさん。重くないですか？」

「平気だから気にしないで」

平気に着くとシャルは楓をベッドに降ろした。

「ありがとうございます」

「添い寝してあげるよ」

「えっ？ 良いですよ」

「遠慮しない」

その日シャルは楓と添い寝して眠りについた。

部屋では何故か終の落ち着かない状態に一夏は声を掛けた。

「なあ、終。何そわそわしてんだ？」
「いや・・・別に」

完全に嘘だ。終の言葉を聞いた瞬間一夏はそう確信した。

「・・・・・・・・相談に乗るぜ」
「・・・・・・・・多分、平気だ」

一夏は終の肩を叩いたが終は遠い目をして断った。

終と簪（後書き）

感想を待っています。

休日（前書き）

一夏が凄い。

それだけ

休日

朝、楓は朝食を食べながら周りを見ていた。楽しげに話す女子達、そして周りに居るセシリア、鈴、シャル、ラウラを見ると苦笑いした。

「平和ですね」

「いきなりどうしたの？」

「いえ、思っただけです」

楓がボソツと言った後鈴が聞いたが楓は言つと再び朝食を食べる。

一夏と筭は手を繋いで街を歩いていた。理由はデート中であると言
う事だ。

「どこ行くか」

「このままただ歩くと言うのも良いかもしれないな」

「だったらいろんな所行こうぜ」

「ああ、そうだな」

一夏は筭の手を強く握り走ると筭もついていった。

終は自分の部屋で溜め息を吐いていた。理由は

「楯無、簪、何故お前等が俺の部屋にいる？」

「休みなんだから」

「気にしない」

「気にするわ!!」

楯無と簪は終の部屋でリラックスしていた。

「ねえ、終」

「何だよ簪」

「終の事、もっと知りたい」

「ブウウウウウウウウウツ!？」

終は簪の言葉を聞いて口に含んでいたお茶を吹き出した。

「何の話かな？ 終」

それを聞いた楯無はISを展開しそうな勢いで終に詰め寄った。

「待て待て待て、楯無、落ち着け、マジで落ち着け」

「ふふふ」

「ねえ、私が知りたいのは終の過去に関する事だけど」

「・・・・・・・・」

それを聞いた二人は椅子に座った。

「いきなりで、ごめん」

「いや、平気だ」

「そう言えば、あまり話さないね。終は自分の事」

「話すよ。ちゃんと、俺の事」

終は一度咳払いして楯無と簪を見た。

「まず俺の本名はゼロ。人工生命体で兵器として作られたんだよ。ついでに俺の頭には暴走スイッチがあるんだ」

終は自分の頭を突つつくと二人は暴走スイッチ？と頭を傾げた。

「ああ、もしもの場合に発動して辺りを破壊するまで止まらない」

「じゃ、止めるには？」

「俺の頭に衝撃を与えるか、殺すかだな」

終の殺すと言つ言葉に二人は暗い表情をした。

「それ位しか止める方法が無いんだよ。まあ、あくまで奥の手だ」

終はそう言っつて再びお茶を飲んだ。

「死なせない」

「ん？」

「絶対に、死なせないから」

「ふん。そうか」

簪の目を見た終は鼻で笑いお茶を飲んだ。

「色々歩いたから腹減ったな」

「喫茶店に行つて、何か食べよう。丁度あるからな」

一夏と篤は喫茶店に入り席に座るとメニューを見た後注文をした。

「それにしても・・・」

「ん？」

運ばれた料理を食べていると篤は手を止めて一夏を見た。

「一夏と離れ、そして再び出会えた」

「ああ、そうだな。俺も篤と再会できて良かった」

二人は微笑みながら食事を食べた。

数分後一夏達は店を出て歩いていた。

「なあ、箒、少し良いか？」

「何だ？」

「わりい、トイレ」

「さっさと行ってこい」

一夏がトイレに走り箒は近くのベンチで座って待つ事にした。

(一夏、最初の方はこうなるなど、思っていなかったからな)

箒が一夏との思い出を思い出し微笑んでいるとチャライ男が箒に近付いた。

「ねえ君、可愛いね。俺と遊ばない？」

「断る。連れが居るからな」

「別に良いじゃん。俺と遊んだ方が楽しいよ」

男は箒の腕を掴んだ丁度その時一夏が戻ってきて箒の腕を掴んでい

る男を確認する事僅か1秒。

「俺の筈に……」

殺気を放ち走り出す事2秒程。そして周りが避ける事0、1秒。

「手を出すんじゃないねえ!!」

「グベラ!？」

一夏は男の顔面に飛び蹴りを喰らわせ男は3メートル弱飛んだ。

「一夏、その」

「筈……」

筈の言葉を遮るように手を掴んだ。

「へっ？」

「場所変えようぜ」

「あ、ああ」

一夏と箒は場所を変えるために歩き出した。

「ふいまへん……ガク」

箒をナンパした男は周りに哀れな目で見られた。

「はあ、どこまで連れてくるんだ？」

「まあ、ほら。あれ見てみるって」

箒は一夏に言われて見てみると丘の上にした事を気付かされるかの

ごとく夕日が綺麗に輝いていた。

「これは・・・」

「箒が喜ぶかなってな」

一夏はポケットを探り何かを出した。

「ほら、箒」

「一夏、それ」

一夏が取り出したのはロケットペンダントだった。

「それに写真挟んで、首に掛けとけよ」

「ああ、そうさせて貰う」

箒は微笑みながら受け取り二人は帰路に就いた。

休日（後書き）

ロケットペンダントは中に写真を入れるあれです。

感想を待っています。

タッグ結成（前書き）

タッグマッチに向けてタッグを組む者達。

タッグ結成

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏は某霸王すら恐れられると思われるオーラを出しながら生徒会室を
目指していた。

(こんな時に何の用なんだろう？ 楯無さんは)

一夏は楯無に呼ばれた・・・・・・・・・・箒とイチャついて
いる時に。それは頗る一夏の機嫌も悪くなる。下手に刺激すれば間
違いなく死が待っている。

「失礼します」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

入ってきた一夏に楯無は一瞬で言葉を失った。一夏から千冬すら冷
や汗を流す程のオーラが出ていたからだ。

「う、うん。実は頼みがあった」

「お断りします」

「早っ!!」

楯無が頼みと言った瞬間一夏が生徒会室から出ようとしていた。

「聞いてよ。お願いだから一夏君!!」

「仕方ないですね」

完全に立場が逆転しているが楯無は一夏に向かって手を合わせた。

「お願い！ 今度のタッグマッチ私の妹出て!!」

「はっ？」

いきなりの事に一夏は啞然とした。

「あゝ、暇」

終は暇を持って余すように散歩していた。

「ん？」

終は整備室の扉が開いている事に気付き部屋に入ると簪が作業をしていた。

「入るぞ」

「！？ 終」

終が入ると簪は一瞬驚いたが終と分かると安心した表情をした。

「何してんだ？」

「………専用機を」

「成る程、大体分かった」

終は専用機的设计図を見て納得した顔をした。

「ほら、白式の開発で私の専用機」

「ああ、殆どを白式に持って行かれたんだろ。それと一夏を恨むなよな」

「うん……」

終は簪の頭を撫でながら设计図を再び見た。

「俺も手伝うぜ」

「何を？」

「専用機作るのを」

終が笑顔で椅子に座り簪も終の隣に座った。

そんな様子を整備室の扉の隙間から一夏と楯無が覗いていた。

「終、良い雰囲気だな」

一夏は終を見ていると隣からドス黒いオーラが出ている事に気付き見てみると楯無が嫉妬の眼差しで見っていた。

「フフフ。そうなんだ。へえ、フフフ」

一夏は見て思った。悪魔か？と思っていると楯無はフラフラとどこかに歩いていった。

「どこ行くんた？ まっいか、タッグマッチ子笥と組もう」

そのまま一夏は篝の部屋を目指した。

楓は一人自分の部屋でのんびりしていた。

「ん、眠い」

そのまま寝そうになるが部屋に楯無がいきなり入り楓の目が覚めた。

「楓ちゃん!!」

「た、楯無さん!? いきなりどうしたんですか!?!」

「タッグマッチ私とペア組んで!!」

「え〜と、その〜」

「良い!?!」

「は、はい!?!」

最初は断ろうとした楓だが楯無の気迫に頷いた。

「終、覚悟しといてね。フッフ」

魔王じみた笑みを浮かべた楯無を見て楓は震えていた。

一方の終と簪は作業している途中で簪が終の方を向いた。

「ねえ、終」

「ん？ 何だ」

終も手を止めて簪を見た。

「タッグマッチ、誰かと組んでる？」

「いや、まだだ」

「それなら・・・私と組んで」

「ああ、だったらさっさと作り終えるか」

終は再び作業をすると簪も作業を再開した。

セシリア達は楓を誘おうとしたが楯無に誘われる様子を見てしまった。

「楓さん、私が居ながら」

「フフフ。よし殺そう。思いっきり殺そう」

「へえ、そうなんだ。そうなんだ」

「浮気か、私が居ながら」

セシリア、鈴、シャル、ラウラの目が濁り負のオーラを発していた。

「セシリア、気が合わないけど組もう。それで楓にお仕置きしな
き
や」

「良いですわ。タッグマッチ後の方が宜しいかと」

「なら何するか話し合しましょう」

「了解ですわ」

物騒な話をしながらセシリアと鈴で組み部屋に向かった。

1930

「シャルロット、用件は分かるな」

「うん。僕達で組んで、楓にお仕置きしようね」

「ああ、賛成だ」

シャルとラウラも物騒な話をして組み部屋に向かう。

「ッ!?!?・・・何か、寒気が」

それを楓は僅かに感じ取った。

一夏は箒の部屋に來ると一夏は箒に膝枕されていた。

「箒の膝枕、気持ち良いな」

「そうか？　なら何時でも來ると良い。好きなだけしてやる」

箒は一夏の頭を撫でながら言つと一夏は箒の顔を見た。

「なあ、箒。タッグマッチ、一緒に出てくれ」

「勿論だ。一夏以外と出る訳がないだろ」

「箒……ありがとう」

一夏は箒を抱き締めた。

「一夏・・・」

それに等も一夏を強く抱き返し暫くそのままだった。

タッグ結成（後書き）

感想を待っています。

専用機作成（前書き）

久々の投稿！

専用機作成

終と簪は専用機の作成をしていた。

「さて、打鉄が元だからな、防御重視にするか？」

「ううん。機動重視でお願い」

「分かった。そうするぜ」

こうして終と簪は打鉄を防御重視から機動重視にする為の作業を開始した。

「ああ、簪、俺は少し一夏と楯無の所に行く」

「お姉ちゃんには何のよう？」

「起動データを貰いに。一夏は武器データを貰いに行きます」

あまりの簪の威圧感に終は思わず敬語になり一夏と楯無の元へ向かう終だった。

(簪は何を怒ってたんだ？)

終は簪の怒っていた原因が解らずにいた。自分だとは気付かずに。

「一夏、居るか？」

終は一夏が居ると思われる自分と一夏の部屋をノックするが反応がない。

「あれ？ 簪の部屋か？」

終が簪の部屋に向かおうとすると部屋の扉が開き一夏が出てきた。

「ああ、一夏」

「どうした？ 終」

「白式借りに来た」

「何で？」

いきなりの事に戸惑う一夏だが終が事情を説明すると白式を終に貸し終は楯無の元に向かった。

「あっ、楯無さんがピリピリしてる事伝え忘れた」

一夏は終に一番重要な事を伝え忘れていた。

「楯無、入るぞっ！？」

終が生徒会室の扉を開けるといきなり蒼流旋が終の横を横切った。

「何かな？ 終」

終はISを展開してドス黒いオーラを放っている楯無を黙ってみた。

「なあ、楯無」

「何かな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

最早直視すら難しいレベルだった。

「頼みがあつてな」

「頼み？」

終から頼みと聞くと楯無はISを解除した。

「霧纏ミスティアス・レディの淑女貸してくれないか？」
「特別に良いよ」

終は霧纏ミスティアス・レディの淑女を受け取ると礼を言い生徒会室を出た。

「はあ、何だかな」

楯無は溜め息を一つ吐いた。

終は整備室に戻ると再び作業を開始した。

「どうだったの？」
「ああ、借りてきた」

終は白式と霧纏の淑女を机に置いた。
ミステリアス・レディ

「白式の武器データと霧纏ミステリアス・レディの稼働データを使う」
「だから、借りたんだ」
「そう言う事だ」

終は白式から武器のデータを取り替は霧纏ミステリアス・レディの淑女から稼働データを
取った。

「あつ、そうだ」

作業をしていた終の手が止まり席を立ち上がった。

「どつしたの？」
「少し行くから待っていてくれ」

そう言い終は部屋を出た。

「どこ行くんだろ？」

簪は終の後ろ姿を見ると少し寂しさを感じた。

楓は部屋で本を読んでいたが本にしおりを挟み閉じると部屋を見渡した。

「……………」

楓はポーツとした表情で部屋を見渡していると頭に痛みが走りそれと同時に何か流れ込んでくる感じがした。

『よろしくね!』

『友達になろう!』

『来ないでよ!』 化け物!』

楓は気付くとベッドに横になっていて何時の間にか寝ていた事を理解した。

「それにしても、今は?」

断片的に流れた声と狭い白い部屋だがどこか聞いた事と見た事があるが、思い出したくない感じだった。

「何だろう? この気持ち」

楓は不安を感じながら再び本を開き読みだした。

「簪、戻ったぞ」

「うんって、あれ？」

終が戻ると簪は振り返ったが違和感を感じると次々と入ってくる人物達が居た。

「この人達は……」

「整備班の奴等に協力を頼んでな」

終はそう言い作業に取り掛かる。

「……お前はお前、楯無は楯無。そうだろ？」
「えっ？」

簪は終の言葉に少しきよとんとした表情をした。

「楯無と自分の違いに苦しんだ。言えばコンプレックス」

確かに簪は楯無との違いにコンプレックスを抱いていた。

「だから一人で専用機を作って解消しようとした。けどな」

終は簪に向き合い真剣な表情で言った。

「人は協力して強くなるんだろ？ だったら協力して、お前の強さを見つければいい」

「私の、強さ？」

「そつ。人それぞれの強さだ。それを焦らず見つける」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

簪は整備班のメンバーを見た。自分に協力してくれる者達があんなにも居たと感じた。

「お嬢様……………」
「本音……………」

本音は簪に声を掛けると簪は本音を見た。

「私に出来る事、お手伝いさせて下さい」
「……………うん。お願いね」

その様子を終は満足そうに、また寂しげに見ていた。

（俺も、もっと弱かったら）

終は改めて自分の手を見た。血に汚れた手を。終は手を握り締め再び作業を開始した。

専用機作成（後書き）

さて、次回はどうか……

完成と本能（前書き）

久々の投稿、orz

終に関しては次回のオリジナル長編に関係ある事だし。

と言う訳で本編どうぞ。

完成と本能

終は屋上で空を見ていた。

「……………」

終はまるで品を定めるように屋上から下を見ていた。

「……………どこから壊すか」

終は不適な笑みを浮かべるが、

「終？」

「!？」

終は振り返ると屋上の入り口に簪が居た。

「どうしたの？」

「………何でもない」

終は屋上から出て行き簷は首を傾げた。

「どうしたんだろ？ 終」

簷も終の後を追いつけた。

簷と終は整備室に入り簷の専用機の打鉄式式の調整をしていた。

「後少しだな」

「うん・・・」

終と簪は最終調整しそして、

「出来た・・・」

「ああ、確かに」

簪の打鉄式式を見て簪は終の方を向いた。

「終・・・約束・・・覚えてる？」

「ああ、当たり前だ。明日模擬戦しような」

そう言うと終は部屋を出た。

終は壁に寄り掛かると首を鳴らした。

「終か……」

丁度ラウラが終に近寄り声を掛けた。

「終、楓達が食事をしようと言っているのだが」

だが終はラウラの言葉を最後まで聞かず壁を殴った。

「話しかけるな」

終はそれだけを言うとその場を離れラウラは終の余りの殺気に脅え壁を見ると凹み罅が入っていた。

「終、お前……………」

ラウラは脅えた表情で終の背中を見ていた。

あるビルの上で零は遠くを眺めていた。

「ゼロ、お前は止められない筈だ。自分の本能を」

零は林檎をかじりながら呟いていた。

「ちっ・・・・・・・・」

終は自分の手を見て舌打ちをした。

（何時まで今の状態が持つかだな）

終は壁に寄り掛かり目を閉じ、暫くして開けると終の瞳は赤黒く変わっていたが目を閉じて開けると元に戻った。

完成と本能（後書き）

次回をお楽しみに！！

タッグマッチ、開催（前書き）

終の新たな力、発動！！

タッグマッチ、開催

専用機持ち限定のタッグマッチ当日。終はISスーツに着替えていて、更衣室の椅子に座って目を閉じていた。

（頼むから、今回だけでも、保ってくれ）

終は目を開けて、立ち上がると拳を握った。

「俺の本能が、いつ起きてくるか………だな」

終は謎めいた言葉を呟き、更衣室を出た。

第一回戦第一試合は楓&楯無対終&簪であり、楯無は殺気めいた目で終を睨んでいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・始めるか」

楓はルシファーとゼウスを出し、終はオルトロスを構え、楯無は蒼流旋、簪は薙刀、夢現を構えると一気に向かった。

「ふんっ」

終はオルトロスを振るうと楓はルシファーで防いだ。

「やるな・・・・・・・・」

「私も、強くなってるんですよ」

「そうか・・・・・・・・よ!!!」

「きゃあ!?!」

終はルシファーを蹴り楓と距離を取ると・・・・・・・・

「普通に突っ込んでんな」

楓は一瞬呆気にとられると終にルシファーを止められたと理解するとルシファーを動かそうとするが動かなかった。

「それに……一人じゃないよ」

簪が楓の後ろから夢現を振り下ろそうとするが楯無が二人の間に入り夢現を蒼流旋で防いだ。

「忘れられて、お姉さんショックだな」

「簪、離れる！」

終の声が聞こえ、簪が離れると楯無の背中に楓がぶつかった。

「きゃあ!?!」

「うわあ!?!」

二人は地面に激突すると土煙が上がり、終の隣に簪が来た。

「私はどうすればいい？」

「取り合えず簪は楓を相手してくれ、楯無は俺がやる」

簪が頷くと土煙が晴れると終と簪は瞬間加速を使いイクニッション・ブースト簪は楓、終は楯無とぶつかり合った。

「晴れるまで待ってたのか？ 律儀だな」

「畏があつたら嫌だなんて思ったからね」

終と楯無はハデスと蒼流旋をぶつけ合い、離れるとまた一気に駆け出すを繰り返していた。

「あっちはレベルが高いね」
「そうですね」

楓はルシファーを仕舞い、ポセイドンを取り出し、簪の夢現とぶつけていた。

「本当に……やるね」
「そちらも、ですね」

二人もお互いに武器をぶつけないながら離れると背中についている二連荷電粒子砲、春雷を楓に放つと、楓は横に避け、ゼウスを放つが、簪は上に避け、夢現を振り下ろし、楓はポセイドンで防いだ。

「やるね」
「そちらもです」

二人はお互いの武器をぶつけ合った。

終と楯無はハデスと蒼流旋をぶつけ、お互いに離れた。

「やるよな。お前も」

「それはどうも」

楯無は一向に終に近付こうとせずその場から動こうとしなかった。

(何企んで……………まさか!?)

終は違和感を感じると終の周りには霧が満ちていた。

「清き熱情」
クリア・パッション

終の周りの霧は熱を発し、爆発すると水蒸気が辺りを包んだ。

(終の事だから、動きを止めた程度……………どう来る？)

楯無が蒼流旋を構え待ち構えていると、水蒸気から三つの鎖が楯無に向かってきた。

「!?!」

楯無は蒼流旋で三つの鎖を弾くが鎖の一つが蒼流旋に巻き付き、引っ張られると楯無は蒼流旋を手放してしまった。

「くっ!?!」

楯無は蛇腹剣、ラストイー・ネイルを取り出した。

「嫌ね、その鎖……」
「気にすんなよ」

水蒸気が晴れるとそこには、黒い装甲が赤紫に変わり、更には左腕には三つの鎖が付き、スクーターは更に巨大になっていた。

「ホントに悪魔みたい」
「悪魔だよ。混沌の牙カオスファングつてな」

楯無は皮肉を言ったつもりだったが終は気にする様子なく言った。

「じゃ、行くぜー!!」

終は蒼流旋で突きを放ち、避けると次にハデスで斬り掛かった。

「くっ!!」

楯無がラスティー・ネイルを振るうとラスティー・ネイルに水が纏っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

終は一端離れると蒼流旋を投げ捨て、ケルベロスを取り出し、構えるがケルベロスの上の銃口二つにはオルトロスが付いていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

終が引き金を引くとケルベロスから高威力のレーザーが放たれ、楯無が避けると地面に穴が開いた。

「どれだけ威力強いのか？」

それを見た楯無は啞然としていたが、終は次々と引き金を引いた。

「くっ!？」

次々と引き金が引かれるが、楯無は攻撃の間に間がある事に気付いた。

(一瞬間があるなら、その時に攻めれば)

楯無が地面に落ちている蒼流旋を手に取ると終はケルベロスの引き金を引いた。

(今だ!!!)

終が再びケルベロスを構える前に、楯無が蒼流旋を終の首に突きつけた。

「勝負あった？」

「どうだろうな」

終はケルベロスで楯無の蒼流旋を弾くとハデスで斬り掛かった。

「斬撃もだつたわね！！」

「油断しすぎだろ」

終は楯無にケルベロスを向けると楯無は瞬間加速イケニッション・ブーストで離れたとケルベロスから大量の弾丸が放たれた。

「弾丸！？」

「さっきのはキャノンモード、今はマシンガンモードだ」

楯無はラストイー・ネイルと蒼流旋を構えると、終もハデスとケルベロスを構えた。

楓と簪はルシファーと夢現を何度もぶつけた。

「くっ!!」

「っ!？」

簪が春雷を放てば楓はゼウスの弾丸で相殺すると煙で視界が遮られた。

(一体、どう……)

楓が待ち構えていると簪が猛スピードで突っ込み、夢現を振り下ろした。

「終の側に居たいから、強くなりたい」
「私も、守られなきゃは嫌ですから、強くなりたいです」

二人は瞬間加速を使いぶつかり合った。
イグニッション・ブースト

「はっ！ やあ！」
「ふっ！ はあ！」

楓と簪はお互いにルシファーと夢現をぶつけ合い、互角に戦っていた。

楯無と戦っていた終は突然別の方向を向いた。

「何？ 余裕なの」

楯無はそっぽを向かれ不機嫌になるが、終は首を振った。

「ちげえ、客だ。しかも団体のなあ」

「!？」

楯無が見たのはこれから狩りをしようとする………獣の目だった。

(久々の、狩りだな………)

終は内心ほくそ笑んでいた。

タッグマッチ、開催（後書き）

感想を待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1864r/>

IS<インフィニット・ストラトス>黒き牙と永遠の月

2012年1月6日20時51分発行